

神田ムク入道遺跡

グループホーム及び地域密着型特定施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012. 3

高知市教育委員会

神田ムク入道遺跡

グループホーム及び地域密着型特定施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012. 3

高知市教育委員会



井戸 SE1 完掘状況



溝 SD10 遺物出土状況



須恵器蓋 (101)



須恵器杯 (126)



瓦器皿 (336)



土師質土器杯 (507)



龜山焼須恵器甕 (647)



中国産白磁四耳壺 (679)



中国産青白磁皿 (750)



中国産灰釉壺 (615)

序

神田ムク入道遺跡の所在する三ヶ谷神田地区は、高知市街地を北に望む鷲尾連峰より延びた丘陵端に広がる地に位置します。かつて南流した鏡川が形成した沖積平野は豊かな農地となり、周囲には弥生時代から古代にかけての遺跡が集中し、律令制下の条里地割の跡もとどることができます。

近年、高知市近郊地としての開発はめざましく、特に土佐道路の開通を始めとする道路網の整備と河川改修の実施を経て、かつての田園地帯は至便で優れた環境のベッドタウンとして大きく姿を変えています。

この度、グループホーム及び地域密着型特定施設が建設される運びとなり、埋蔵文化財の緊急調査が実施されました。その結果、古代の集落跡を始めとして、様々な遺物を含んだ中世の建物跡や井戸跡なども確認され、地域に新たな歴史を刻む、貴重な成果とすることができます。

この報告書が、さらに高知市の歴史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成24年3月

高知市教育委員会

例　　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成22年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市神田ムク入道1002-1他に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成22年度から23年度にかけて行った。

試掘調査 平成22年6月2日～6月8日、調査面積75m²

本調査 平成22年8月30日～12月1日、調査面積870m²

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 同 生涯学習課主査 丸山和代

調査担当 同 生涯学習課指導主事 浜田恵子 梶原瑞司

5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
6. 調査にあたっては、社会福祉法人ふるさと自然村、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7. 遺物の資料調査については森達也（愛知県陶磁資料館）、出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター）、池澤俊幸（同）、徳平涼子（同）、吉成承三（同）、松村信博（香南市文化財センター）はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）
8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

〔発掘作業〕岡崎速男 尾崎角美 梶尾洋子 下本益之 谷内孝子 西村道明 弘田誠一
松吉弘明 山下勝正

〔測量補助〕田上浩 田坂京子

〔整理作業〕大野佳代子 梶尾洋子 酒井暢子 島村加奈 松木富子
9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10. 遺構の略号は、土坑：SK、溝・溝状遺構：SD、柱穴及び小型の穴：P、井戸：SE、性格不明遺構：SXとした。
11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「10-KM」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2
第Ⅲ章 調査の方法.....	9
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 I区の調査	
1. 基本層序.....	10
2. 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	
(1) 自然流路.....	19
(2) 包含層出土の遺物・その他の遺物.....	21
3. 古代の遺構と遺物	
(1) 挖立柱建物跡.....	25
(2) 土坑.....	27
(3) ピット.....	41
(4) 性格不明遺構.....	49
(5) 包含層出土の遺物・その他の遺物.....	53
4. 中世の遺構と遺物	
(1) 挖立柱建物跡.....	55
(2) 土坑.....	70
(3) 井戸.....	89
(4) 溝.....	91
(5) ピット.....	100
(6) 性格不明遺構.....	112
(7) 包含層出土の遺物.....	114
5. 近世の遺物	
(1) 包含層出土の遺物.....	115
第2節 II区の調査	
1. 基本層序.....	115
2. 中世の遺構と遺物	
(1) 土坑.....	116
(2) 溝.....	116
(3) ピット.....	118
第V章 考察	
第1節 弥生時代から古代の検出遺構と遺物.....	152
第2節 神田ムク入道遺跡、中世検出遺構の性格と変遷.....	154
第3節 中世神田の景観復元—「長宗我部地検帳」にみえる中世の神田と神田ムク入道遺跡.....	163
第4節 神田ムク入道遺跡出土遺物の様相.....	174

挿図目次

Fig. 1	神田ムク入道遺跡調査区位置図	1
Fig. 2	高知市航空写真（昭和22・23年撮影）	6
Fig. 3	高知市航空写真（昭和34年撮影）	7
Fig. 4	神田ムク入道遺跡及び周辺の遺跡	8
Fig. 5	調査区位置図	9
Fig. 6	基本層序（1）	12
Fig. 7	基本層序（2）	13
Fig. 8	基本層序（3）	14
Fig. 9	I 区検出遺構全体図（古代）	15～16
Fig. 10	I 区検出遺構全体図（中世）	17～18
Fig. 11	自然流路検出位置図・SR1出土遺物実測図	20
Fig. 12	V層出土遺物実測図	22
Fig. 13	III・IV層出土遺物実測図（1）	23
Fig. 14	III・IV層出土遺物実測図（2）	24
Fig. 15	遺構内混入の遺物実測図	24
Fig. 16	SB1平面図・セクション図・エレベーション図・SB1～P6出土遺物実測図	26
Fig. 17	SB2平面図・エレベーション図	27
Fig. 18	SB3平面図・セクション図・エレベーション図・SB3～P2出土遺物実測図	28
Fig. 19	SK2・3・13・14平面図・セクション図・SK2・3・13・14出土遺物実測図	29
Fig. 20	SK16平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	30
Fig. 21	SK17・18平面図・セクション図・エレベーション図・SK17出土遺物実測図	31
Fig. 22	SK45・51・55・65・70～73・80平面図・セクション図・エレベーション図	32
Fig. 23	SK81～85平面図・セクション図・エレベーション図・縦出土状況図	33
Fig. 24	SK86・88・93・95～97・99・100平面図・セクション図・エレベーション図	35
Fig. 25	SK101・104・106～109・111・112・114平面図・セクション図・エレベーション図	36
Fig. 26	SK65・84・100・106・114出土遺物実測図	37
Fig. 27	SK115・116・119・122・124・126・127平面図・セクション図・エレベーション図・遺物及び縦出土状況図	39
Fig. 28	SK115・116・122・124・126出土遺物実測図	41
Fig. 29	P199・200・295・360・470・511・512・514～516・552・664平面図・エレベーション図	43
Fig. 30	P665・672・673・679・715・733・736・740・742・744・747平面図・エレベーション図・遺物及び縦出土状況図	44
Fig. 31	P752・763・765・766・770・783・784平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図	45
Fig. 32	P199・200・295・470・512・552・664・673・715・733・742・747・752・765・770出土遺物実測図	46
Fig. 33	SX2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図	48
Fig. 34	SX4平面図・セクション図	49
Fig. 35	SX4出土遺物実測図	50
Fig. 36	II層出土遺物実測図	51
Fig. 37	III層出土遺物実測図	52
Fig. 38	IV・V層出土遺物実測図	53

Fig. 39	遺構内混入の遺物実測図(1)	54
Fig. 40	遺構内混入の遺物実測図(2)	55
Fig. 41	SB4平面図・エレベーション図・SB4-P2出土遺物実測図	56
Fig. 42	SB5平面図・エレベーション図・SB5-P3・6出土遺物実測図	57
Fig. 43	SB6・7平面図・エレベーション図	58
Fig. 44	SB8平面図・エレベーション図・SB8-P5・6出土遺物実測図	59
Fig. 45	SB9平面図・エレベーション図	61
Fig. 46	SB10平面図・エレベーション図・SB10-P5出土遺物実測図	62
Fig. 47	SB11平面図・セクション図・エレベーション図・SB11-P8出土遺物実測図	63
Fig. 48	SB12平面図・セクション図・エレベーション図	64
Fig. 49	SB12-P2・3出土遺物実測図	65
Fig. 50	SB12-P4出土遺物実測図(1)	66
Fig. 51	SB12-P4出土遺物実測図(2)	67
Fig. 52	SB13平面図・セクション図・エレベーション図	68
Fig. 53	SB14平面図・エレベーション図・SB14-P8出土遺物実測図	69
Fig. 54	SB15平面図・セクション図・エレベーション図・SB15-P5・6出土遺物実測図	70
Fig. 55	SK5~8平面図・セクション図・エレベーション図・SK5・7出土遺物実測図	71
Fig. 56	SK9~12・15・19~22・26平面図・セクション図・エレベーション図	73
Fig. 57	SK23~25・28~31・33・34平面図・セクション図・エレベーション図	75
Fig. 58	SK15・21~23・28・29・34出土遺物実測図	77
Fig. 59	SK35~41平面図・セクション図・縦出土状況図	78
Fig. 60	SK35・36・39~41出土遺物実測図	79
Fig. 61	SK42・44・46~50・52・54平面図・セクション図	80
Fig. 62	SK53・56~61・63・66・67平面図・セクション図	82
Fig. 63	SK42・44・46・56・58・60・67出土遺物実測図	84
Fig. 64	SK68・74・75・77~79・89平面図・セクション図・縦出土状況図	86
Fig. 65	SK74・75・77~79出土遺物実測図	87
Fig. 66	SK91・92・98平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	88
Fig. 67	SK110・118平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	89
Fig. 68	SE1平面図・セクション図・縦出土状況図・出土遺物実測図	90
Fig. 69	SD1~3セクション図・SD1・3出土遺物実測図	91
Fig. 70	SD4セクション図・出土遺物実測図	92
Fig. 71	SD5・6セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	93
Fig. 72	SD7セクション図・出土遺物実測図	94
Fig. 73	SD8セクション図・出土遺物実測図	95
Fig. 74	SD9セクション図・出土遺物実測図	96
Fig. 75	SD10セクション図・遺物出土状況図	97
Fig. 76	SD10出土遺物実測図(1)	98
Fig. 77	SD10出土遺物実測図(2)	99
Fig. 78	SD11~13セクション図・エレベーション図・SD13出土遺物実測図	100
Fig. 79	P52・75・156・183・271・322・344・406・409・411・425・480平面図・セクション図・ エレベーション図・縦出土状況図	101

Fig. 80	P3・38・52・59・64・75・77・99・100・105・146・156・161・183・207・229・262・266・271・307・329・ 344・347・350・361・367・375・383・385・387出土遺物実測図	103
Fig. 81	P406・409・411・419・425・428・435・456・479・480出土遺物実測図	104
Fig. 82	P483・490・500・520・531・537・651・680・695・709・774平面図・セクション図・ エレベーション図・礎出土状況図	105
Fig. 83	P483・485・487・490・496出土遺物実測図	106
Fig. 84	P500・519～521・528・529出土遺物実測図	107
Fig. 85	P531・535・536出土遺物実測図	108
Fig. 86	P537・549・651出土遺物実測図	109
Fig. 87	P680・695・698出土遺物実測図	110
Fig. 88	P709・713・751・764・774・778出土遺物実測図	111
Fig. 89	SX3平面図・セクション図	112
Fig. 90	SX6平面図・セクション図・SX3・6出土遺物実測図	113
Fig. 91	II層出土遺物実測図	114
Fig. 92	I層出土遺物実測図	115
Fig. 93	II区検出造構全体図・II区北壁セクション図・SK128～130・SD15・16平面図・セクション図・ エレベーション図	117
Fig. 94	SK130・SD15・16出土遺物実測図	118
Fig. 95	神田ムク入道遺跡屋敷地の変遷(1)	161
Fig. 96	神田ムク入道遺跡屋敷地の変遷(2)	162
Fig. 97	神田ムク入道遺跡屋敷地の空間構成	162
Fig. 98	「マトコロヤシキ」推定地と周辺の小字	169
Fig. 99	神田小字図と中世の景観復元	170

表 目 次

Tab. 1～3	土坑一覧表	119
Tab. 4・5	ピット計測表	122
Tab. 6	SBピット計測表	124
Tab. 7～33	遺物観察表	125
Tab. 34	掘立柱建物跡計測表	160
Tab. 35～37	神田の小字と『神田之庄地検帳』の記載	171
Tab. 38	神田ムク入道遺跡出土遺物器種別出土点数と組成比	176
Tab. 39	神田ムク入道遺跡出土遺物用途別出土点数と組成比	176

写真図版目次

卷頭図版 1 井戸SE1完掘状況、溝SD10遺物出土状況	
卷頭図版 2 須恵器蓋・須恵器杯・瓦器皿・土師質土器杯・龜山焼須恵器壺・中国産白磁四耳壺・中国産青白磁皿・中国産灰釉壺	
PL. 1 調査前全景、調査区全景	185
PL. 2 I区完掘状況(第1面)、I区北西部完掘状況(第2面)	186
PL. 3 I区南壁、II区北壁	187
PL. 4 SE1半截状況、SE1完掘状況	188
PL. 5 SE1石組(上部)、同(下部)	189
PL. 6 SE1曲物出土状況、SK16	190
PL. 7 SK41疊出土状況、SK56セクション	191
PL. 8 SK106遺物出土状況、SD5・6疊出土状況	192
PL. 9 SD7、SD7セクション	193
PL. 10 SD8、SD8セクション	194
PL. 11 SD9、SD13完掘状況	195
PL. 12 SD10遺物出土状況	196
PL. 13 SB8-P6遺物出土状況、SB12-P4セクション	197
PL. 14 P651遺物出土状況、SX4	198
PL. 15 SK37・39・42完掘状況、SK40・56・124遺物出土状況、SK79・SD5疊出土状況、SD13セクション	199
PL. 16 SB12-P4・P75・271・483・500・747・SX4遺物出土状況、P480疊出土状況	200
PL. 17 SK23・124・III・V層遺物出土状況	201
PL. 18 SK122・P512・770・SX4・III層遺物出土状況	202
PL. 19 SD4・10・II・III層遺物出土状況	203
PL. 20 SR1・V層出土遺物	204
PL. 21 III・IV・V層出土遺物	205
PL. 22 SD4・SX3・SB3-P2・SK14・106出土遺物	206
PL. 23 SK122・124・126・P715・733・742・770出土遺物	207
PL. 24 P747・512・SX2・4・II層出土遺物	208
PL. 25 II・III層出土遺物	209
PL. 26 SK37・60・SD6・SX1・III層出土遺物	210
PL. 27 SK22・SD4・P322・425・SB12-P3・SX3出土遺物	211
PL. 28 SB12-P3・4出土遺物	212
PL. 29 SB12-P4・SK29・42出土遺物	213
PL. 30 SK79・118・SD4・6・10出土遺物	214
PL. 31 SD10・13・P75出土遺物	215
PL. 32 P271・375・425・483・528・537・651・709・764出土遺物	216
PL. 33 SD16・II・III層出土遺物	217
PL. 34 発掘作業風景、神田小学校児童の遺跡見学会	218

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

神田ムク入道遺跡は高知市西部の神田地区に所在し、鷲尾山脈の北に広がる丘陵部の先端付近に立地している。平成7年度に行われた発掘調査では、中世の屋敷跡に関わる多くの遺構と遺物が確認され、また同年、北側の隣接地にて行われた試掘調査でも、水成堆積層内から弥生時代前期末～中期の遺物が出土している。

平成22年、遺跡の範囲内においてグループホーム及び地域密着型特定施設の建設が計画され、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対して提出された。これを受けて、高知市教育委員会が平成22年6月2日から6月8日にかけて試掘確認調査を行い、その結果、工事予定地内の3箇所の試掘坑全てにおいて、中世の遺構と遺物を確認した。試掘調査の結果を受けて、高知県教育委員会の指導の下、開発者である社会福祉法人ふるさと自然村と高知市教育委員会の間で協議を行い、当該地の建物建設予定地部分について、高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

本調査は平成22年8月30日から12月1日にかけて実施した。

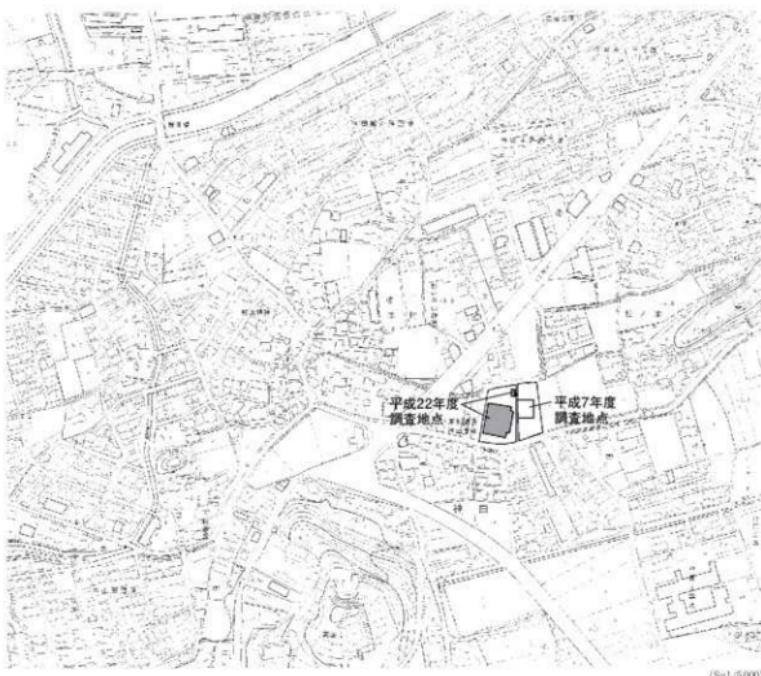


Fig.1 神田ムク入道遺跡調査区位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

神田ムク入道遺跡が所在する高知市の平野部は、北部と南部を東西に延びる小起伏山系によって挟まれた地溝状の盆地である。平野部の基盤地質は秩父累帯中帯と南帯に属しており、その上は沖積層によって広く覆われている。この平野の堆積には、秩父累帯北帯に源を発する鏡川が多くの役割を担い、さらに周囲の山々より流れ込む久万川、神田川、吉野川などの小河川がそれを部分的に補ったものとみられる。鏡川は多くの支流を集め、高知市鏡の川口付近より水量を増して南進した後、高知市尾立付近から川幅を広げ扇状地を形成している。神田ムク入道遺跡周辺にもこの扇状地が広がっており、かつての鏡川は低湿地を何度も河道を変えつつ様々なに流路を形成していたものと思われる。

神田ムク入道遺跡は、高知市の南部を東西に連なる宇津野山、烏帽子山、柏尾山を含む鷺尾山脈の北側丘陵の先端付近にあり、神田川を北に臨む微高地に立地している。鏡川の一支部である神田川は現在、高知市西部の小丘陵である針木の谷を発した後、東進して現在の高知市朝倉、鶴部、神田地区を流れるが、かつてその河道は一定せず、度々氾濫を繰り返したとみられている。このため神田地区周辺には蛇行する河道跡らしい地形が幾筋か認められている。(Fig.2・3)

今回の調査では、古墳時代以前の堆積層で、川砂利と砂の層、粘土層などが確認されており、古墳時代以前にはここが河川の一部や湿地であったことが推定される。またこうしたことから、本遺跡が居住域として安定し始めるのは、古代以降と考えられる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

神田ムク入道遺跡は、烏帽子山、柏尾山の北側丘陵の先端付近にあり、周囲の丘陵部や山腹には、シルタニ遺跡、ケジカ端遺跡、高神遺跡、神田遺跡、高座古墳、舟岡山古墳、舟岡山遺跡、神田南城跡など、弥生時代から中世の遺跡が多く分布している。また、丘陵部先端付近の微高地には御手洗遺跡、神田川以北の低地と周囲の独立丘陵には、柳田遺跡^(注1)、鶴部遺跡^(注2)、加治屋敷遺跡、鶴部城跡、神田旧城跡、石立城跡などが分布している。

縄文時代の遺跡では、1km南西の低地に柳田遺跡があり、包含層より縄文時代後期～晩期の遺物が出土している。同遺跡では弥生時代から古墳時代の流路跡、土坑などの遺構も検出されており、多量の遺物が出土している。また600m北にある鶴部遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代後期までの遺物が出土し、弥生時代の竪穴住居跡や土坑などの遺構が検出されている。

弥生時代の遺跡は、先の柳田遺跡、鶴部遺跡の他、神田ムク入道遺跡の西250mにある御手洗遺跡や、南西370mの井城山の尾根筋と南東斜面にあるシルタニ遺跡とケジカ端遺跡などが確認されている。御手洗遺跡では弥生時代中期の集落跡が確認され、該当期の竪穴住居跡や土坑が検出されている。^(注3) また、シルタニ遺跡では弥生時代の石包丁が出土し、ケジカ端遺跡でも弥生時代の石包丁や石斧が出土している。この他、南西の独立丘陵の先端付近にある神田遺跡でも弥生時代の遺物が

確認されている。また、南西にある舟岡山遺跡では弥生土器が確認されているが、現在は宅地化が進み遺跡の大半が消滅したとみられている。

古墳は、丘陵部や山腹に、古墳時代後期の舟岡山古墳と高座古墳がある。高座古墳は山腹の東斜面に立地する径10mの円墳で、横穴式石室をもつ。舟岡山古墳は舟岡山の南斜面に位置する円墳で、横穴式石室をもつと思われるが、石室は消滅している。

古墳時代から古代の遺跡では、井城山の東に続く丘陵部東斜面に高神遺跡があり、須恵器壺が出土している。また井城山の尾根筋に立地するシルタニ遺跡でも平安時代の須恵器壺が出土している。神田川以北では、先の鶴部遺跡において古代の掘立柱建物跡、柵列、溝跡などが検出されている。また700m西方にある加治屋敷跡でも土師器杯、須恵器蓋・壺などの古代の遺物が出土している。

中世の遺跡では、北東750mに石立城跡、北方600mに神田旧城跡、南西500mに神田南城跡、北西1.2kmに鶴部城跡がある。神田南城跡は井城山の尾根にある山城で、城主は細川宗桃・鍋島修理と伝えられる。

古代

『和名類聚抄』によると、古代の神田地区は「土佐郡」に属し、「神戸」郷にあたると考えられる。『続日本紀』神護慶雲2年(768)条には、「土左国土左郡入神依田公名代等冊一人賜姓賀茂」とあり、土佐郡神依田(神田か)の名代ら41人が賀茂の姓を賜ったとの記事がみられる。また隣接する「鶴部」郷の地名にも「賀茂」との共通性がみえ、古代の「神戸」「鶴部」郷と古代豪族「賀茂氏」との強い関わりが推定される。

また『東大寺東南院文書』によると、天平勝宝4年(752)の『造寺司牒』の封戸施入記事に「土左郡鶴部郷五十戸」とあり、鶴部郷に東大寺の封戸が存在していたことが分かる。

この様に、古代の神田、鶴部については、大和の豪族や寺院との密接な関係性が窺われ、東大寺領となった鶴部郷とその周辺域の開発がこの頃から促進されたとみられる。朝倉、神田地区一帯には、条里地割(土地区画)が今も認められるが^(註4)(Fig.2・3)、これらの古代律令制下の土地開発が中央との強い関係性のもとで進められたとみられる。

この後の鶴部郷と東大寺の関係については記録が無く、以降も寺領莊園になったとの断定はできない。しかし、『東大寺東南院文書』久安4年(1148)の条には、「土左国百畠 同代米二百六十四石六斗二升以色代如形弁之」とあり、土佐では東大寺の封戸が引き続いて平安末期頃まで存在していたことが分かる。

中世

中世前期の神田については史料が乏しく、不明な所が多い。しかし、天正16年(1588)の『長宗我部地検帳』には、一宮庄、神田庄、朝倉庄、領家分の莊園名がみえ、領主は不明ながら、中世の神田がそれ以前に莊園化されていたことが窺われる。また神田ムク入道遺跡の南の尾根上には、永祿年中に細川氏が築いたとされる神田南城跡が存在する他、周間に神田旧城跡、石立城跡、鶴部城跡などの中世城跡が存在する。

これらの城主がどのように変遷したかは明らかでないが、2.3km北西にある杓田には、有力地頭の大黒氏が居り、朝倉、鶴部、神田にも勢力を及ぼしていたことが推測される。『佐伯文書』^(註5)に

よると、南北朝期には大黒氏は北朝方に属し、大高坂松王丸ら南朝方と戦って勝利した後は、有力守護の細川氏との関係を維持しつつ当地域を支配していたものと考えられる。

これ以後、当地域に勢力を及ぼしていたとみられる有力土豪としては、高岡郡東部の蓮池を本拠地とした大平氏があり、「土左郡鶴部社棟札」^(註6)に「鶴部御社大檀那大平山城主守国雄永正元年甲子九月十日」の文字があることから、永正元年（1504）頃には一定の勢力をもっていたことが窺われる。

しかし、大永7年（1527）の「朝倉庄池内天神社棟札」^(註7)には、後に本山氏となる「八木実茂」の棟上が記されており、嶺北地域より台頭してきた本山氏の勢力が及んでいることがみてとれる。本山氏は朝倉城を築き、浦戸湾以西の地域に支配を及ぼすこととなった。

永禄3年（1560）に長宗我部元親が本山氏を長浜の戦で破って以降、永禄6年（1563）本山氏が朝倉城を捨てて敗退するまで、両者の戦いは続き、神田も戦場となった。本山氏方に属し敗れた者の土地は『地検帳』にみる長宗我部家臣の所領となったとみられる。このような変転の中、長宗我部氏の一族との伝承がある大黒氏は、一時は本山氏の支配を受けながらも、長宗我部氏の挙兵に伴って本山方と戦い^(註8)、その戦功によって『長宗我部地検帳』にみえる杓田、鶴部、大高坂などの所領が安堵された。

天正16年（1588）の『長宗我部地検帳』「土佐郡神田之庄地検帳」には、莊園支配者の居住地を思わせる「マトコロヤシキ」（政所屋敷）や、「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「シウケンヤシキ」など在地有力者の居宅を思わせる記載も見えており、当時の神田が重要な地域であったことが推察される。

近世

山内氏の土佐入国後、長宗我部氏のもとにあった一領具足とよばれる在地の武士の多くは、農民や郷士となり、藩の支配体制に組み入れられていった。

神田村は元禄の『地払帳』によると、総地高は一千三四石余で、うち本田高八七八石余、新田高一五五石余である。本田は蔵入地が百六石余で、他は桐間将監ら22名の知行地であり、新田は貢物地七二石余、残りは久万彦兵衛及び1名の役地と三橋源五良他2名の領地となっている。また、寛保の『郷村帳』には家数一二九、人數六三八とある。

なお、神田から南西に道をとり、白土峠を越えると、中世には隆盛を誇った觀正寺（観音正寺）跡を経て、吾南平野に至る古道が通じており、城下町と豊かな農業地帯である現高知市春野町を結ぶ幹道となっていた。

〔註〕

- 1)「柳田遺跡」高知県文化財団埋蔵文化財センター1994年
- 2)「鴨部遺跡」高知市教育委員会2002年
- 3)「御手洗遺跡発掘調査現地説明会資料」高知市教育委員会2011年
- 4) 大脇保彦「土佐の条里－ その復元再考と補説」『高知の研究 第2巻』清文堂1982年
- 5)「土佐國齋簡集拾遺」卷一所収
- 6)「土佐國齋簡集拾遺」卷四所収
- 7)「土佐國齋簡集拾遺」卷三所収
- 8)「土佐國齋簡集拾遺」卷九所収「大黒弾正忠宛 長宗我部元親書状」

〔参考文献〕

- 『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
『日本の地質8－四国地方』日本の地質 四国地方編集委員会編1991年
『高知県の地名』日本歴史地名大系40 平凡社1983年
『高知市史 上巻』高知市史編纂委員会編1958年
『高知県史 古代中世編』高知県編1971年
『高知県の歴史』荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興 山川出版2001年



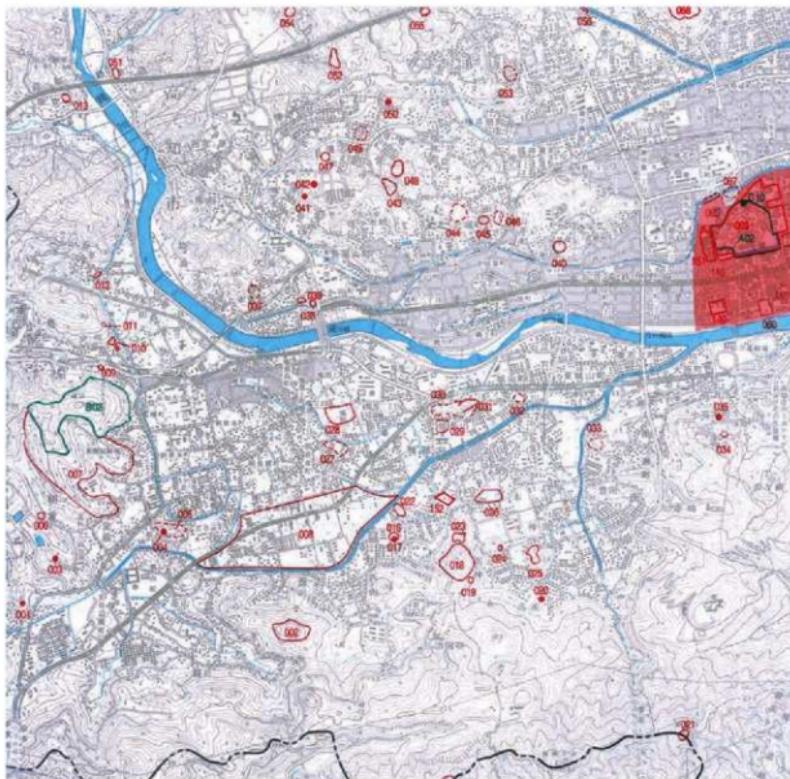
(S=1/20000)

Fig.2 高知市航空写真（昭和22・23年撮影）



(S=1/6000)

Fig.3 高知市航空写真（昭和34年撮影）



■ 郭中参考地

(S=1/35,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
026	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	024	高神遺跡	古墳・古代	048	からーと口遺跡	弥生
001	鶴平山古墳	古墳	025	神田遺跡	弥生～中世	049	福井別城跡	中世
002	恵美須山古墳	中世	027	鶴郡城跡	中世	050	福井古墳	古墳
003	行宮古古墳	古墳	028	政治大臣遺跡	古代～中世	051	尾立遺跡	古代～中世
004	ワルス山古墳	古墳	029	鶴郡遺跡	弥生	052	中の谷遺跡	弥生
005	藤永野城跡	中世	030	神田山城跡	中世	053	葛武保宇城跡	中世
006	朝倉城山第2遺跡	弥生	031	能茶山古跡	近世	064	勾ヶ谷遺跡	築文～弥生
007	朝倉城山遺跡	弥生	032	石立城跡	中世	055	福井遺跡	築文～中世
008	柳田遺跡	築文～古墳	033	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	056	初月遺跡	弥生
009	野中御原覗跡	江戸	034	小石木山遺跡	弥生	060	南御原駿跡	近世
010	朝倉社	古代～	035	小石木山古墳	古墳	061	中島町遺跡	古墳
011	手曳山遺跡	弥生	037	約田城跡	中世	063	大高坂城跡	中世
012	朝倉城寺寺遺跡	古代	038	上本宮町遺跡	弥生	063	高知城跡	近世
013	旧官守寺跡	古代～	039	約田遺跡	古墳	066	尾戸遺跡	弥生
016	舟岡山遺跡	弥生	040	丹口城跡	中世	067	尾戸廻路	近世
017	舟岡山古墳	古墳	041	塚の原1号墳	古墳	068	安樂寺山城跡	中世
018	神田山城跡	中世	042	塚の原2号墳	古墳	146	高知城伝下尾戸跡	古墳～近世
019	テジカ端遺跡	弥生	043	高知市阿波裏遺跡	弥生～古代	149	金子橋遺跡	近世
020	高東古墳	古墳	044	福井西城跡	中世	151	西弘小路遺跡	近世
021	鶴尾城跡	中世	045	福井元尾城跡	中世	152	御手洗遺跡	弥生～中世
022	鶴山城台古遺跡	弥生～中世	046	福井元城跡	中世	A 02	国指定史跡高知城跡	近世
023	シルタニ遺跡	弥生～古代	047	桶内遺跡	弥生	B 02	県指定史跡朝倉城跡	中世

* No.は高知市道路地図による。

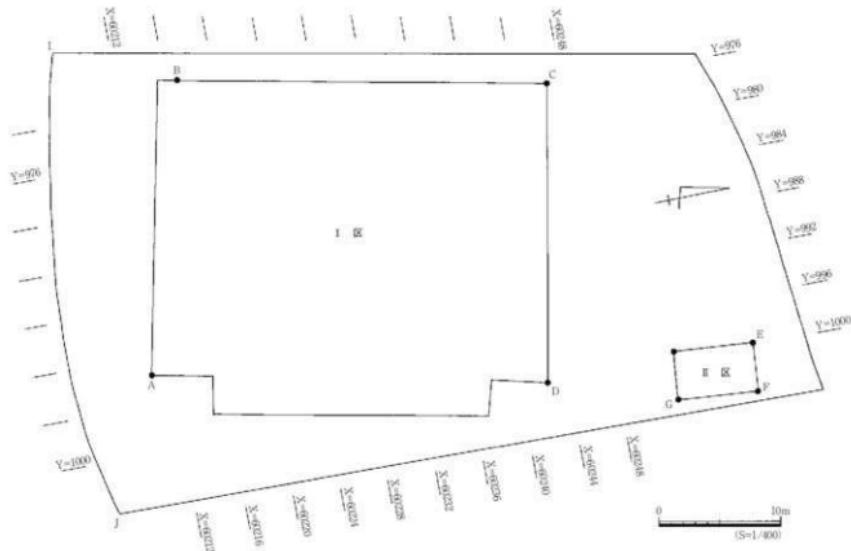
Fig.4 神田ムク入道遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法

調査区は、本体建物の建設予定地部分をⅠ区、その北東側にあたる付属施設の予定地部分をⅡ区とした。各調査区とも遺構検出面は旧耕作土の直下であり、上面には近現代の整地層が厚く堆積していた。そのため重機を用いて整地層と旧耕作土層を除去し、その後、人力による遺構検出と遺構掘削を行った。遺構検出は、古代・中世の遺物包含層であるⅡ層の上面とⅢ層上面、Ⅲ層下位の3面にて行った。Ⅲ層以下での堆積状況の確認にあたっては、重機掘削を行い、遺物の集中が認められた箇所では人力による精査を行った。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、世界測地系公共座標に基づく4m×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市神田414番地先に設定された高知市第2地区補助点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。



測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標
B	60216973	970249	E	60259.607	1000.034	I	60207.346	966.000
C	60246.776	976.075	F	60259.282	1004.028	J	60205.022	1004.296
D	60242.388	1000.207	G	60252.682	1003.578			

*測点A～Dは検出遺構全体図のA～D点位置と対応する。

Fig.5 調査区位置図

第IV章 調査の成果

第1節 I 区の調査

1. 基本層序

基本層序は調査 I 区の南壁・北壁・西壁で観察した。各地点とも近現代の整地層と耕作土の直下が古代・中世の遺構検出面となっており、近世の遺物包含層は残存しない。また、古代・中世の遺物包含層 II 層についても、上面が強く削平されている。

I 区南壁・北壁・西壁にて観察した堆積層の内容は次の通りである。(Fig.6～8)

I - 1 層 : 10YR3/2 黒褐色シルト

I - 2 層 : 10YR6/6 明黄褐色シルト

I - 3 層 : 10YR5/2 灰黄褐色シルト

I - 4 層 : 10YR6/2 灰黄褐色シルト

II 層 : 10YR4/2 灰黄褐色シルト (0.2～0.5cm 大の角礫と 1～2cm 大の円礫を少量含む。)

II' 層 : 10YR4/2 灰黄褐色シルト (粗砂、0.2～0.5cm 大の角礫と 1～3cm 大の円礫を多く含む。)

III 層 : 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (0.2～0.5cm 大の角礫を少量含む。部分的に砂が混じる。)

III' 層 : 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト

IV 層 : 10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂 (部分的に粗砂が混じる。)

V - 1 層 : 10YR5/1 褐灰色砂 (0.5～1cm 大の円礫を少量含む。)

V - 2 層 : 10YR5/1 褐灰色砂礫 (粗砂に 0.5～3cm 大の円礫を多く含む。)

V - 3 層 : 10YR5/1 褐灰色粗砂 (粗砂に 0.5～3cm 大の円礫を少量含む。)

V - 4 層 : 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 (粗砂に 0.5～4cm 大の円礫を多く含む。)

V - 5 層 : 10YR4/1 褐灰色粗砂 (1～2cm 大の円礫を少量含む。)

I - 1 層と I - 2 層は表土と近現代の整地層、I - 3 層と I - 4 層は近現代の旧耕作土と床土であり、I 層内には近世から近現代の遺物が少量含まれている。

II 層は古代・中世の遺物包含層にあたる灰黄褐色シルト層である。II 層は調査区全体で検出されるが、調査区西側部分では、シルトに粗砂と礫を多く含む II' 層となっている。

III 層は古墳時代から古代の遺物包含層にあたるにぶい黄褐色シルト層である。また一部、弥生時代末から古墳時代初頭の遺物も含まれている。

IV 層も古墳時代から古代の遺物包含層で、III 層と V 層の間に薄く堆積する灰黄褐色シルト質砂層である。遺物量は少量であるが、古墳時代から古代 7 世紀までの遺物が出土している。IV 層は調査区東部で検出されたもので、調査区西部では III 層の直下が V 層となっている。

V - 1～V - 5 層は砂層と砂礫層からなる河川堆積層である。遺物の出土が確認できるのは最上層にあたる V - 1 層と V - 4 層で、ここより弥生時代末から古墳時代の遺物が出土している。これ以下の V - 2・3・5 層では出土遺物は確認できていない。

各層の堆積状況によると、本調査区にて IV・V 層が堆積する古墳時代以前には、当地域は北方を蛇行して流れる河川（鏡川の支流にあたる現在の神田川）の影響を強く受ける環境下にあり、進路

を様々に変えた支流の河筋にあたっていたとみられる。特に、調査区南壁の西側部分と西壁、及び北壁のV層上面では、自然流路とみられる砂礫層(SRI・2)を検出しており、ここから弥生時代末～古墳時代の遺物がまとまって出土している。統いて、Ⅲ層の堆積が進んだ古代7世紀頃には、本調査区付近は安定した立地環境へ移ったとみられ、古代以降、遺構群が出現する。

ここで包含層Ⅱ層とⅢ層についてその広がりと高低をみると、Ⅲ層の最上面は南壁東部で標高4.3m、南壁西部で標高4.3m、北壁東部で標高4.4mとなっており、北側が僅かに高まっている。また、北壁の西部側はⅡ層が残存しないが、Ⅲ層が標高4.5mまで高まっている様子が観察された。これらのことより、古代以降、本調査地点は北を流れる河川(旧神田川)の自然堤防上に形成された微高地となって安定し、開発が進められたとみられる。

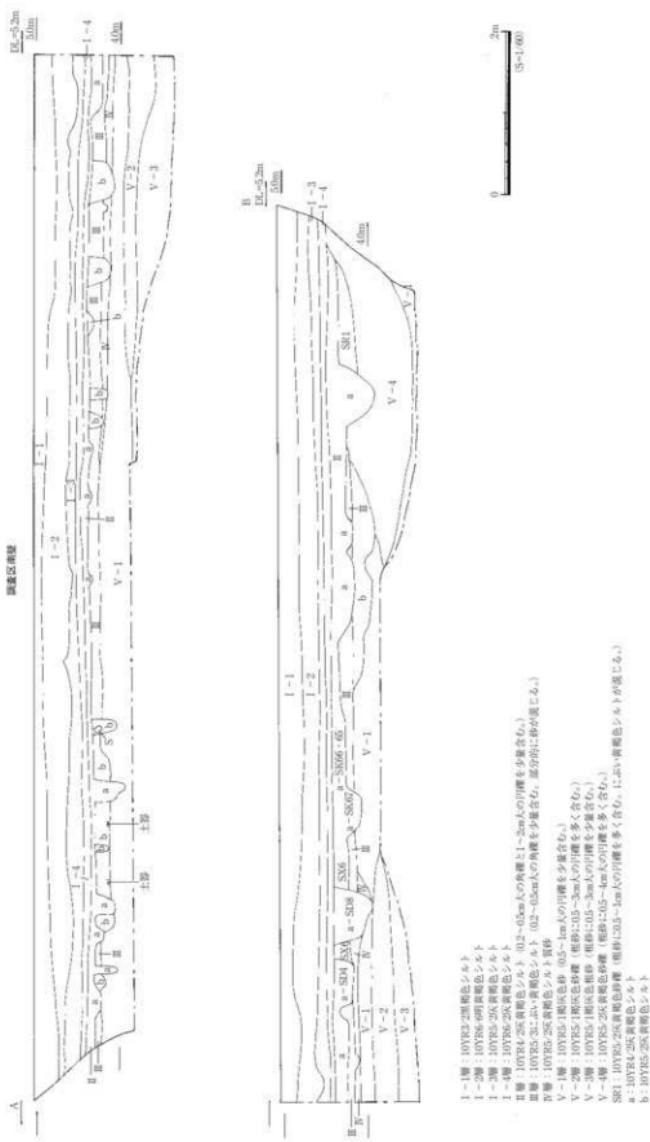


Fig.6 基本層序 (1)

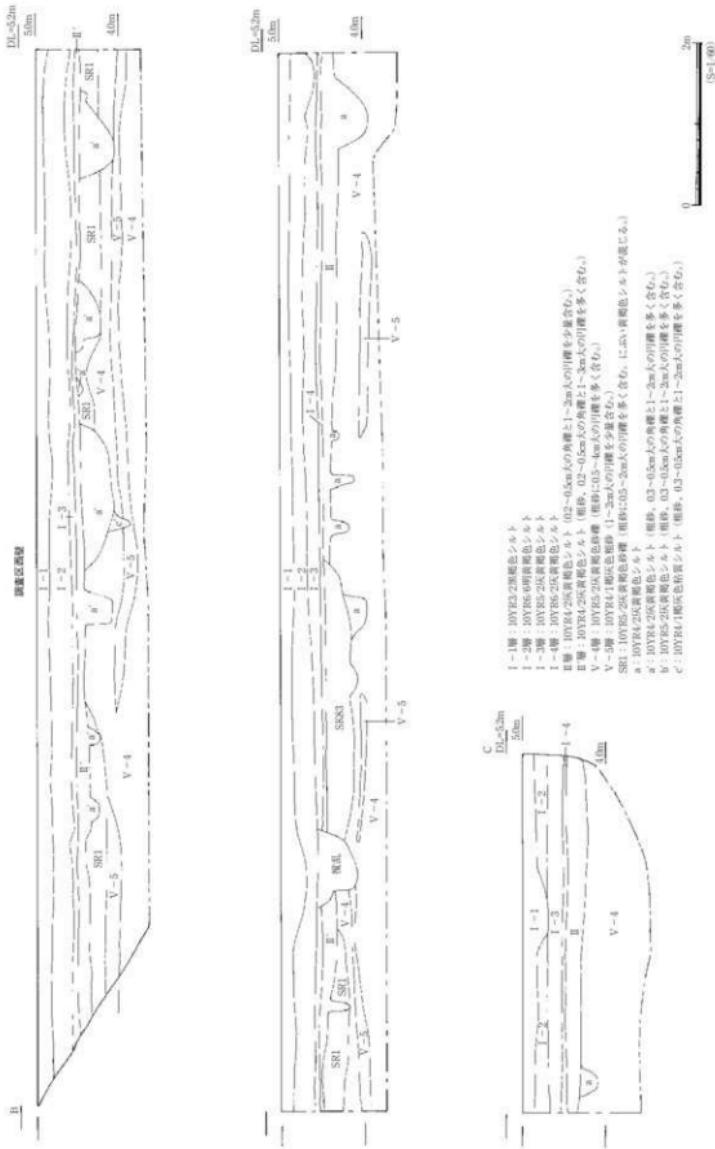


Fig.7 基本層序 (2)

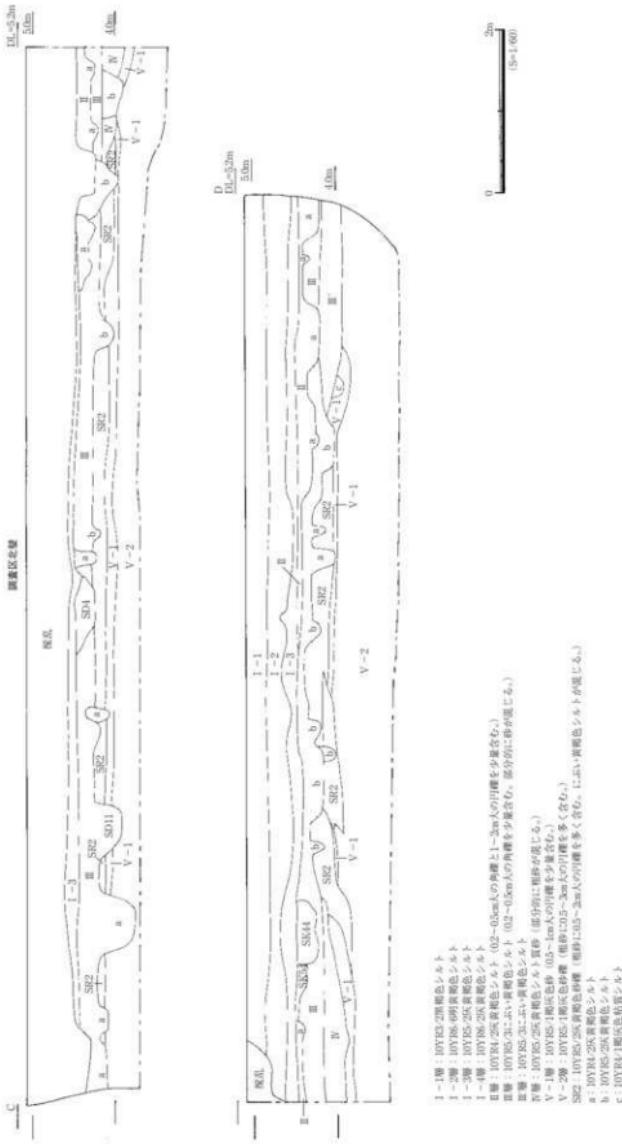


Fig.8 基本層序 (3)

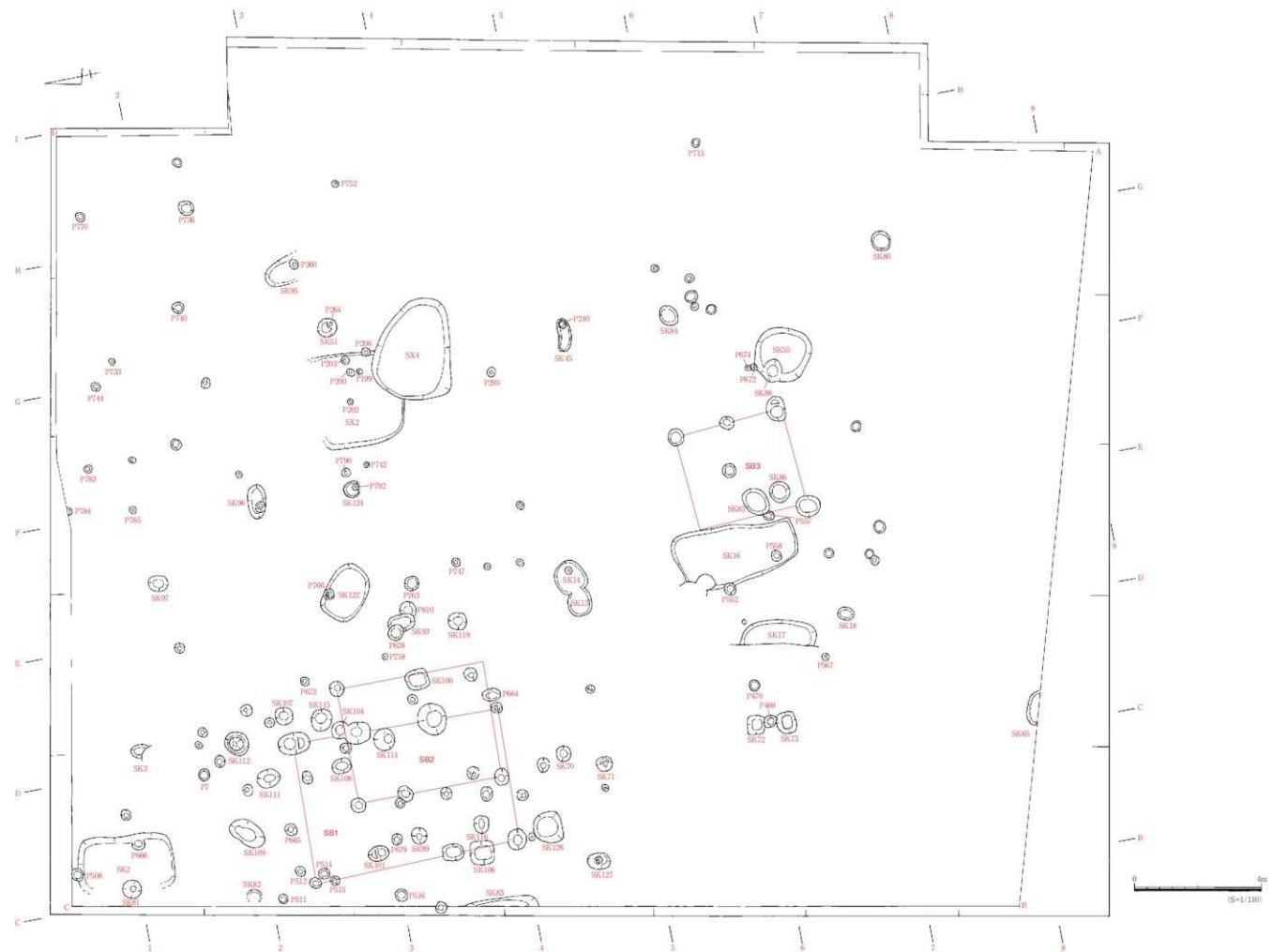


Fig.9 I区検出遺構全体図(古代)

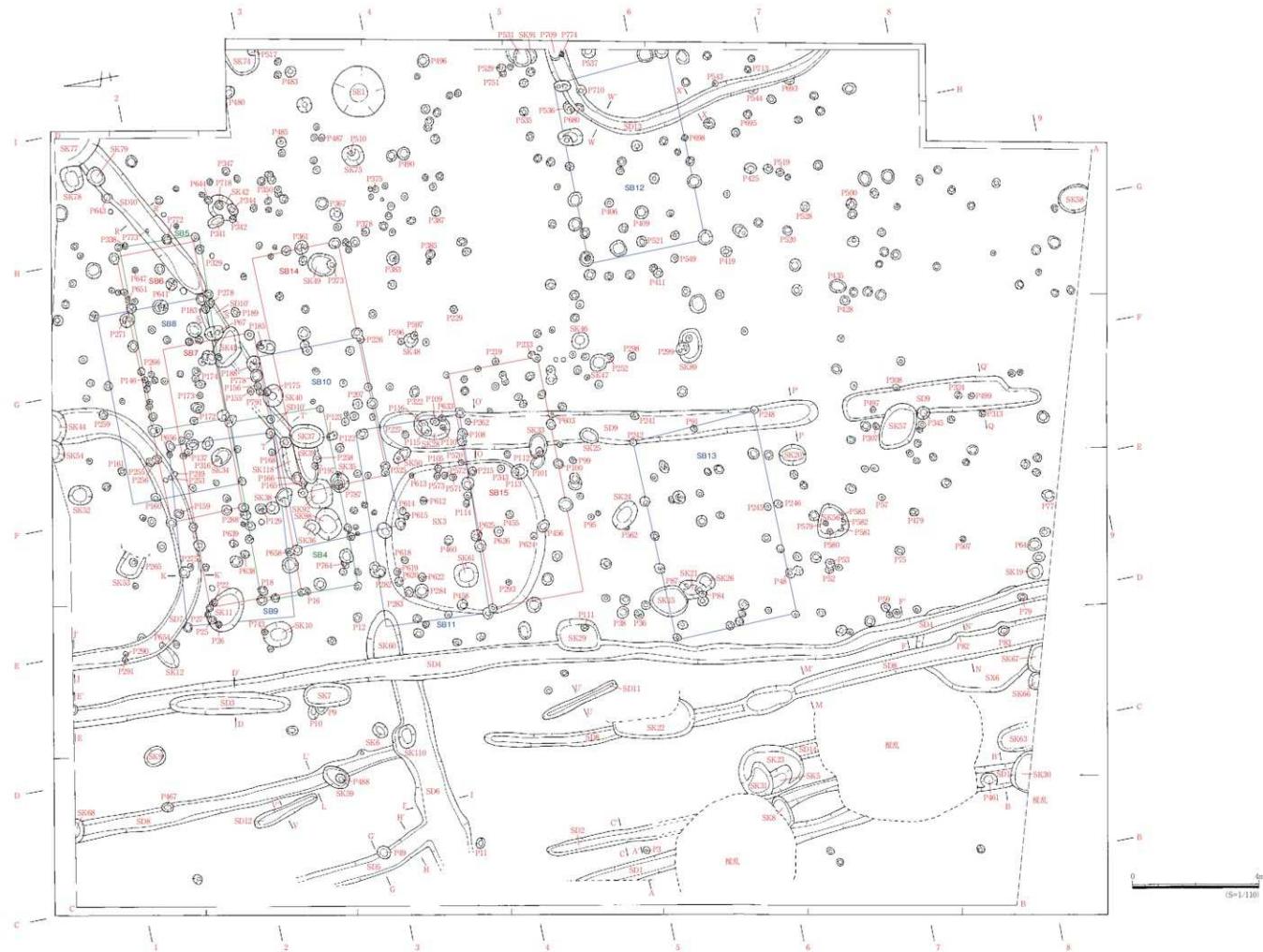


Fig.10 I 区検出遺構全体図 (中世)

2. 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

今回の調査区では、弥生時代・古墳時代の遺構は未検出であるが、調査区南壁の西側部分と西壁、北壁にて、自然流路に関わる古墳時代の堆積層(SR1・2)を検出した。また、Ⅲ層以下の検出作業の際にも、平面上でⅢ層(シルト層)・Ⅳ層(砂質シルト層)・V層(砂礫層)の境界線が数箇所検出されており、各々のラインが北西から南東の方向を示す様子が検出された。(Fig.11) この流路の方向については、当時、本流であった旧鏡川が高知市の北西を源流として東へ向かい、その支流も蛇行しながら東進したことと照合すると、北西から南東へ向かっていたと推察される。

弥生時代・古墳時代の遺物は、自然流路(SR1)と遺物包含層Ⅲ層・Ⅳ層、V-1・4層内から出土している。

(1) 自然流路

SR1 (Fig.6・7・11)

調査区南西部にて検出された砂礫層で、自然流路の一部と考えられる。検出面はⅢ層下位にあたる標高4.3mのレベルであり、Ⅲ層下位を切っている。平面プランでは、北西から南東に向かって延びる東岸のラインが16mにわたって検出されており、岸以東にはⅢ層が堆積する。

調査区南壁と西壁での堆積状況を観察すると、SR1はV層(砂礫層)の上面に堆積する深さ20cm前後の浅い溜まりであり、上面には古代・中世の遺物包含層であるⅡ層が堆積している。埋土は灰黄褐色砂礫で、粗砂に0.5~2cm大の円礫を多く含んでおり、これにⅢ層と同質のにぶい黄褐色シルトが混じっている。

出土遺物は弥生土器及び古式土師器の壺・高杯、須恵器壺・瓶等である。遺物は特に南側にあたるB-7グリッド地点から多く出土し、土器片約150点が得られているが、小破片のものが殆どである。また、その他の地点では出土量は極めて少ない。

図示したものは弥生土器及び古式土師器の高杯(1)・壺(2~7)、須恵器壺(8)・壺又は瓶(9)である。このうち、1~4・6・7・9がB-7グリッド地点からまとまって出土したものである。1は弥生時代後期の高杯。5は弥生時代末の壺の底部。3・4・6・7は弥生時代末~古墳時代初頭の壺で、4・6・7は体部外面にタタキ目が顕著に残る。2は古墳時代前期の壺で、内外面ナデ調整である。

SR1は古墳時代に比定される。

SR2 (Fig.8)

調査区北壁にて観察された砂礫層で、深さ20~30cmの浅い落ち込みが広がっている。平面プランの検出が出来ていないが、埋土や堆積状況の特徴がSR1に共通しており、同様の流路の一部と考えられる。北壁セクション(Fig.8)によると、SR2の検出面は標高4.2m前後で、SR2の上面にはⅢ層、下面にはV層が堆積している。埋土は灰黄褐色砂礫で、粗砂に0.5~2cm大の円礫を多く含んでおり、これにⅢ層と同質のにぶい黄褐色シルトが混じっている。

出土遺物は確認できていないが、V層及びⅢ層との前後関係からみて、SR2は古墳時代に位置付けられる。

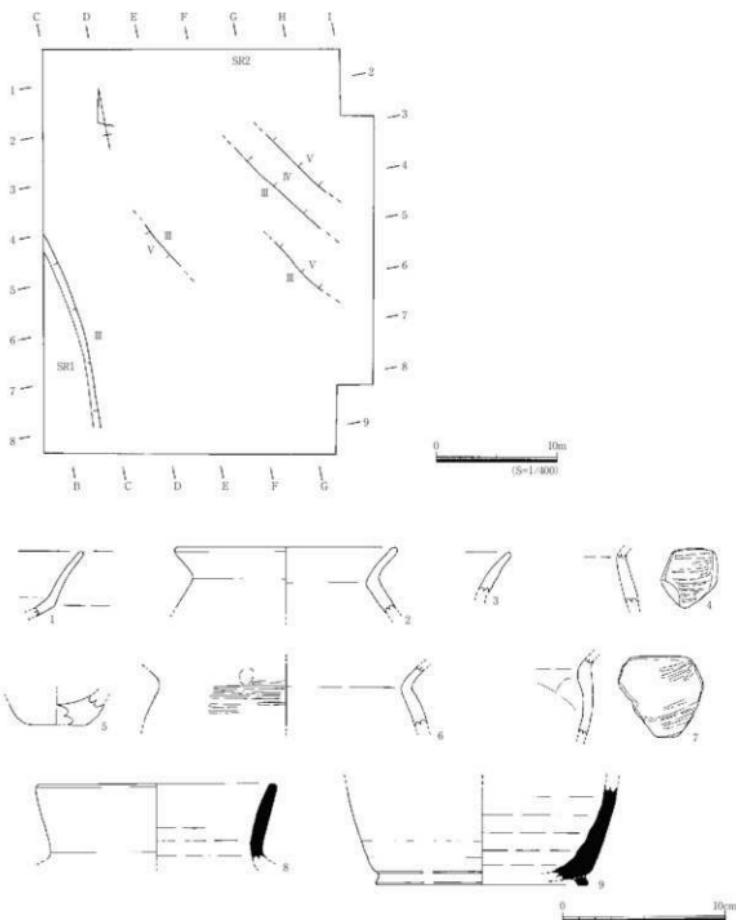


Fig.11 自然流路検出位置図・SR1出土遺物実測図

(2) 包含層出土の遺物・その他の遺物

V-1・V-4層出土の遺物 (Fig.12)

V-1・V-4層は標高4.0～4.1m前後に堆積する褐灰色砂層・灰黄褐色砂礫層である。遺物の出土は疎らであるが、ここより弥生時代末～古墳時代の遺物が出土している。

図示したものは弥生土器の壺(10)、弥生土器及び土師器の壺(11～20・28)・鉢(21)・高杯(22～27)、叩石(31)、須恵器蓋(29)・壺(30)である。10は弥生後期末の二重口縁壺。11・12・14・15・17～20は弥生時代末～古墳時代初頭の壺で、12・15・17・19・20は体部外面にタタキ目が残る。22・23・25・26・27は同期の高杯で、脚部(26・27)は接合部で剥離する。13は古墳時代前期の壺で、長く伸びる口縁部をもつ。同タイプの壺は宮崎県に分布し、高知県西部の西ノ谷遺跡にて出土が報告されている。21は古墳時代中期の丸底の鉢で内外面にナデを施す。30は古墳時代の須恵器壺の口縁部で、外面に断面三角形の突帯と樹描波状文を巡らせる。31は砂岩製の叩石で画面の中央と周縁に敲打痕を認める。

IV層出土の遺物 (Fig.13・14)

IV層は標高4.1～4.2mの間に堆積する灰黄褐色シルト質砂層である。IV層からの出土遺物は少量であるが、古墳時代から古代7世紀までの遺物が出土している。

図示したものは土師器壺(32)、須恵器杯(50)・甌(41)である。32は古墳時代前期の壺で、体部外面はタタキの後ハケとナデ調整を施す。41は外面上半に回転カキ目調整を施す。50は6世紀末～7世紀の杯身である。

III層出土の遺物 (Fig.13・14)

III層は標高4.2～4.4mの間に堆積するにぶい黄褐色シルト層で、古墳時代から古代の遺物包含層にあたる。同層からは古墳時代後期から古代8・9世紀までの遺物が出土しているが、特に古墳時代後期から古代7世紀までのものについてはIII層下位からの出土が目立つ。

図示したものは土師器壺(33)、須恵器杯(49・51～54)・杯蓋(36・37)・高杯(38)・平瓶(39)・平瓶又は提瓶(40)・甌(41)・甌又は壺(44～46)・壺(47)・瓶(48)・器種不明(42・43)、弥生土器及び土師器の壺(35)・器種不明(34)である。33は古墳時代初頭の土師器壺で、体部内面にヘラケズリを施す。35は弥生時代末～古墳時代初頭の壺の底部。34も同時代のものとみられる器種不明の底部片である。39は古墳時代後期の平瓶で、天井部に粘土を充填する。40は平瓶又は提瓶とみられるもので、体部に回転カキ目調整を施す。39と同様の粘土充填が考えられるが、充填部分は剥離する。42も回転カキ目調整が施されるが小破片のため器種は特定できない。41は甌で、体部上半に回転カキ目調整を施す。44～46は甌又は壺の体部片で、44は2条の沈線間に斜め方向の刻み目が施される。また45も同タイプとみられるものである。43は小破片のため器種不明であるが、把手が貼付されている。49・51～54は6世紀末～7世紀の杯身で、底部が残存する49は外底に回転ヘラケズリが施される。

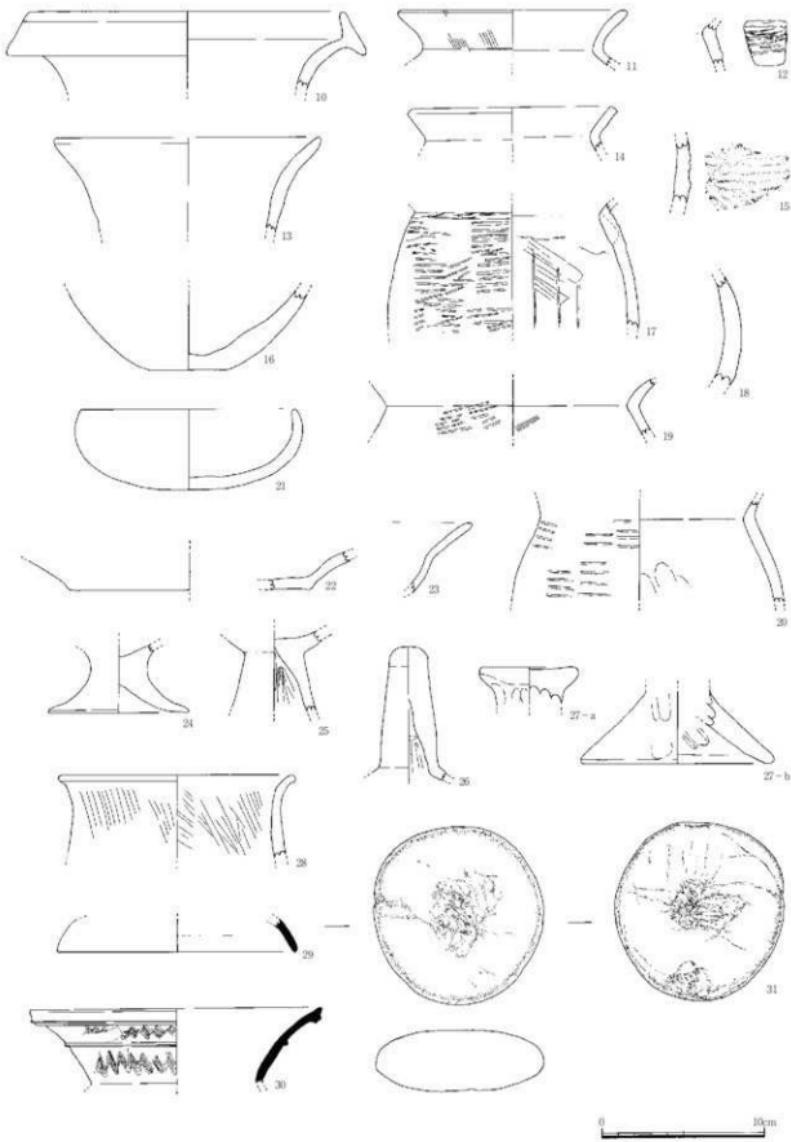


Fig.12 V層出土遺物実測図

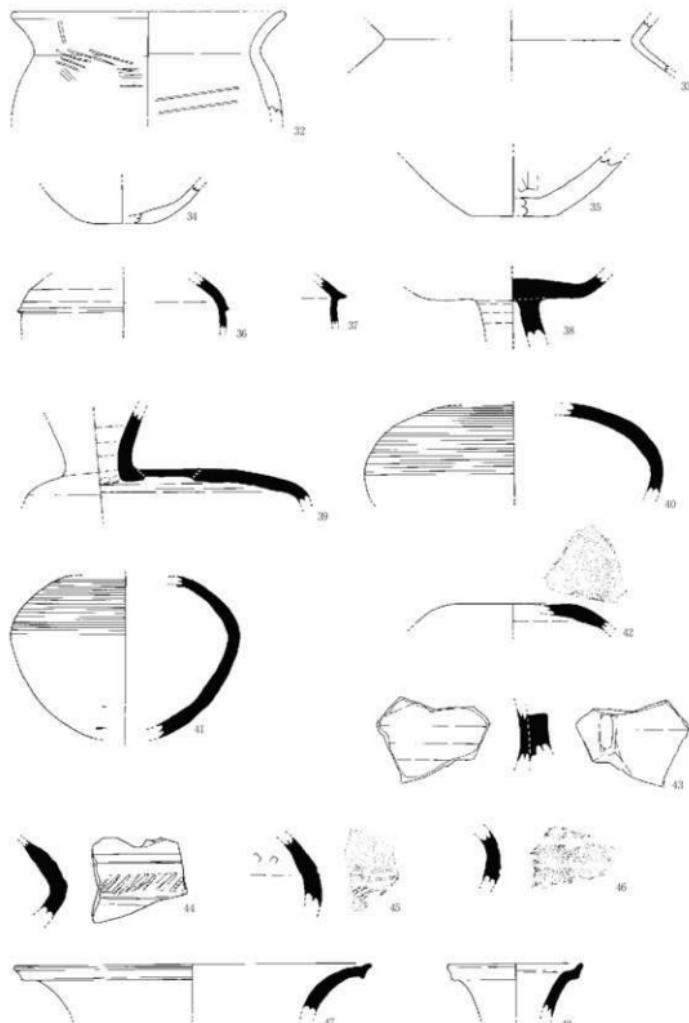


Fig.13 III・IV層出土遺物実測図(1)

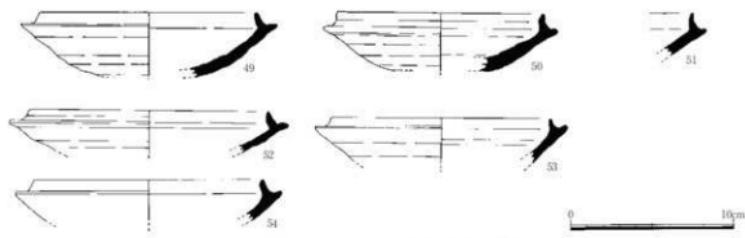


Fig.14 III・IV層出土遺物実測図 (2)

遺構内混入の遺物 (Fig.15)

この他、古代・中世の遺構内からも、混入品とみられる弥生時代末～古墳時代の遺物が出土している。

図示したものは弥生土器及び土師器の甕 (55～59)・高杯 (62)・須恵器杯 (67・68)・蓋 (60)・高杯 (61)・翫又は壺 (64)・甕 (66)・器種不明 (63・65)である。55～59は古墳時代の甕。57～59は弥生時代末～古墳時代初頭の甕である。60は古墳時代後期の須恵器蓋。61は須恵器高杯。64は須恵器翫又は壺で、外面に2条の沈線と斜め方向の刻み目を施す。66は古墳時代の須恵器甕で、口縁部外面に櫛描波状文を巡らす。

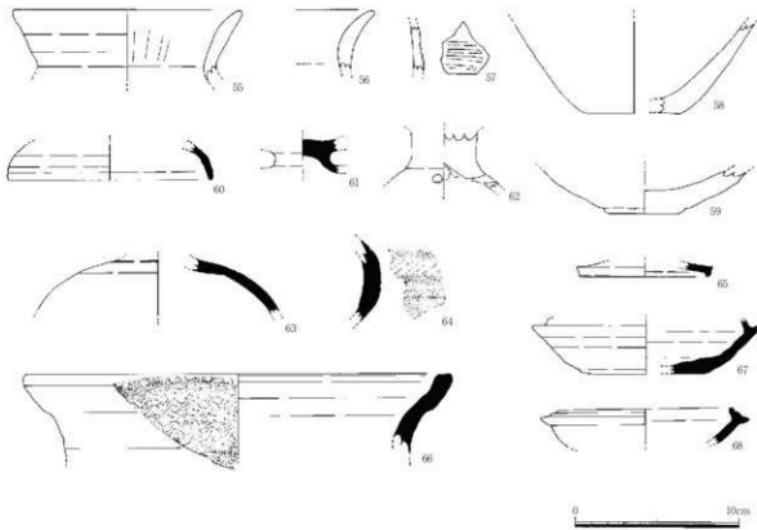


Fig.15 遺構内混入の遺物実測図

3.古代の遺構と遺物

古代の遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑45基、ピット92基、性格不明遺構2基を検出した。遺構は8~9世紀のものが主体をなし、包含層からも同時代の遺物が最も多く出土している。一方、IV層の下位からV層上面で検出されたSK124・P511・512・514~516・747等、7世紀に遡る遺構も少数確認されている。

(1) 掘立柱建物跡

古代の掘立柱建物跡は3棟を確認した。このうち調査区南西部で検出されたSB3はⅢ層上面にて検出したもので、出土遺物の内容から8~9世紀に比定される。一方、調査区の北西部で検出したSB1とSB2は、V層上面で検出したもので、周辺には同一面で検出され埋土が共通する一群の土坑とピット(P511・512・514~516)が存在する。

なお、各柱穴の詳細については、SBピット計測表(Tab.6)に規模を示している。

SB1 (Fig.16)

調査区北西部で検出された1間×3間の南北棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P3が古代のSK104を切っている。また、P2が中世のピットと、P4・7が中世のSD6と重複しており、P2・4・7が先行する。棟方向はN-1°-Eである。規模は梁間4.40m、桁行6.58m、桁行の柱間寸法は2.19mを測る。柱穴は7基を検出し、P8が未検出である。柱穴の規模は、P2・3・4が径80~100cm、P6・7が径62~70cmと大型で、深さはP2が30cm、P3が42cm、P4が12cm、P6・7が36cm、P7が36cmと様々である。またP1・P5については径35cm前後と小型であり、SB1に伴うかどうか検討をする。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。

遺物はP2から土師器杯又は皿の底部1点、P3から土師器甕の体部片1点、P6から土師器甕の体部片2点、須恵器杯の口縁部1点、古墳時代の混入の可能性をもつ須恵器杯(69)1点、瓶の底部1点、甕の体部片1点が出土している。

SB2 (Fig.17)

調査区北西部で検出された1間×3間の南北棟建物跡である。古代のSB1とは重複するが、柱穴の直接的な切り合いがないため前後関係は明らかでない。その他では、P2が中世のSK7と重複しておりP2が先行する。棟方向はN-0°-Eである。規模は梁間3.70m、桁行4.60m、桁行の柱間寸法は1.53mを測る。柱穴は4基を検出し、P3~5・7は未検出である。柱穴の規模は径45~50cm、深さ12~22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

遺物はP1から土師器皿の口縁部1点と須恵器甕の体部片、P2から須恵器甕の体部片が出土している。

SB3 (Fig.18)

調査区の南西部にて検出された1間×2間の南北棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P2~4が中世のSD9に切れられ、P5が中世のP55に切れられる。棟方向はN-1°-Eである。規模は梁間3.20m、桁行3.18m、桁行の柱間寸法は1.59mを測る。柱穴は4基を検出し、P1・6は未検出である。柱穴規模は径48~76cm、検出面からの深さは10~28cmを測る。埋土はP2・4が灰黄褐色シルト、

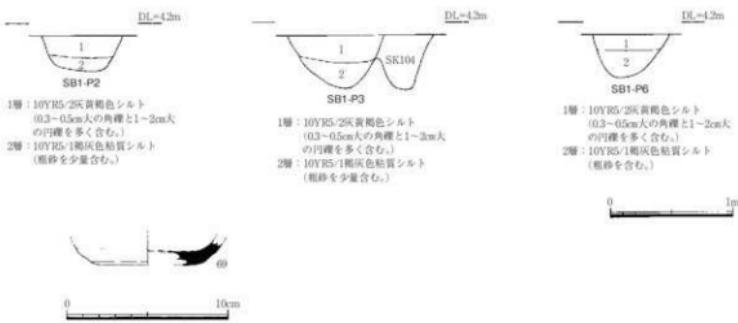
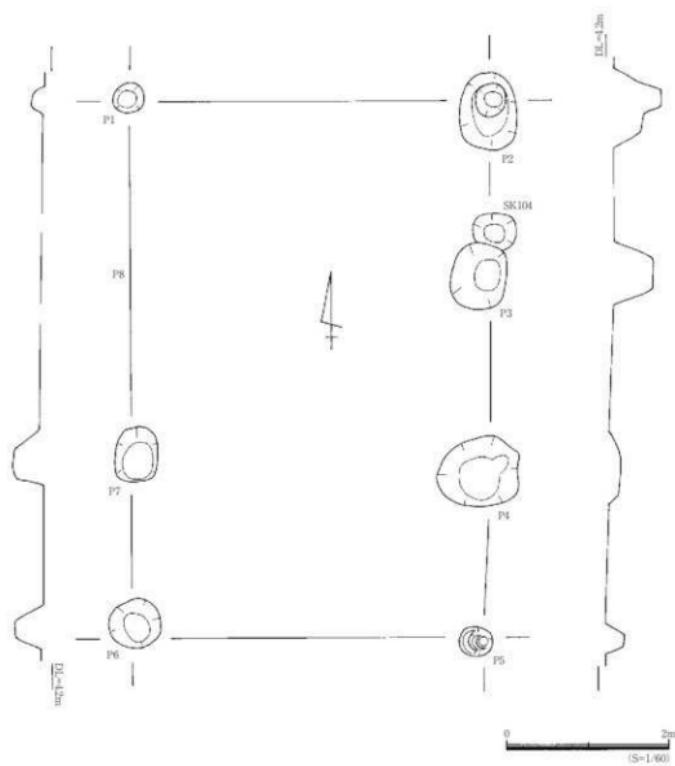


Fig.16 SB1平面図・セクション図・エレベーション図・SB1-P6出土遺物実測図

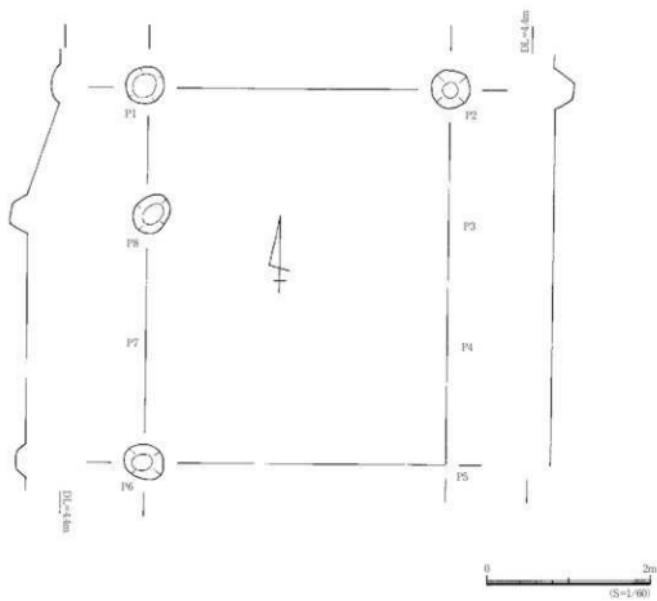


Fig.17 SB2平面図・エレベーション図

P3がにぶい黄褐色シルト、P5が褐灰色シルトである。

遺物はP2から土師器杯の口縁部2点と底部2点、皿の口縁部1点、土師器細片、須恵器杯又は皿の口縁部2点と底部2点、皿の底部1点、蓋1点、甕の体部片、須恵器細片、土錘1点、P4から土師器皿の底部1点と土師質土器細片が出土している。

図示したものはP2出土の須恵器杯(70)、須恵器杯又は皿(71)、土錘(72)である。

(2) 土坑

古代、及び古代の可能性をもつ土坑は、45基を検出した。多くは8~9世紀の遺物を含み該当期の構造とみられるが、中にはSK124など6世紀末~7世紀の遺物を含むものも検出されている。

SK2 (Fig.19)

C-0・1グリッドに位置する土坑で、古代のSK81・P508・666を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.02m、短軸の残存長1.50m、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯の口縁部と底部1点、土師器皿・甕の体部片、須恵器蓋の笠部1点、須恵器杯・高杯・甕の体部片である。

図示したものは土師器杯(73)、須恵器蓋(74)である。73は土師器杯で、外底にヘラ切り痕が残る。74は6世紀末~7世紀の須恵器蓋で、混入の可能性をもつ。

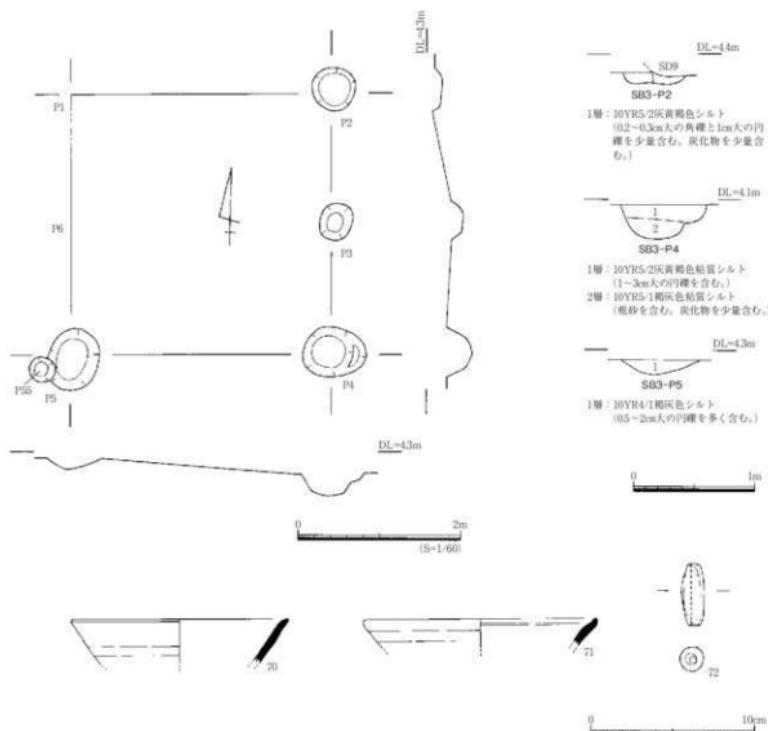


Fig.18 SB3平面図・セクション図・エレベーション図・SB3-P2出土遺物実測図

SK3 (Fig.19)

D - 1 グリッドに位置する土坑で、中世のSK9に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.58m、短軸 0.36m、深さ 28cm を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片、土師器細片、須恵器甕の体部片である。

SK13 (Fig.19)

D - 4 グリッドに位置し、古代のSK14を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.92m、短軸 0.76m、深さ 6cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器杯又は皿の底部 2 点、製塙土器の口縁部 1 点、及び土師器甕の体部片と土師器細片である。図示したものは製塙土器 (75) である。75 は胎土中に小礫や粗砂を多く含み、内面にチヂ目が残る。

SK14 (Fig.19)

D - 4 グリッドに位置し、古代のSK13と中世のP50に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.92m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯の口縁部1点、杯又は皿の底部1点、高杯の脚部1点、甕の口縁部1点、須恵器高杯(77)、須恵器蓋とみられる底部片(76)、及び土師器細片である。

SK16 (Fig.20)

D - 5・6 グリッドに位置する大型の土坑で、古代のP552・558を切り、中世のSB13 - P7・SK21・

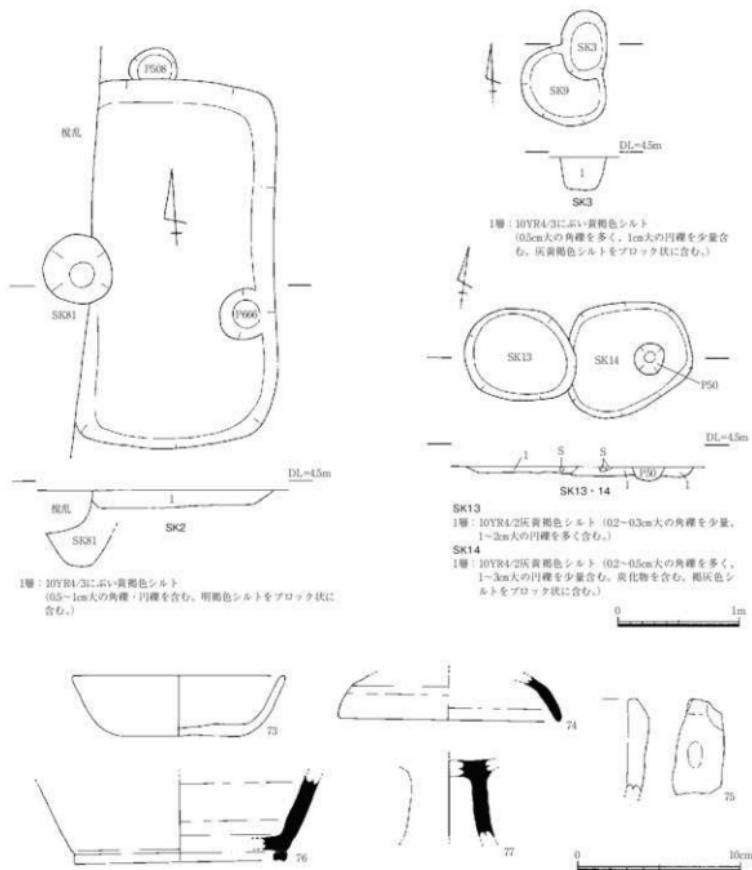


Fig.19 SK2・3・13・14平面図・セクション図・SK2・13・14出土遺物実測図
(SK2: 73・74, SK13: 75, SK14: 76・77)

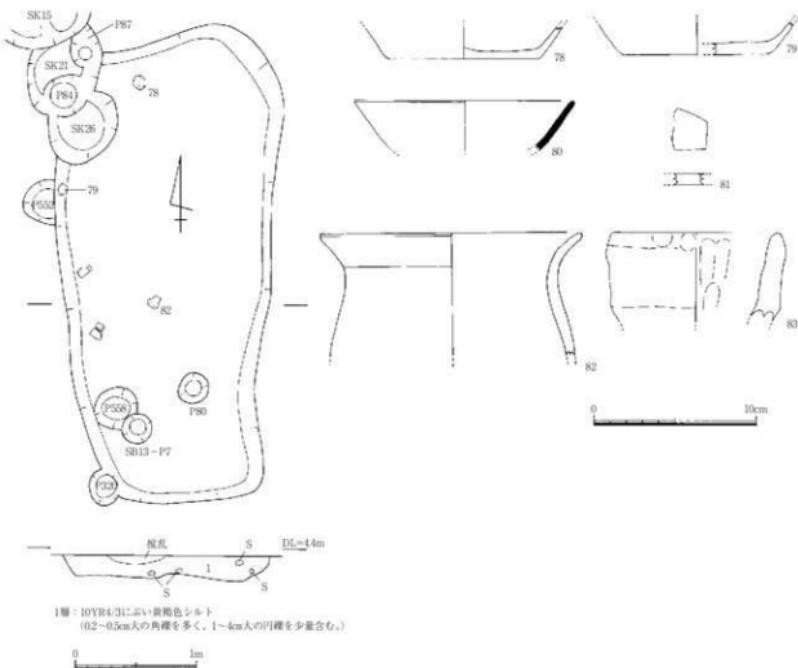


Fig.20 SK16平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

26・P80・84・87・320に切られる。平面形は不整形で、長軸3.80m、短軸1.80m、深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦で壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯及び皿の底部3点、甕の口縁部1点、須恵器杯の口縁部1点、製塙土器の口縁部1点、及び土師器細片、須恵器細片である。このうち、赤色塗彩土師器杯又は皿の底部片が下層より出土している。

図示したものは土師器杯(78・79)・甕(82)、赤色塗彩土師器細片(81)、須恵器杯(80)、製塙土器(83)である。

SK17 (Fig21)

D-6グリッドに位置する。西側部分を中世のSD4に切られているため全体の形態は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、南北長2.32m、東西残存長0.72m、深さ13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・甕、製塙土器である。出土点数は口縁部数にして

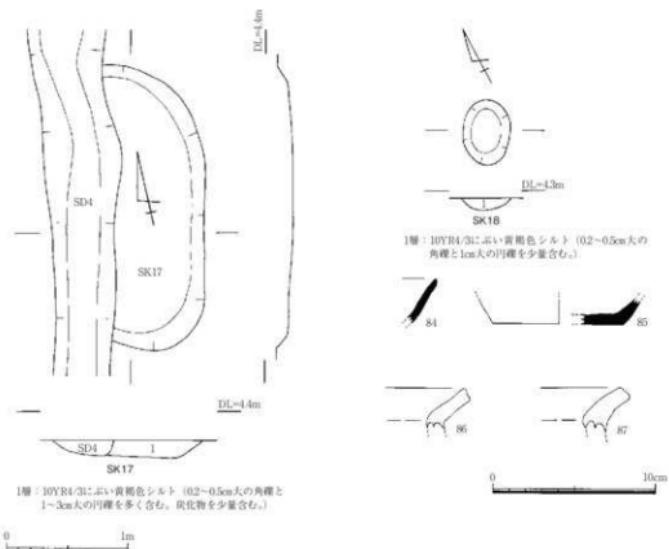


Fig.21 SK17・18平面図・セクション図・エレベーション図・SK17出土遺物実測図

土師器杯1点、壺2点、須恵器杯1点、皿2点、底部数にして土師器杯又は皿13点、須恵器杯2点、その他土師器及び須恵器片50数点である。

図示したものは、須恵器杯(85)、須恵器杯又は皿(84)、土師器壺(86・87)である。

SK18 (Fig.21)

D - 6グリッドに位置する土坑で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.52m、短軸0.42m、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯又は皿の口縁部1点、土師器皿の底部1点、須恵器杯の口縁部1点、及び須恵器細片である。

SK45 (Fig.22)

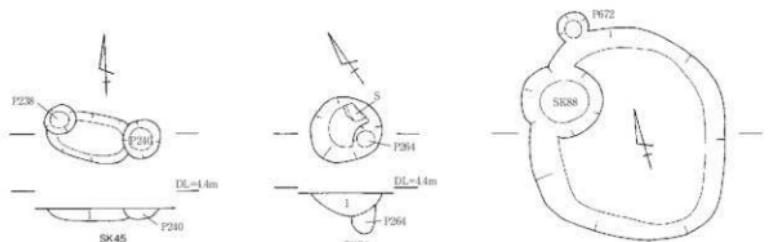
F - 5グリッドに位置し、中世のP238と古代のP240に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸の残存長0.70m、短軸0.38m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯又は皿の底部1点と土師器壺の体部片1点である。

SK51 (Fig.22)

G - 3グリッドに位置し、古代のP264を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.52m、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

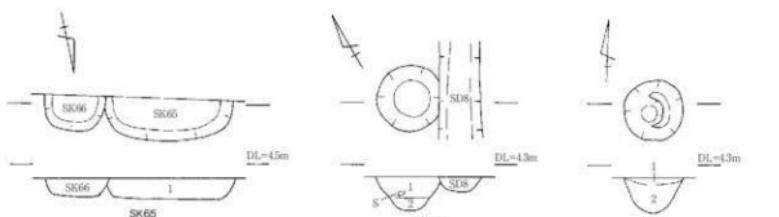
出土遺物は土師器杯又は皿の口縁部1点と底部1点、及び土師器壺の体部片、土師器と須恵器



1層：10YR5/2区黄褐色シルト
(0.2~0.3cm大の角礫を含む。にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を少量含む。)

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト
(0.2~0.3cm大の角礫と1~2cm大の内礫を多く含む。細灰色シルトをブロック状に含む。)

1層：10YR5/2区黄褐色シルト (炭化物を少量含む。)



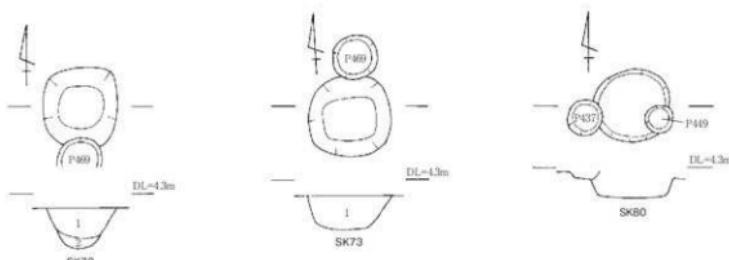
1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト
(粗砂をブロック状に含む。)

1層：10YR5/2区黄褐色シルト
(0.2~0.3cm大の角礫と1~3cm大の内礫を多く含む。)

1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト
(0.2~0.3cm大の角礫と1~2cm大の内礫を多く含む。)

2層：10YR5/2区灰褐色シルト
(0.2~0.5cm大の角礫と1~3cm大の内礫を多く含む。)

2層：10YR5/2区黄褐色シルト
(0.2~0.3cm大の角礫と1~2cm大の内礫を少含む。)



1層：10YR5/2区黄褐色シルト
(0.2~0.5cm大の角礫と1~3cm大の内礫を多く含む。)

2層：10YR5/1区灰褐色シルト
(0.2~0.5cm大の角礫と1~3cm大の内礫を多く含む。)

1層：10YR5/2区灰褐色シルト
(0.2~0.5cm大の角礫と1~3cm大の内礫を多く含む。)

0 1m

Fig.22 SK45・51・55・65・70～73・80平面図・セクション図・エレベーション図

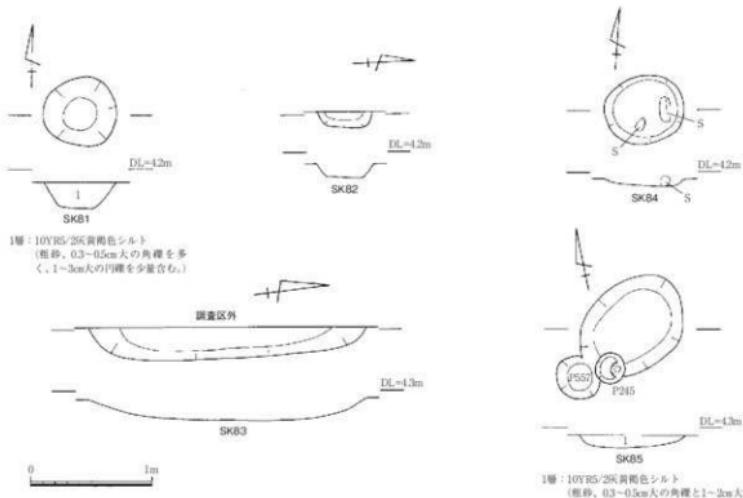


Fig.23 SK81~85平面図・セクション図・エレベーション図・礫出土状況図

細片である。

SK55 (Fig.22)

F - 6 グリッドに位置し、古代のSK88・P672を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸1.82m、短軸1.60m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯の底部1点、須恵器杯又は皿の口縁部1点と底部1点、及び土師器壺の体部片、土師器と須恵器細片である。

SK65 (Fig.22・26)

C - 8 グリッドに位置し、中世のSK66に切られる。南側が調査区外となるため、形態、規模とも不明であるが、東西長1.05m、南北確認長0.34m、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器蓋(92)1点と土師器細片である。

SK70 (Fig.22)

C - 4 グリッドに位置し、中世のSD8に切られる。平面形は円形を呈し、径0.53m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと褐灰色シルトである。

出土遺物は確認できていないが、周辺遺構との関係からみて古代の可能性をもつ。

SK71 (Fig.22)

C - 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、径0.50m、深さ30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器杯又は皿の口縁部1点と製塙土器の口縁部1点である。

SK72 (Fig.22)

C - 5・6グリッドに位置し、古代のP469に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸0.66m、短軸0.60m、深さ36cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと褐灰色シルトである。

出土遺物は土師器杯又は皿の口縁部1点と土師器細片である。

SK73 (Fig.22)

C - 6グリッドに位置し、古代のP469に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸0.68m、短軸0.66m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器皿の口縁部と底部1点、須恵器杯又は皿の底部1点である。

SK80 (Fig.80)

F - 7グリッドに位置し、中世のP437・449に切られる。平面形は円形を呈し、径0.60m、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片と土師器細片である。

SK81 (Fig.23)

C - 0グリッドに位置する。古代のSK2とは重複するが、SK81がその下面にて検出されており先行する。平面形は円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.58m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器細片1点である。

SK82 (Fig.23)

B - 1グリッドに位置する。西側が調査区外に出るため全体の規模と形態は不明であるが、南北長0.46m、東西確認長0.14m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器細片である。

SK83 (Fig.23)

B - 3グリッドに位置する。西側の大部分が調査区外に出るため全体の規模と形態は不明であるが、南北長2.30m、東西確認長0.28m、深さ16cmを測る。埋土は粗砂を含む灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師器杯の口縁部3点と底部1点、須恵器杯の底部1点、及び須恵器甕の体部片、土師器細片、須恵器細片である。

SK84 (Fig.23)

F - 5グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.66m、短軸0.58m、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯の底部(89)1点、皿の口縁部(88)1点、土師器細片である。

SK85 (Fig.23)

E - 6グリッドに位置する土坑で、古代のP557を切り、中世のP245に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸0.96m、短軸0.70m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていない。

SK86 (Fig.24)

E - 6グリッドに位置する土坑で、中世のP246に切られる。平面形は円形を呈し、径0.62m、深さ

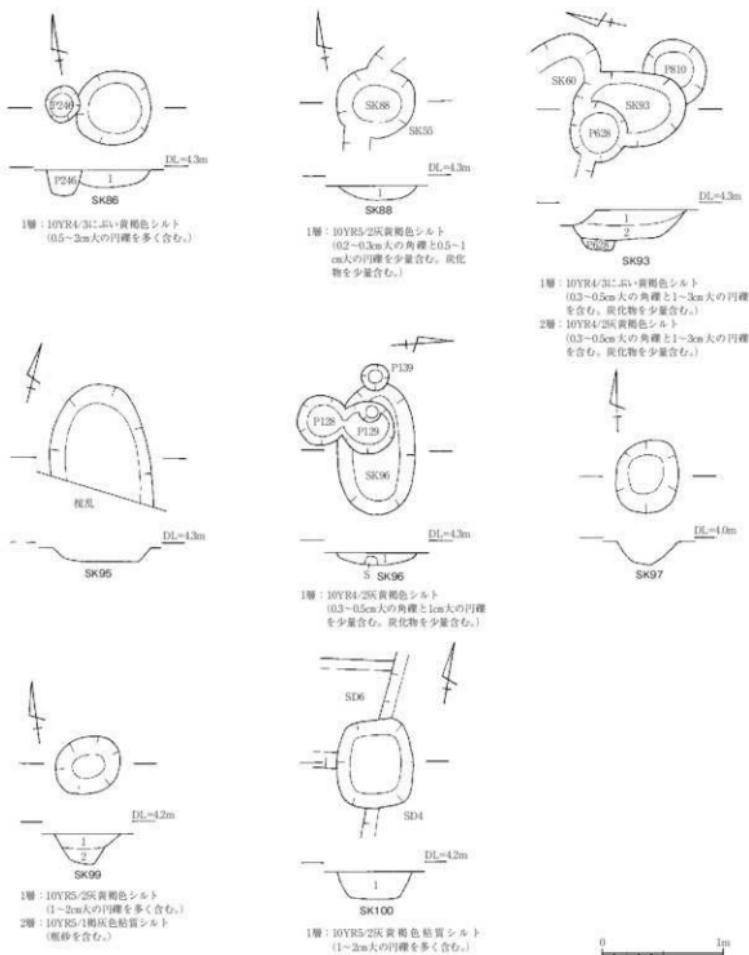


Fig.24 SK86・88・93・95～97・99・100平面図・セクション図・エレベーション図

8cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていない。

SK88 (Fig.24)

F - 6グリッドに位置する土坑で、古代のSK55に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.66m、

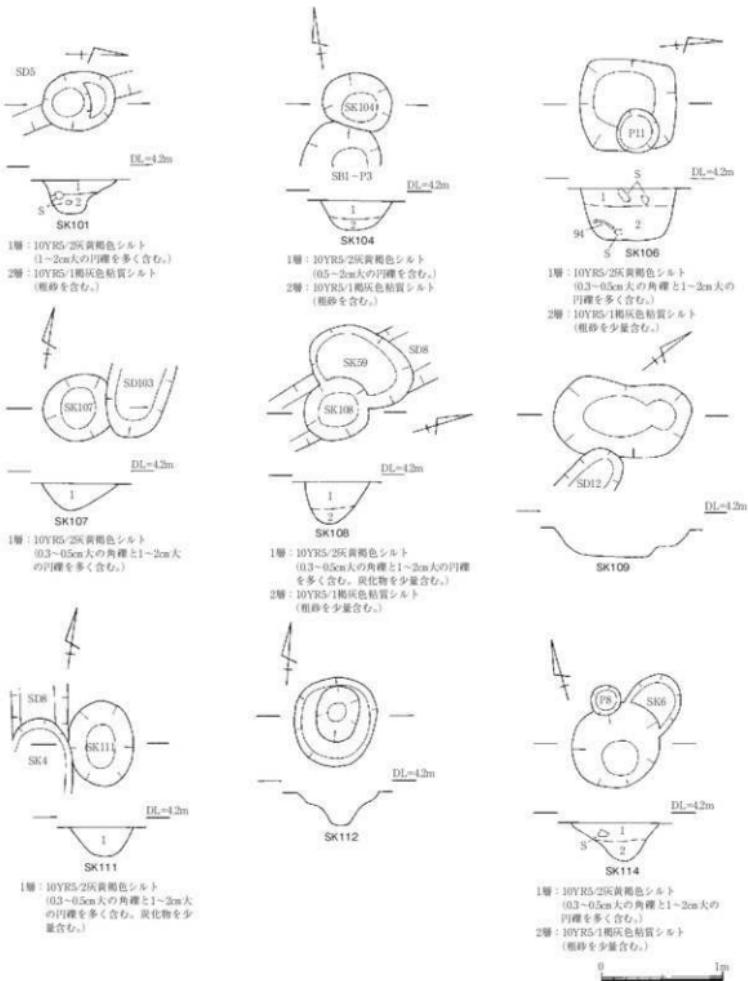
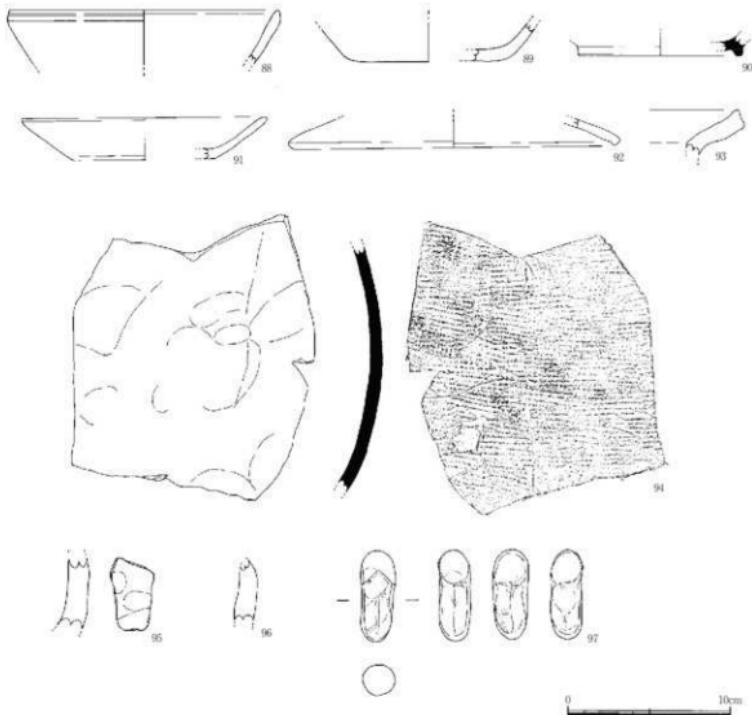


Fig.25 SK101・104・106~109・111・112・114平面図・セクション図・エレベーション図

短軸0.58m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯又は皿の口縁部2点、須恵器杯の口縁部1点、及び土師器壺の体部片と須恵器細片である。



**Fig.26 SK65・84・100・106・114出土遺物実測図
(SK65:92、SK84:88・89、SK100:93、SK106:91・94～97、SK114:90)**

SK93 (Fig.24)

D - 3 グリッドに位置する土坑で、古代のP628・810を切り、中世のSK60に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.62m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器杯又は皿の体部片と須恵器壺の体部片、及び土師器細片である。

SK95 (Fig.24)

G - 2・3 グリッドに位置する。南側が搅乱を受けるため全体の形態、規模は不明であるが、南北残存長0.90m、東西長0.82m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器壺の体部片と土師器細片である。

SK96 (Fig.24)

E - 2 グリッドに位置する土坑で、中世のP128・129・139に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸1.10m、短軸0.62m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から灰白色の角礫が出土し

ている。

出土遺物は土師器甕の体部片と土師器細片である。

SK97 (Fig.24)

E - 1 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.60m、短軸 0.54m、深さ 20cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK99 (Fig.24)

C - 3 グリッドに位置する。中世の SD5 とは重複しており、SD5 の下面にて検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.55m、短軸 0.48m、深さ 26cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトと褐色粘質シルトである。

出土遺物は須恵器杯又は皿の体部片である。

SK100 (Fig.24・26)

D - 3 グリッドに位置する。中世の SD4・6 とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 0.73m、短軸 0.62m、深さ 22cm を測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師器甕の口縁部 (93) 1 点、製塙土器の体部片 1 点、及び須恵器甕の体部片である。

SK101 (Fig.25)

B - 2・C - 2 グリッドに位置する。中世の P49・SD5 とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.62m、短軸 0.50m、深さ 28cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK104 (Fig.25)

C - 2・D - 2 グリッドに位置し、SB1 - P3 に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸 0.56m、短軸 0.44m、深さ 24cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片である。

SK106 (Fig.25・26)

B - 3 グリッドに位置する。中世の P11 とは重複しており、P11 の下面にて検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 0.78m、短軸 0.76m、深さ 40cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器皿の口縁部と底部 1 点、製塙土器 4 点、棒状石製品 1 点、及び須恵器甕の体部片と須恵器細片である。

図示したものは土師器杯 (91)、須恵器甕 (94)、製塙土器 (95・96)、砂岩製の棒状石製品 (97) である。

SK107 (Fig.25)

D - 2 グリッドに位置する。中世の SD3 とは重複しており、SD3 の下面にて検出された。平面形は円形を呈し、長軸 0.60m、短軸 0.56m、深さ 20cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片である。

SK108 (Fig.25)

C - 2 グリッドに位置する。中世の SK59・SD8 とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は円形を呈し、長軸 0.55m、短軸 0.50m、深さ 32cm を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

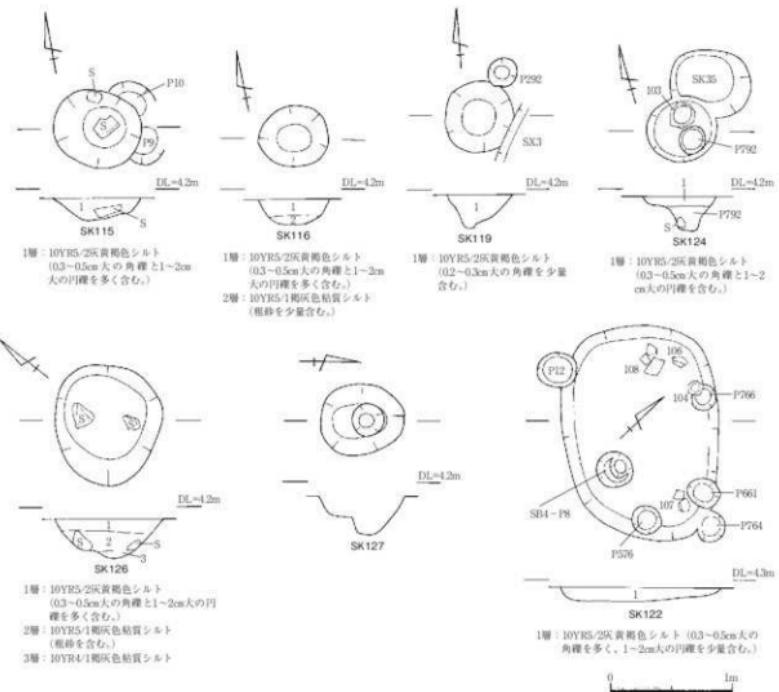


Fig.27 SK115・116・119・121・124・126・127平面図・セクション図・エレベーション図・
遺物及び出土状況図

出土遺物は土師器杯又は皿の底部1点、及び土師器甕の体部片と土師器細片である。

SK109 (Fig.25)

C - 1グリッドに位置する。中世のSD12とは重複しており、SD12の下面にて検出された。平面形は梢円形を呈し、長軸1.13m、短軸0.64m、深さ23cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていない。

SK111 (Fig.25)

C - 2グリッドに位置する。中世のSD8とは重複しており、その下面にて検出された。平面形は梢円形を呈し、長軸0.70m、短軸0.53m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片である。

SK112 (Fig.25)

D - 1グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.70m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK114 (Fig.25・26)

C - 3 グリッドに位置する。中世のSK6・SD8・P8とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は円形を呈し、径0.70m、深さ31cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器杯の口縁部1点と底部1点である。図示したものは須恵器杯(90)である。

SK115 (Fig.27・28)

D - 2 グリッドに位置する。中世のP9・10とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.62m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯(98)1点、製塙土器の体部1点、及び土師器壺の体部片である。

SK116 (Fig.27・28)

C - 3 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器壺の口縁部(99)と土師器細片である。

SK119 (Fig.27)

D - 3 グリッドに位置する。中世のP292・SX3とは重複しており、これらの下面にて検出された。平面形は円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.58m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていないが、埋土や周辺の検出遺構からみて古代の遺構である可能性が高い。

SK122 (Fig.27・28)

D - 2・3・E - 2・3 グリッドに位置する土坑で、古代のP766を切り、中世のSB4 - P8・P12・576・661・764に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.30m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯、須恵器杯・蓋・壺・壺であり、口縁部と底部点数にして土師器杯の口縁部2点と底部4点、須恵器杯の口縁部3点と底部1点、須恵器蓋1点、須恵器壺の底部1点、壺の底部1点、及び土師器と須恵器細片が出土している。

図示したものは土師器杯(106)、須恵器杯(104・105)・壺(107)・壺(108)である。このうち104・105は6世紀末～7世紀の須恵器杯で、混入の可能性をもつ。

SK124 (Fig.27・28)

E - 3 グリッドに位置し、古代のP792を切る。また中世のSK35とは重複しておりその下面にて検出された。平面形は円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.54m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は須恵器壺(102・103)である。このうち須恵器壺の口縁部(103)は口縁部を伏せた状態で床面から出土している。103は古墳時代～古代前期の壺で、体部外面に平行状のタタキ、内面に円錐状のタタキ目を残す。

SK124は古代前期に比定される。

SK126 (Fig.27・28)

B - 4 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.90m、深さ31cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。床面から白色系の角礫が出土する。

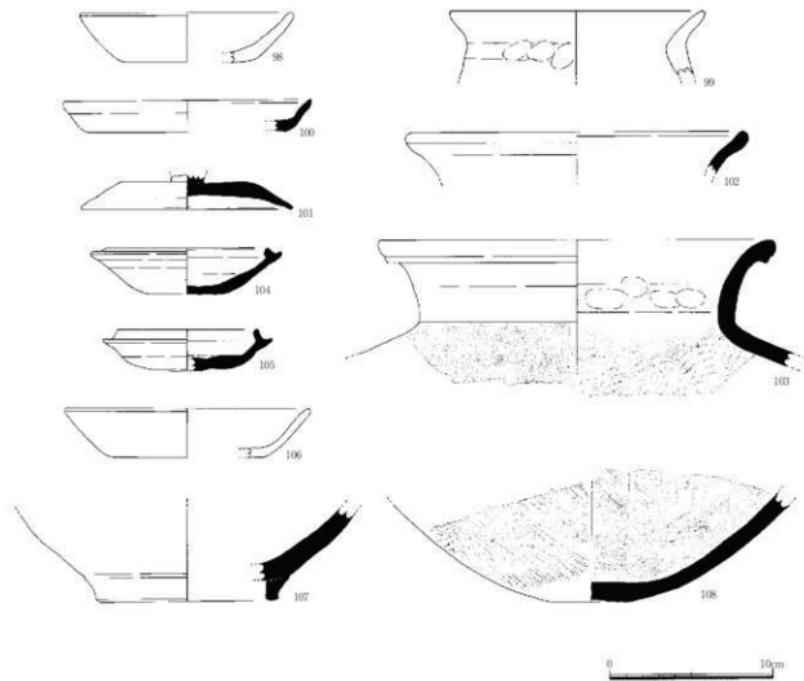


Fig.28 SK115・116・122・124・126出土遺物実測図
(SK115:98、SK116:99、SK122:104~108、SK124:102・103、SK126:100・101)

出土遺物は土師器皿・甕、須恵器杯・皿・蓋・甕である。口縁部及び底部点数では、土師器皿の底部3点、須恵器杯の底部1点、皿の口縁部と底部1点、蓋1点であり、この他に土師器甕と須恵器甕の体部片及び須恵器細片が出土している。図示したものは須恵器蓋(101)・皿(100)である。

SK127 (Fig.27)

B-4グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.68m、短軸0.57m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面からはピット状の凹みを検出している。

出土遺物は土師器皿の底部1点、土師器甕の体部1点である。

(3) ピット

古代、及び古代の可能性をもつピットは、柱穴を含めて92基を検出した。ピットの多くは8~9世紀の遺物を含み、該当期の遺構とみられるが、中にはP512・516・747など6世紀末~7世紀の遺物を含むものも検出されている。この他、明瞭な遺物は得られていないが、調査区北西隅で検出さ

れたP511・514・515は、P512・516とともに氾濫堆積層であるV層の上面にて検出されたもので、7世紀のピットの一群とみられる。

以下では、特徴的な検出状況や遺物出土状況を示したピットを取り上げて報告する。また、他遺構との切り合い関係をもつものや、検出状況からみて特に重要なものについては、ピット計測表に概要を示した。(Tab.4)

P199 (Fig.29・32)

F-3グリッドに位置する。検出規模は径21cm、深さ15cm、埋土はにぶい黄褐色シルトで褐色シルトのブロックと炭化物を少量含んでいる。出土遺物は土師器杯の底部1点と須恵器蓋(114)1点である。

P200 (Fig.29・32)

F-3グリッドに位置する。検出規模は径28cm、深さ21cm、埋土はにぶい黄褐色シルトで褐色シルトのブロックと炭化物を少量含んでいる。出土遺物は土師器杯又は皿の底部(109)1点と、土師器細片及び須恵器細片である。

P295 (Fig.29・32)

F-4グリッドに位置する。検出規模は径27cm、深さ10cm、埋土は灰黄褐色シルトで褐色シルトのブロックと炭化物を少量含んでいる。遺物は上層から須恵器杯(110)1点が出土している。

P360 (Fig.29)

G-3グリッドに位置する。検出規模は径27cm、深さ13cm、埋土は灰黄褐色シルトで褐色シルトのブロックと炭化物を少量含んでいる。出土遺物は土師器杯の口縁部1点、須恵器壺の体部片、製塩土器の体部片1点である。

P470 (Fig.29・32)

C-5・6グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。検出規模は径36cm、深さ8cm、埋土は灰黄褐色シルトで褐色シルトのブロックと炭化物を少量含んでいる。出土遺物は土師器杯の底部(111)1点と土師器細片である。

P511 (Fig.29)

B-2グリッド、V層の上面にて検出したもので、SB1-P1・P512・514～516が近接している。検出規模は径30cm、深さ14cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで粗砂と1cm前後の円礫を多く含んでいる。出土遺物は確認できていないが、周辺ピットとの共通性からみて7世紀の遺構であった可能性がある。

P512 (Fig.29・32)

B-2グリッド、V層の上面にて検出したもので、SB1-P1・P511・514～516が近接している。検出規模は径35cm、深さ15cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで粗砂を多く含んでいる。出土遺物は土師器杯の口縁部1点と須恵器杯(126)1点である。126は6世紀末～7世紀の杯である。

P512は7世紀に比定される。

P514 (Fig.29)

B-2グリッド、V層の上面にて検出したもので、SB1-P1・P511・512・515・516が近接している。

検出規模は径32cm、深さ12cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで粗砂と1cm前後の円礫を多く含んでいる。出土遺物は土師器細片のみであるが、周辺ピットとの共通性からみて7世紀の遺構であった可能性がある。

P515 (Fig.29)

B-2グリッド、V層の上面にて検出したもので、SB1-P1・P511・512・514・516が近接している。検出規模は径35cm、深さ18cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで粗砂を多く含んでいる。埋土中から土師器壺の体部片が出土している。周辺ピットとの共通性からみて7世紀の遺構であった可能性がある。

P516 (Fig.29)

B-2・3グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径35cm、深さ20cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで粗砂を多く含んでいる。埋土中から土師器壺の体部片が出土している。P512～515との共通性からみて7世紀の遺構であった可能性がある。

P552 (Fig.29・32)

D-5グリッドに位置し、III層の下位にて検出した。検出規模は径38cm、深さ11cm、埋土は灰黄

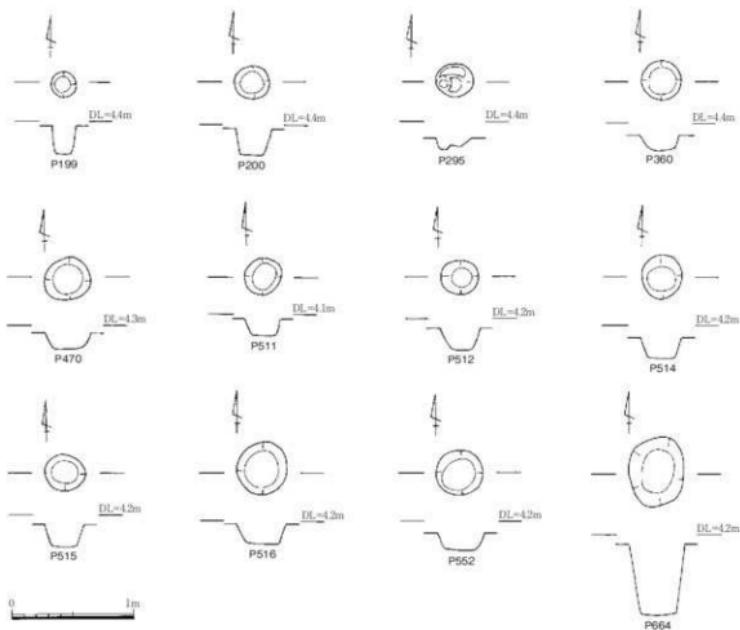


Fig.29 P199・200・295・360・470・511・512・514～516・552・664平面図・エレベーション図

褐色シルトで粗砂を含んでいる。出土遺物は土師器壺の底部(112)1点、及び土師器壺の体部片と須恵器細片である。

P664 (Fig.29・32)

D-3・4グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径60×45cm、深さ54cm、埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が褐灰色粘質シルトで1~2cm大の円礫を含んでいる。出土遺物は須恵器杯の底部1点、須恵器高杯の脚部、土師器細片と須恵器細片である。

図示したものは須恵器杯(116)・高杯(121)である。121は高杯の脚部で透かしをもつ。

P665 (Fig.30)

C-2グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径36cm、深さ21cm、埋土は灰黃褐色シルトである。出土遺物は土師器壺の体部片と須恵器細片である。

P672 (Fig.30)

F-6グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。古代のP674と切り合うが前後関係は不明である。検出規模は径27cm、深さ32cmで、径14cmの柱痕を検出している。埋土は褐灰色粘質シルトで粗砂を含んでいる。出土遺物は土師器細片、土師器壺の体部片、須恵器瓶の口縁部1点である。

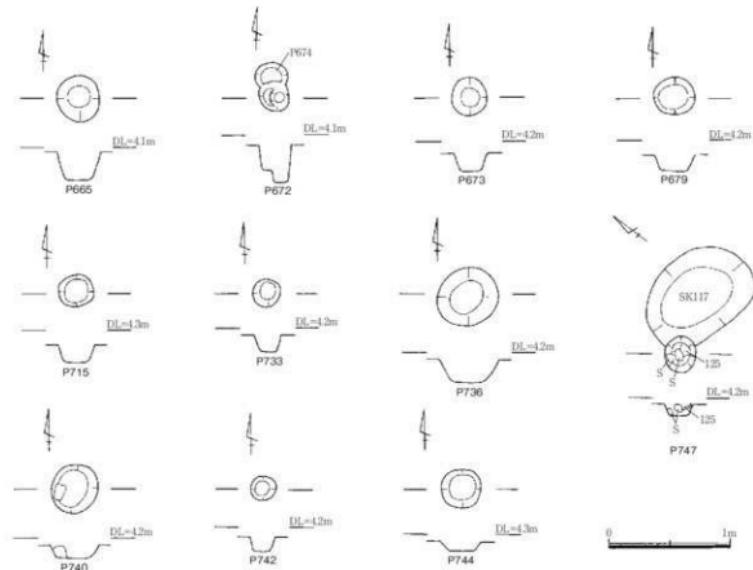


Fig.30 P665・672・673・679・715・733・736・740・742・744・747平面図・エレベーション図・遺物及び発出土状況図

P673 (Fig.30・32)

D - 2 グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。切り合い関係では上面を中世のSD4によって切られている。検出規模は径27cm、深さ14cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器皿(113)1点と底部1点、土師器細片である。

P679 (Fig.30)

C - 3 グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径30cm、深さ12cm、埋土は灰黄褐色粘質シルトで1~2cm大の円礫を多く含んでいる。出土遺物は土師器杯又は皿の体部片と土師器細片である。

P715 (Fig.30・32)

G - 6・H - 6 グリッドに位置し、Ⅲ層の最下位にて検出した。検出規模は径25cm、深さ14cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は須恵器壺(118)である。

P733 (Fig.30・32)

G - 1 グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径18cm、深さ12cm、埋土は灰黄褐色シルトで、褐灰色粘土の柱痕を検出する。出土遺物は柱痕出土の須恵器蓋(117)である。

P736 (Fig.30)

H - 2 グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径40cm、深さ16cm、埋土は灰黄褐色シルトで粗砂を多く含んでいる。出土遺物は土師器壺の口縁部1点である。

P740 (Fig.30)

G - 2 グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径38cm、深さ12cm、埋土は灰黄褐色シルトで粗砂を多く含んでいる。出土遺物は土師器壺の体部片である。

P742 (Fig.30・32)

E - 3・F - 3 グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。検出規模は径20cm、深さ12cm、

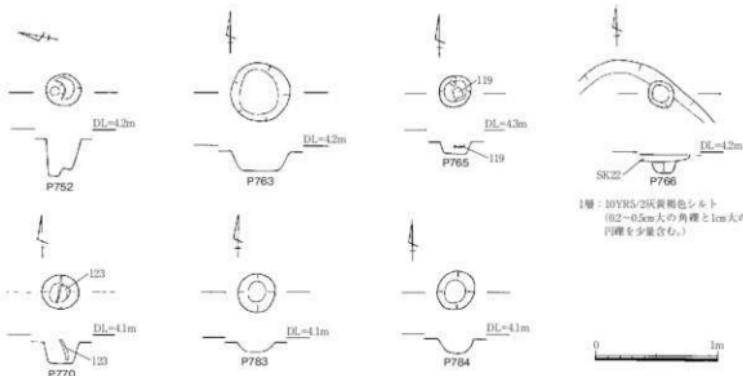


Fig.31 P752・763・766・770・783・784平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図

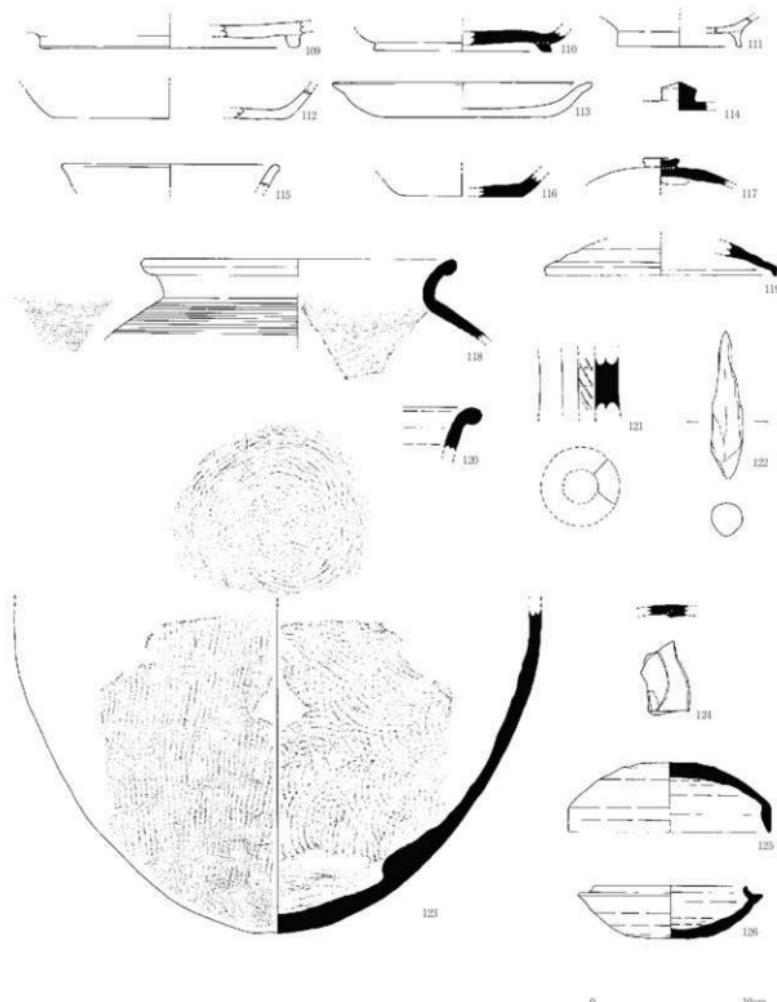


Fig.32 P199·200·295·470·512·552·664·673·715·733·742·747·752·765·770出土遺物実測図
 (P199:114, P200:109, P295:110, P470:111, P512:126, P552:112, P664:116·121, P673:113, P715:118,
 P733:117, P742:115·120·122, P747:125, P752:124, P765:119, P770:123)

埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は下層から土師器杯の口縁部(115)、須恵器壺又は壺の口縁部(120)、木製品又は木片(122)が出土している。

P744 (Fig.30)

F-1・G-1グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。検出規模は径32cm、深さ6cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器杯の底部1点と土師器細片、土師器壺の体部片、須恵器壺の体部片である。

P747 (Fig.30・32)

E-3グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。切り合い関係では、中世のSK61とSX3に切られる。検出規模は径26cm、深さ8cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は6世紀末～7世紀の須恵器杯の蓋(125)である。

P752 (Fig.31・32)

H-3グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径23cm、深さ30cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は須恵器平瓶と土師器細片である。

図示したものは須恵器平瓶(124)である。124は平瓶の体部片で、天井部の粘土充填部分内面に段が残る。

P763 (Fig.31)

D-3・E-3グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。中世のSX3とは重複するが、P763が先行する。検出規模は径30cm、深さ12cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器壺の体部片と土師器細片である。

P765 (Fig.31・32)

E-1・F-1グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。検出規模は径22cm、深さ7cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器壺の体部片、須恵器蓋(119)、須恵器壺の体部片である。

P766 (Fig.31)

E-2グリッドに位置し、Ⅲ層の下位にて検出した。古代のSK122とは重複するが、P766が先行する。検出規模は径20cm、深さ8cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器細片である。

P770 (Fig.31・32)

H-1グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径30cm、深さ15cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器杯又は皿の口縁部1点と底部1点、須恵器壺の底部(123)、土師器細片である。

P783 (Fig.31)

F-1グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径28cm、深さ7cm、埋土は灰黄褐色シルトで粗砂を多く含んでいる。出土遺物は土師器壺の体部片と土師器細片である。

P784 (Fig.31)

F-1グリッドに位置し、V層の上面にて検出した。検出規模は径27cm、深さ8cm、埋土は灰黄褐色シルトで粗砂を多く含んでいる。出土遺物は土師器壺の体部片である。

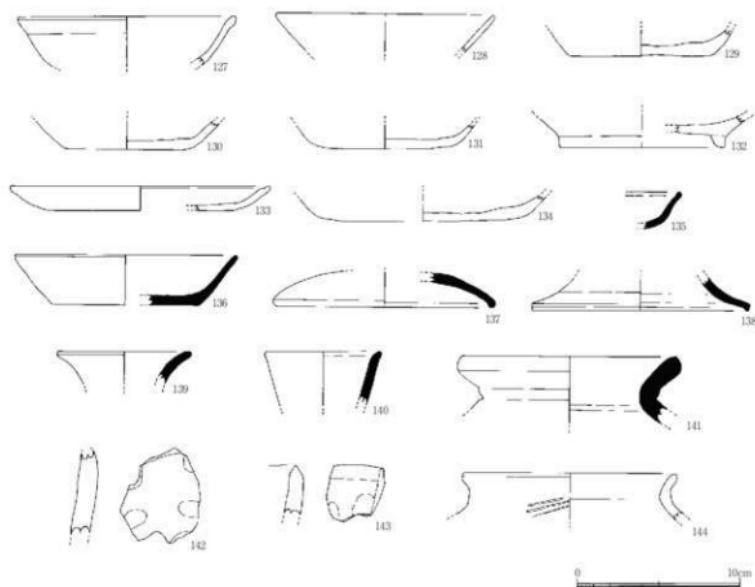
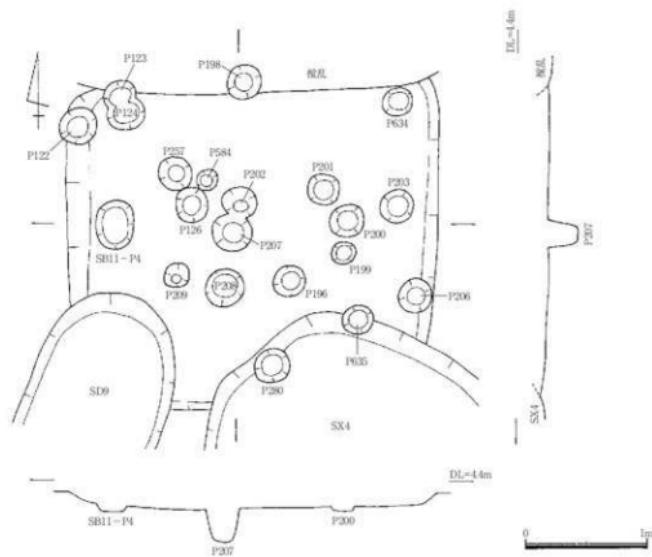


Fig.33 SX2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

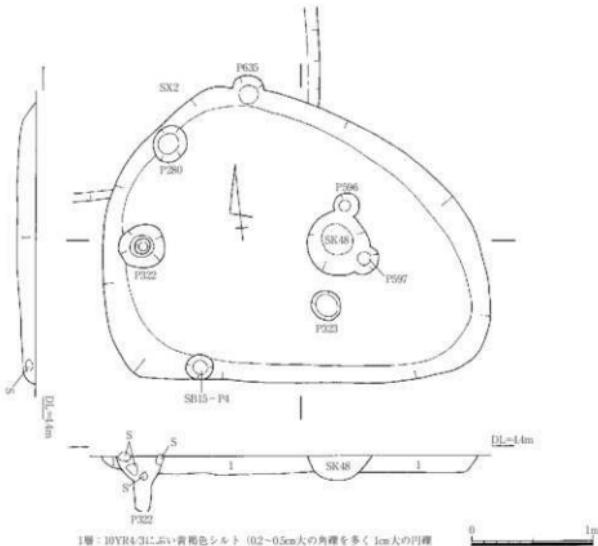


Fig.34 SX4平面図・セクション図

(4) 性格不明遺構

SX2 (Fig.33)

F - 3グリッドに位置する大型の遺構で、中世のSB11 - P4・SD9・P122～124・126・196・198～203・206～209・257・280・584・634、古代のSX4に切られる。周囲を別遺構によって切られるため、規模と形態は不明であるが、平面形は隅丸方形とみられ、東西長3.04m、南北残存長2.60m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部数にして、土師器杯2点、皿2点、須恵器杯2点、皿2点、蓋2点、瓶3点、壺1点、製塙土器1点、底部数にして土師器杯6点、皿6点、須恵器杯1点である。この他、壺の体部片、土師器片、須恵器片200数点が出土している。

図示したものは土師器杯(127～132)・皿(133・134)・壺(144)、須恵器杯(136)・皿(135)・蓋(137)・高杯(138)・壺(139)・壺か(140)・壺(141)、製塙土器(142・143)である。142・143は胎土中に小礫や粗砂が多く含み、内面にチヂレ目が残る。

SX4 (Fig.34・35)

F - 3・4・G - 3・4グリッドに位置する大型の遺構で、古代のSX2・P635を切り、中世のSB15 - P4・SK48・P280・322・323・596・597に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸3.28m、短軸2.40m、深さ12cmを測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

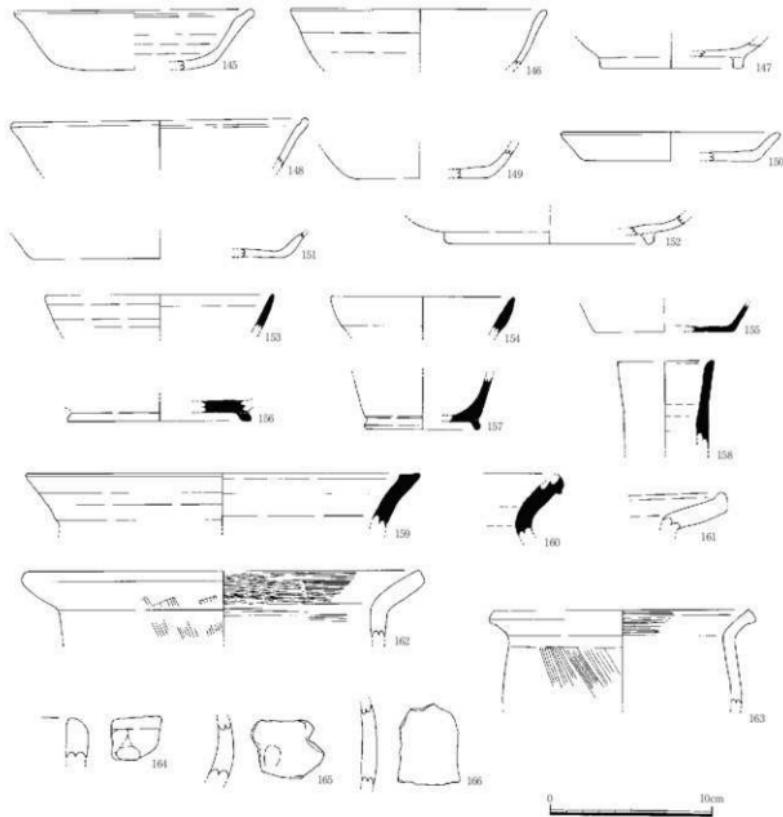


Fig.35 SX4出土遺物実測図

出土遺物は、口縁部数にして土師器杯1点、皿6点、杯又は皿5点、甕4点、須恵器杯4点、杯又は皿3点、甕1点、壺又は瓶3点、底部数にして杯1点、皿3点である。この他、製塙土器の体部、土師器片200数点が出土している。

図示したものは土師器杯(145～149)・皿(150～152)・甕(161～163)、須恵器杯(153～155)・壺(158)・甕(159・160)、器種不明(156・157)、製塙土器(164～166)である。

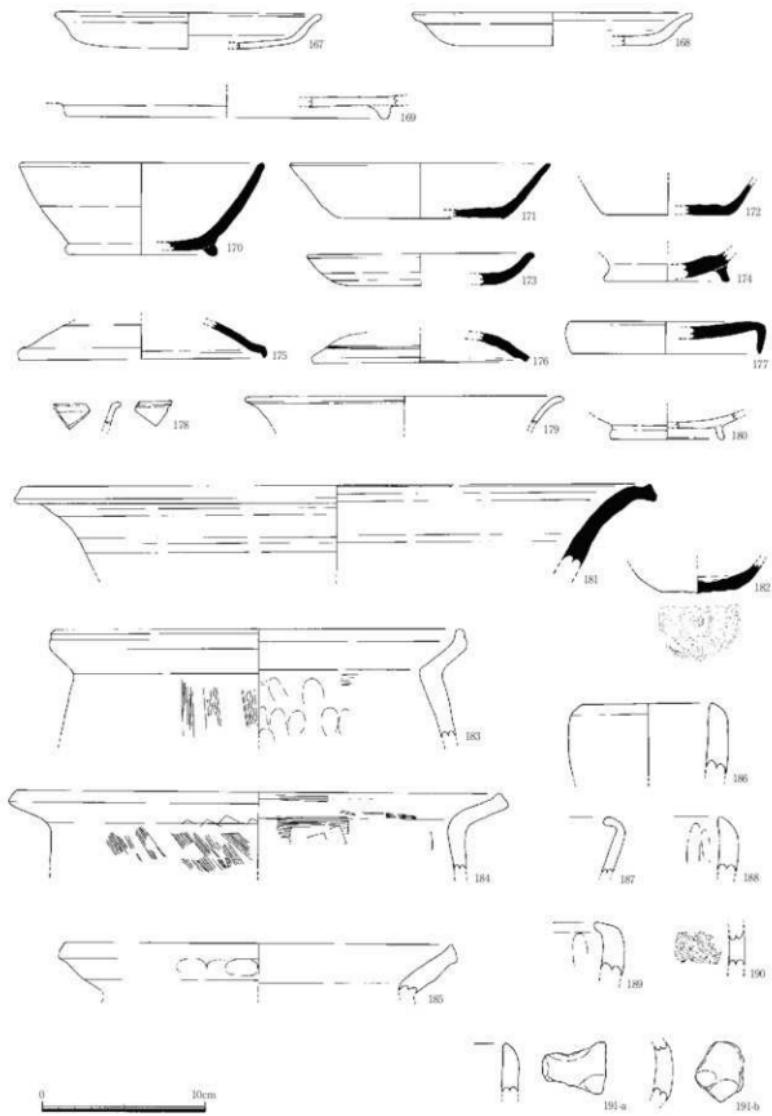


Fig.36 II層出土遺物実測図

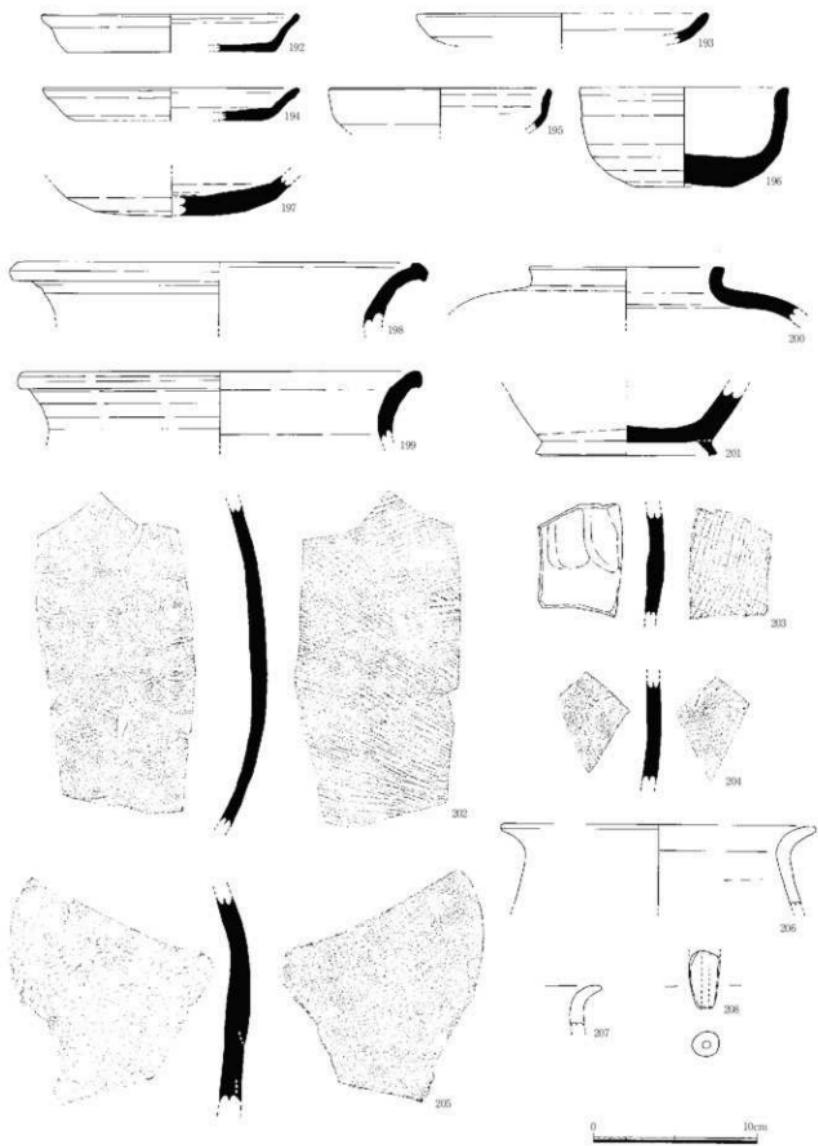


Fig.37 Ⅲ層出土遺物実測図

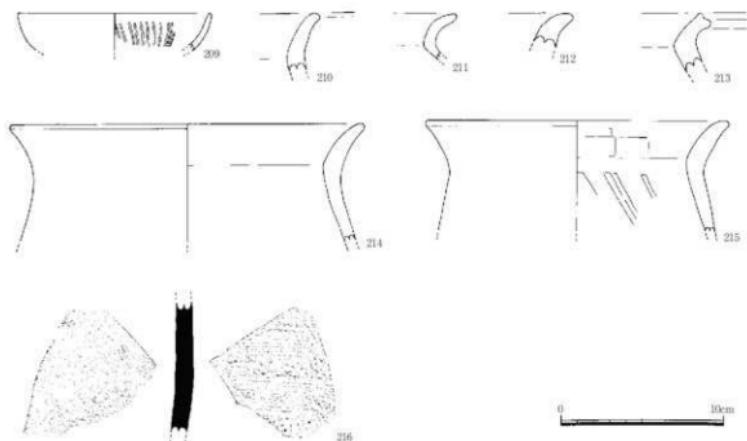


Fig.38 N・V層出土遺物実測図

(5) 包含層出土の遺物・その他の遺物

II・III層出土の遺物 (Fig.36・37)

II層・III層から古代の遺物が多く出土している。図示したものはII層出土の土師器皿(167・168)・皿又は盤(169)・壺(183~185)・須恵器杯(170~172・174)・皿(173)・杯蓋(175・176)・壺蓋(177)・器種不明(182)・壺(181)、製塙土器(186~191)・緑釉陶器器種不明(178)・灰釉陶器椀(179・180)、III層出土の須恵器椀(195・196)・皿(192~194)・器種不明(197)・壺(198~201)・壺(202~205)、土師器壺(206・207)・土錘(208)である。195・196は7世紀の須恵器椀、198・199は広口壺の口縁部である。200は短頸壺で7~8世紀、201は壺の底部で8世紀の製品である。186~191は製塙土器で、190は内面に布目痕、188・189は内面にチヂレ目が残る。

IV層・V層出土の遺物 (Fig.38)

図示したものはIV層出土の土師器椀(209)・壺(210~212・214・215)、V層出土の土師器壺(213)・須恵器壺(216)である。209は土師器椀で内面にミガキ調整と放射状の暗文を施す。搬入品で7~8世紀の製品である。

遺構内混入の遺物 (Fig.39・40)

この他、中世の遺構内からも、混入とみられる古代の遺物が多く出土している。

図示したものは土師器杯(217)・皿(218・223~227)・椀(219)・蓋(228・229)・赤色塗彩土師器杯(220)・赤色塗彩土師器杯又は皿(221・222)・壺(260~262)・須恵器杯(230~238)・皿(239~242)・蓋(243~248・268・269)・鉢(257)・高杯(249~251)・器種不明(252)・瓶(255)・壺(253・254)・壺又は瓶(256・258・259)・製塙土器(263~267)である。263~267は製塙土器で、267は内面に布目、264・266は内面にチヂレ目が残る。

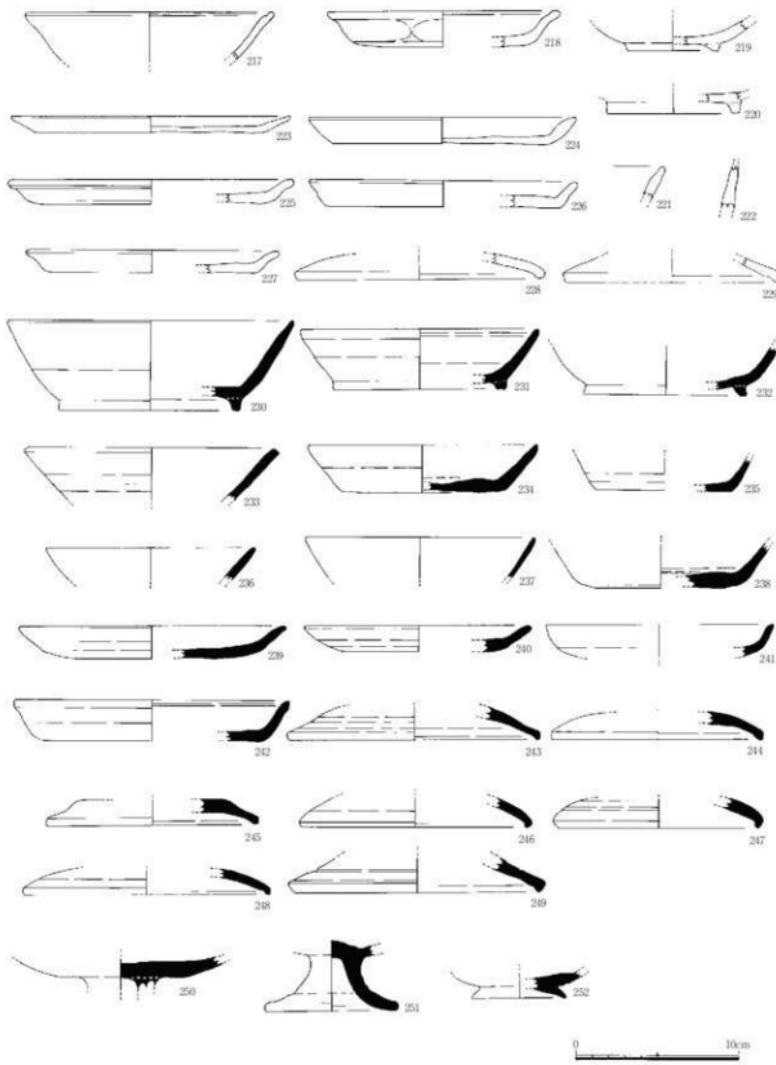


Fig.39 遺構内混入の遺物実測図 (1)

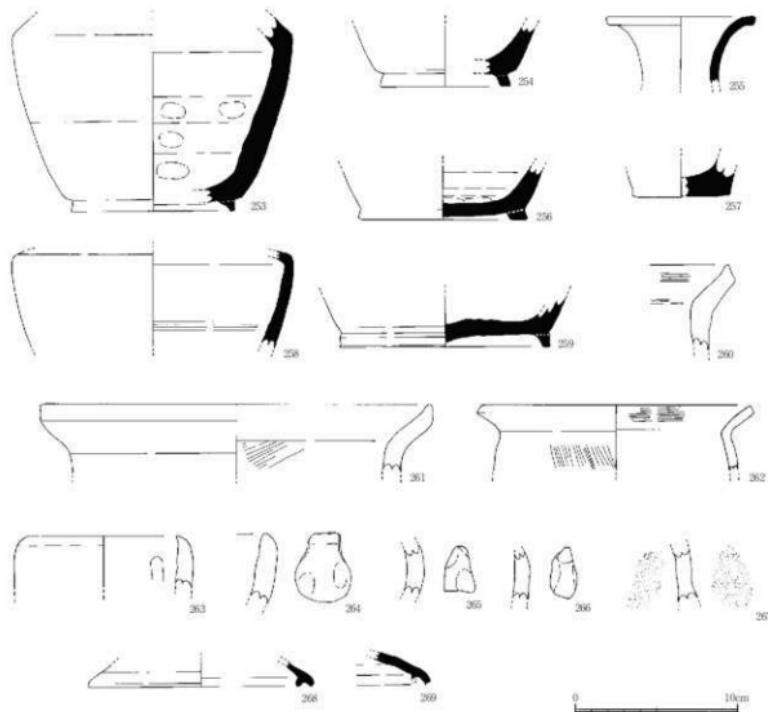


Fig.40 遺構内混入の遺物実測図 (2)

4. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物跡12棟、土坑62基、井戸1基、溝及び溝状遺構13条、ピット642基、性格不明遺構2基を確認した。遺構は12～13世紀の遺物を含むものが多数を占め、包含層からも同時代の遺物が最も多く出土している。この他少数ではあるが、P52・75・271・521など、14世紀の遺物を含む遺構も検出されている。

(1) 掘立柱建物跡

中世の掘立柱建物跡は東西棟のSB4～15を確認した。しかし建物の柱穴として特定したもの以外にも、柱痕を伴うピットが周辺に複数存在しており、本来の建物数はさらに多かったと思われる。建物は特に調査区の東部に集中する傾向があり、重複して検出されたものもあることから、同地点で数度の建て替えが行われたとみられる。

なお、各柱穴の詳細については、SBピット計測表 (Tab.6) に示している。

SB4 (Fig.41)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P3が古代のP809、P8が古代のSK122を切り、P4が中世のSB6-P7・SB8-P7に切られる。また、P3はSB8-P8と柱穴が重複する。

棟方向はN-89°-Eである。規模は梁間3.04m、桁行5.70-5.80m、桁行の柱間寸法は1.90-1.93mを測る。柱穴は8基を検出している。柱穴の規模は、P3・6が径21-24cm、P1・2・5・8が径28-30cm、P4・7が径35-40cmで、深さはP1-3・5・7が22-34cmを測る。またP4・6・8については下面での検出であるが、SB4検出面からの復元深度は28-54cmとなる。また、P1では径18cmの柱痕、P5では径12cmの柱痕を検出し、P2・4では床面から柱痕状の凹みを検出している。埋土はP1・3・5・7がにぶい黄褐色シルト、P2・6・8が灰黄褐色シルト、P4が褐色シルトである。

遺物はP1-3・5・7・8から土師質土器杯・小皿、瓦器碗、青磁碗が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿3点、底部数にして土師質土器杯4点、小皿2点、青磁碗1点であり、この他土師質土器細片と瓦器の体部片が出土している。また、P1では柱痕内から土師質土器小皿の口縁部と細片、P2では柱痕内から土師質土器杯の体部片、P7では柱痕内から土師質土器杯の口縁部1点と底部1点が出土している。

図示したものはP2出土の青磁碗(270)である。270は中国龍泉窯系の青磁碗で、内底にヘラ形に

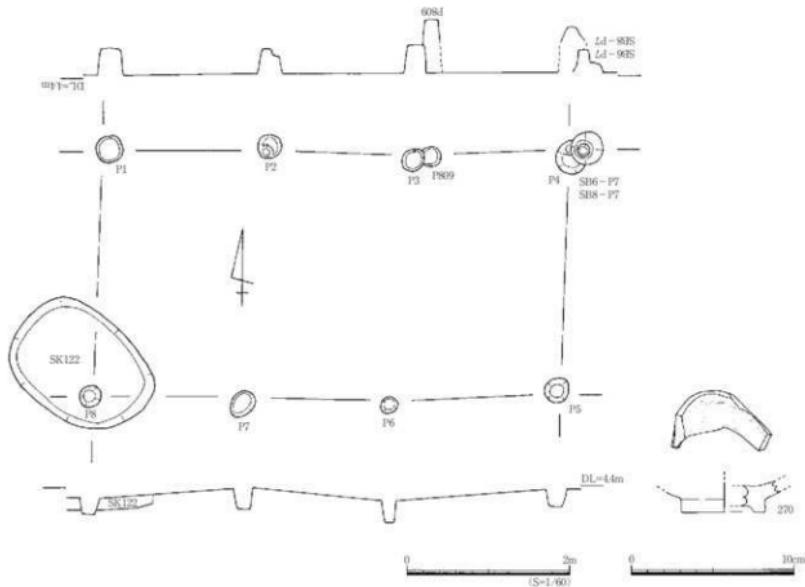


Fig.41 SB4平面図・エレベーション図・SB4-P2出土遺物実測図

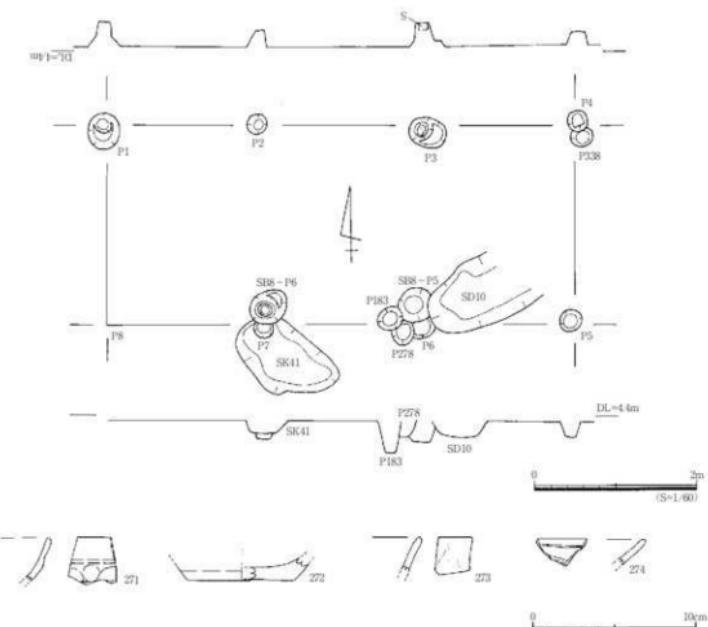


Fig.42 SB5平面図・エレベーション図・SB5-P3・6出土遺物実測図

よる文様を施す。270はP316床面出土の青磁片と接合関係がある。

SB5 (Fig.42)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P4が中世のP338を切り、P6が中世のSB8-P5とSD10・P278に切られ、P7が中世のSB8-P6とSK41に切られる。また、P1はSB6-P2と柱穴が重複する。

棟方向はN-88°-Wである。規模は梁間2.44m、桁行5.80m、桁行の柱間寸法は1.93mを測る。柱穴は7基を検出し、P8は未検出である。柱穴の規模は、P2・4-7が径24-36cm、P1・3が径44-48cmで、深さは15-31cmを測る。またP7については下面での検出であるが、SB5検出面からの復元深度は24cmとなる。この他、P3では径19cmの柱痕を検出し、柱痕の床部分から根石と見られる角礫が出土した。また、P1でも床面から径12cmの柱状の凹みを検出している。埋土はP1・3が灰黄褐色シルト、P2がにぶい黄褐色シルト、P4-7が褐灰色シルトである。

遺物はP1~3・5・6から土師質土器小皿、瓦器椀、青磁碗、瓦質土器鍋が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿2点、瓦器椀又は皿2点、青磁碗1点、底部数にして土師質土器杯1点、小皿1点であり、その他土師質土器細片、瓦器細片、瓦質土器の体部片が出土している。

図示したものはP3柱痕出土の土師質土器杯(272)、P3埋土中出土の瓦器椀(271)と青磁碗(273)、

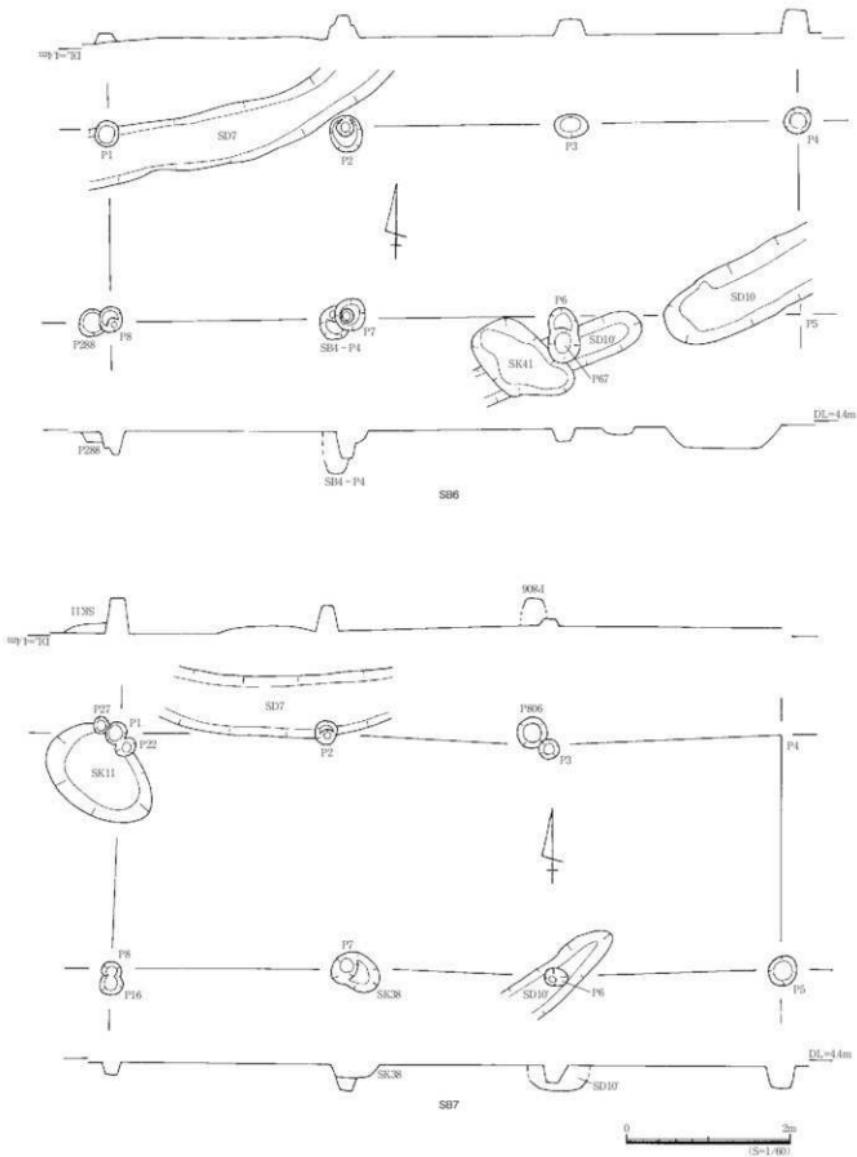


Fig.43 SB6・7平面図・エレベーション図

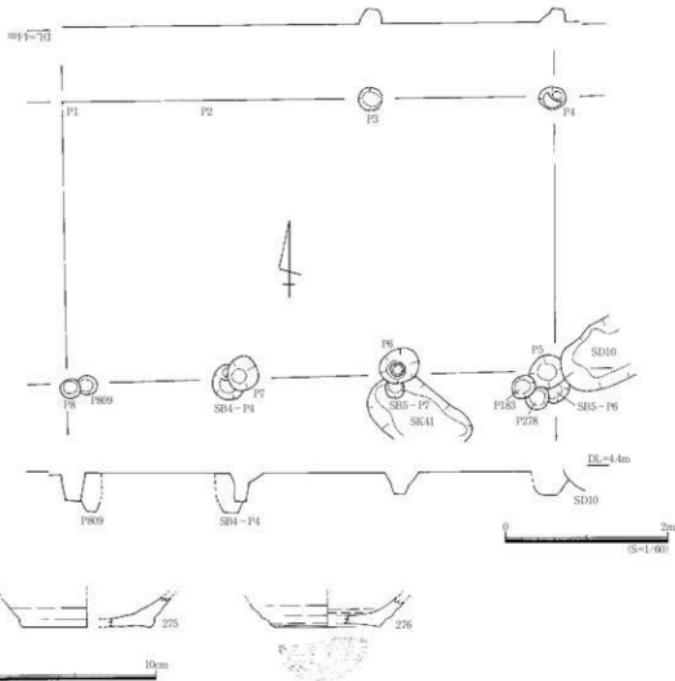


Fig.44 SB8 平面図・エレベーション図・SB8-P5・6 出土遺物実測図

P6出土の瓦器椀(274)である。271・274は和泉型の瓦器椀である。ともに内外面の炭素吸着は良好で、274は内面にミガキと暗文が残る。273は中国龍泉窯系青磁碗(森田分類碗I-5b類)で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面に鎧蓮弁文を描き、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。

SB6 (Fig.43)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P6が中世のSD10'を、P8が中世のP288を切り、P1が中世のSD7に、P6がP67に切られる。また、P7がSB4-P4を切っている。また、P2がSB5-P1と、P7がSB8-P7と柱穴が重複している。

棟方向はN-90°-Wである。規模は梁間2.36m、桁行8.50m、桁行の柱間寸法は2.83mを測る。柱穴は7基を検出し、P5が未検出である。柱穴の規模は、P1・4・6・8が径30～34cm、P2・3・7が径40～45cmで、深さは15～34cmを測る。また、P2・7・8では床面から柱痕状の凹みを検出している。埋土はP1～3・6・7が灰黄褐色シルト、P4が褐灰色シルト、P8がにぶい黄褐色シルトである。

遺物はP2・4・6～8から土師質土器杯・小皿、瓦器椀、常滑焼壺が出土している。出土点数は

口縁部数にして土師質土器小皿2点、底部数にして土師質土器杯1点、小皿1点であり、この他に土師質土器細片、瓦器碗の体部片、常滑焼の体部片等が出土している。

SB7 (Fig.43)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P1が中世のSK11を切り、P6が中世のSD10'を切り、P7が中世のSK38に切られている。また、P2とSD7、P8とP16とは切り合うが前後関係は不明である。またP6とSB10-P3は柱穴が重複し、P7とSB9-P6も重複している。

棟方向はN-90°-Wである。規模は梁間2.90m、桁行8.30m、桁行の柱間寸法は2.76mを測る。柱穴は7基を検出し、P4が未検出である。柱穴の規模は、P1・3・6・7が径26~30cm、P5が径36cm、P8が径22cmで、深さはP6・8が16~22cm、P1・2・5・7が30~44cmを測る。またP3については下面での検出であるが、SB7検出面からの復元深度は15cmとなる。また、P1では径18cmの柱痕を検出している。埋土はP2・3・6~8が灰黄褐色シルト、P1・5がにぶい黄褐色シルトである。

遺物は、P1・2・6・8から土師質土器杯・小皿、瓦器碗、須恵器甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿3点、底部数にして土師質土器小皿1点であり、その他土師質土器細片、瓦器碗の体部片、須恵器甕の体部片が出土している。

SB8 (Fig.44)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P5がSB5-P6を、P6がSB5-P7とSK41を、P7がSB4-P4を切る。またP5が中世のSD10・P183・P278に切られ、P8が古代のP809を切っている。また、P7がSB6-P7と柱穴が重複しており、P8がSB4-P3と重複している。

棟方向はN-90°-Wである。規模は梁間3.36m、桁行6.04m、桁行の柱間寸法は2.01mを測る。柱穴は6基を検出し、P1・2が未検出である。柱穴の規模は、P3・4が径28~34cm、P5・6・7が径40~48cm、P8が径23cmで、深さは18~34cmである。またP5については下面での検出であるが、SB8検出面からの復元深度は32cmとなる。この他、P4では径16cmの柱痕を検出し、P6・7では床面から柱痕状の凹みを検出している。埋土はP3~7が灰黄褐色シルト、P8がにぶい黄褐色シルトである。

遺物はP3~8から土師質土器杯・小皿、瓦器碗又は皿が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器小皿1点、底部数にして土師質土器杯6点、小皿1点であり、その他土師質土器細片、瓦器の体部片が出土している。また、P4では柱痕内から瓦器碗又は皿の体部片1点と土師質土器細片、P6では柱痕内から土師質土器杯の底部片(276)1点が出土している。

図示したものはP5出土の土師質土器杯(275)、P6柱痕出土の土師質土器杯(276)である。

SB9 (Fig.45)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P4が中世のP656と古代のP806を、P5が中世のSD10'を切り、P1~3が中世のSD7に、P6が中世のSK38に切られる。また、P6がSB7-P7と重複する。

棟方向はN-86°-Wである。規模は梁間3.24m、桁行5.68m、桁行の柱間寸法は1.89mを測る。柱穴は6基を検出し、P7・8が未検出である。柱穴の規模は、P1~6が径28~38cm、P2~6が深さ

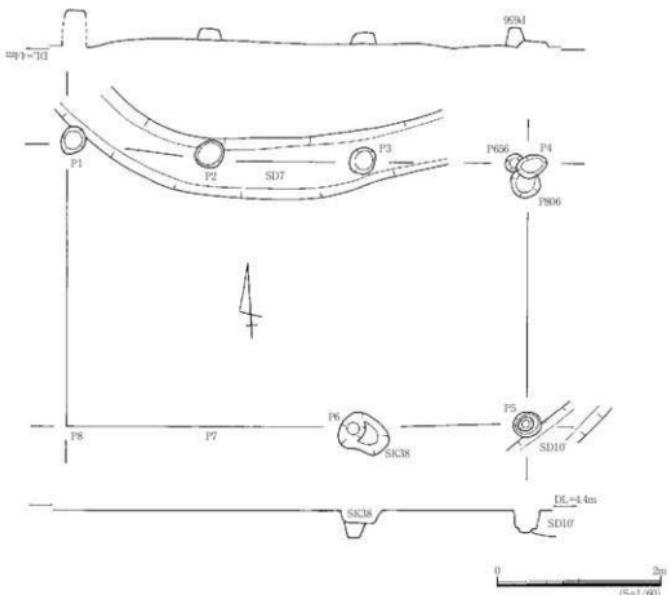


Fig.45 SB9平面図・エレベーション図

15～32cmである。またP1については下面での検出であるが、SB9検出面からの復元深度は42cmとなる。この他、P5では床面から柱痕状の凹みを検出している。埋土はP2～6が灰黄褐色シルト、P1が褐灰色シルトである。

遺物はP2・3・5から土師質土器杯・小皿、瓦器椀が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿6点、底部数にして土師質土器杯2点、小皿1点である。

SB10 (Fig.46)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P1がP658を、P3がSD10'を、P5がP226を切り、P4がP188に、P8がSX3に切られる。またSBとの前後関係では、P7がSB14～P8に切られており、SB10がSB14に先行する。

棟方向はN-90°-Wである。規模は梁間3.30m、桁行6.14m、桁行の柱間寸法は2.04mを測る。柱穴は7基を検出し、P2が未検出である。柱穴の規模は、P1・3・4・6～8が径28～38cm、P5が径48cm、深さ20～41cmである。またP4・8については下面での検出であるが、SB10検出面からの復元深度は30～32cmとなる。この他、P7では柱痕を検出している。埋土はP1・3・5・7・8が灰黄褐色シルト、P4・6がにぶい黄褐色シルトである。

遺物はP1・3～8から土師質土器杯・小皿、瓦器椀、須恵器甕、白磁片が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯5点、小皿5点、瓦器椀1点、底部数にして土師質土器小皿4点であ

り、この他、土師質土器細片、白磁の体部片、瓦器椀又は皿の体部片、須恵器壺の体部片が出土している。このうち、P4では柱痕から土師質土器細片、P5では柱痕から土師質土器小皿の底部1点、P6では柱痕から土師質土器小皿の底部1点と須恵器壺体部片、P7では柱痕から土師質土器小皿の口縁部1点と細片が出土している。

図示したものはP5柱痕出土の土師質土器小皿(277)、P5埋土出土の土師質土器小皿(278)である。

SB11 (Fig.47)

調査区中央部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P2が中世のP282を、P6～8が中世のSX3を切り、P5が中世のSD9に切られている。

棟方向はN-87°-Wである。規模は梁間3.30m、桁行6.40m、桁行の柱間寸法は2.13mを測る。柱穴は7基を検出し、P1が未検出である。柱穴の規模は、P2・3・5・7が径28～34cm、P4・6・8が径38～42cmで、P2～4・6が深さ18～34cmを測る。またP5・7・8については下面での検出であるが、SB11検出面からの復元深度は26～44cmとなる。埋土はP2・4・6が灰黄褐色シルト、P3がにぶい黄褐色シルト、P5・7・8が褐灰色シルトである。

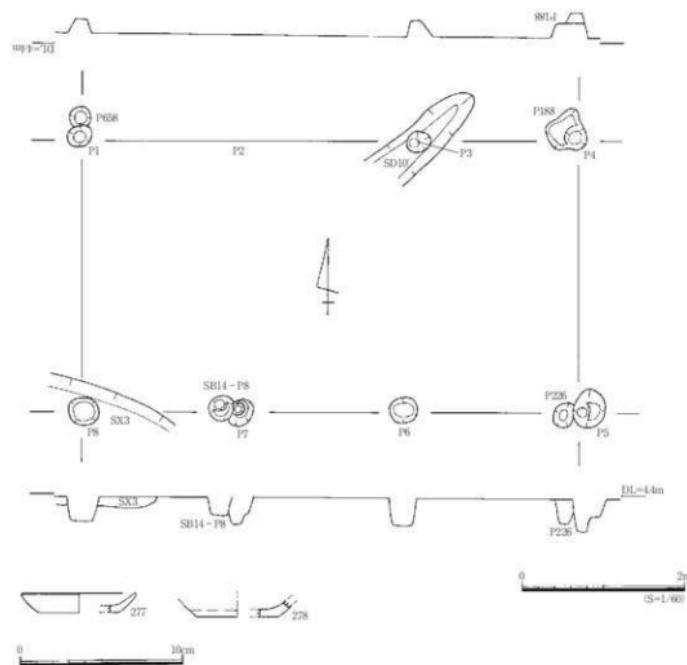


Fig.46 SB10平面図・エレベーション図・SB10-P5出土遺物実測図

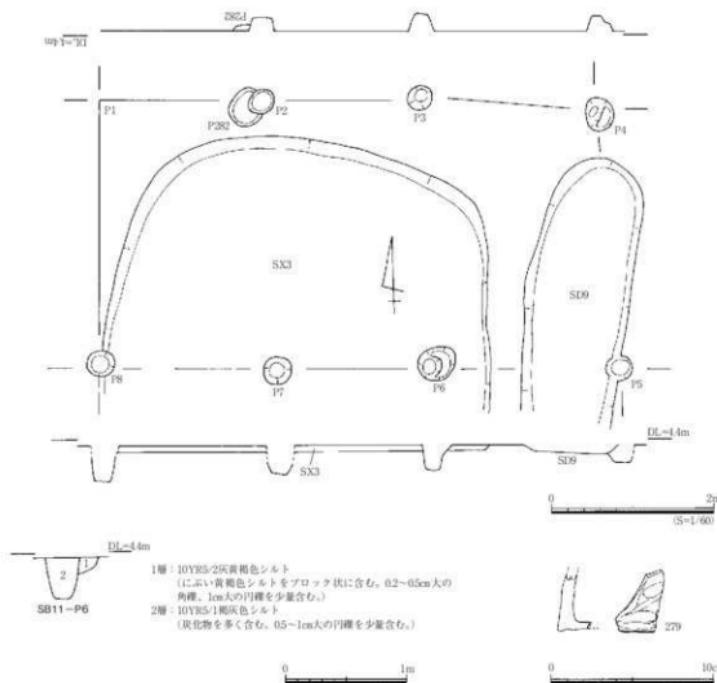
遺物はP2～4・6～8から土師質土器杯・小皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵器甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿3点、瓦器椀又は皿21点であり、この他、土師質土器細片、瓦器椀又は皿の体部片、須恵器甕、瓦質土器片が出土している。

図示したものはP8出土の瓦質土器器種不明(279)である。

SB12 (Fig.48～51)

調査区南東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P4が中世のSD13に切られている。

棟方向はN-87°-Eである。規模は梁間3.80m、桁行5.94m、桁行の柱間寸法は1.98mを測る。柱穴は7基を検出し、P6が未検出である。柱穴の規模は、P1・2・5・7・8が径42～50cm、P3が径96×62cm、P4が径64×52cmと大型である。SB検出面からの深さはP1・2・5・7・8が9～22cm、P3が48cm、P4が54cmを測る。またP3・4では柱痕を検出し、P1では床面から柱痕状の凹みを検出している。また、P8の床からは径27cm大の角礫が出土し、P3でも大型の角礫2個が出土している。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。



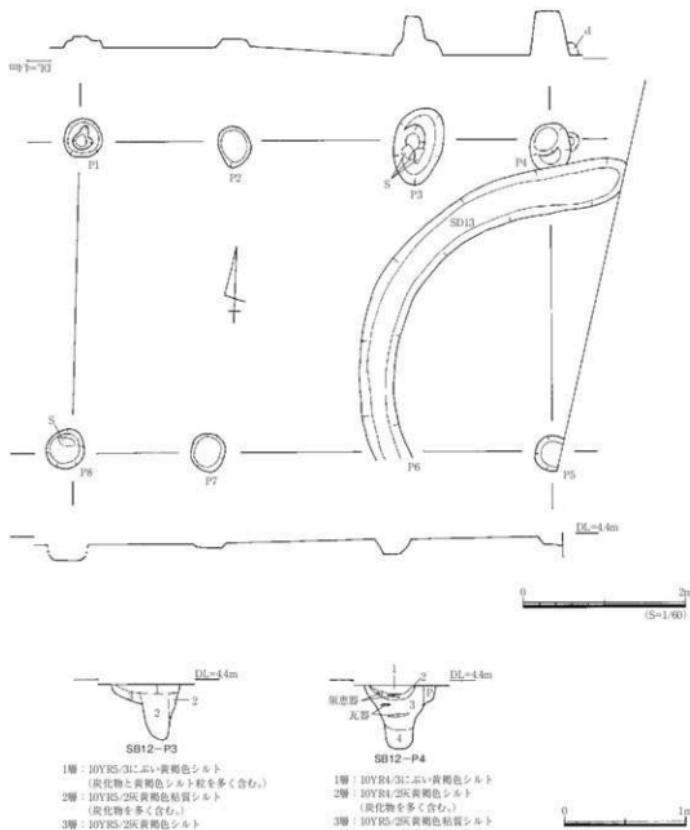


Fig.48 SB12平面図・セクション図・エレベーション図

遺物はP1～5、7から土師質土器杯・小皿、瓦器碗・皿、須恵器甕、白磁碗、青磁碗・皿が出土している。このうちP3・4には特に多くの遺物が発見されており、P3からは口縁部数にして土師質土器杯14点、小皿29点、瓦器碗5点、瓦器皿3点、青磁碗1点、底部数にして土師質土器杯10点、小皿23点、瓦器碗2点、瓦器皿3点、この他300数点の土器片が出土している。またP4からは口縁部数にして土師質土器杯21点、小皿48点、瓦器碗13点、瓦器皿2点、青磁碗2点、須恵器甕2点、底部数にして土師質土器杯23点、小皿53点、瓦器碗5点、瓦器皿1点、青磁碗1点、青磁皿1点、その他500数点の土器片が出土している。

図示したものは、P2上層出土の土師質土器杯(280)、P3出土の土師質土器杯(281～286)・

小皿 (287～293)、瓦器碗 (294～298)・皿 (299)、須恵器甕 (300)、白磁碗 (301)、青磁碗 (302)・皿 (303)、P4出土の土師質土器杯 (304・306～310)・碗又は杯 (305)・小皿 (311～323)、瓦器碗 (324～334)・皿 (335～338)、青磁碗 (339～342)・皿 (343)、陶器甕 (347～350)、須恵器鉢 (344)・甕 (345・346) である。294～298は和泉型瓦器碗、299は和泉型の瓦器皿である。294・295・298は炭素吸着が弱く、外面の炭素は剥離する。296・297は内面の炭素吸着も認められない。301は中国産の白磁碗（森田分類碗V類）で、12世紀に比定される。302は中国同安窯系の青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。外面に柳目、内面に片切形による文様と図線を描く。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し貫入が入る。303は中国同安窯系の青磁皿で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。内面にヘラと柳描きによる文様を描く。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し貫入が入る。339～342は中国龍泉窯系の青磁碗（森田分類碗I・2類）で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切形による文様を施す。343は中国同安窯系の青磁皿で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。内面に柳描きによる文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。344は東播系の須恵器鉢。347・348は常滑焼甕（赤羽・中野編年3～4型式）で、12世紀第4四半期

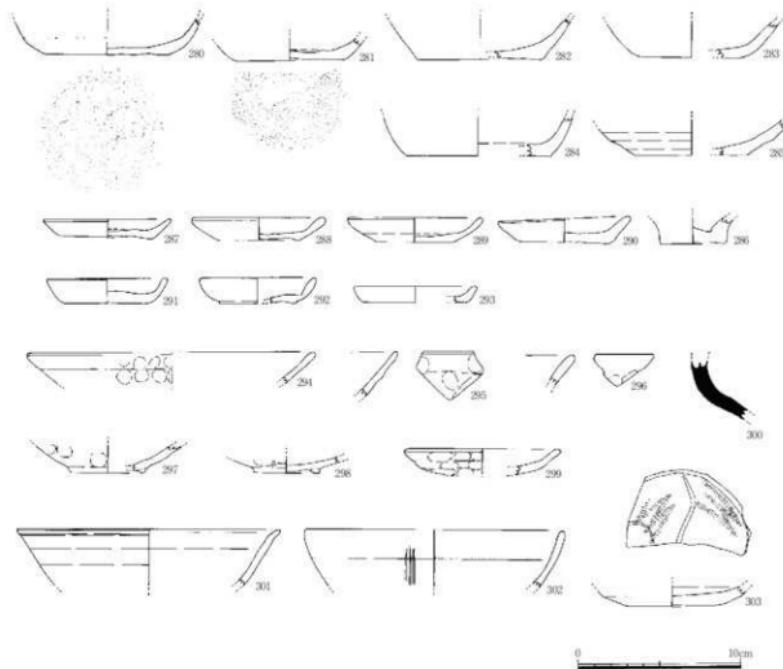


Fig.49 SB12-P2・3出土遺物実測図

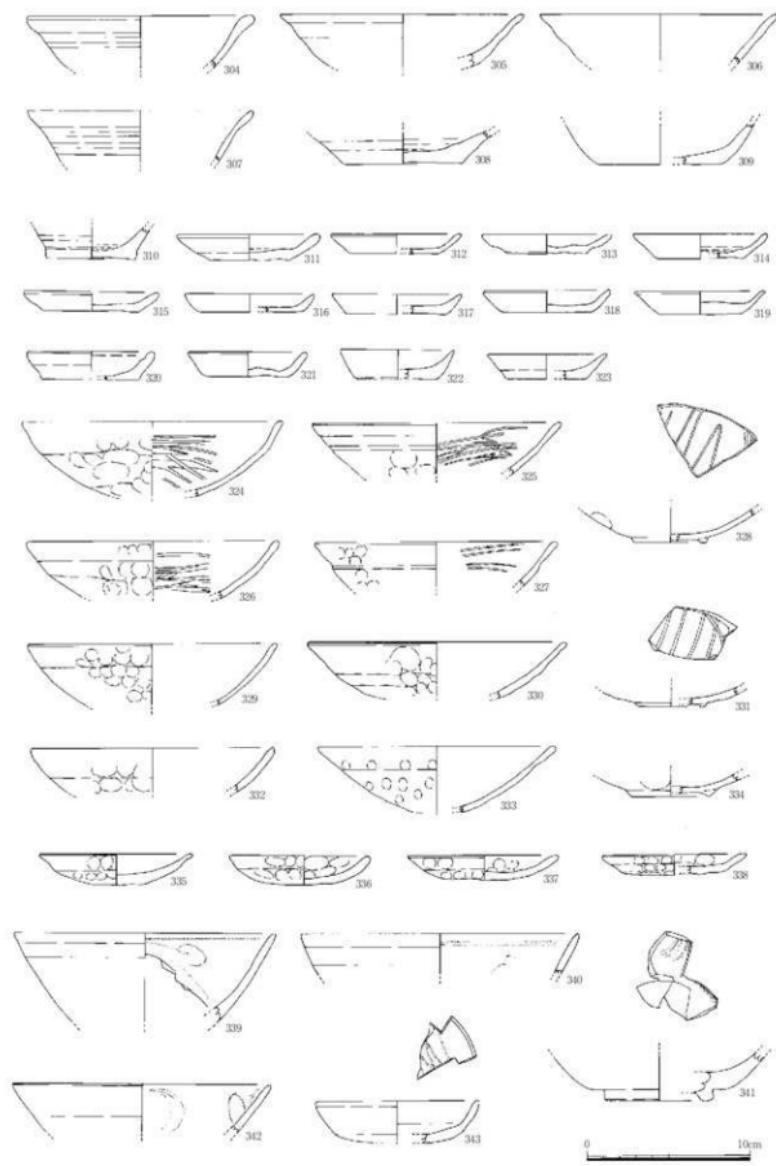


Fig.50 SB12 - P4出土遺物実測図 (1)

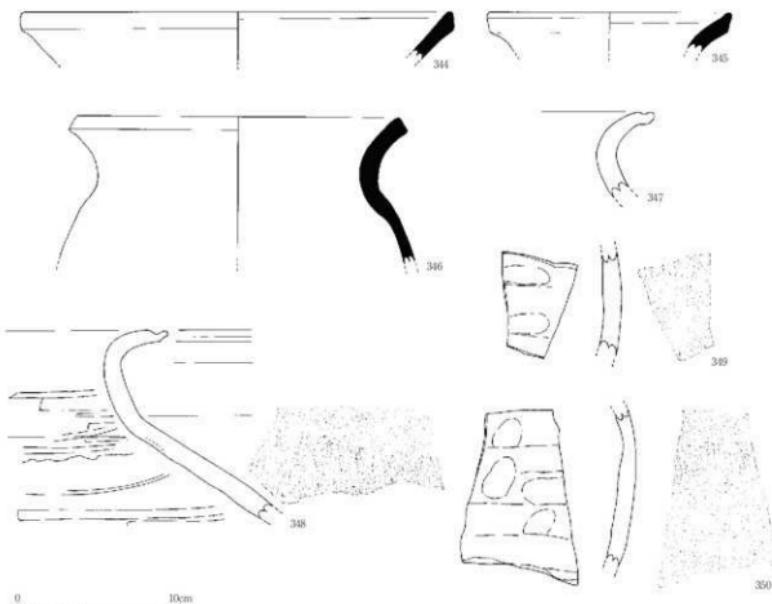


Fig.51 SB12-P4出土遺物実測図 (2)

～13世紀第1四半期に比定される。ともに口縁部肩部外面に灰オーリーブ色の自然釉がかかる。349・350は常滑焼窯の体部片で外面にタタキ目が残る。

SB13 (Fig.52)

調査区南部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P4・5が中世のSD9を切り、P7が古代のSK16を切っている。

棟方向はN-88°-Eである。規模は梁間3.84m、桁行6.40m、桁行の柱間寸法は2.13mを測る。柱穴は7基を検出し、P6が未検出である。柱穴の規模は、径28～38cm、SB検出面からの深さはP1・2・8が8～18cm、P3～5・7が36～42cmである。またP3では径15cmの柱痕を検出し、P2・4では床面から柱痕状の凹みを検出している。埋土はP1・4・5・7・8が灰黄褐色シルト、P2・3がにぶい黄褐色シルトである。

遺物はP1・3～5・8から土師質土器杯・小皿、瓦器椀が出土している。出土点数は、口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿5点、底部数にして土師質土器杯1点、小皿2点であり、この他土師質土器片、瓦器椀の体部片が出土している。このうち、P3の柱痕からは土師質土器小皿の口縁部1点が出土している。

SB14 (Fig.53)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P1が中世

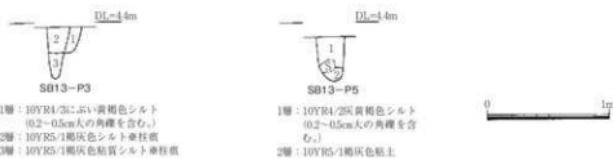
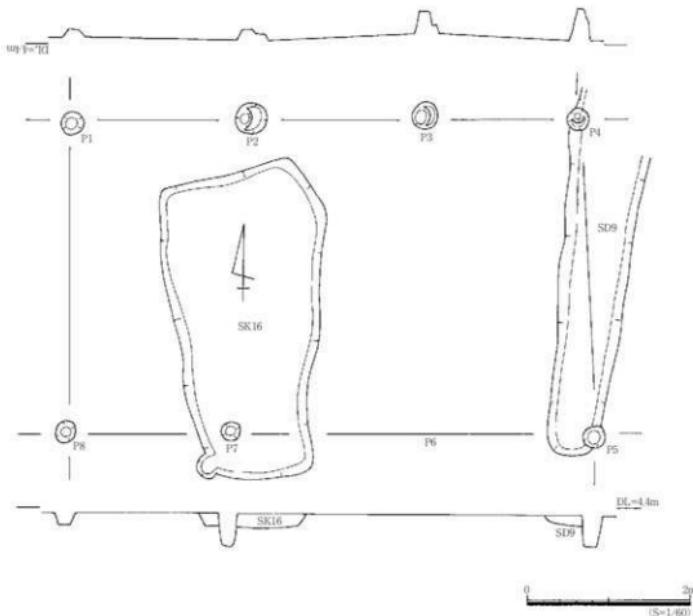


Fig.52 SB13平面図・セクション図・エレベーション図

のSK92を切り、P6が時期不明のP226を切る。またP3が中世のP185と切り合うが前後関係は不明である。また他のSBとの前後関係では、P8がSB10-P7を切っており、SB10が先行する。この他、P6がSB10-P5と、P7がSB10-P6と柱穴が重複している。

棟方向はN-90°-Wである。規模は梁間2.78m、桁行7.50m、桁行の柱間寸法は250mを測る。柱穴は6基を検出し、P2・4が未検出である。柱穴の規模は、P1・3・5・7・8が径32~38cm、P6が径48×36cmで、深さは15~41cmである。また、P7では床面から柱痕を検出し、P1・5・8は床面から大型の角礫が出土している。埋土はP1・5・6・8が灰黄褐色シルト、P3・7がにぶい灰褐色シルトである。

遺物はP3・5~8から土師質土器杯・小皿、瓦器椀、須恵器壺が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿4点、底部数にして土師質土器杯3点、小皿6点、瓦器椀1点であり、

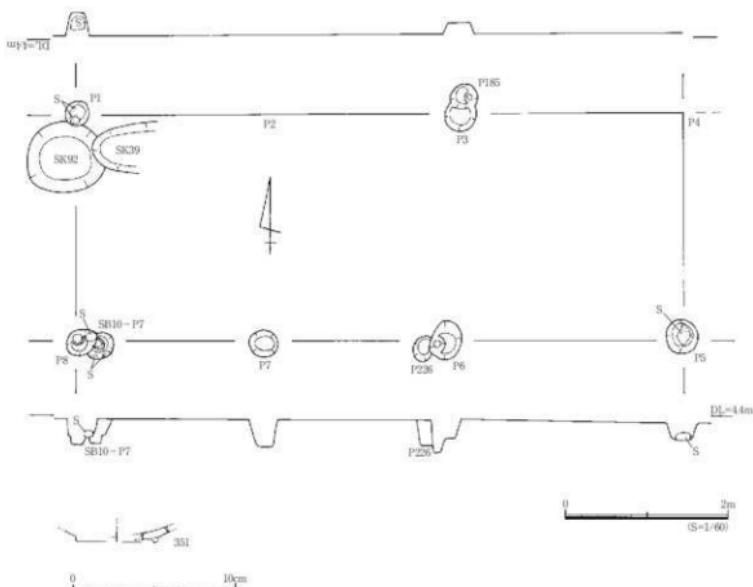


Fig.53 SB14平面図・エレベーション図・SB14-P8出土遺物実測図

他に土師質土器片、瓦器椀の体部片、須恵器壺の体部片が出土している。また、P6では柱痕から土師質土器小皿の底部1点、P7では柱痕から土師質土器小皿の底部と須恵器壺の体部片、P8では柱痕から土師質土器小皿の底部1点と瓦器椀の底部1点が出土している。

図示したものはP8柱痕出土の瓦器椀(351)である。351は和泉型の瓦器椀で、内外面とも炭素吸着は認められない。

SB15 (Fig.54)

調査区中央部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。他遺構との前後関係では、P4が古代のSX4を切り、P6が中世のSD9を切り、P1が中世のSX3に切られ、P3が中世のP108に切られ、P5が中世のP233に切られる。

棟方向はN - 90° - Wである。規模は梁間2.84m、桁行7.50m、桁行の柱間寸法は2.50mを測る。柱穴は6基を検出し、P2・8が未検出である。柱穴の規模は、P1・3～5が径23～30cm、P6・7が径37～42cmで、深さはP3が9cm、P1・4～7が16～31cmを測る。また、P6では柱痕を検出している。埋土はP1・3がにぶい黄褐色シルト、P4～7が灰黄褐色シルトである。

遺物はP1・3～7から土師質土器杯・小皿、須恵器壺、陶器壺、土錘が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器小皿2点、底部数にして土師質土器杯4点、小皿3点であり、その他須恵器壺、陶器壺、土錘の体部片と土師質土器細片が出土している。

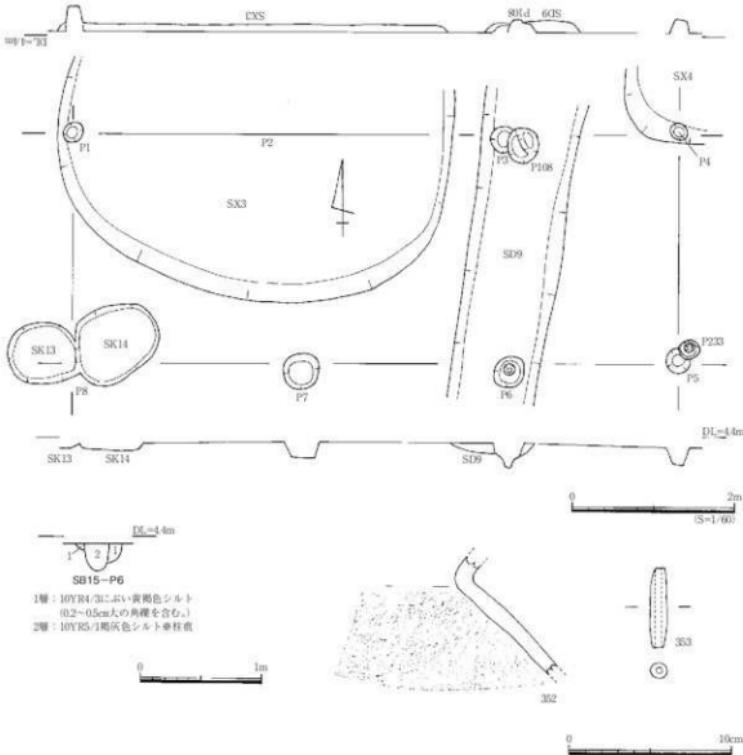


Fig.54 SB15平面図・セクション図・エレベーション図・SB15-P5・6出土遺物実測図

図示したものはP5出土の陶器壺(352)、土錘(353)である。

(2) 土坑

SK5 (Fig.55)

B-6グリッドに位置し、中世のSK23・31に切られる。平面形は楕円形を呈し、南北残存長0.76m、東西長0.55m、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部2点と底部3点、土師質土器小皿の口縁部1点と底部3点、土師質土器細片9点、及び古代の混入とみられる須恵器皿である。

図示したものは土師質土器小皿(354)である。

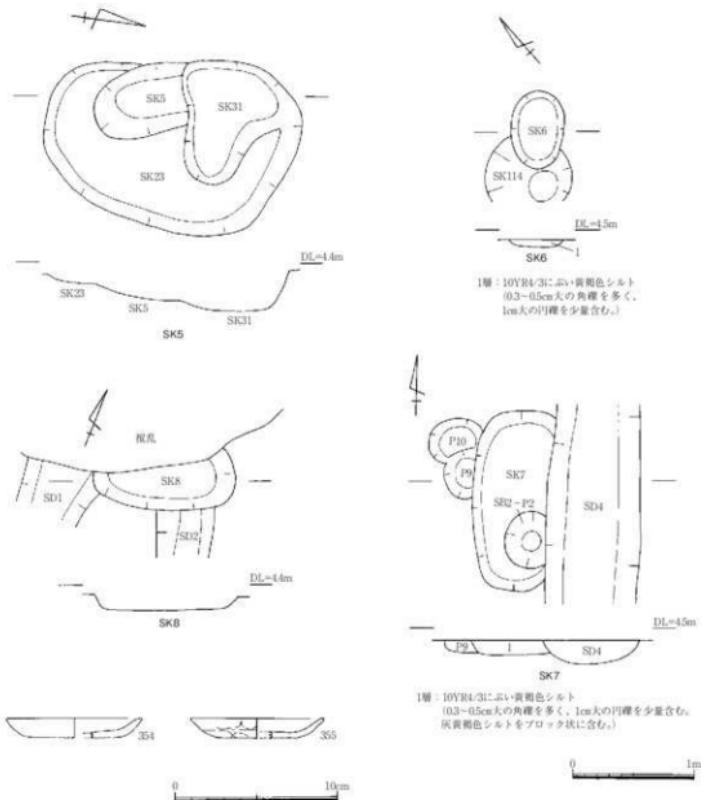


Fig.55 SK5～8平面図・セクション図・エレベーション図・SK5・7出土遺物実測図
(SK5:354, SK7:355)

SK6 (Fig.55)

C - 3グリッドに位置し、古代のSK114を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.64m、短軸0.44m、深さ5cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK7 (Fig.55)

D - 2グリッドに位置し、中世のP9・10と古代のSB2 - P2を切り、中世のSD4に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.48m、短軸残存長0.60m、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は瓦器皿の口縁部(355)と底部2点、土師質土器細片、須恵器壺の体部片、及び古代の混入とみられる須恵器皿と土師器片である。

SK8 (Fig.55)

B - 5・6グリッドに位置し、中世のSD1・2を切る。北側が搅乱を受けるが、平面形は梢円形とみられ、東西長1.18m、南北残存長0.40m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部2点と底部3点、土師質土器小皿の底部3点、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器皿である。

SK9 (Fig.56)

D - 1グリッドに位置し、古代のSK3を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.62m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は古代の混入とみられる土師器杯又は皿、須恵器皿・壺である。

SK10 (Fig.56)

D - 2グリッドに位置し、中世のP743を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.84m、深さ41cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は古代の混入とみられる土師器杯・壺、須恵器蓋・壺である。

SK11 (Fig.56)

E - 1・2グリッドに位置する土坑で、中世のP25～27を切り、中世のSB7 - P1とP22に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸1.45m、短軸0.98m、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の口縁部1点、瓦器椀の底部1点と体部片、及び土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる土師器杯・壺、須恵器片も出土している。

SK12 (Fig.56)

D - 1グリッドに位置し、中世のSD7に切られる。平面形は梢円形とみられ、南北の残存長0.64m、東西長0.50m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器細片、及び古代の混入とみられる土師器壺、須恵器壺である。

SK15 (Fig.56・58)

D - 5グリッドに位置し、中世のSK21を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸1.16m、短軸0.94m、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部8点、杯の底部2点、小皿の底部3点、土師質土器細片である。図示したものは土師質土器杯(360)・小皿(359)である。

SK19 (Fig.56)

D - 8グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、径0.50m、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点、瓦器椀の体部片、及び土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる土師器壺、須恵器杯が出土している。

SK20 (Fig.56)

E - 6グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.78m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

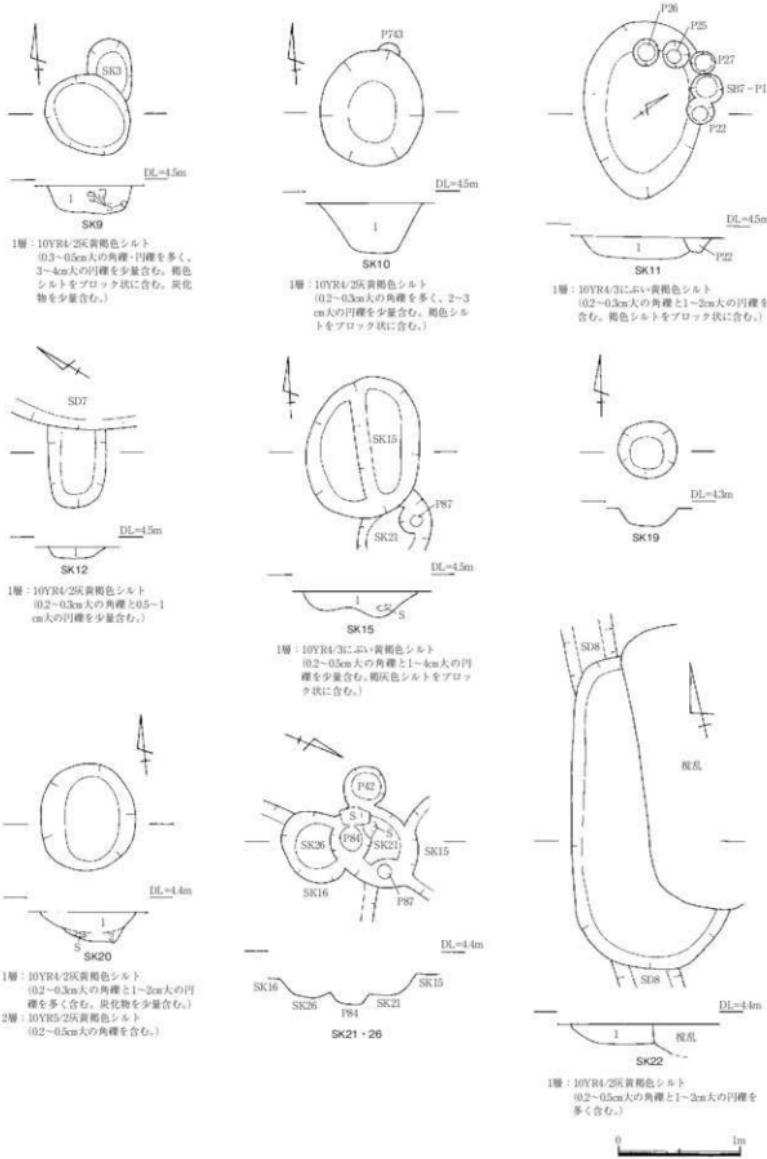


Fig.56 SK9～12・15・19～22・26平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点、瓦器碗の体部片1点、及び土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる土師器杯・壺、須恵器杯も出土している。

SK21 (Fig.56・58)

D - 5グリッドに位置する土坑で、古代のSK16、中世のSK26・P84・87を切り、中世のSK15に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸0.80m、短軸0.60m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

遺物は下層から瓦器碗(367)1点が出土している。367は和泉型の瓦器碗で、内面にミガキを施す。

SK22 (Fig.56・58)

C - 4・5グリッドに位置し、中世SD8を切る。東部が擾乱を受けるが、平面形は梢円形とみられ、南北長2.60m、東西残存長1.28m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器皿、青磁碗、土師質土器鍋又は壺、須恵器壺である。出土点数は口縁部数にして土師器杯又は小皿7点、壺1点、瓦器皿3点、青磁碗1点、底部数にして土師器杯3点、小皿1点、瓦器皿2点であり、この他、土師質土器細片、古代の混入とみられる土師器蓋、製塙土器、須恵器壺等が出土している。

図示したものは瓦器皿(368)、青磁碗(369)である。369は中国同安窯系の青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。外面に櫛描きによる文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。

SK23 (Fig.57・58)

B - 6・C - 5・6グリッドに位置し、中世のSK5・31と溝状造構SD14を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸2.08m、短軸1.50m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器碗・皿である。出土点数は、口縁部数にして土師質土器杯又は皿20点、瓦器皿2点、底部数にして土師質土器杯13点、小皿6点、瓦器碗又は皿3点であり、この他土師質土器細片200数点多くの遺物が出土している。また、古代の混入とみられる土師器壺、須恵器皿・壺等も出土している。

図示したものは土師質土器杯(356～358・361)・小皿(362)である。

SK24 (Fig.57)

E - 5グリッドに位置し、時期不明のP562を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸0.98m、短軸0.64m、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点と土師質土器細片で、他に古代の混入とみられる赤彩土器器の杯1点が出土している。

SK25 (Fig.57)

E - 5グリッドに位置し、中世のSD9を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.46m、深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK26 (Fig.56)

D - 5グリッドに位置し、古代のSK16と中世のP84を切り、中世のSK21に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸0.64m、短軸0.54m、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。出土遺物は確

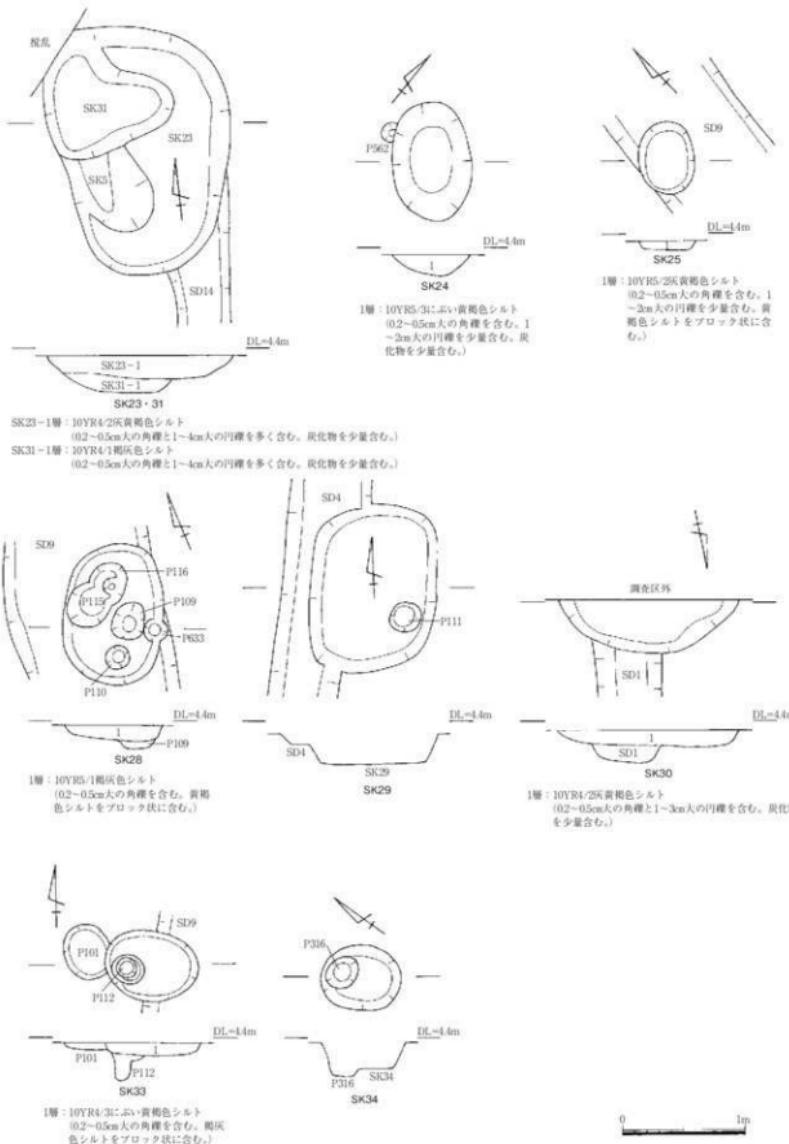


Fig.57 SK23~25・28~31・33・34平面図・セクション図・エレベーション図

認できていない。

SK28 (Fig57・58)

F - 3 グリッドに位置し、中世のP109・110・115・116・633・SD9を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸1.17m、短軸0.80m、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部3点、杯の底部4点、瓦器椀又は皿の口縁部1点、土師質土器細片20点である。その他、古代の混入とみられる須恵器蓋が出土している。

図示したものは土師質土器杯(366)である。

SK29 (Fig57・58)

D - 4 グリッドに位置し、中世のP111を切り、中世のSD4に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.38m、短軸1.04m、深さ25cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、土師質土器小皿の口縁部2点と底部3点、瓦器椀の底部1点と体部片、東播系須恵器鉢の口縁部1点、及び土師質土器細片であり、その他古代の混入とみられる土師器皿・甕、須恵器杯が出土している。

図示したものは土師質土器小皿(364・365)、東播系須恵器鉢(370)である。370は東播系の須恵器鉢で口縁部外面は黒色に発色する。

SK30 (Fig57)

B - 7 グリッドに位置し、中世のSD1を切る。南部が調査区外となるため規模と形態は不明であるが、東西確認長1.48m、南北確認長0.46m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は瓦器椀の口縁部1点、土師質土器細片5点、及び古代の混入とみられる土師器甕の体部片である。

SK31 (Fig57)

B - 5 グリッドに位置する土坑で、中世のSK5を切り、中世のSK23に切られる。平面形は不整形を呈し、東西長1.08m、南北長0.88m、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、瓦器椀の口縁部2点と体部片であり、その他古代の混入とみられる土師器甕、須恵器杯が出土している。

SK33 (Fig57)

E - 4 グリッドに位置し、中世のSD9・P101・112を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.78m、短軸0.58m、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器細片と須恵器細片である。

SK34 (Fig57・58)

F - 2 グリッドに位置し、中世のP316を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.66m、短軸0.54m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部1点、小皿の口縁部3点と底部2点、瓦器椀の体部片と土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器小皿(363)である。

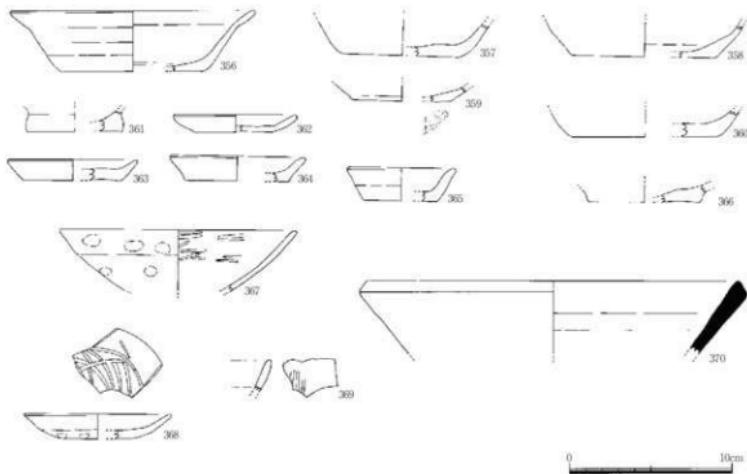


Fig.58 SK15・21～23・28・29・34出土遺物実測図

(SK15:359・360, SK21:367, SK22:368・369, SK23:356～358・361・362, SK28:366, SK29:364・365・370, SK34:363)

SK35 (Fig.59・60)

E - 3 グリッドに位置し、古代のSK124・P790、中世のSB4 - P6、時期不明のP787を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.68m、短軸0.53m、深さ26cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部1点、土師質土器小皿の口縁部1点、東播系須恵器の口縁部2点、土師質土器細片である。また、古代の混入とみられる須恵器蓋も出土している。

図示したものは土師質土器杯(371)、東播系須恵器鉢(372)である。

SK36 (Fig.59・60)

E - 2 グリッドに位置し、中世のSK98を切る。西側が搅乱を受けているため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、東西残存長0.40m、南北長0.50m、深さ11cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部(373)1点と底部1点、及び土師質土器細片である。

SK37 (Fig.59)

F - 2・3 グリッドに位置し、中世のSK39・SD10'・P168を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸1.13m、短軸0.70m、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、小皿の口縁部2点、瓦器椀の口縁部1点と体部片、及び土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる須恵器杯が出土している。

SK38 (Fig.59)

E - 2 グリッドに位置し、中世のSB7 - P7・SB9 - P6を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.61m、短軸0.46m、深さ28cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

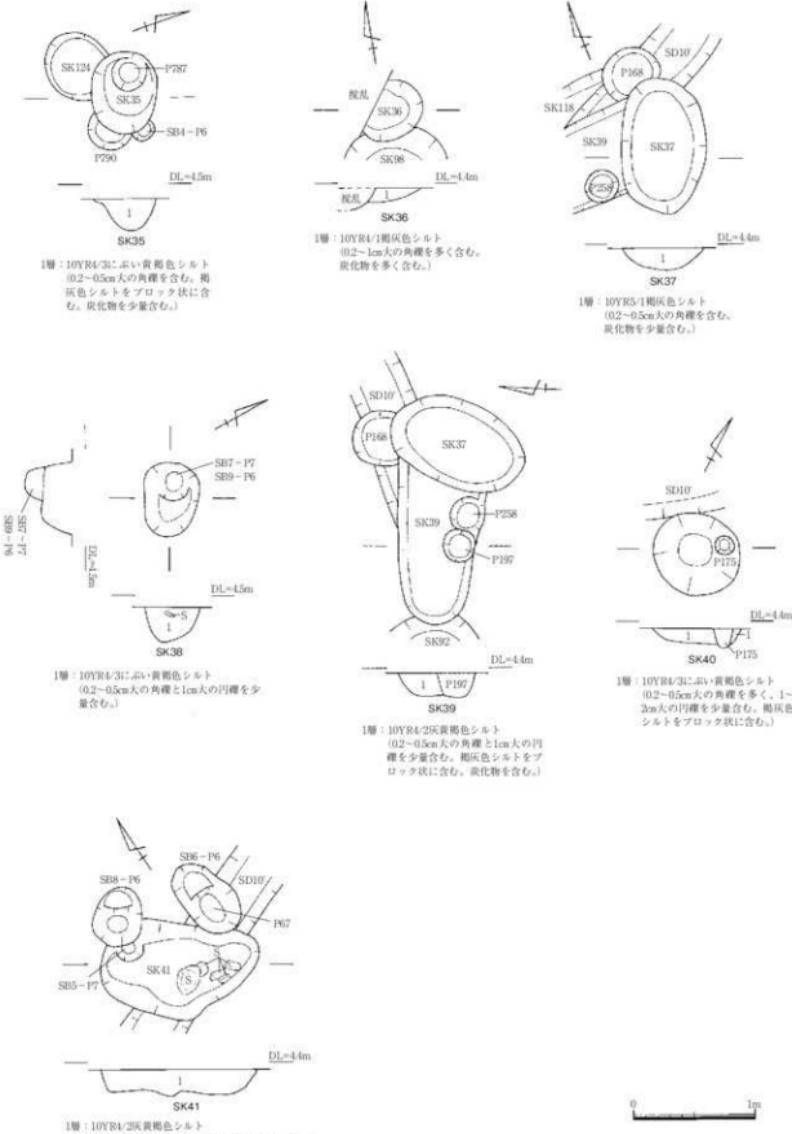


Fig.59 SK35~41 平面図・セクション図・礫出土状況図

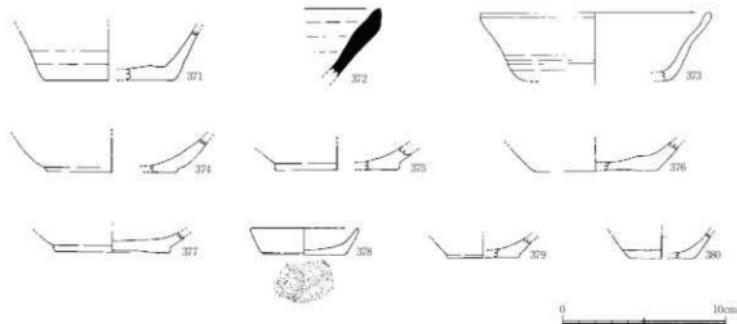


Fig.60 SK35・36・39～41出土遺物実測図
(SK35: 371・372, SK36: 373, SK39: 374・375, SK40: 376, SK41: 377～380)

出土遺物は古代の混入とみられる土師器壺の口縁部1点、土師器細片である。

SK39 (Fig.59・60)

F - 2グリッドに位置する土坑で、中世のSK92・SD10'・P168・258を切り、中世のSK37・P197に切られる。東側が削平を受け全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、東西残存長1.54m、南北長0.70m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点、底部6点、土師質土器小皿の口縁部と底部1点、瓦器碗の口縁部2点と体部片、及び土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器碗(374)・碗又は杯(375)である。

SK40 (Fig.59・60)

F - 2グリッドに位置する土坑で、中世のSD10'を切り、中世のP175に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.66m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は小皿の口縁部3点、杯の底部2点、瓦器碗の体部片、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器細片である。

図示したものは土師質土器杯(376)である。

SK41 (Fig.59・60)

F - 2・G - 2グリッドに位置する土坑で、中世のSB5 - P7・SD10'を切り、中世のSB8 - P6・P67に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸1.32m、短軸0.80m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から礫が出土している。

出土遺物は土師質土器杯の底部3点、小皿の底部7点、白磁皿の底部1点、及び土師質土器細片60数点である。

図示したものは土師質土器碗又は杯(377)・小皿(378・379)、白磁皿(380)である。380は中国産の白磁皿(森田分類IX類)で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。平底、外底無釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。

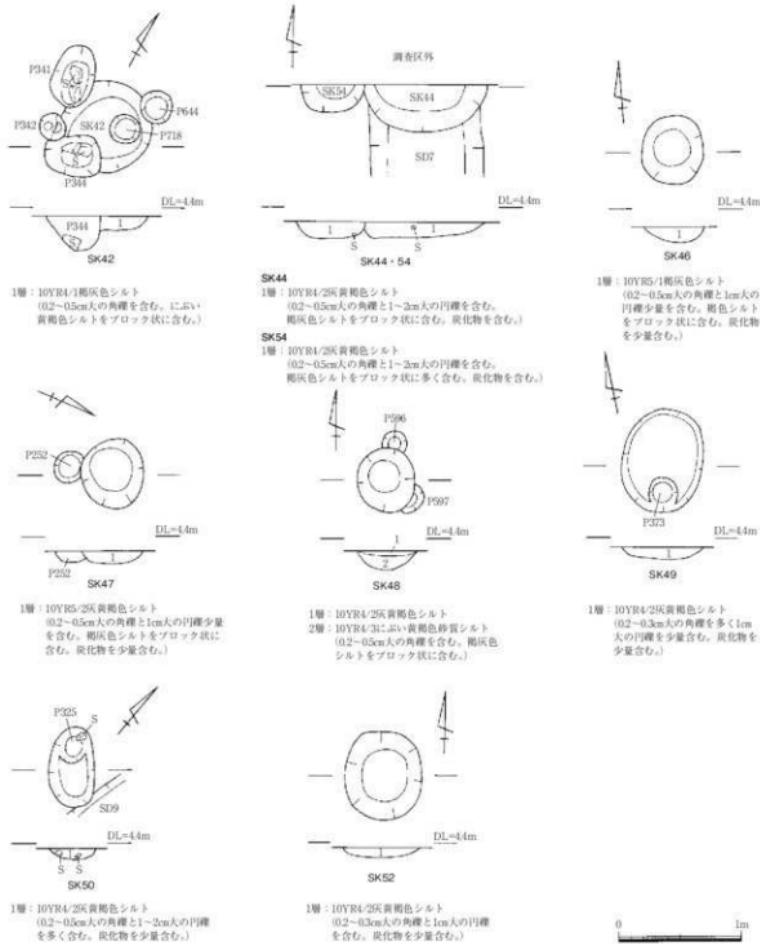


Fig.61 SK42・44・46~50・52・54平面図・セクション図

SK42 (Fig.61・63)

H-2グリッドに位置する土坑で、中世のP718を切り、中世のP341・342・344・644に切られる。平面形は椭円形を呈し、長軸0.95m、短軸0.74m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部5点と底部1点、土師質土器小皿の口縁部2点と底部2点、瓦器椀の体部片2点、常滑焼甕の体部片1点である。

図示したものは土師質土器杯（381）・小皿（382）、常滑焼壺（392）である。392は常滑焼壺の体部片で、外面に格子状のタタキ目が残る。

SK44 (Fig61・63)

F-1グリッドに位置する土坑で、中世のSD7を切り、中世のSK54に切られる。北側が調査区外に出るため、形態、規模とも不明であるが、東西径1.00m、南北確認長0.40mを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部8点、小皿の底部4点、杯又は小皿の口縁部1点、瓦器椀の口縁部1点と体部片、須恵器壺の体部片、及び土師質土器細片50数点である。

図示したものは土師質土器小皿（383）である。

SK46 (Fig61・63)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.57m、短軸0.50m、深さ13cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は瓦器皿（384）1点と土師質土器細片である。

SK47 (Fig61)

F-5グリッドに位置し、中世のP252を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.52m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は瓦器椀又は皿の体部片と土師質土器細片である。

SK48 (Fig61)

F-3グリッドに位置し、古代のSX4、中世のP596・597を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.52m、短軸0.48m、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトとぶい黄褐色砂質シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部1点と、古代の混入とみられる土師器壺の体部片である。

SK49 (Fig61)

G-3グリッドに位置し、中世のP373を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.67m、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部1点と底部1点、白磁碗又は皿の体部片、須恵器壺の体部片、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器杯と土師器壺である。

SK50 (Fig61)

E-3・F-3グリッドに位置し、中世のSD9・P325を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.66m、短軸0.38m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部2点、瓦器椀又は皿の体部片、土師質土器細片である。

SK52 (Fig61)

F-1グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.63m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点、瓦器椀又は皿の体部片、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器蓋と須恵器細片である。

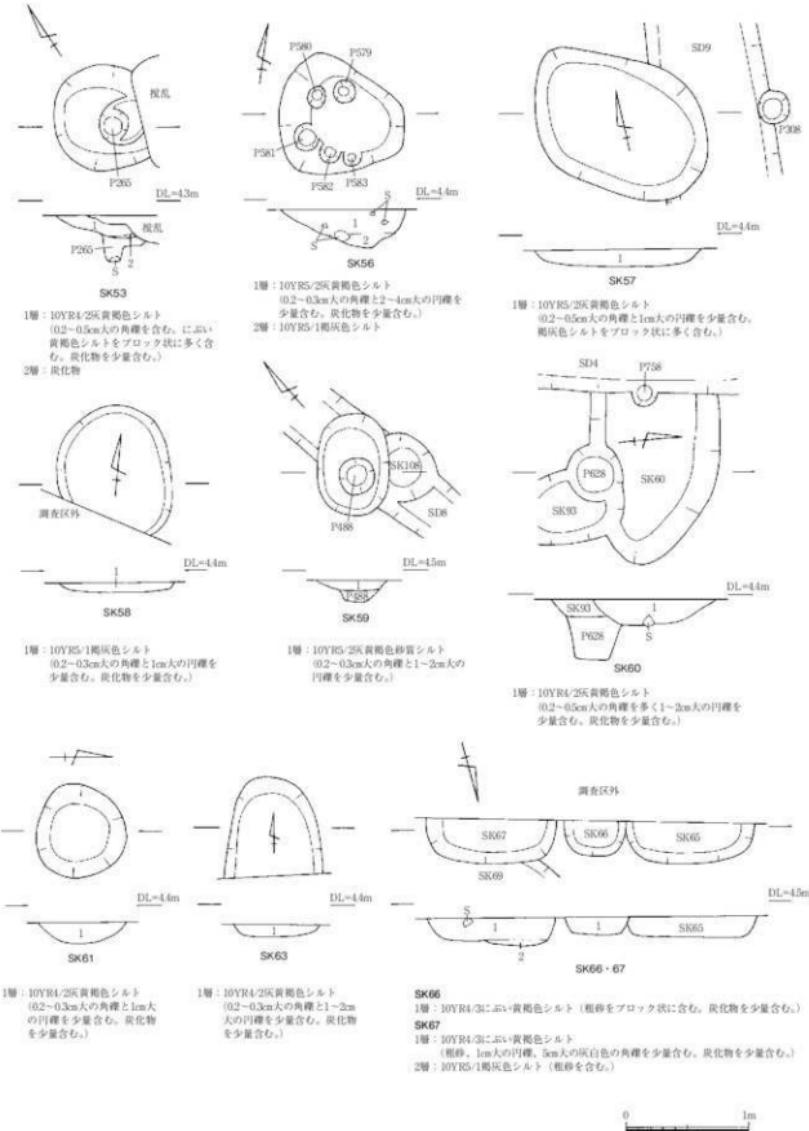


Fig.62 SK53・56～61・63・66・67 平面図・セクション図

SK53 (Fig.62)

E - 1 グリッドに位置し、中世のP265を切る。東側が搅乱を受けるため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、東西残存長0.70m、南北長0.88m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器杯の底部1点、小皿の口縁部1点と底部1点、及び瓦器椀又は皿の体部片と土師質土器細片である。

SK54 (Fig.61)

F - 1 グリッドに位置し、中世のSK44を切る。北側が調査区外に出るため、全体の形態、規模とも不明であるが、東西長0.52m、南北確認長0.22m、深さ14cmを測る。出土遺物は確認できていない。

SK56 (Fig.62・63)

D - 6 グリッドに位置し、時期不明のP579～583を切る。平面形は不整形を呈し、長軸1.02m、短軸1.00m、深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部3点と底部1点、小皿の口縁部1点、瓦器椀又は皿の口縁部1点と体部片、土師質土器細片40数点である。この他、古代の混入とみられる土師器杯・皿・壺、須恵器片も出土している。

図示したものは土師質土器杯(385)・小皿(386)である。

SK57 (Fig.62)

E - 7 グリッドに位置し、中世のSD9を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸1.54m、短軸1.10m、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点と土師質土器細片、及び古代の混入とみられる土師器杯又は皿・壺、須恵器杯・瓶又は壺である。

SK58 (Fig.62・63)

F - 9・G - 9 グリッドに位置する。南側が調査区外に出るが、平面形は楕円形とみられ、南北確認長1.10m、東西長0.95m、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部6点、小皿の口縁部3点と底部2点、瓦器椀の口縁部1点、瓦器椀又は皿の口縁部1点と体部片、及び土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(391)・小皿(387)、瓦器椀(388)である。

SK59 (Fig.62)

C - 2 グリッドに位置し、古代のSK108、中世のSD8・P488を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.60m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。

出土遺物は土師質土器細片である。

SK60 (Fig.62・63)

D - 3 グリッドに位置する土坑で、古代のSK93・P628・758を切り、中世のSD4に切られる。西側が削平されるため、形態、規模とも不明であるが、東西残存長1.40m、南北長1.08m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部1点、土師質土器小皿の底部2点、瓦器椀の底部1点及び瓦器細片、須恵器壺の体部片、土師質土器細片、古代の混入とみられる須恵器杯・蓋、須恵器片である。

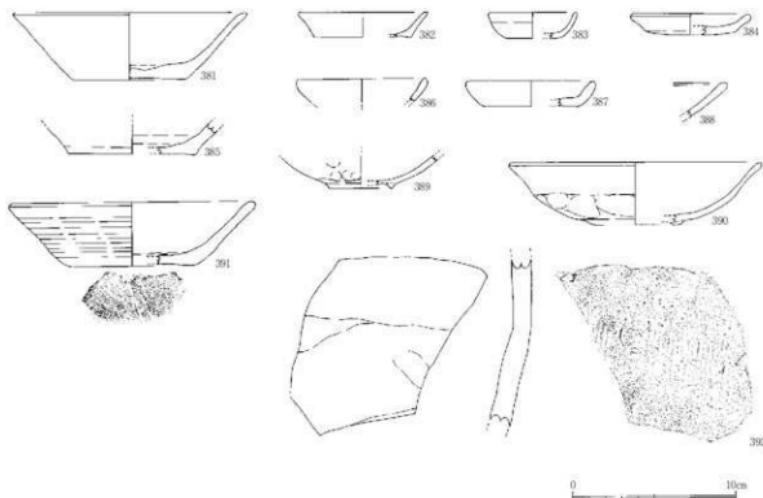


Fig.63 SK42・44・46・56・58・60・67出土遺物実測図

(SK42:381・382・392, SK44:383, SK46:384, SK56:385・386, SK58:387・388・391, SK60:389, SK67:390)

図示したものは瓦器碗(389)である。389は和泉型の瓦器碗である。炭素吸着は良好で、内面にナデとミガキを施す。

SK61 (Fig.62)

D - 3・E - 3グリッドに位置する土坑で、上面を中世のSX3に切られている。平面形は円形を呈し、径0.75m、確認面からの深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点、底部3点、瓦器碗又は皿の体部片、及び土師質土器細片である。

SK63 (Fig.62)

B - 7グリッドに位置する。南側が搅乱を受けるため、形態、規模とも不明であるが、南北残存長0.80m、東西長0.78m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点、底部1点、瓦器碗又は皿の口縁部1点、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器杯と土師器壺の体部片である。

SK66 (Fig.62)

C - 8グリッドに位置し、古代のSK65を切る。南側が調査区外となるため、形態、規模とも不明であるが、東西長0.52m、南北確認長0.30m、深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部2点、及び土師質土器細片である。

SK67 (Fig.62・63)

C - 8グリッドに位置し、中世のSX6を切る。南側が調査区外となるため、形態、規模とも不明で

あるが、東西長1.08m、南北確認長0.36m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトと褐灰色シルトである。

出土遺物は下層から出土した瓦器椀の口縁部2点と体部片、土師質土器細片である。

図示したものは和泉型の瓦器椀(390)である。

SK68 (Fig.64)

C-0グリッドに位置し、中世のSD8を切る。北側が調査区外となるため、形態、規模とも不明であるが、東西長0.76m、南北確認長0.40m、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の体部片、及び古代の混入とみられる土師器壺の体部片である。

SK74 (Fig.64・65)

I-2・3グリッドに位置し、中世のP517に切られる。東側が調査区外に出るため、形態、規模とも不明であるが、南北長0.96m、東西確認長0.82m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部3点、小皿の口縁部と底部2点、瓦器皿の口縁部2点と体部片、青磁碗の口縁部1点、常滑焼壺の体部片、須恵器壺の体部片、及び土師質土器細片90数点である。

図示したものは土師質土器杯(393)・小皿(394)、瓦器皿(395)、青磁碗(396)、陶器壺(406)である。396は中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類碗I-4類)で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切彫による文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。406は常滑焼壺の体部片で、外面に格子状のタタキ目を施す。

SK75 (Fig.64・65)

H-3グリッドに位置し、中世のP510を切る。平面形は円形を呈し、径0.70m、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部2点、土師質土器小皿の底部2点、瓦器椀の口縁部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯又は椀(399)・小皿(397・398)である。

SK77 (Fig.64・65)

H-1グリッドに位置する土坑で、中世SD10を切り、中世のSK78に切られる。東と南側部分が調査区外となるため、形態、規模とも不明であるが、南北確認長1.28m、東西確認長0.74m、深さ23cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部8点、土師質土器小皿の口縁部1点、瓦器椀の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(400・401)・杯又は椀(402)である。

SK78 (Fig.64・65)

H-1グリッドに位置し、中世のSK77を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.68m、短軸0.65m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点、小皿の口縁部1点と底部1点、青磁碗の口縁部1点、及び土師質土器細片である。

図示したものは青磁碗(403)である。403は中国龍泉窯系青磁碗(森田分類碗I-5b類)で、

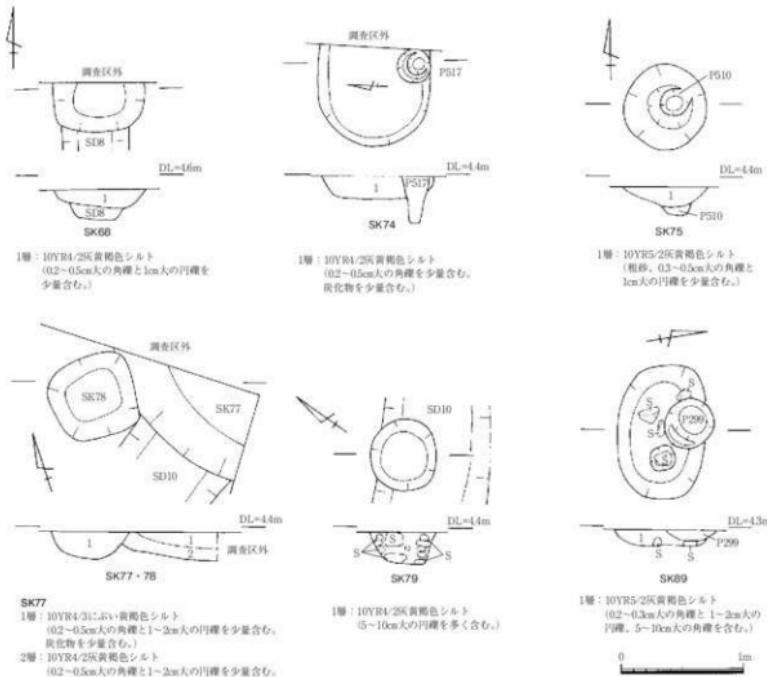


Fig.64 SK68・74・75・77～79・89平面図・セクション図・発出土状況図

13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面に鏽蓮弁文を描き、オリーブ灰色を帯びる半透明の釉を施す。

SK79 (Fig.64・65)

H-1グリッドに位置し、中世のSD10を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に5～10cm大の円碟が多く含んでいる。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部1点、小皿の口縁部1点、瓦器椀の口縁部2点と底部1点、須恵器甕の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器小皿(404)、須恵器甕(405)である。

SK89 (Fig.64)

F-5・6グリッドに位置する土坑で、中世のP299に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸1.12m、短軸0.73m、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

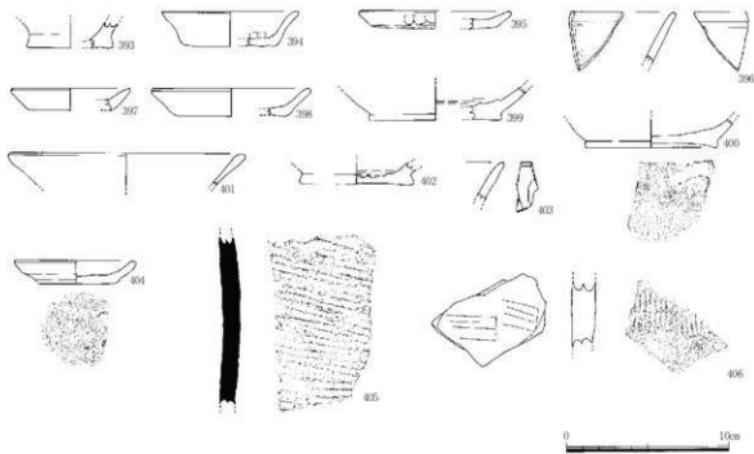


Fig.65 SK74・75・77～79出土遺物実測図

(SK74:393～396・406、SK75:397～399、SK77:400～402、SK78:403、SK79:404・405)

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点、杯又は小皿の口縁部1点、土師質土器細片である。

SK91 (Fig.66)

H-5グリッドに位置し、P531に切られる。東側が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、南北長0.80m、東西確認長0.40m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部2点、小皿の口縁部3点と底部4点、瓦器椀の口縁部1点、白磁の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(407)・小皿(408・409)、瓦器皿(410)、器種不明の白磁(411)である。411は中国産の白磁の体部片で、内面にロクロ目が残り、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。

SK92 (Fig.66)

E-2グリッドに位置する土坑で、時期不明のピットの上面を切り、中世のSK39・SB14-P1に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.97m、短軸0.87m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部7点と底部5点、小皿の口縁部2点と底部2点、瓦器椀又は皿の体部細片、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器蓋である。

図示したものは土師質土器杯(412・413)・椀(416)・椀又は杯(415)・小皿(414)である。

SK98 (Fig.66)

E-2グリッドに位置し、中世のSK36に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.86m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

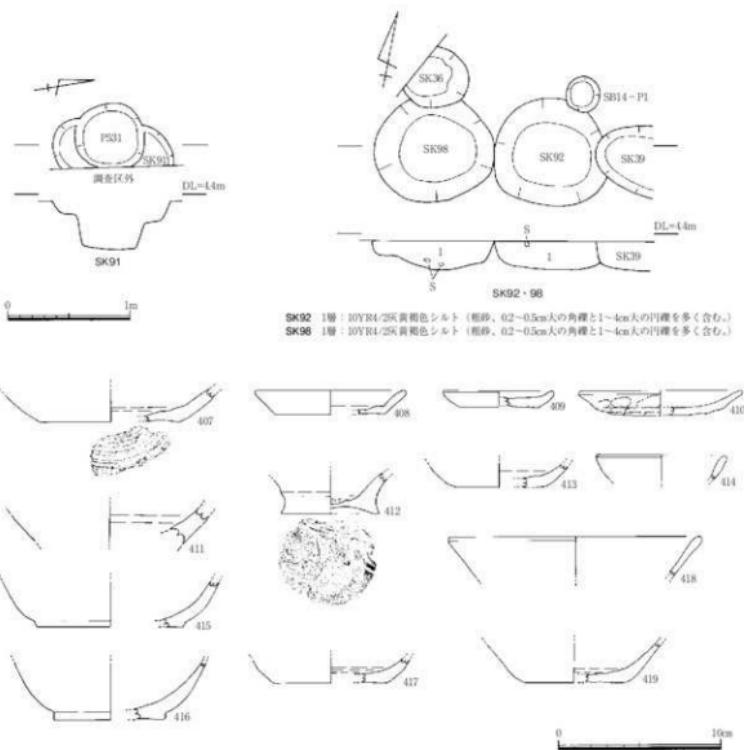


Fig.66 SK91・92・98平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
(SK91: 407~411, SK92: 412~416, SK98: 417~419)

出土遺物は土師質土器杯又は小皿の口縁部7点、土師質土器杯の底部3点、瓦器体部片、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器片である。

図示したものは土師質土器杯(417~419)である。

SK110 (Fig.67)

C-3グリッドに位置する。中世のSD6とは重複しており、その下面にて検出された。平面形は梢円形を呈し、長軸0.70m、短軸0.54m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は小皿の口縁部6点、土師質土器杯の底部1点、須恵器甕の底部1点、土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる須恵器皿、土師器甕、古墳時代後期の須恵器蓋も出土している。

図示したものは土師質土器杯(420)である。

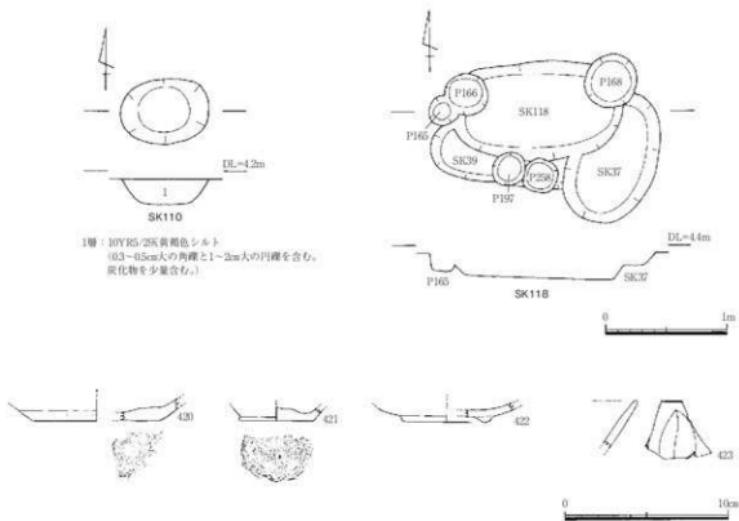


Fig.67 SK110・118平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
(SK110: 420、SK118: 421～423)

SK118 (Fig.67)

F-2グリッドに位置する。中世のSK37・39・P165・168・197・258とは重複しており、その下面にて検出された。平面形は橢円形を呈し、長軸1.40m、短軸0.80m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部3点、小皿の底部2点、瓦器椀の底部1点と体部片、青磁碗の口縁部1点、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる土師器甕、須恵器杯・蓋である。

図示したものは土師質土器小皿(421)、瓦器椀(422)、青磁碗(423)である。422は和泉型の瓦器椀である。423は中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類I-5b類)で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面に鎬蓮弁文を描き、黄褐色を帯びる透明の釉を施す。

(3) 井戸

SE1 (Fig.68)

H-5グリッドに位置する石組の井戸である。掘り方の平面形は円形を呈し、内面には石組が巡らされる。また、底部分には曲物がはめ込まれている。検出面で確認した井戸の掘り方は径160cm、石組み内側にあたる開口部の径は約134cm、曲物底までの深さは114cmである。曲物は厚さ約2mmの板材を用いたもので、径46～60cm、高さ20cmを測る。石組に用いられた石は、10～30cm大の割り石で、大部分は白色系のチャートからなり、これに砂岩が少量混じる。また、石組の間には河原石とみられる円礫が部分的にはめ込まれている。

埋土は、曲物の上面まで堆積する1層が灰黄褐色シルト、曲物内に堆積する2層が黒褐色粘質シル

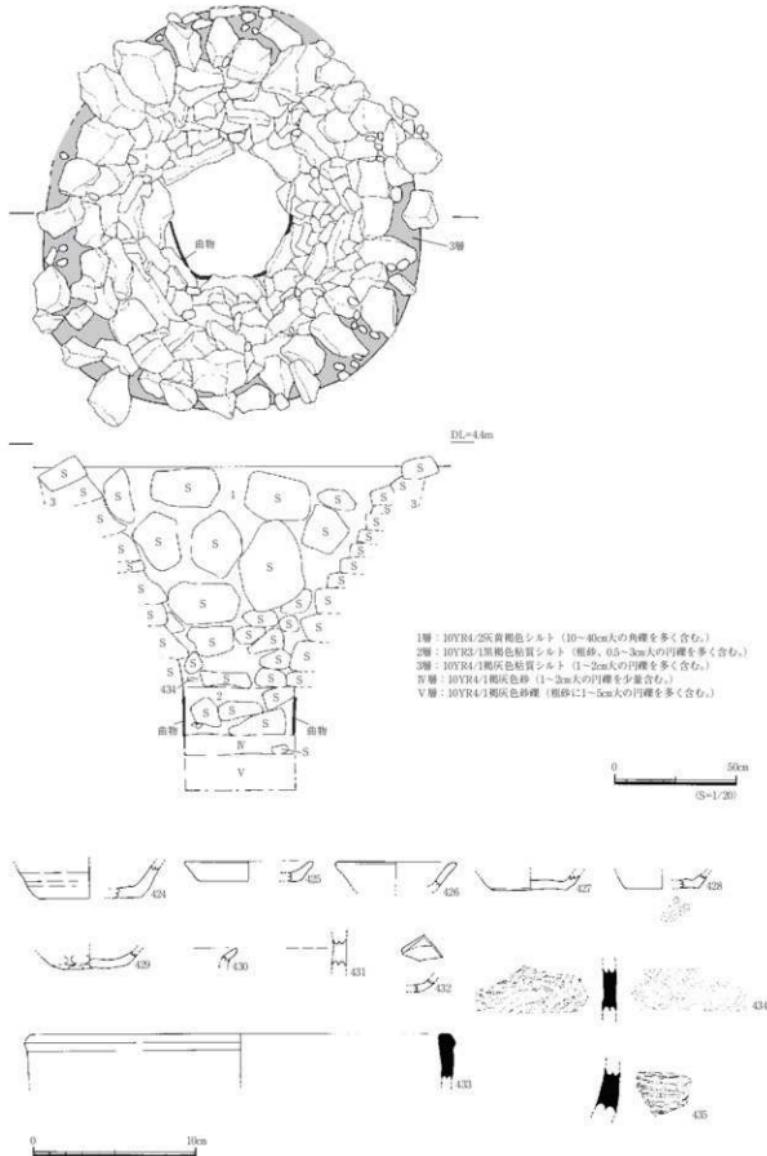


Fig.68 SE1平面図・セクション図・出土状況図・出土遺物実測図

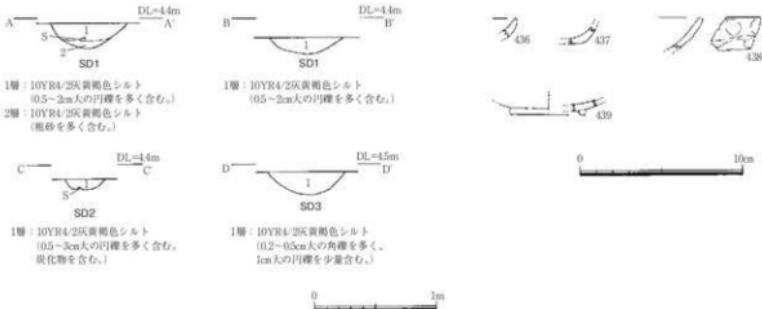


Fig.69 SD1~3セクション図・SD1・3出土遺物実測図 (SD1:436, SD3:437~439)

ト、石組背面の掘り方埋土にあたる3層が円窓を多く含む褐灰色粘質シルトである。このうち井戸の埋め戻し埋土にあたる1層と2層内には、10~40cm大の白色系のチャート角窓が多量に投げ込まれている。

出土遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・瓦器碗・皿、白磁碗・皿、青磁碗、須恵器壺である。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿11点、鍋1点、白磁碗又は皿1点、底部数にして土師質土器杯8点、小皿6点、瓦器皿1点、白磁皿1点で、この他、瓦器体部片、須恵器壺体部片、白磁片、青磁碗の体部片、土師質土器細片等150数点の遺物が出土している。

図示したものは土師質土器杯(424)・小皿(425~428)、瓦器皿(429)、須恵器壺(434・435)、須恵器種不明(433)、白磁皿(432)・器種不明(430・431)である。このうち、須恵器壺(434)が2層から、その他は何れも1層からの出土である。430は中国産の白磁の口縁部片で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。431は中国産の白磁の体部片である。432は中国産の白磁皿(森田分類IX類)で、13世紀後半~14世紀前半に比定される。平底、外底無釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。433は東播系須恵器である。

(4) 溝

SD1 (Fig.69)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向はN-4°-Wである。切り合い関係では時期不明のP461を切り、中世のSK8・30に切られる。検出長は14.8m、幅0.62~0.63m、検出面からの深さは15~22cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は1層が灰黄褐色シルトで円窓を多く含み、2層が灰黄褐色シルトに粗砂を多く含んでいる。

出土遺物は中世の土師質土器小皿、瓦器碗又は皿の細片、土師質土器細片である。この他、須恵器杯・皿・蓋・壺等の古代の遺物や古墳時代の土師器壺も多く混入している。

図示したものは土師質土器小皿(436)である。

SD2 (Fig.69)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向はN-3°-Wである。切り合い関係では中世のSK8

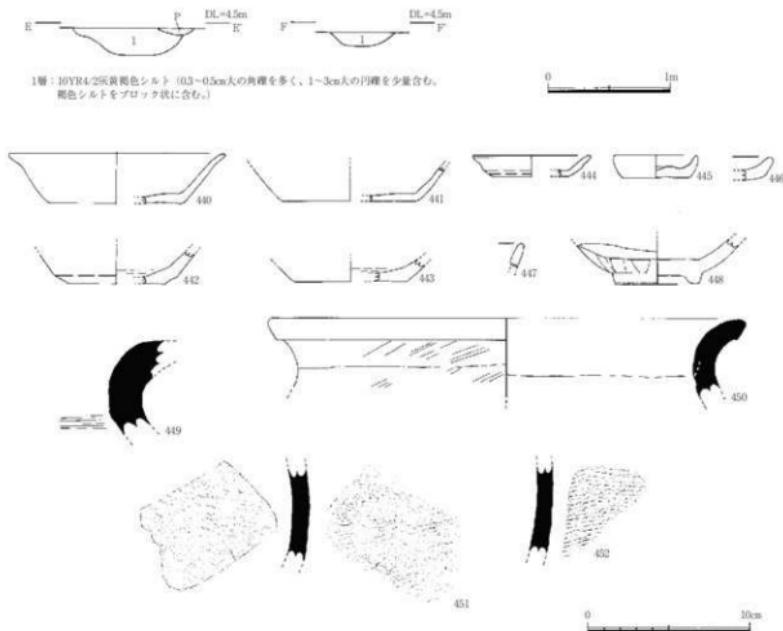


Fig.70 SD4 セクション図・出土遺物実測図

に切られている。検出長は9.4m、幅0.34～0.40m、検出面からの深さは10～16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中には円礫を多く含む。

出土遺物は土師質土器小皿、瓦器碗又は皿の体部片、土師質土器細片である。この他古代の混入とみられる土師器壺、須恵器片が多く含まれる。

SD3 (Fig.69)

調査区西部を南北方向に延びる溝状遺構で、軸方向はN-12°-Eである。切り合い関係では中世のSD4と古代のSK107・P691を切る。検出長は3.7m、幅0.64m、検出面からの深さは18cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿、瓦器碗又は皿の体部片、土師質土器細片であり、この他古代の混入とみられる土師器皿・壺、須恵器蓋・壺も含まれる。

図示したものは土師質土器小皿(437)、瓦器碗(438・439)である。438・439は和泉型の瓦器碗で、内外面の炭素は剥離する。

SD4 (Fig.70)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向は北部がN-3°-E、南部がN-3°-Wである。切り合い関係では中世のSK7・29・SX6・SD6・P79と古代のSK17・100・567・663・673を切り、中世の

SD3に切られる。検出長は30.9m、幅0.70～0.95m、検出面からの深さは22cmを測る。断面形態はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器碗又は皿、青磁皿、須恵器甕、及び土師質土器細片である。この他古代の混入とみられる土師器皿・甕、須恵器杯・皿・高杯・蓋・壺・甕・器種不明、製塙土器も含まれる。

図示したものは土師質土器杯(440～443)・小皿(444～446)、青磁碗(448)・皿(447)、須恵器甕(449～452)である。447は中国龍泉窯系の青磁皿で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。448は中国龍泉窯系青磁碗(森田分類碗I-5b類)で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面に鎬蓮弁文を描き、オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。449は亀山窯の須恵器甕で、胎土中に黒色粒を含み器表面にも黒色粒の吹き出しが見られる。450・452は東播系須恵器甕で、体部外面に

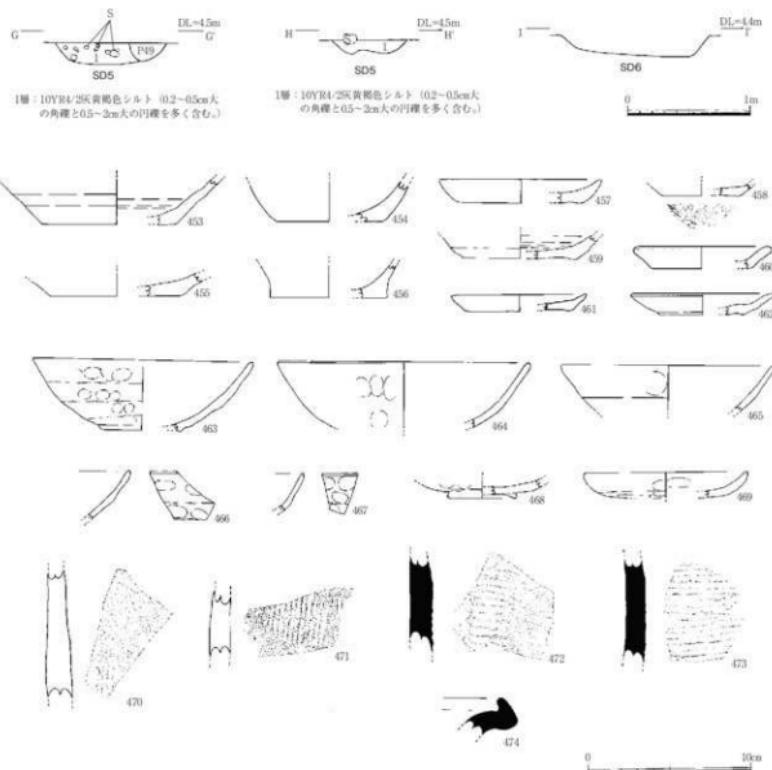


Fig.71 SD5・6セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
(SD5: 453～458, SD6: 459～474)

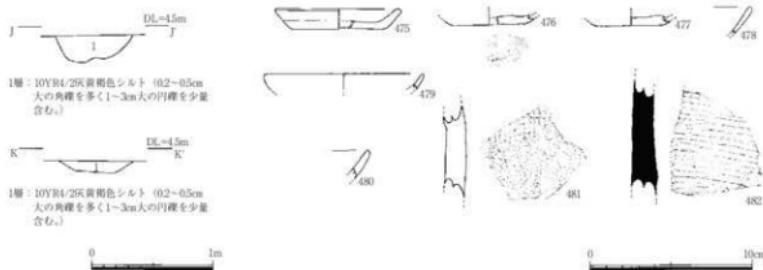


Fig.7.22 SD7 セクション図・出土遺物実測図

タタキ目を残す。胎土は灰黄色を呈し、外面は黒色に発色する。

SD5 (Fig.71)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向は N - 4° - W である。切り合い関係では中世の SD6 と古代の SB1 - P1・SK99・101・P514・515・679 を切り、中世の P49 に切られる。検出長は 4.0m、幅 0.72 ~ 0.76m、検出面からの深さは 14 ~ 18cm を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトであり、円礫を多く含む。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、須恵器甕の体部片と土師質土器細片である。この他古代の混入とみられる土師器皿・甕、須恵器杯・蓋も含まれる。

図示したものは土師質土器杯 (453・455・456)・杯又は椀 (454)・小皿 (457・458) である。

SD6 (Fig.71)

調査区西部を東西方向に延びる溝で、軸方向は N - 85° - E である。切り合い関係では中世の SK110 と古代の SB1 - P4・P7・SK100・P686・757 を切り、中世の SD4・5 に切られる。また南北方向の SD8 と交差するが前後関係は不明である。検出長は 6.0m、幅 1.05 ~ 1.20m、検出面からの深さは 16 ~ 20cm を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、常滑焼甕、土師質土器細片である。この他古代の混入とみられる土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・高杯・蓋、製塙土器、古墳時代の混入とみられる土師器甕も出土している。

図示したものは土師質土器杯 (459)・小皿 (460 ~ 462)、瓦器椀 (463 ~ 468)・皿 (469)、須恵器甕 (472 ~ 474)、陶器甕 (470・471) である。463 ~ 468 は和泉型瓦器椀で、463 は炭素吸着が認められず、465 は外面上半のみに炭素が吸着する。470・471 は常滑焼甕の体部片で外面に格子状のタタキ目が残る。473 は亀山窯の須恵器甕で、体部外面に平行状のタタキを施す。胎土中には黒色粒を含み、器表面にも黒色粒の吹き出しが見られる。

SD7 (Fig.72)

調査区北部に位置する溝である。北側部分が調査区外となるため全体の形状は明らかでないが、北側に向かって半円状に湾曲しており、円形または橢円形に巡る周溝の可能性がある。他遺構との切り合い関係では、中世の SB6 - P1・SB7 - P2・SB9 - P2・SK12・P158 ~ 160・249・253・255・

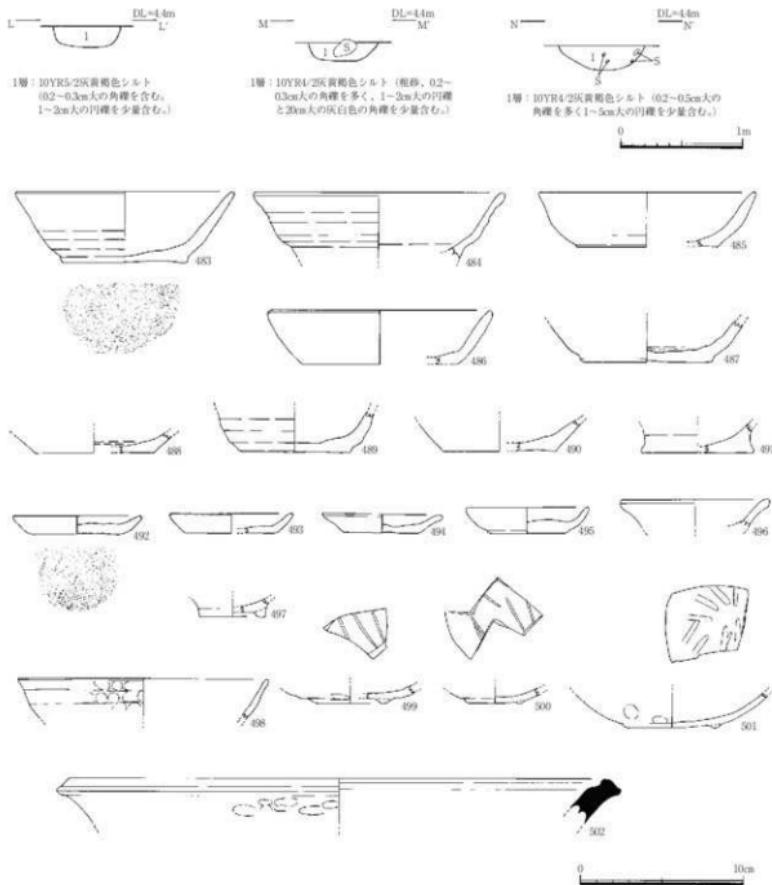


Fig.73 SD8 セクション図・出土遺物実測図

256・259・275・290・291・654を切り、中世のSK44に切られている。検出長は12.6mで、半円状に巡る溝の外周は東西径約8mとなる。溝の幅は0.64～0.70m、検出面からの深さは10～20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、須恵器甕、常滑焼甕、青磁碗、白磁碗又は皿、土師質土器細片である。この他古代の混入とみられる土器甕、須恵器杯・皿・高杯も含まれる。

図示したものは土師質土器小皿(475～477)、瓦器椀(478)、白磁皿(479)、青磁碗(480)、陶器甕(481)、須恵器甕(482)である。478は和泉型の瓦器椀である。479は中国産の白磁皿で、灰白色

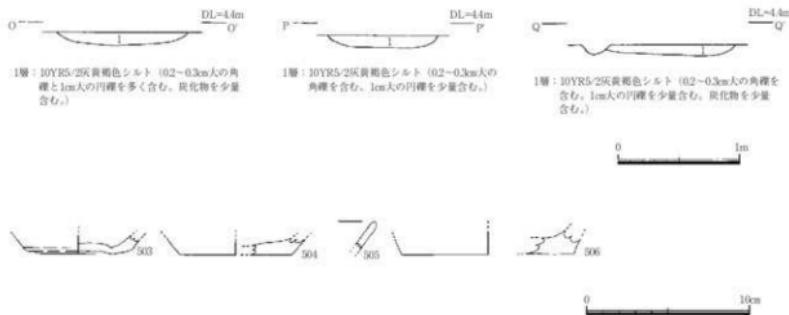


Fig.74 SD9セクション図・出土遺物実測図

を帯びる透明の釉を施す。480は中国龍泉窯系の青磁碗（森田分類碗I-2類又はI-4類）で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切形による文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。481は常滑燒窯の体部片で外面に格子状のタタキ目が残る。482は亀山窯の須恵器窯で、体部外面に平行状のタタキを施す。胎土中には黒色粒を含み、器表面にも黒色粒の吹き出しが見られる。

SD8 (Fig.73)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向は北部でN-0°-E、南部でN-2°-Wである。切り合い関係では古代のSK70・108・111・P636・675・681、中世のSX6・P82・83を切り、SK22・59・68・P467に切られる。また、交差するSD6との前後関係は不明である。検出長は28.4m、幅0.58～0.74m、検出面からの深さは20～22cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトで、南部では埋土中に径20cm前後の白色系の角礫が含まれている。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、須恵器窯、常滑燒窯、土師質土器細片である。この他、古代の混入とみられる土師器杯・窯、須恵器杯・器種不明・窯、製塙土器も含まれる。

図示したものは土師質土器杯（483～488・490・491）、椀又は杯（489）・小皿（492～496）、瓦器椀（497～501）、須恵器窯（502）である。497～501は和泉型の瓦器椀で、501は内面、497は内外面ともに炭素吸着が認められない。

SD9 (Fig.74)

調査区の中央部を南北方向に延びる溝で、北部でN-9°-E、南部でN-7°-Eの軸方向をもつ。切り合い関係では、中世のSB11-P5・262・345・497・499・603・633、古代のSB3-P2・SB3-P4、時期不明のP227を切り、中世のSK25・28・33・50・57・SB13-P5・SB15-P3・SB15-P6・P91・108～110・115・116・241・242・308・313・324に切られる。検出長は20m、幅0.91～1.08m、検出面からの深さは10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、亀山窯の須恵器窯である。この他、埋土中には古代の遺物片が多く混入しており、土師器皿か・蓋・器種不明・窯、須恵器杯・杯又は皿・皿か・蓋、

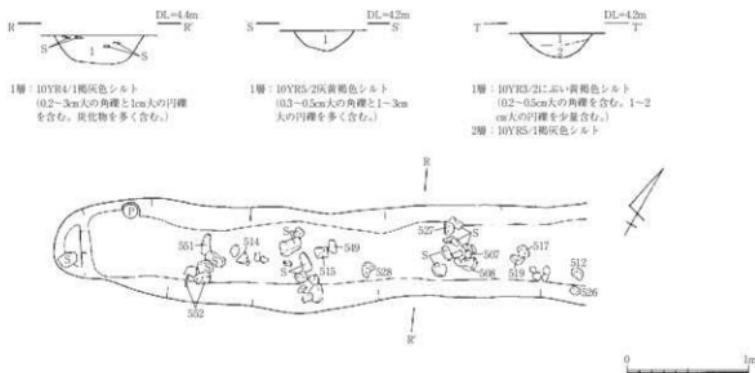


Fig.75 SD10セクション図・遺物出土状況図

製塙土器、赤彩土器の細片などが含まれる。

図示したものは土師質土器杯(504)・小皿(503)、瓦器碗(505)、陶器壺か(506)である。

SD10・SD10' (Fig.75 ~ 77)

調査区北部を東西方向に延びる溝である。東部はⅡ層下位、西部についてはⅢ層下位で検出しているため、東部をSD10、西部をSD10'とした。軸方向は東部がN-60°-E、西部がN-70°-Eである。切り合ひ関係では中世のSB5-P6・SB8-P5・P643-772・773-778・791を切り、中世のSB6-P6・SB7-P6・SB9-P5・SB10-P3・SK37-39-41-77-79・P67-155-156-168-175-183・188-278に切られる。検出長は11.2m、幅は東部で0.76m、西部で0.58m、検出面からの深さは東部で24cm、西部で20cmを測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は東部が褐灰色シルト、西部が灰黄色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐灰色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿・瓦器碗・皿・白磁皿・壺・青磁碗・皿・陶器壺・須恵器鉢・壺・丸瓦、及び土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(507~516)・小皿(517~528)、瓦器碗(529~541)・皿(542)、白磁皿(543)・壺(544)、青磁碗(545~547)、陶器壺(549)、須恵器鉢(548)・壺(551・552)、丸瓦(550)である。529~541は和泉型の瓦器碗、542は和泉型の瓦器皿。543は中国産の白磁皿(森田分類IX類)で、13世紀後半~14世紀前半に比定される。口縁端部と口縁部内面は無釉で、オリーブ黄色を帯びる灰白色の釉を施す。544是中国産の白磁壺で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。545は中國同安窯系の青磁碗で、12世紀後半~13世紀前半に比定される。外面に櫛描きによる文様を描き、オリーブ黄色を帯びる透明の釉を施す。546是中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類碗I-2類)で、12世紀後半~13世紀前葉に比定される。内面に片切彫による文様を描き、オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。547は中国龍泉窯系の青磁碗で、内面に片切彫による文様を描く。548は東播系の須恵器鉢。549は常滑焼壺の底部付近の破片で、内外面にナデを施す。

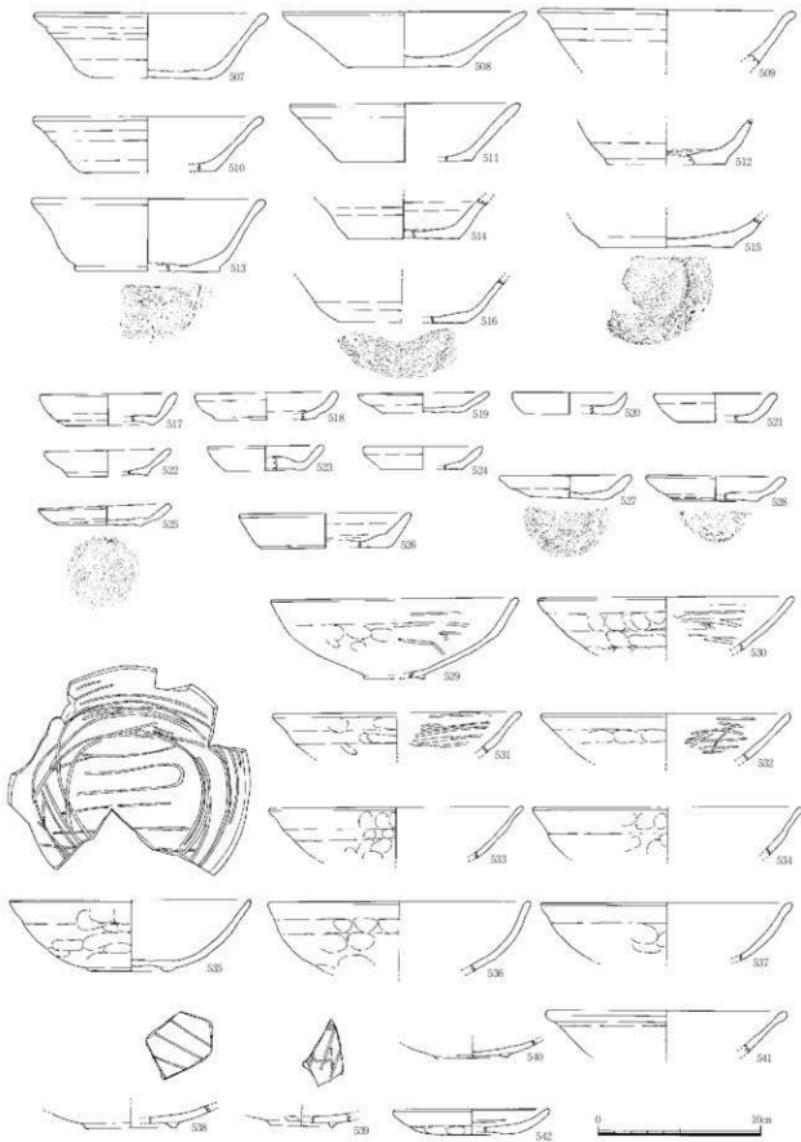


Fig.76 SD10出土遺物実測図(1)

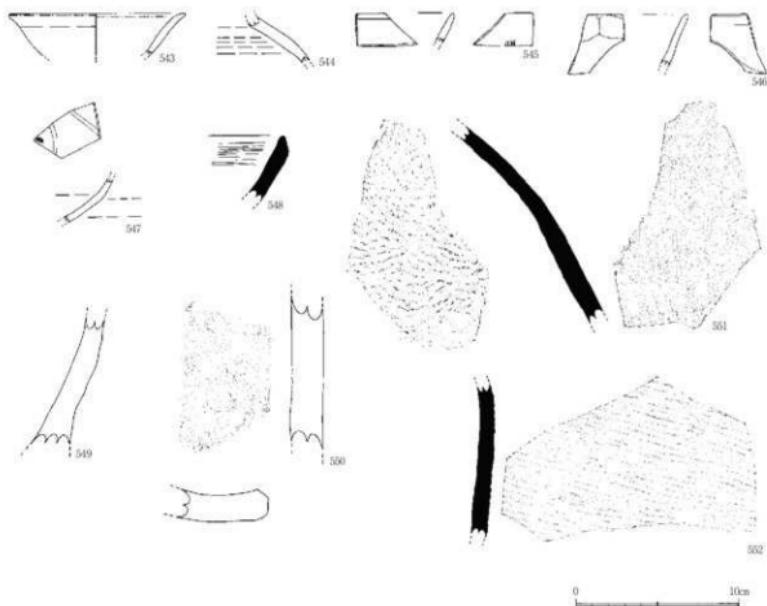


Fig.77 SD10出土遺物実測図 (2)

SD11 (Fig.78)

調査区西部で検出された溝又は溝状遺構で、古代のP797を切っている。軸方向はN - 14° - Wで、検出長2.4m、幅0.32m、検出面からの深さは7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトで、円縫を多く含んでいる。出土遺物は確認できていない。

SD12 (Fig.78)

調査区北西部で検出された溝又は溝状遺構で、SK109を切っている。軸方向はN - 15° - Wで、検出長2.1m、幅0.4m、検出面からの深さは6cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトで、円縫を多く含んでいる。出土遺物は須恵器杯又は皿の体部である。

SD13 (Fig.78)

調査区南東部にて検出された。東側が調査区外に出るため全体の形状は明らかでないが、東へ向かって湾曲しており、SD7と類似の周溝であった可能性がある。切り合ひ関係では中世のP536・543・544・680・693・709・710・774を切っている。検出長は10.4m、幅0.36 ~ 0.46m、検出面からの深さは13 ~ 16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器碗・皿、須恵器甕・瓶又は壺、白磁壺、青磁碗・皿、土師質

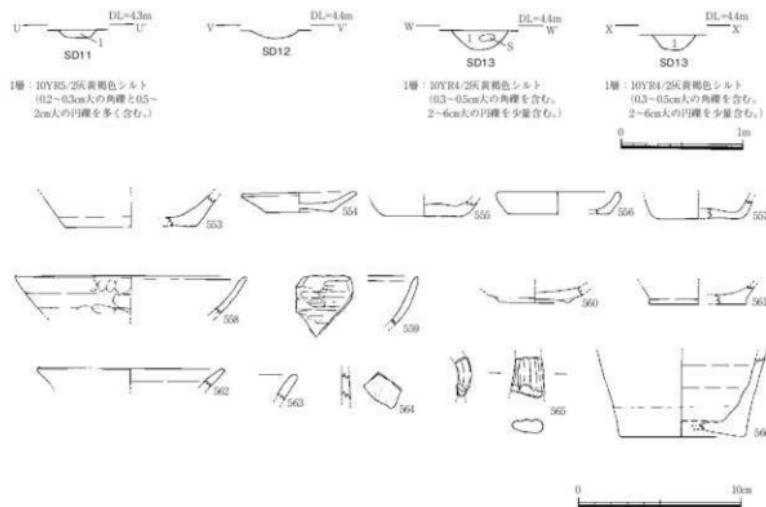


Fig.78 SD11～13セクション図・エレベーション図・SD13出土遺物実測図

土器細片である。この他古代の混入とみられる土師器壺が出土している。

図示したものは土師質土器杯(553)・小皿(554～557・561)、瓦器碗(558～560)、白磁壺(565)、青磁碗(563・564)・皿(562)、陶器器種不明(566)である。558・560は和泉型、559は楠葉型の瓦器碗。562は中国産の青磁皿で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。563は中国産の青磁碗の口縁部で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。564は中国龍泉窯系青磁碗(森田分類窯I-5b類)で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面に鏽斑文を描き、オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。565は中国産の白磁四耳壺の耳か。外面に2条の凹線を施し、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。

(5) ピット

中世のピットは642基を検出しており、特に数棟の掘立柱建物跡が確認された調査区の北東部に集中する傾向が認められた。ここで検出したピットには、柱痕をもつものや床面に根石を伴うものがあり、建物の柱穴と特定できたピット以外にも、柱穴が存在したと思われる。また、出土遺物については、小破片のものが多く、出土点数も僅少であるもの多かった。しかし中には、P500・520・531・537・680・695・709・774の様に、多くの遺物が廃棄されたピットも認められる。

以下では、特徴的な検出状況や遺物出土状況を示したピットを取り上げて報告する。その他のピットについては詳細を触れないが、出土遺物を図示したものや柱痕を検出したものについては、

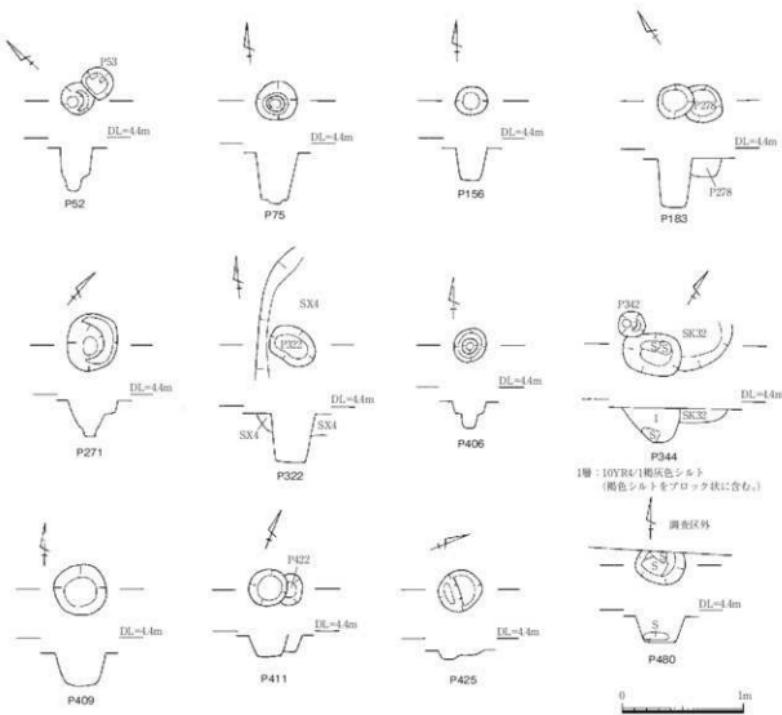


Fig.79 P52・75・156・183・271・322・344・406・409・411・425・480平面図・セクション図・エレベーション図・出土状況図

ピット一覧表 (Tab.4・5) に概要を示すこととした。

P52 (Fig.79・80)

D - 6グリッドに位置し、中世のP53を切る。検出規模は径30cm、深さ35cm、埋土は灰黄褐色シルトで、柱痕を検出している。遺物は、柱痕から土師質土器杯の底部1点と細片、埋土中から瓦質土器鍋の底部(600)1点が出土している。

P75 (Fig.79・80)

D - 7グリッドに位置する。検出規模は径30cm、深さ40cm、埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を少量含む。出土遺物は土師質土器杯1点、小皿1点、瓦質土器鍋の底部1点、土師質土器細片で、このうち土師質土器杯(567)が床面から完形で出土している。

P156 (Fig.79・80)

F - 2グリッドに位置する。検出規模は径23cm、深さ28cm、埋土は褐灰色シルトである。下層は

炭化物を多く含む粘土層となっており、柱痕とみられる。遺物は柱痕から瓦器碗の体部片と土師質土器小皿の底部(574)1点、埋土中から白磁碗の口縁部(592)と土師質土器細片が出土している。592は中国産の白磁碗(森田分類碗V類)で、12世紀に比定される。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。

P183 (Fig.79・80)

G-2グリッドに位置する。検出規模は径33cm、深さ37cm、埋土は灰黄褐色シルトで、下層に炭化物を多量に含んでいる。出土遺物は土師質土器杯の底部1点と細片、青磁碗の底部1点であり、このうち青磁碗が下層の炭化物集中内から出土している。

図示したものは青磁碗(596)である。596は中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類碗I-2類)で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切形による文様を描き、明オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。

P271 (Fig.79・80)

G-1グリッドに位置する。検出規模は径42×36cm、深さ30cm、埋土は灰黄褐色シルトで、径20cmの柱痕を検出している。柱痕の埋土は褐灰色粘土で炭化物を多く含んでいる。遺物は柱痕から白磁碗の口縁部1点、青磁碗の体部1点、土師質土器細片が、埋土中から土師質土器小皿の口縁部2点と細片、瓦質土器鍋の体部片が出土している。

図示したものは柱痕出土の白磁碗(591)と青磁碗(597)である。591は中国産の白磁碗(森田分類碗IV類)で、12世紀に比定される。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。597は中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類碗I-4類)で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切形による文様を描き、明オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。

P322 (Fig.79)

F-3グリッドに位置し、古代のSX4を切る。検出規模は径38cm、深さ44cm、埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中からは径20cmと10cm前後の白色の角礫が数個出土する。出土遺物は古代の混入とみられる甕と須恵器片である。

P344 (Fig.79・80)

H-2グリッドに位置し、中世のSK42を切る。検出規模は径48×34cm、深さ24cm、埋土は褐灰色シルトで、床面から径20cmと10cmの白色の角礫が出土する。出土遺物は土師質土器杯の底部1点、小皿の底部3点、陶器甕の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器小皿(583)、陶器甕(602)である。602は常滑焼甕の体部片で、外面に格子状のタタキ目が残る。

P406 (Fig.79・81)

G-5グリッドに位置する。検出規模は径25cm、深さ22cm、埋土は灰黄褐色シルトで、径13cmの柱痕を検出している。遺物は、柱痕から土師質土器小皿の口縁部1点と底部1点、白磁壺又は水注の口縁部1点、埋土中から土師質土器小皿の口縁部1点と底部7点が出土している。

図示したものは白磁壺又は水注(603)である。603は中国産の白磁壺又は水注で、オリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施す。

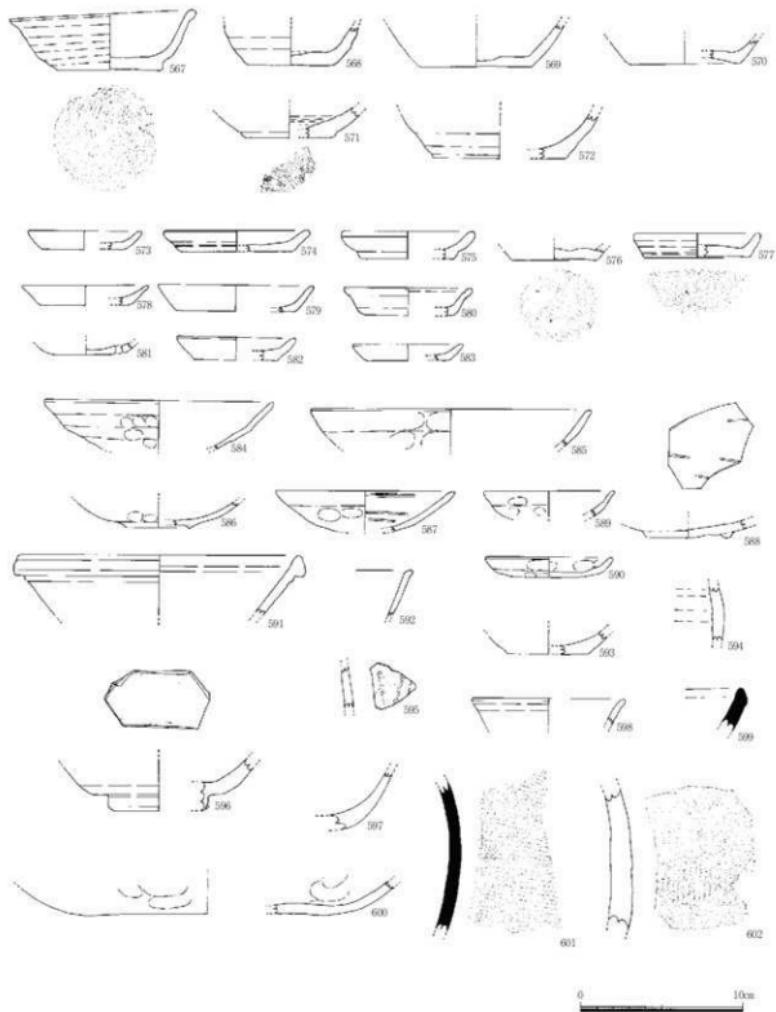


Fig.80 P3・38・52・59・64・75・77・99・100・105・146・156・161・183・207・229・262・266・
271・307・329・344・347・350・361・367・375・383・385・387出土遺物実測図
(P3:573・587、P38:584、P52:600、P59:568、P64:589、P75:567、P77:569、P99:576、P100:570、
P105:598、P146:595、P156:574・592、P161:575、P183:596、P207:571、P229:588、P262:593、
P266:578、P271:591・597、P307:572・579、P329:580、P344:582・602、P347:594、P350:585、
P361:577、P367:581・586、P375:590、P383:601、P385:599、P387:582)

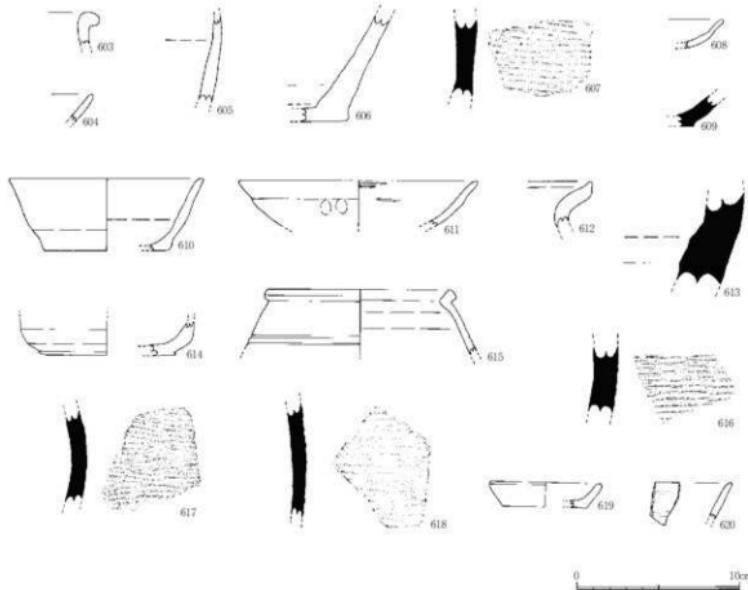


Fig.81 P406・409・411・419・425・428・435・456・479・480出土遺物実測図

(P406:603、P409:605～609、P411:610～613、P419:614、P425:615、
P428:616、P435:617、P456:604、P479:618、P480:619・620)

P409 (Fig.79・81)

G-5グリッドに位置する。検出規模は径42cm、深さ29cm、埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は、土師質土器杯の底部2点、小皿の口縁部2点と底部3点、瓦器皿の口縁部3点と体部片、須恵器甕の体部片、陶器甕の底部1点、白磁壺の体部片1点、土師質土器細片が出土している。

図示したものは瓦器皿(608)、白磁器種不明(605)、陶器甕(606)、須恵器甕(607・609)である。605は中国産の白磁の体部片で、内面にロクロ目が残る。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。606は常滑焼甕の底部である。607は亀山窯の須恵器甕で、体部外面に平行状のタタキを施す。胎土中には黒色粒を含む。609も亀山窯の甕か。外面上半に自然釉がかかり、胎土中に黒色粒を含む。608は和泉型の瓦器皿である。

P411 (Fig.79・81)

G-5グリッドに位置し、古代のP422を切る。検出規模は径32cm、深さ18cm、埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は、土師質土器杯の口縁部1点、瓦器椀の口縁部3点、常滑焼甕の口縁部1点、須恵器甕の体部片、土師質土器細片が出土している。

図示したものは土師質土器杯(610)、瓦器椀(611)、陶器甕(612)、須恵器甕(613)である。611は和泉型の瓦器椀。612は常滑焼甕(赤羽・中野編年3～4型式)の口縁部で、12世紀第4四半期～13

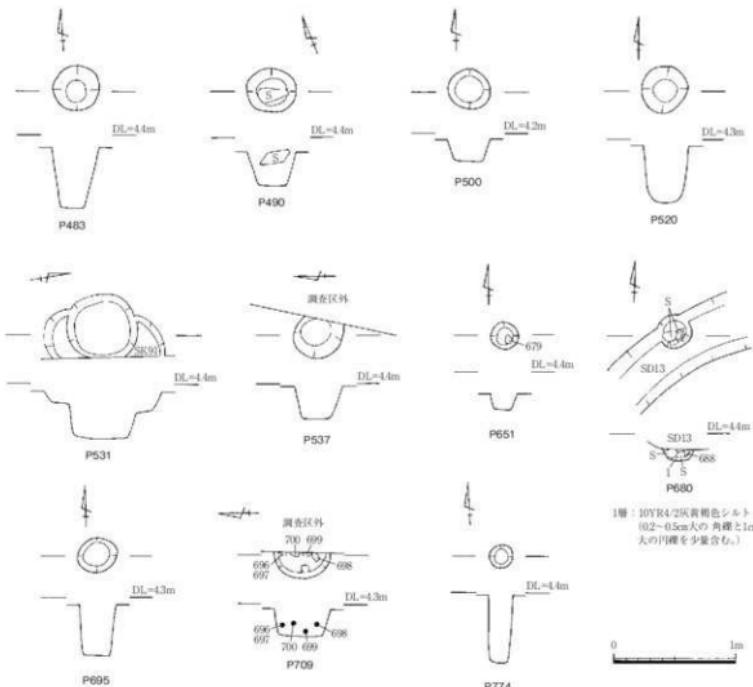


Fig.82 P483・490・500・520・531・537・651・680・695・709・774平面図・セクション図・エレベーション図・発出土状況図

世紀第1四半期に比定される。口縁部内面には自然釉がかかる。613は亀山窯の須恵器甕の体部片で、外面ナデ、内面に強いロクロ目が残る。胎土中には黒色粒を多く含む。

P425 (Fig.79・81)

G-6グリッドに位置する。検出規模は径32cm、深さ7cm、埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は、土師質土器小皿の口縁部2点と底部1点、青磁又は灰釉の壺、及び古代の混入とみられる須恵器瓶である。図示したものは壺(615)である。615は中国福建省磁窯系の灰釉の壺で、胎土中に黒色粒を多く含む。内外面に灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。

P480 (Fig.79・81)

I-2グリッドに位置する。検出規模は径39cm、深さ19cm、埋土は灰黄褐色シルトである。床面からは径18cmと10cmの白色の角礫2個が出土している。

図示したものは土師質土器小皿(619)、青磁碗(620)である。620は中国同安窯系の青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。ヘラと柳描きによる文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明

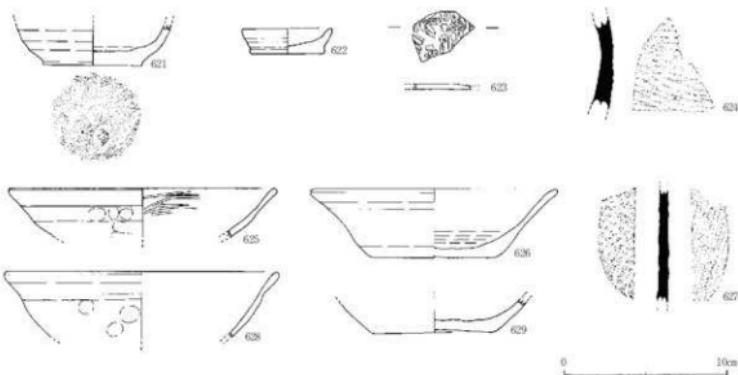


Fig.83 P483・485・487・490・496出土遺物実測図
(P483:621～624、P485:625、P487:626・627、P490:628、P496:629)

の釉を施す。

P483 (Fig.82・83)

I-3グリッドに位置する。検出規模は径38cm、深さ50cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層は褐灰色粘土となる。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点・小皿の口縁部1点・青白磁皿の底部1点、瓦器細片、須恵器壺の体部、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(621)・小皿(622)、青白磁皿(623)、須恵器壺(624)である。623は中国産の青白磁皿で、内面に陽刻による草花文を施す。釉は明緑灰色に発色する。624は龜山窯の須恵器壺の体部片で、外面に平行状のタタキを施す。胎土中には黒色粒を多く含む。

P490 (Fig.82)

H-4グリッドに位置する。検出規模は径38cm、深さ30cmである。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から径25cmの白色の角礫が出土している。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部2点・瓦器椀の口縁部(628)1点、土師質土器細片である。

P500 (Fig.82・84)

G-7グリッドに位置する。検出規模は径35cm、深さ20cm、埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を多く含んでおり、下層は褐灰色粘土となる。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部4点・小皿の口縁部9点と底部4点、瓦器椀の細片、青磁碗の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(630～633)・小皿(634～636)、青磁碗(637)で、このうち630～635・637が床面からまとめて出土したものである。637は中国同安窯系の青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。描きによる文様を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。

P520 (Fig.82・84)

G-6グリッドに位置する。検出規模は径38cm、深さ43cm、埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を少量

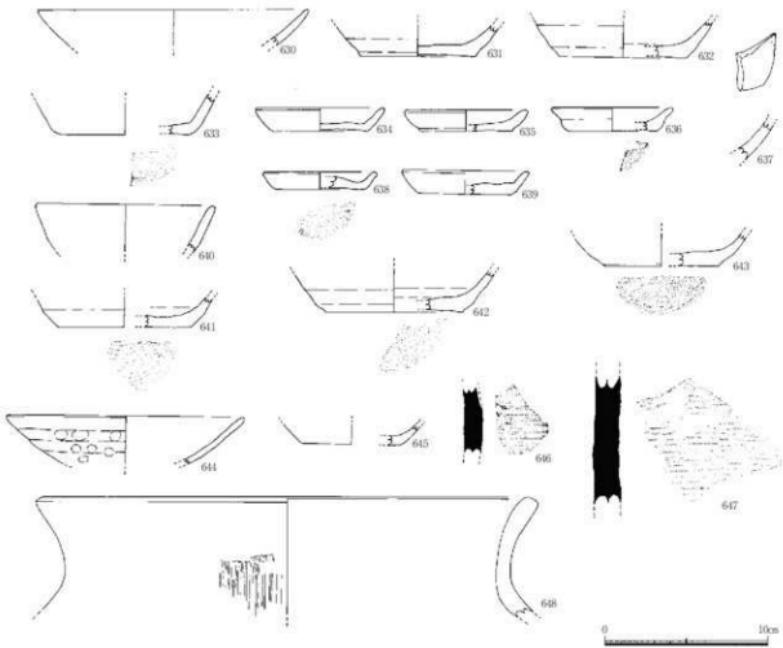


Fig.84 P500・519～521・528・529出土遺物実測図

(P500:630～637, P519:645・646, P520:638・639・641～643・646, P521:648, P528:647, P529:644)

含む。出土遺物は土師質土器杯の口縁部8点と底部6点、小皿の口縁部5点と底部5点、瓦器椀細片、須恵器壺の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(640～643)・小皿(638・639)である。

P531 (Fig.82・85)

H-5グリッドに位置する。検出規模は径58cm、深さ24cm。埋土は灰黄褐色シルトで、径20cmの柱痕を検出している。柱痕の埋土は褐色粘土で炭化物を多く含んでいる。遺物は、柱痕内から土師質土器杯の口縁部6点と底部7点、小皿の口縁部12点と底部7点、瓦器椀の口縁部1点と体部片が、埋土中から土師質土器杯の口縁部4点と底部5点、小皿の口縁部8点と底部5点、瓦器椀の体部片、青磁皿の口縁部1点、土師質土器細片が出土している。

図示したものは土師質土器杯(649～653)・小皿(654～657)、瓦器椀(659)、青磁皿(660)である。659は和泉型の瓦器椀。660は中国産の青磁皿で、外面下半は無釉。にぶい黄色を帯びる透明の釉を施し貫入が入る。

P537 (Fig.82・86)

H-5グリッドに位置する。検出規模は径32cm、深さ25cm、埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は埋土中より、土師質土器杯の口縁部6点と底部4点、小皿の口縁部12点と底部7点、瓦器椀の口縁部3点と底部1点と体部片、須恵器捏鉢の口縁部1点と体部片、白磁壺の口縁部2点と体部、青磁碗の口縁部3点、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器小皿(665～667)、瓦器椀(668～670)、青磁碗(671～673)、白磁壺(674～676)、須恵器鉢(677)である。668～670は和泉型瓦器椀。671・672は中国産の青磁碗の口縁部で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し貫入が入る。673は中国龍泉窯系の青磁碗(森田分類碗I-2類又はI-4類)で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。口縁部内面にヘラ彫による沈線を巡らせ、内外面に灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。674～676は中国産の白磁壺で、674は灰白色、675・676はオリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施す。677は東播系の須恵器鉢である。

P651 (Fig.82・86)

G-1グリッドに位置する。検出規模は径20cm、深さ15cm、埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を多く含む。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、須恵器甕の体部片、白磁壺の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは白磁壺(679)である。679は中国産の白磁壺で、体部上位に2条の沈線を巡らせ、耳を貼付する。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施し貫入が入る。

P680 (Fig.82・87)

H-5グリッドに位置し、中世のSD13を切る。検出規模は径29cm、深さ15cm、埋土は灰黄褐色シ

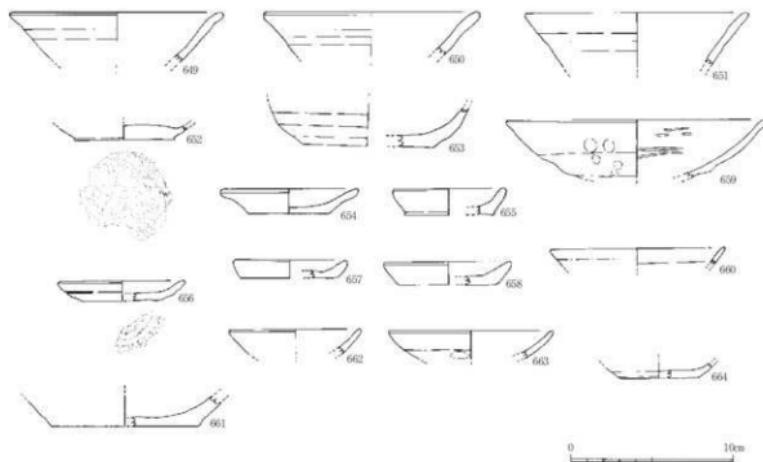


Fig.85 P531・535・536出土遺物実測図
(P531:649～657・659・660、P535:661～663、P536:658～664)

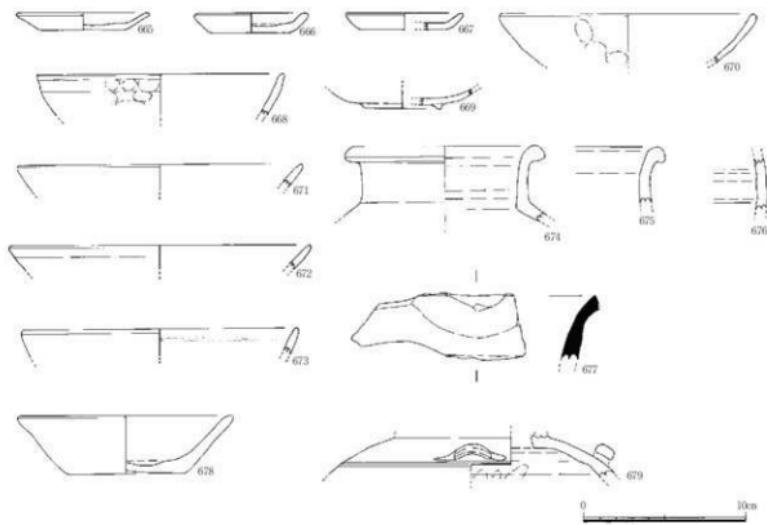


Fig.86 P537・549・651出土遺物実測図 (P537:665~677、P549:678、P651:679)

ルトである。出土遺物は土師質土器杯の口縁部5点と底部2点、小皿の口縁部2点と底部1点、瓦器碗の底部1点と体部片、陶器甕の口縁部1点、須恵器甕の体部片、白磁碗の体部片と白磁甕の体部片、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(680・681)・小皿(682)、瓦器碗(683・684)、須恵器鉢(686)、白磁壺(685)、陶器甕(687)、須恵器甕(688)である。685は中国産の白磁甕の体部片か。内面に強いロクロ目が残り、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。687は常滑焼甕(赤羽・中野編年3~4型式)の口縁部で、12世紀第4四半期~13世紀第1四半期に比定される。口縁部内面と肩部外面には自然釉がかかること。

P695 (Fig.82・87)

H-6グリッドに位置する。検出規模は径29cm、深さ41cmである。埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を多く含む。床面では径14cmの柱痕を検出しておらず、褐灰色粘土で炭化物を多く含んでおり。遺物は柱痕から土師質土器杯の口縁部1点(689)、埋土中から土師質土器杯の口縁部4点と底部6点、小皿の底部2点、須恵器甕の体部片、土師質土器細片が出土している。

図示したものは土師質土器杯(689~691・693)・小皿(692)である。692は土師質土器小皿で、底部に円孔を穿つ。

P709 (Fig.82・88)

H-5グリッドに位置する。検出規模は径48cm、深さ22cm、埋土は灰黄褐色シルトである。

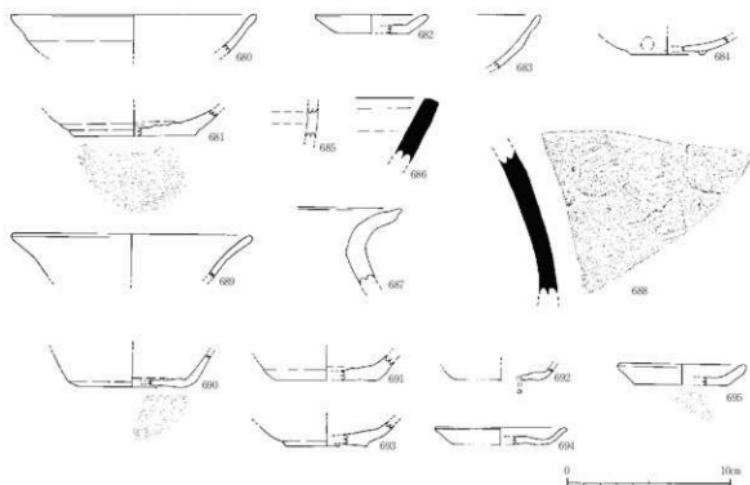


Fig.87 P680・695・698出土遺物実測図 (P680:680～688, P695:689～693, P698:694～695)

出土遺物は土師質土器杯の口縁部5点と底部4点、小皿の口縁部5点と底部2点、瓦器椀の口縁部3点と底部2点と体部片、青磁皿の口縁部1点、土師質土器細片である。

図示したものは土師質土器杯(697～700)・小皿(696)、瓦器椀(701)、青磁皿(711)である。711は中国産の青磁皿で、外面下半は無釉。黄褐色を帯びる半透明の釉を施す。

P774 (Fig.82・88)

H-5グリッドに位置し、中世のSD13に切られる。検出規模は径22cm、深さ55cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器杯の口縁部7点と底部1点、完形の小皿1点と小皿口縁部11点底部3点、瓦器椀の口縁部2点と底部1点、瓦器皿の口縁部1点と底部1点、土師質土器細片、及び古代の混入とみられる須恵器片である。

図示したものは土師質土器小皿(704～706)、瓦器椀(708)・皿(703)である。

ピット出土の遺物 (Fig.80・81・83～88)

この他、中世のピット内から出土した特徴的な遺物を図示した。

図示したものは、P3出土の土師質土器小皿(573)、瓦器皿(587)、P38出土の瓦器椀(584)、P59出土の土師質土器杯(568)、P64出土の瓦器皿(589)、P77出土の土師質土器杯(569)、P99出土の土師質土器小皿(576)、P100出土の土師質土器杯(570)、P105出土の青磁皿(598)、P146出土の青磁碗(595)、P161出土の土師質土器小皿(575)、P207出土の土師質土器杯(571)、P229出土の瓦器椀(588)、P262出土の白磁皿(593)、P266出土の土師質土器小皿(578)、P307出土の土師質土器杯(572)・小皿(579)、P329出土の土師質土器小皿(580)、P347出土の白磁壺(594)、P350出土の

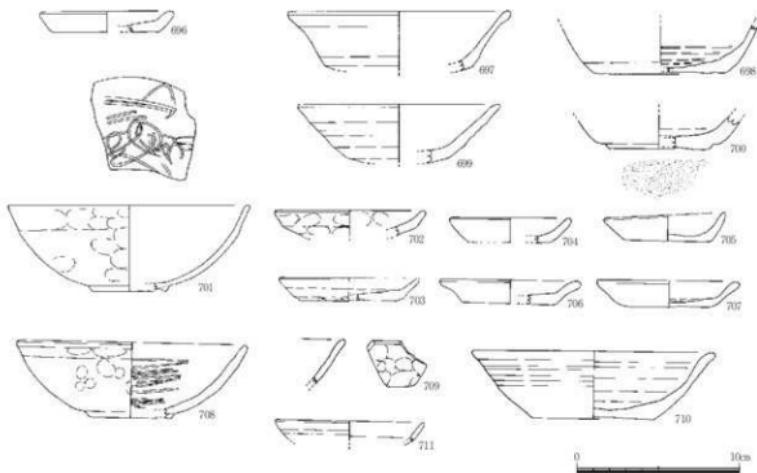


Fig.88 P709・713・751・764・774・778出土遺物実測図

(P709:696~701・711,P713:702,P751:709,P764:710,P774:703~706・708,P778:707)

瓦器椀(585)、P361出土の土師質土器小皿(577)、P367出土の土師質土器小皿(581)、瓦器椀(586)、P375出土の瓦器皿(590)、P383出土の須恵器壺(601)、P385出土の須恵器鉢(599)、P387出土の土師質土器小皿(582)、P419出土の土師質土器杯(614)、P428出土の須恵器壺(616)、P435出土の須恵器壺(617)、P456出土の青磁碗(604)、P479出土の須恵器壺(618)、P485出土の瓦器椀(625)、P487出土の土師質土器杯(626)、須恵器壺(627)、P496出土の土師質土器杯(629)、P519出土の土師質土器小皿(645)、須恵器壺(646)、P521出土の瓦質土器鍋(648)、P528出土の須恵器壺(647)、P529出土の瓦器椀(644)、P535出土の土師質土器杯(661)・小皿(662)、瓦器皿(663)、P536出土の土師質土器小皿(658・664)、P549出土の土師質土器杯(678)、P698出土の土師質土器小皿(694・695)、P713出土の瓦器皿(702)、P751出土の瓦器椀(709)、P764出土の土師質土器杯(710)、P778出土の土師質土器小皿(707)である。

584~586・588・625・644・709は和泉型の瓦器椀、587・589・590・663・702は和泉型の瓦器皿。593は中国産の白磁皿(森田分類IX類)で、13世紀後半~14世紀前半に比定される。平底、外底無釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。594は中国産の白磁壺の体部片か。内面施釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。595は中国龍泉窯系の青磁碗で、外面にヘラ彫による文様を描く。598は中国産の青磁皿で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し粗い貫入が入る。604は中国龍泉窯系の青磁碗で、内面に片切形による文様を描く。599は東播系の須恵器鉢である。616・646・647は龜山窯の須恵器壺で、外面に平行状のタタキ、内面にナデを施す。胎土中には黒色粒を多く含む。

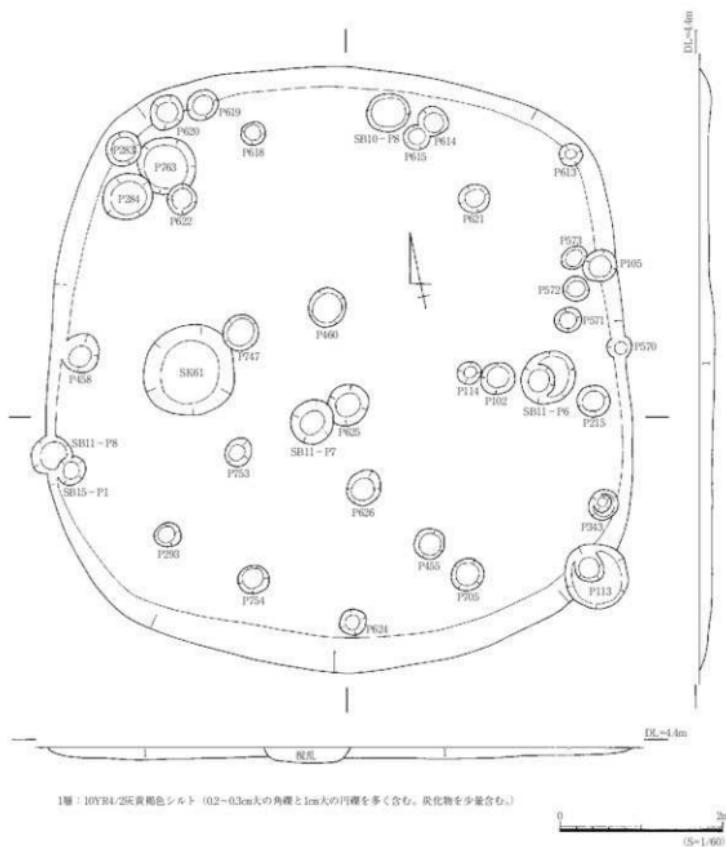


Fig.89 SX3平面図・セクション図

(6) 性格不明遺構

SX3 (Fig.89)

D - 3・4・E - 3・4に位置する大型の性格不明遺構で、中世のSK61・P343・455・458・460・570～573・613～615・618～622・624～626、古代のP705・747・753・754・763を切り、中世のSB10・P8・SB11・P6～8・SB15・P1と中世のP105・113・114・215・283・284・293に切られる。平面形は不整形を呈し、南北長4.98m、東西長4.80m、深さ12cmを測る。床はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は土師質土器杯の底部5点、小皿の底部1点、瓦器碗の口縁部2点と体部片、青磁碗の

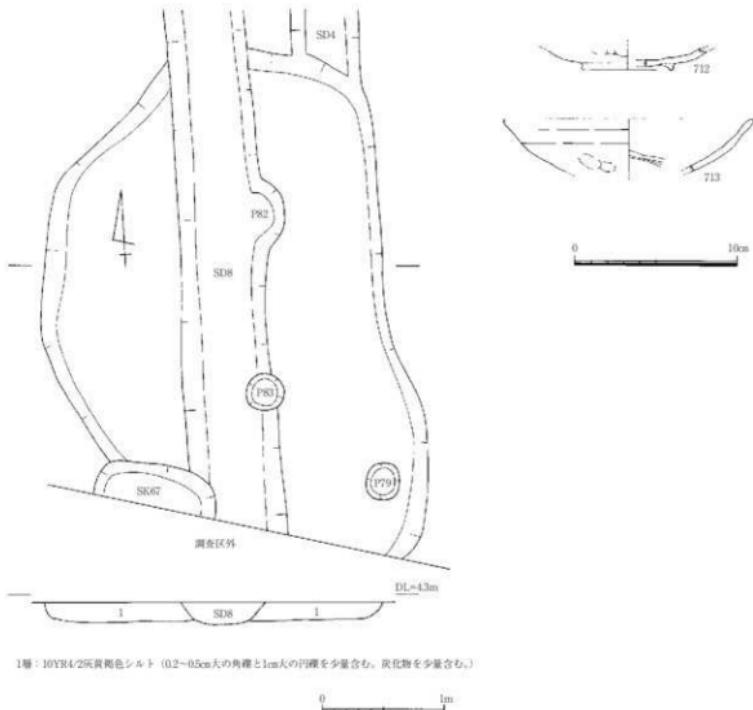


Fig.90 SX6平面図・セクション図・SX3・6出土遺物実測図 (SX3:712, SX6:713)

口縁部1点と体部片、土師質土器細片である。この他、古代の遺物も多く混入しており、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・高杯・蓋・壺・甕が出土している。

図示したものは瓦器椀(712)である。

SX6 (Fig.90)

C - 7・8・D - 7・8グリッドに位置する大型の性格不明遺構で、中世のSK67・SD4・8・P79・82・83に切られる。南部が削平を受けるため全体の規模が不明であるが、平面形は不整形を呈し、南北残存長4.00m、東西長2.86m、深さ14cmを測る。床はほぼ平坦で壁は斜め上方に緩やかに立ち上がっている。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀の口縁部1点と体部細片、土師質土器細片である。この他、土師器皿・甕、須恵器片など古代の遺物も多く混入している。

図示したものは瓦器椀(713)である。

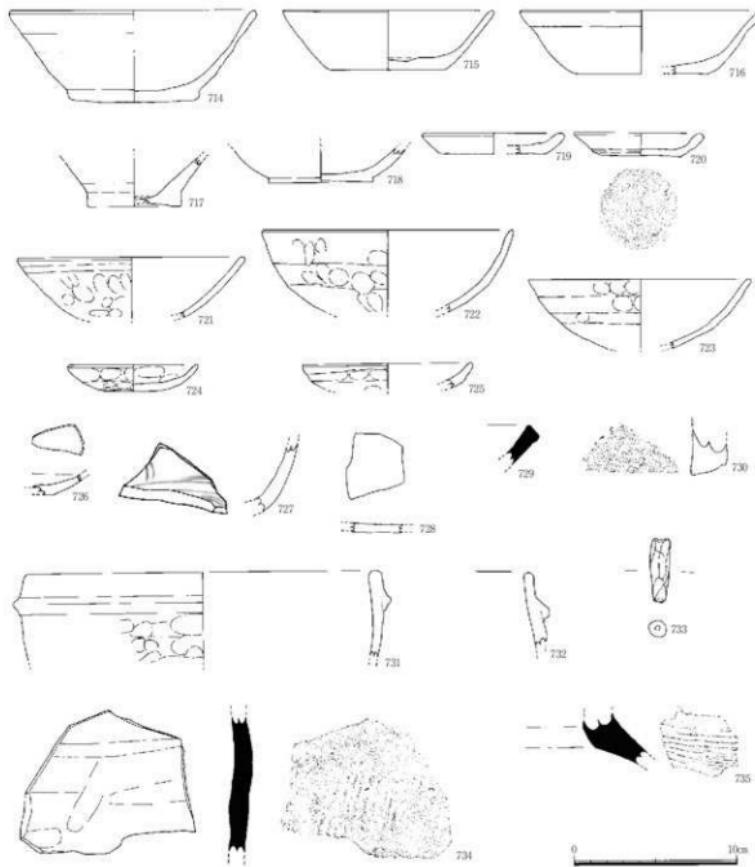


Fig.91 II層出土遺物実測図

(7) 包含層出土の遺物 (Fig.91)

ここでは、II層から出土した中世の遺物のうち、特徴的なものを取り上げた。図示したものは土師質土器杯(714~718)・小皿(719・720)、瓦器椀(721~723)・皿(724・725)、白磁皿(726)、青磁碗(727)・盤か(728)、須恵器鉢(729)・甕(734・735)、瓦質土器鍋(731・732)、土錘(733)、瓦(730)である。

721~723は和泉型の瓦器椀、724・725は和泉型の瓦器皿である。726は中国産の白磁皿(森田分類Ⅳ類)で、13世紀後半~14世紀前半に比定される。平底、外底無釉で、灰白色を帯びる透明の

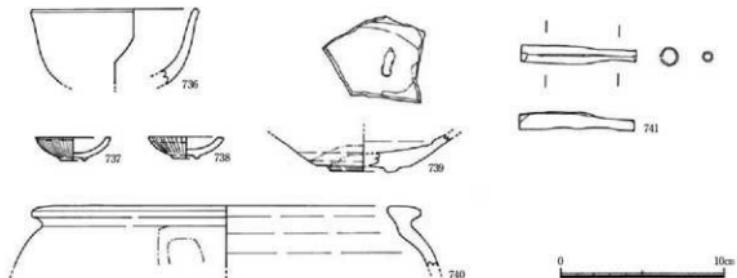


Fig. 92 I層出土遺物実測図

軸を施す。727は中国龍泉窯系の青磁碗（森田分類碗I-4類）で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面に片切形による文様を描き、オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。729は東播系の須恵器鉢である。735は龜山窯の須恵器壺の体部片で、外面に平行状のタタキを施す。胎土中には黒色粒を多く含む。

5. 近世の遺物

(1) 包含層出土の遺物 (Fig.92)

近世の遺物は、近現代の整地層と耕作土層であるI層から出土している。

図示したものはI層出土の染付中碗(726)、白磁紅皿(727・728)、陶器壺(740)・小皿(739)、銅製煙管(741)である。726は肥前産の端反形中碗。727・728は肥前産の白磁紅皿である。739は唐津系灰釉陶器の小皿で、内底に胎土目痕が残る。740は丹波焼の壺で、外面に鉄軸、口縁端部と体部内面に灰釉を施す。741は煙管の吸口である。

第2節 II区の調査

1. 基本層序

II区はI区の北東側に設定された調査区であり、堆積状況はI区にはほぼ共通する。調査区北壁にて観察した堆積層の内容は次の通りである。(Fig.93)

I-1層: 10YR6/6明黄褐色シルト(角礫を多く含む。)

I-2層: 10YR6/1褐灰色粘質シルト

II層: 10YR4/2灰黄褐色シルト(0.2~1cm大の角礫を多く含む。炭化物を少量含む。)

III層: 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(0.2~0.5cm大の角礫を少量含む。)

IV層: 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト

V層: 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫(粗砂に1~5cm大の円礫を多く含む。)

このうちI-1・I-2層は近現代の整地層と旧耕作土層であり、I層の直下にあるII層が中世の遺構検出面と遺物包含層になる。III層は調査I区での古代の遺物包含層に対応するが、出土遺物は

確認できていない。

次に各検出層のレベルを見ると、Ⅲ層の最上面は北壁で標高4.4mであった。これを調査Ⅰ区と比較すると、Ⅱ区に近い北東部で標高4.4m、南端部では標高4.3mとなっており、本調査区では北側がやや高まっていたことが分かる。

2. 中世の遺構と遺物

Ⅱ区では、中世の土坑3基(SK128～130)、溝2条(SD15・16)、ピット16基(P811～826)を検出した。

(1) 土坑

SK128 (Fig.93)

調査区の南西隅で検出した土坑で、中世のSD15に切られる。西側をSD15に削平され、南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、南北確認長0.88m、東西残存長0.42m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、最下層は褐灰色粘質シルトとなる。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点、小皿の底部1点、土師質土器細片である。

SK129 (Fig.93)

調査区の東部で検出した土坑で、中世のSD16を切っている。東側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、南北長0.88m、東西確認長0.64m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の口縁部2点と土師質土器細片、瓦器椀又は皿の体部細片である。

SK130 (Fig.93・94)

調査区の東部で検出した土坑で、中世のSD16に切られる。東側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、南北長0.86m、東西確認長0.50m、深さ29cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部1点と土師質土器細片、瓦器椀又は皿の体部細片、須恵器鉢の口縁部1点である。図示したものは土師質土器小皿(743)、須恵器鉢(746)、土錘(748)である。746は東播系の須恵器鉢で、胎土は黄灰色を呈し、口縁部外面のみ灰色に発色する。

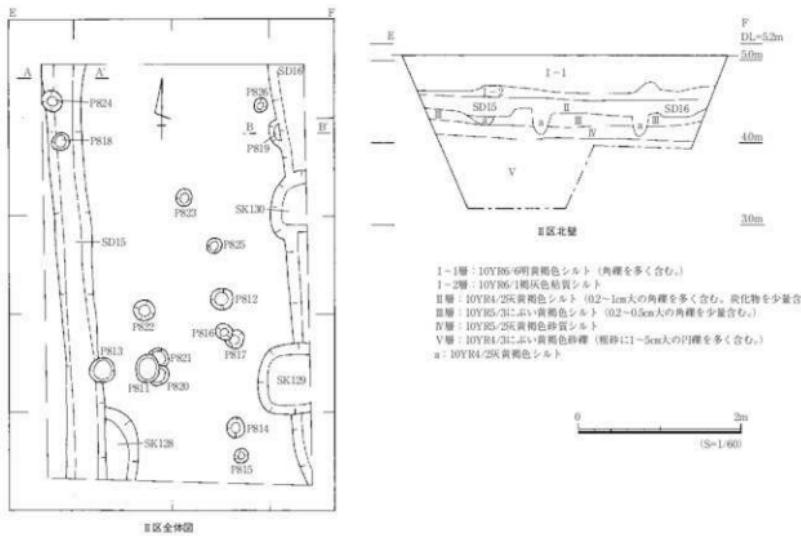
(2) 溝

SD15 (Fig.93・94)

調査区西部を南北方向に延びる溝で、軸方向はN-5°-Wである。切り合い関係では中世のSK128・P818・824を切り、中世のP813に切られる。検出長は5.1m、幅0.64m、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀又は皿の体部片、須恵器壺の体部片である。

図示したものは土師質土器小皿(742)である。



I~1層 : 10YR6/45黄褐色シルト (角礫を多く含む。)
 I~2層 : 10YR6/1褐色灰質シルト
 II層 : 10YR4/25黄褐色シルト (0.2~1cm大の角礫を多く含む。炭化物を少量含む。)
 III層 : 10YR5/35(32.5)褐色褐色シルト (0.2~0.5cm大の角礫を少量含む。)
 IV層 : 10YR5/25黄褐色砂質シルト
 V層 : 10YR4/35(32.5)褐色褐色砂質シルト (粗粒に1~5cm大の円礫を多く含む。)
 a : 10YR4/25黄褐色シルト

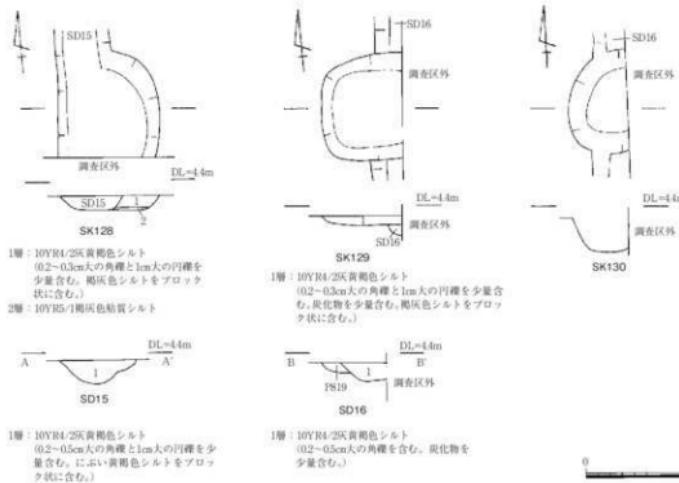


Fig.93 II 区検出遺構全体図・II 区北壁セクション図・SK128~130・SD15・16平面図・セクション図・エレベーション図

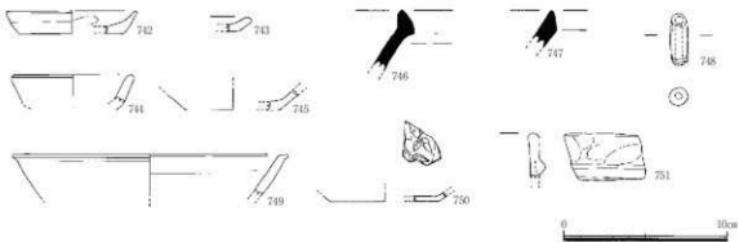


Fig.94 SK130・SD15・16出土遺物実測図
(SK130:743・746・748、SD15:742、SD16:744・745・747・749～751)

SD16 (Fig.93・94)

調査区東部を南北方向に延びる溝で、軸方向はN - 5° - Wである。切り合い関係では中世のSK130・P819を切り、中世のSK129に切られる。検出長は5.1m、幅は確認長0.42m、検出面からの深さは16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀又は皿の体部片、須恵器鉢、瓦質土器鍋、白磁碗、青白磁皿である。

図示したものは土師質土器杯(745)・小皿(744)、須恵器鉢(747)、白磁碗(749)、青白磁皿(750)、瓦質土器鍋(751)である。747は東播系の須恵器鉢。749は中国産の白磁碗(森田分類碗Ⅶ類か)で、12世紀～13世紀初頭に比定される。灰白色を帯びる半透明の釉を施し貫入が入る。

(3) ピット

中世のピットは16基(P811～826)を検出した。各ピットの規模と特徴はピット一覧表 (Tab.4・5) に示している。出土遺物は何れも小片であり図示できるものは無い。

Tab.1 土坑一覧表(1)

遺構名	グリッド	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	切り合ひ開闢	時期
SK2	C - 0・1	楕円形	3.02	1.50	14	SK81・P508・666を切る。	古代
SK3	D - 1	楕円形	0.58	0.36	28	SK9に切られる。	古代か
SK5	B - 6	楕円形	0.76	0.55	22	SK23・31に切られる。	中世か
SK6	C - 3	楕円形	0.64	0.44	5	SK114を切る。	中世か
SK7	D - 2	楕円形	1.48	0.60	10	P9・10・SE2・P2を切る。SD4に切られる。	中世
SK8	B - 5・6	楕円形	1.18	0.40	10	SD1・2を切る。	中世
SK9	D - 1	楕円形	0.74	0.62	22	SK3を切る。	中世
SK10	D - 2	楕円形	0.94	0.84	41	P743を切る。	中世
SK11	E - 1・2	楕円形	1.45	0.98	18	P25・27を切る。SB7・P1・P22に切られる。	中世
SK12	D - 1	楕円形	0.64	0.50	10	SD7に切られる。	中世
SK13	D - 4	楕円形	0.92	0.76	6	SK14を切る。	古代
SK14	D - 4	楕円形	1.04	0.92	8	SK13・P50に切られる。	古代
SK15	D - 5	楕円形	1.16	0.94	20	SK21を切る。	中世
SK16	D - 5・6	不整形	3.80	1.80	20	P552・558を切る。SB13・P7・SK21・26・P80・84・87・320に切られる。	古代か
SK17	D - 6	楕円形	2.32	0.72	13	SD4に切られる。	古代
SK18	D - 6	楕円形	0.52	0.42	10		古代
SK19	D - 8	円形	0.50	0.50	14		中世
SK20	E - 6	楕円形	0.88	0.78	24		中世
SK21	D - 5	楕円形	0.80	0.60	18	SK16・26・P84・87を切る。SK15に切られる。	中世
SK22	C - 4・5	楕円形	2.60	1.28	18	SD8を切る。	中世
SK23	B - 6・C - 5・6	楕円形	2.08	1.50	20	SK5・31・SD14を切る。	中世
SK24	E - 5	楕円形	0.98	0.64	20	P562を切る。	中世
SK25	E - 5	楕円形	0.60	0.46	7	SD9を切る。	中世
SK26	D - 5	楕円形	0.64	0.54	20	SK16・P84を切る。SK21に切られる。	中世
SK28	F - 3	楕円形	1.17	0.80	14	P109・110・115・116・633・SD9を切る。	中世
SK29	D - 4	楕円形	1.38	1.04	25	P111を切る。SD4に切られる。	中世
SK30	B - 7	不明	確認1.48	確認0.46	18	SD1を切る。	中世
SK31	B - 5	不整形	1.08	0.88	13	SK5を切る。SK23に切られる。	中世
SK33	E - 4	楕円形	0.78	0.58	10	SD9・P101・112を切る。	中世
SK34	F - 2	楕円形	0.66	0.54	22	P316を切る。	中世
SK35	E - 3	楕円形	0.68	0.53	26	SK124・SB4・F6・P287・790を切る。	中世
SK36	E - 2	楕円形	残 0.40	0.50	11	SK38を切る。	中世
SK37	F - 2・3	楕円形	1.13	0.70	18	SK39・SD10・P168を切る。	中世
SK38	E - 2	楕円形	0.61	0.46	28	SD7・P7・SB9・P6を切る。	中世
SK39	F - 2	楕円形	残 1.54	0.70	20	SK92・SD10・P168・258を切る。SK37・P197に切られる。	中世
SK40	F - 2	楕円形	0.74	0.66	12	SD10を切る。P175に切られる。	中世
SK41	F - 2・G - 2	不整形	1.32	0.80	20	SD10・SD5・P7を切る。SD8・P6・67に切られる。	中世
SK42	H - 2	楕円形	0.95	0.74	12	P718を切る。P341・342・344・644に切られる。	中世
SK44	F - 1	不明	1.00	確認0.40	14	SD7を切る。SK5に切られる。	中世
SK45	F - 5	楕円形	0.70	0.38	10	P238・240に切られる。	古代か
SK46	F - 5	楕円形	0.57	0.50	13		中世
SK47	F - 5	楕円形	0.58	0.52	10	P252を切る。	中世
SK48	F - 3	楕円形	0.52	0.48	16	SX4・P596・597を切る。	中世
SK49	G - 3	楕円形	0.88	0.67	9	P373を切る。	中世

Tab.2 土坑一覧表(2)

遺構名	グリッド	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	切り合ひ関係	時期
SK50	E - 3 · F - 3	楕円形	0.66	0.38	10	SD9 · F325を切る。	中世
SK51	G - 3	楕円形	0.60	0.52	18	P264を切る。	古代か
SK52	F - 1	楕円形	0.74	0.63	10		中世
SK53	E - 1	楕円形	残0.70	0.88	20	P265を切る。	中世
SK54	F - 1	不明	0.52	確認0.22	14	SK44を切る。	中世
SK55	F - 6	楕円形	1.82	1.60	8	SK58 · F672を切る。	古代か
SK56	D - 6	不整形	1.02	1.00	30	P579 · 583を切る。	中世
SK57	E - 7	楕円形	1.54	1.10	14	SD9を切る。	中世
SK58	F - 9 · G - 9	楕円形	確認1.10	0.95	10		中世
SK59	C - 2	楕円形	0.85	0.60	8	SK108 · SD8 · P488を切る。	中世
SK60	D - 3	不明	残1.40	1.08	20	SK93 · P628 · 758を切る。SD4に切られる。	中世
SK61	D - 3 · E - 3	円形	0.75	0.75	18	SK31に切られる。	中世
SK63	B - 7	不明	残0.80	0.78	10		中世
SK65	C - 8	不明	1.05	確認0.34	18	SK66に切られる。	古代
SK66	C - 8	不明	0.52	確認0.30	15	SK65を切る。	中世
SK67	C - 8	不明	1.08	確認0.36	22	SK66を切る。	中世
SK68	C - 0	不明	0.76	確認0.40	16	SD8に切れる。	中世
SK70	C - 4	円形	0.53	0.53	28	SD8に切られる。	古代か
SK71	C - 4	円形	0.50	0.50	30		古代か
SK72	C - 5 · 6	不整形	0.66	0.60	36	P469に切られる。	古代か
SK73	C - 6	不整形	0.68	0.66	28	P469に切られる。	古代か
SK74	I - 2 · 3	不明	0.96	確認0.82	18	P517に切られる。	中世
SK75	H - 3	円形	0.70	0.70	16	P510を切る。	中世
SK77	H - 1	不明	確認1.28	確認0.74	23	SD10を切る。SK78に切られる。	中世
SK78	H - 1	隅丸方形	0.68	0.65	22	SK77を切る。	中世
SK79	H - 1	楕円形	0.60	0.55	24	SD10を切る。	中世
SK80	F - 7	円形	0.60	0.60	6	P437 · 449に切られる。	古代か
SK81	C - 0	円形	0.60	0.58	22	SK21に切られる。	古代か
SK82	B - 1	不明	0.46	確認0.14	11		古代か
SK83	B - 3	不明	2.30	確認0.28	16		古代か
SK84	F - 5	楕円形	0.66	0.58	6		古代か
SK85	E - 6	楕円形	0.96	0.70	10	P567を切る。P245に切られる。	古代か
SK86	E - 6	円形	0.62	0.62	8	P246に切られる。	古代か
SK88	F - 6	楕円形	0.66	0.58	12	SK35に切られる。	古代
SK89	F - 5 · 6	楕円形	1.12	0.73	13	P299に切られる。	中世
SK91	H - 5	楕円形か	0.80	確認0.40	18	P531に切られる。	中世
SK92	E - 2	楕円形	0.97	0.87	24	SK39 · SB14 · P1に切られる。	中世
SK93	D - 3	楕円形	0.94	0.62	22	P628 · P810を切る。SK60に切られる。	古代か
SK95	G - 2 · 3	不明	残0.90	0.82	12		古代か
SK96	E - 2	楕円形	1.10	0.62	10	P128 · 129 · 139に切られる。	古代か
SK97	E - 1	楕円形	0.60	0.54	20		古代か
SK98	E - 2	楕円形	1.00	0.86	24	SK36に切られる。	中世
SK99	C - 3	楕円形	0.55	0.48	26	SD5に切られる。	古代か
SK100	D - 3	隅丸方形	0.73	0.62	22	SD4 · 6に切られる。	古代か
SK101	B - 2 · C - 2	楕円形	0.62	0.50	28	P49 · SD6に切られる。	古代か

Tab.3 土坑一覧表(3)

遺構名	グリッド	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	切り合い関係	時期
SK104	C-2-D-2	楕円形	0.56	0.44	24	SBI-P3に切られる。	古代か
SK106	B-3	楕丸方形	0.78	0.76	40	P11に切られる。	古代
SK107	D-2	円形	0.60	0.56	20	SD3に切られる。	古墳時代 又は古代
SK108	C-2	円形	0.55	0.50	32	SK59・SD4に切られる。	古代か
SK109	C-1	楕円形	1.13	0.64	23	SD12に切られる。	不明
SK110	C-3	楕円形	0.70	0.54	22	SD6に切られる。	中世
SK111	C-2	楕円形	0.70	0.53	24	SD8に切られる。	古代か
SK112	D-1	楕円形	0.74	0.70	28		古代か
SK114	C-3	円形	0.70	0.70	31	SK6・P8・SD8に切られる。	古代か
SK115	D-2	楕円形	0.74	0.62	20	P9・P10に切られる。	古代
SK116	C-3	楕円形	0.60	0.50	22		古墳時代 又は古代
SK118	F-2	楕円形	1.40	0.80	20	SK37・39・P165・166・168・197・258に切られる。	中世
SK119	D-3	円形	0.60	0.58	28	P292・SX3に切られる。	古代か
SK122	D-2-3-E-2-3	楕円形	1.76	1.30	11	P766を切る。SB4-P8・P12・P76・661・764に切られる。	古代
SK124	E-3	円形	0.58	0.54	8	P792を切る。SK35に切られる。	古代
SK126	B-4	楕円形	1.00	0.90	31		古代
SK127	B-4	楕円形	0.68	0.57	18		古代か
SK128	Ⅱ区	楕円形	確認0.88	残0.42	1200	SD15(BHSD301)に切られる。	中世
SK129	Ⅱ区	楕円形	0.88	確認0.64	1000	SD16(BHSD302)を切る。	中世
SK130	Ⅱ区	楕円形	0.86	確認0.50	2900	SD16(BHSD302)に切られる。	中世

Tab.4 ピット計測表(1)

古代

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	検出面
P199	F - 3	21	15	Ⅲ層上面
P200	F - 3	28	21	Ⅲ層上面
P295	F - 4	27	10	Ⅲ層上面
P360	G - 3	27	13	Ⅲ層上面
P470	C - 5・6	36	8	Ⅲ層下位
P511	B - 2	30	14	V層上面
P512	B - 2	35	15	V層上面
P514	B - 2	32	12	V層上面
P515	B - 2	35	18	V層上面
P516	B - 2・3	35	20	V層上面
P532	D - 5	38	11	Ⅲ層下位
P538	D - 6	32	5	V層上面
P628	D - 3	47	35	Ⅲ層下位
P635	F - 3	25	10	Ⅲ層下位
P664	D - 3・4	60×45	54	V層上面
P665	C - 2	36	21	V層上面
P666	C - 1	39	26	V層上面
P672	F - 6	27	32	V層上面
P673	D - 2	27	14	V層上面
P679	C - 3	30	12	V層上面
P686	C - 3	34	11	V層上面
P705	E - 4	27	4	V層上面
P715	G - 6・H - 6	25	14	Ⅲ層最下位
P733	G - 1	18	12	V層上面
P736	H - 2	40	16	V層上面
P737	H - 2	30	6	V層上面
P740	G - 2	38	12	V層上面
P742	E - 3・F - 3	20	12	Ⅲ層下位
P744	F - 1・G - 1	32	6	Ⅲ層下位
P747	E - 3	26	8	Ⅲ層下位
P752	H - 3	23	30	V層上面
P753	E - 4	20	10	V層上面
P754	E - 4	26	15	V層上面
P756	D - 2	35	10	V層上面
P757	D - 3	29	17	V層上面
P758	D - 3	20	20	V層上面
P763	D - 3・E - 3	30	12	V層上面
P765	E - 1・F - 1	22	7	Ⅲ層下位
P766	E - 2	20	8	Ⅲ層下位
P770	H - 1	30	15	V層上面
P783	F - 1	28	7	V層上面
P784	F - 1	27	8	V層上面
P790	E - 3・F - 3	39	10	Ⅲ層下位
P792	E - 3	28	26	Ⅲ層下位

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	検出面
P295	C - 4	36	10	V層上面
P297	C - 4	27	11	V層上面
P299	C - 4	23	13	V層上面
P801	D - 1	29	8	V層上面
P805	F - 2	44	20	V層上面
P806	F - 1	33	5	V層上面
P808	F - 1	26	10	V層上面
P809	F - 2	20	12	V層上面
P810	D - 3	43	22	V層上面

※深さは各検出面からの検出深度。

中世

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	柱痕・特徴
P3	B - 4	34	26	
P11	B - 3	35	31	柱痕(径20cm)
P12	D - 3	29	18	柱痕(径18cm)
P18	E - 2	32	19	柱痕(径18cm)
P36	D - 5	30	8	柱痕
P38	D - 5	39	12	
P48	D - 6	27	11	柱痕(径17cm)
P52	D - 6	30	35	柱痕
P57	D - 7・E - 7	20	33	柱痕
P59	D - 7	29	29	
P64	D - 8	40	22	
P75	D - 7	30	40	
P77	D - 8	36	10	
P84	D - 5	29	27	柱痕
P95	E - 4・5	22	30	柱痕
P99	E - 4	20	50	柱痕
P100	E - 4	34	18	
P105	E - 3	30	23	
P108	F - 4	33	13	柱痕(径13cm)
P111	D - 4	23	20	柱痕(径20cm)
P113	E - 4	50	16	柱痕(径20cm)
P114	E - 4	17	20	柱痕(径17cm)
P122	F - 3	32	25	柱痕(径14cm)
P123	F - 3	27	18	柱痕(径16cm)
P129	E - 2	38	5	柱痕(径19cm)
P137	F - 1	37	14	柱痕(径17cm)
P146	F - 1	25	20	
P156	F - 2	23	28	下層は粘土と炭
P161	F - 1	28	36	下層は粘土と炭
P172	F - 2	20	23	柱痕(径10cm)
P173	F - 2	21	34	柱痕
P174	F - 2・G - 2	28	21	柱痕(径13cm)

Tab.5 ピット計測表(2)

造構名	グリッド	併(cm)	深さ(cm)	柱痕・特徴
P183	G-2	33	37	
P186	G-2	38	24	柱痕
P189	G-2	28	32	柱痕(併12cm)
P207	F-3	30	46	柱痕と併20cmの縦
P219	F-4	22	13	柱痕(併15cm)
P229	G-4	20	18	
P262	F-4	24	8	
P266	G-1	20	18	柱痕(併12cm)
P271	G-1	36	30	柱痕(併20cm)
P298	F-5	19	12	柱痕(併10cm)
P307	E-7	20	12	
P322	F-3	38	44	併20cmと併10cmの縦
P329	G-2	17	12	
P342	H-2	20	25	柱痕(併11cm)
P343	E-4	22	18	柱痕
P344	H-2	48×34	24	併20cmと併10cmの縦
P347	H-2	29	19	
P350	H-3	26	17	
P361	G-3	42	6	柱痕(併15cm)
P366	H-3	24	22	柱痕(併10cm)
P367	G-3·H-3	38	20	柱痕(併15cm)
P375	H-3	30	20	
P378	G-3	24	18	柱痕
P383	G-3	32	5	柱痕(併15cm)
P385	G-4	35	19	
P387	G-4	25	7	
P406	G-5	25	22	柱痕(併13cm)
P409	G-5	42	29	
P411	G-5	32	18	
P419	G-6	30	32	柱痕
P425	G-6	32	7	
P428	F-7	30	5	
P435	F-7	43	10	
P456	E-4	22	20	
P479	D-7	26	4(31)	
P480	I-2	39	19	併18cmと併10cmの縦
P483	I-3	38	50	柱痕か
P485	H-3	37	24(40)	
P487	H-3	30	4(11)	
P490	H-4	38	30(34)	併25cmの縦
P496	H-4-1-4	36	14(10)	
P500	G-7	35	20(36)	柱痕
P507	D-7	22	8(36)	柱痕(併12cm)
P519	G-6·7	25	34(41)	
P520	G-6	38	43(56)	

造構名	グリッド	併(cm)	深さ(cm)	柱痕・特徴
P521	G-5	36	9(22)	
P528	G-7	25	23(31)	
P529	H-4·5	29	22	
P531	H-5	58	24	柱痕(併20cm)
P535	H-5	30	22	
P536	H-5	29	15	併20cmの縦
P537	H-5	32	25	
P549	G-6	27	11(32)	
P625	E-4	35	21(32)	柱痕(併14cm)
P638	E-2	28	19(30)	柱痕(併15cm)
P639	F-2	40	20(32)	柱痕(併16cm)
P641	G-2	35	22(41)	柱痕(併16cm)
P647	G-1	30	32(43)	柱痕
P651	G-1	20	15(26)	
P680	H-5	29	15(46)	
P695	H-6	29	41(53)	柱痕(併14cm)
P698	H-6	27	30(21)	
P709	H-5	48	22(32)	
P713	H-6	25	26(36)	柱痕
P751	H-4·5	20	6(30)	
P764	E-3	24	8(26)	
P774	H-5	22	55	
P778	F-2	46	6(34)	
P811	II区	31	6	
P812	II区	25	17	
P813	II区	32	4	
P814	II区	21	11	
P815	II区	19	10	
P816	II区	21	15	
P817	II区	23	14	
P818	II区	21	9	
P819	II区	30	8	
P820	II区	25	9	
P821	II区	25	9	
P822	II区	30	12(22)	
P823	II区	18	18(28)	
P824	II区	25	10(20)	
P825	II区	22	12(22)	
P826	II区	15	10(20)	

*下間に検出されたピットの深さについては、実際の検出面からの確認深度と、検出面を標高4.35mに描えた場合の復元深度の両方を表示した。
()は復元深度。

Tab.6 SBピット計測表

道構番号	ピット番号	径 (cm)	深さ (cm)
SB1	P1	35	15
	P2	94 × 68	30
	P3	80 × 66	42
	P4	100 × 88	12
	P5	35 × 30	22
	P6	62 × 60	36
	P7	70 × 50	36
	P8	—	—
SB2	P1	45	12
	P2	45	22
	P3	—	—
	P4	—	—
	P5	—	—
	P6	50 × 40	15
	P7	—	—
	P8	50 × 42	20
SB3	P1	—	—
	P2	53	10
	P3	48 × 40	16
	P4	70 × 64	28
	P5	76 × 62	12
	P6	—	—
SB4	P1	30	34
	P2	30	30
	P3	24	34
	P4	40 × 36	12 (54)
	P5	30	22
	P6	21	28 (38)
	P7	35 × 28	26
	P8	28	20 (28)
SB5	P1	44 × 40	31
	P2	25	20
	P3	48 × 36	30
	P4	26	15
	P5	24	20
	P6	36	25
	P7	24	8 (24)
	P8	—	—
SB6	P1	30	15
	P2	45 × 40	30
	P3	40 × 30	20
	P4	32	28
	P5	—	—
	P6	34	18
	P7	40 × 38	34
	P8	30	28
SB7	P1	28	44
	P2	30 × 28	34
	P3	26	10 (15)
	P4	—	—
	P5	36	30
	P6	30 × 24	22
	P7	28	32
	P8	22	16
SB8	P1	—	—
	P2	—	—
	P3	28	18
	P4	34 × 30	18
	P5	40	16 (32)
	P6	48 × 40	30
	P7	40 × 38	34
	P8	23	34
SB9	P1	30	10 (42)
	P2	34	26
	P3	32	16
	P4	38	15
	P5	30	26
	P6	28	32
	P7	—	—
	P8	—	—
SB10	P1	30	20
	P2	—	—
	P3	30 × 24	22
	P4	28	12 (32)
	P5	48 × 36	41
	P6	35	34
	P7	35	35
	P8	38	21 (30)
SB11	P1	—	—
	P2	30	18
	P3	28	22
	P4	40 × 36	20
	P5	30	10 (26)
	P6	42	34
	P7	34	12 (33)
	P8	38 × 30	34 (44)
SB12	P1	48	15 (22)
	P2	50 × 40	10 (20)
	P3	96 × 62	48
	P4	64 × 52	54
	P5	42	12
	P6	—	—
	P7	48 × 42	6 (9)
	P8	46	7 (14)
SB13	P1	28	8 (14)
	P2	38	14
	P3	32	28 (36)
	P4	29 × 25	39
	P5	28	38 (42)
	P6	—	—
	P7	27	40
	P8	28	18
SB14	P1	32	28
	P2	—	—
	P3	38	15
	P4	—	—
	P5	38	22
	P6	48 × 36	41
	P7	35	34
	P8	38 × 32	32
SB15	P1	23	22 (30)
	P2	—	—
	P3	30	9
	P4	22	16
	P5	30	22 (30)
	P6	37	31
	P7	42	21
	P8	—	—

申下面にて検出された柱穴の深さについては、実際の検出面からの確認深度と、検出面を標高4.35mに補えた場合の復元深度の両方を表示した。
()は復元深度。

Tab.7 遺物観察表(1)

国版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・ 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	最大径						
1	SRI	出生土器	高杯	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・灰・赤褐色／粗	内外面ナデ。	弥生後期		
2	SRI 下層	土器類	甕	134	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	石・長・雲・赤褐色／粗	内外面ナデ。	古墳時代前期		
3	SRI 上層	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/3 内)にぶい黄橙10YR7/3 断)リーブル5Y3/1	石・長・雲・灰・暗灰 灰・赤褐色／粗多量	口縁部内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
4	SRI 上層	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ・赤褐色／粗	体部外面タキ、内面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
5	SRI 下層	出生土器	甕	—	—	4.0	—	にぶい黄橙10YR6/4	石・長・雲・暗灰 粗多量	硬	内外面ナデ。	弥生時代末	
6	SRI 下層	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/3 内)糊灰10YR6/1 断)にぶい黄橙10YR7/3	石・長・雲・灰・赤褐色／粗	口縁部内外面ナデ。体部外 面タキナ・ナデ、内面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
7	SRI 下層	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	外)にぶい75YR6/4 内)糊灰10YR5/1 断)にぶい75YR6/4	石・長・雲・赤褐色 小窪・粗	体部外面タキナ・ナデ。内 面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
8	SRI 烟燐器	甕	146	—	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・細	硬	口縁部内外面回転ナデ。	古墳時代	
9	SRI 烟燐器	甕又は 瓶	—	—	130	—	—	灰10N7 内)灰10N7 断)灰75YR6/1	石・長・細・黑色粒	硬	内外面回転ナデ。内面ロク 口。貼付高台。		
10	包含層 V-1層 F-2	出生土器	甕	192	—	—	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・粗	二重口縁。内外面ナデ。 口縁部外面の文律帶は剥離 か。	弥生時代後期 末		
11	包含層 V-1層 G-2	出生土器・ 土器類	甕	135	—	—	—	外)橙75YR6/4 内)糊灰25Y4/1 断)灰25Y4/1	石・長・雲・赤褐色 粗	口縁部外面ハケ・ナデ、内 面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
12	包含層 V-4層 B-3	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/2 内)にぶい黄橙10YR7/2 断)糊灰N3/	石・長・雲・チ・陽 粗	肩部外面タキ、内面ハケ・ ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
13	包含層 V-1層 H-5	土器類	甕	162	—	—	—	浅黃橙10YR8/4	石・長・雲・灰・赤褐色 粗	軟	内外面ナデ。	古墳時代前期	
14	包含層 V-1層 F-2	出生土器・ 土器類	甕	122	—	—	—	外)にぶい橙75YR7/3 内)にぶい橙75YR7/3 断)糊灰10YR4/1	石・長・雲・糊灰・ 灰・粗	口縁部内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
15	包含層 V層	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	外)にぶい糊75YR5/3 内)にぶい糊75YR6/3	石・長・雲・チ・灰 角粒粗糹	硬	外面平行状のタキ、内面 ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期 外面に盤。	
16	包含層 V-4層 B-3	出生土器	甕	—	—	5.0	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・灰・暗 灰・粗多量	やや軟	内外面ナデ。	弥生後期後半	
17	包含層 V-1層 C-5	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	橙75YR6/6	石・長・雲・赤褐色 小窪・粗	体部外面タキ。内面ハケ・ ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
18	包含層 H層 G-2	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ・灰・ 赤風・粗多量	内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
19	包含層 V-4層 C-4	出生土器	甕	—	—	—	—	外)にぶい橙75YR7/4 内)にぶい橙75YR6/6 断)にぶい橙75YR7/4	石・長・灰・赤褐色 粗	体部外面タキ、内面ハケ・ ナデ。	弥生時代末		
20	包含層 V-1層 E-1	出生土器・ 土器類	甕	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	石・長・雲・赤褐色 粗	软	体部外面タキ後ナデ。内 面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期	
21	包含層 V-1層 E-5	土器類	鉢	130	4.9	4.0	—	外)橙75YR7/6 断)糊灰25Y4/1	石・長・雲・赤褐色 粗	小型丸底鉢。内外面ナデ。	古墳時代中期		
22	包含層 V-1層 E-5	出生土器	高杯	約210	—	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	石・長・雲・金雲母・ 角閃石・赤風・粗	内外面ナデ。	弥生後期		
23	包含層 V-1層	出生土器・ 土器類	高杯	—	—	—	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・灰・粗	内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
24	包含層 V-1層 G-2	土器類	高杯	—	—	8.6	—	外)にぶい橙75YR7/4 内)にぶい橙75YR7/4 断)糊灰25Y4/1	石・長・雲・灰・糊・ 赤褐色・粗	内外面ナデ。	古墳時代前期		
25	包含層 V-1層 G-2	出生土器・ 土器類	高杯	—	—	—	—	橙5YR6/8	石・長・雲・灰・白・ 灰・赤褐色・粗	软	外面ナデ。脚部内面シボリ 目。	弥生時代末～ 古墳時代初期	
26	包含層 V層	出生土器・ 土器類	高杯	—	—	—	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ・暗 灰・赤褐色・粗	软	外面ナデ。脚部内面ナデ・ シボリ目。脚は接合部で剥離。	弥生時代末～ 古墳時代初期	
27-a	包含層 V-1層 D-1	出生土器・ 土器類	高杯	—	—	114	—	にぶい黄橙10YR6/3	石・長・灰・暗灰・ 糊・小窪・粗多量	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		
27-b	包含層 V-1層 D-1	出生土器・ 土器類	高杯	60	—	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	石・長・灰・暗灰・ 糊・小窪・粗多量	外面ユビオサエ・ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初期		

Tab.8 遺物観察表(2)

団版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量				色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
28	包含層 V-1層 D-5	土器部	甕	約14.2	-	-	-	外) 灰5YR7/6 内) 灰5Y5/1 断) 灰5Y6/1	石・長・灰・小粒、粗	やや 軟	内外面ハケ。	古代又は古墳 時代
29	包含層 V-4層 C-4	須恵器	蓋	笠部様 146	-	-	-	外) 灰N6/ 断) 灰灰7.5YR6/1	石・長・粗・細、黑色絞	硬	内外面回転ナデ。	古墳時代
30	包含層 V-1層 D-6	須恵器	甕	17.9	-	-	-	外) 灰N6/ 断) 灰灰7.5YR6/1	石・長・細	硬	口縁部外面に直面三角形の突起を有する側面状況を 有す。内外面回転ナデ。	古墳時代
31	包含層 V-1層 D-2	石製品	叩石	全長 10.9	全厚 3.8	全幅 10.5	重量 650g		砂岩製		両面中央と周縁に敲打痕。	
32	包含層 IV層 G-4	土器部	甕	16.6	-	-	-	外) 灰7.5YR7/4	石・長・灰・灰・灰 /粗・細	体部外面タキハケ・ナ デ。内面ナデ。		古墳時代前期
33	包含層 III層 最下層 H-3	土器部	甕	-	-	-	-	外) 灰7.5YR7/4	石・長・直・灰・赤 尾・粗	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ナデ。内面ハケズ リ。		古墳時代初頭 口縁部外面に 瘤。
34	包含層 III層 最下層	弦生土 器・土器部	不明	-	-	4.0	-	外) 灰7.5YR7/6	石・長・直・灰・赤 尾・粗・細	秋	内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初頭
35	包含層 II層 最下層 E-1	弦生土 器・土器部	甕	-	-	5.2	-	外) 灰5YR6/6 断) 黄灰2.5Y4/1	石・長・直・灰・灰・小 粒・粗		内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初頭
36	包含層 III層	須恵器	蓋	-	-	-	-	外) 灰N6/ 断) 灰灰10YR6/1	石・長・粗・細	硬	天井部外面回転ヘラケズリ。 笠部外面回転ナデ。内面回 転ナデ。	古墳時代
37	包含層 II層 最下層 GH- 1・2	須恵器	蓋	-	-	-	-	外) 灰NS/ 内) 灰N6/ 断) 灰N6/	石・長・灰黒・粗、 細	硬	天井部外面回転と内面回転 ナデ。	古墳時代
38	包含層 III層	須恵器	高杯	-	-	-	-	黄灰2.5Y6/1	石・長・直・粗・細	硬	外面回転ナデ。杯部内面圓 錐回転ナデ。中央部ナデ。	古墳時代
39	包含層 III層	須恵器	平瓶	-	-	-	-	外) 灰白N7/ 断) 灰灰2.5YR5/2	石・長・粗・細、黑色絞	硬	体部外面ナデ、内面回転ナ デ。体部の内井部分に粘土 を充填。内井部内面に円形 の段。注口部は貼付。	古墳時代後期 の段。注口部は貼付。
40	包含層 II層	須恵器	平瓶又 は捷瓶	-	-	-	最大深 18.4	外) 灰NS/ 断) 灰灰5YR5/2	石・長・粗・細、黑色絞	硬	外面上半回転カギ目、下半 ヨコナデ。内面回転ナデ。天 井部分は複合部で割離。	6世紀後半 ～7世紀
41	包含層 IV層 H-7	須恵器	甕	-	-	-	約14.2	外) 灰5Y4/1 内) 灰白N7/ 断) 灰灰7.5YR5/2	石・長・粗・細、黑色絞	硬	外面上半回転カギ目、中位 ナデ。外底折断ヘラケズリ。 内面回転ナデ。外面上に自然 軸。	古墳時代
42	包含層 III層	須恵器	不明	-	-	天井部 径 7.4	-	灰N6/	石・長・粗、黑色絞		天井部外底回転カギ目調 整。内面回転ナデ。	6世紀後半 ～7世紀
43	包含層 III層	須恵器	不明	-	-	-	-	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・直・細	硬	外面上把手と貼付。外面上 ナデ。内面回転ナデ。外面上 に自然軸。	古墳時代
44	包含層 III層	須恵器	縫又是 甕	-	-	-	最大深 約16.0	灰5Y6/1	石・長・直・粗・細	硬	外面上に沈窓。中位に斜 め方向の刻み目。内面回 転ナデ。	6世紀後半 ～7世紀前半
45	包含層 III層	須恵器	縫又是 甕	-	-	-	-	灰白2.5Y7/1	石・長・直・ナ・細	硬	外面上位に沈窓。中位に斜 め方向の刻み目。内面回 転ナデ。	古墳時代
46	包含層 II層	須恵器	縫又是 甕	-	-	-	約9.0	灰白5Y7/1	石・長・粗・細	硬	外面上位に沈窓。外 面摩耗し調整不明。内面回 転ナデ。	古墳時代
47	包含層 II層 最下層 F-2	須恵器	甕	22.0	-	-	-	外) 灰5Y6/1 断) 灰灰10YR6/1	石・長・粗・細、黑色絞	硬	内外面回転ナデ。口縁部内 面に自然軸。	古墳時代
48	包含層 II層	須恵器	甕	8.2	-	-	-	灰5Y6/1	石・長・ナ・粗・細	硬	内外面回転ナデ。	古墳時代
49	包含層 II層	須恵器	甕	15.9	-	-	受部径 13.1	灰N6/ 断) 灰灰5Y5/1	石・長・直・ナ・粗・細	硬	外底回転ナデ。外底回転ヘ ラケズリ。内面回転ナデ。	杯持の身 6世紀末 ～7世紀
50	包含層 II層	須恵器	甕	14.6	-	-	受部径 12.8	外) 灰白5Y7/1 断) 灰灰5Y5/1	石・長・粗・細、黑色絞	硬	外底周縁回転ナデ。外底回 転ヘラケズリ。内面回転ナ デ。	杯持の身 6世紀末 ～7世紀
51	包含層 II層 最下層 ～基層上位 GH- 3・4	須恵器	甕	-	-	-	-	外) 灰N6/ 断) 灰灰7.5YR5/1	石・長・細	硬	内外面回転回転ナデ。	杯持の身 6世紀末 ～7世紀

Tab.9 遺物観察表(3)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徵	備考(生産地・ 年代・使用目的)	
				口径	器高	底径	最大径						
52	包含層 Ⅲ層 最下層	須恵器	杯	17.1	—	—	受部径 14.6	灰7.5Y6/1	石・長・雲・繩	硬	外面周縁回転ナデ。内面回転ナデ。	杯日の身 6世紀末 ～7世紀	
53	包含層 Ⅲ層	須恵器	杯	15.6	—	—	受部径 13.7	灰白5Y7/1	石・長・雲・繩	硬	内外面回転ナデ。	杯日の身 6世紀末 ～7世紀	
54	包含層 Ⅱ層 最下層～ Ⅲ層 上層	須恵器	杯	16.4	—	—	受部径 14.1	灰白25Y7/1	石・長・雲・繩	硬	内外面回転ナデ。	杯日の身 6世紀末 ～7世紀	
55	SD1	土師器	甕	14.0	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR7/3 内)灰黄25Y4/1	石・長・雲・灰・赤 風・粗・細多量	口縁部外面回転ナデ。内面 ナデ。	古墳時代		
56	SD13 上層	土師器	甕	—	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 内)にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・ 粗・赤色粒	内外面ナデ。	古墳時代		
57	SD6	弦生土 器・ 土師器	甕	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・灰・ 粗・繩	外面タキ目。内面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初頭		
58	F796	弦生土 器・ 土師器	甕	—	—	5.6	—	外)橙5YR6/6 内)灰黄25Y4/1 断)燕5YR6/6	石・長・雲・チ・暗 赤・風・粗・角鉢 砂・灰白色の小嘴	内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初頭 外面に盤		
59	SD8	弦生土 器・ 土師器	甕	—	—	4.5	—	外)にぶい橙7.5YR7/3	石・長・雲・チ・灰・ 灰・赤褐色・粗・小嘴	内外面ナデ。	弥生時代末～ 古墳時代初頭		
60	SK110 下層	須恵器	蓋	笠部径 12.5	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・繩	硬	外面周縁回転ナデ。大井部 ナデ。内面回転ナデ。	古墳時代後期	
61	SD4 上層	須恵器	高杯	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	石・長・雲・粗・繩	硬	脚部内面回転ナデ。	古墳時代	
62	SK16	土師器	高杯	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・灰・小繩・ 粗	内外面ナデ。内面ユビオサ エ。底部に円孔。			
63	SD4	須恵器	不明	—	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・繩	硬	内外面回転ナデ。	古墳時代	
64	SD4 上層	須恵器	題又は 志	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・繩	硬	内外面回転ナデ。外側中位 に題と斜方刃の刻み目。	古墳時代	
65	SD7	須恵器	不明	—	—	8.0	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・繩	硬	脚部の外面回転ナデ。	古墳時代か	
66	SK23 下層	須恵器	甕	26.0	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・赤透・ 粗・繩	硬	外面周縁波状文。内外面回 転ナデ。	古墳時代	
67	SK3	須恵器	杯	14.0	35	7.0	受部径 12.0	外)灰N6/ 内)灰褐7.5YR4/2	石・長・雲・粗・繩	硬	体部外面回転ナデ。外底へ ラ切り。内面クロコ目。	杯日の身 6世紀末 ～7世紀	
68	SK35	須恵器	杯	12.9	—	—	受部径 10.4	灰N6/	石・長・雲・粗・繩	硬	外面周縁回転ナデ。天井部 回転ラクケズリ。内面回 転ナデ。	杯日の身 6世紀末 ～7世紀	
69	SB1 P6	須恵器	杯	—	—	6.0	—	灰N6/	石・長・雲・粗・繩	硬	外表面回転ナデ。外底ヘラ切 り。内面回転ナデ。	古墳時代	
70	SB3 P2上層	須恵器	杯	13.4	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・繩	硬	内外面回転ナデ。外面ロク 口目。		
71	SB3 P2	須恵器	杯又は 皿	14.2	—	—	—	灰7.5Y6/1	石・長・雲・チ・繩	やや 軟	内外面回転ナデ。外面織や かなクロ口目。		
72	SB3 P2上層	土器	土錐	全長 37	全厚 14	全幅 14	孔径 0.4 重量 6.4g	灰白5Y8/1	石・長・雲・灰・粗	外面ナデ。			
73	SK2	土師器	杯	13.0	37	6.0	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・粗・繩	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。	8世紀 ～9世紀前半		
74	SK2	須恵器	蓋	笠部径 13.4	—	—	—	灰白N8/	石・長・雲・粗・繩	硬	笠部の外面回転ナデ。天井 部外面ナデ。	6世紀末 ～7世紀	
75	SK13	土器	製塙 土壺	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)灰N6/	石・長・灰・小繩・ 粗	硬	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。			
76	SK14	須恵器	壺か	—	—	13.0	—	灰白N7/	石・長・繩	硬	体部外面イタナデ。内面回 転ナデ。貼付高台。		
77	SK14	須恵器	高杯	—	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・チ・繩	軟	摩耗・調整不明。		
78	SK16 上層	土師器	杯	—	—	9.0	—	淡黄25Y8/3	石・長・雲・赤風・ 粗・繩	軟	摩耗・調整不明。外底ヘラ 切り。		
79	SK16床	土師器	杯	—	—	9.0	—	にぶい黃澄10YR7/4	石・長・雲・チ・繩	軟	摩耗・調整不明。外底ヘラ 切り。		
80	SK16	須恵器	杯	13.4	—	—	—	灰白7.5Y7/1	石・長・雲・繩	軟	内外面回転ナデ。		
81	SK16 下層	赤色唐 彩土師 器	不明	—	—	—	外)赤褐25YR4/6 断)灰白7.5YR8/2	石・長・雲・粗・繩	赤色色彩。顔料は剥離し易 い。				
82	SK16床	土師器	甕	16.0	—	—	—	橙5Y7/6	石・長・雲・赤風・ 粗・小繩・粗	内外面ナデ。			
83	SK16 下層	土器	製塙 土壺	8.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・灰・ 灰・小繩・粗	内外面ユビオサエ・ナデ。			
84	SK17 下層	須恵器	杯又は 皿	—	—	—	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・繩	軟	摩耗・調整不明。		
85	SK17	須恵器	杯	—	—	8.1	—	灰黄25Y5/1	石・長・雲・繩	軟	摩耗・調整不明。		
86	SK17	土師器	甕	—	—	—	—	にぶい黃澄10YR7/4	石・長・雲・赤・粗	硬	口縁部外面ヨコナデ。内面 ヨコハケ。		

Tab.10 遺物観察表(4)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量				色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	載大径					
87	SK17	土師器	甕	—	—	—	—	明治窯5YR5/6	石・長・赤風・灰・粗	硬	口縁部外面ヨコナデ。内面 ヨコハケ。	
88	SK84	土師器	皿	16.6	—	—	—	にふい櫻75YR7/4	石・長・雲・粗・細	やや 軟	外面ナデ・ミガキ。内面摩 耗し調整不明。口縁部内面 に沈線。	
89	SK84	土師器	杯	—	—	9.6	—	浅黄桜75YR8/4	石・長・雲・赤風・ 粗・細	やや 軟	摩耗し調整不明。	
90	SK114	須恵器	杯	—	—	10.0	—	灰5Y6/1	石・長・雲・チ・ 粗・細	やや 軟	貼付高台。	
91	SK106	土師器	杯	15.0	26	8.6	—	にふい黄桜10YR7/3	石・長・雲・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。	
92	SK65	土師器	蓋	笠部様 200	—	—	—	にふい黄桜10YR7/3	石・長・雲・赤風・ 粗・細	硬	外面ナデ。内面周縁削鉛ナ デ。	
93	SK100	土師器	甕	—	—	—	—	にふい櫻75YR5/4	石・長・雲・金雲・ 灰・赤透・粗砂多量	硬	口縁部内外面回転ナデ。	
94	SK106 18	須恵器	甕	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	外面平行状のタキ。内面 包帯・ユビオサエ・ナデ。	
95	SK106	土器	製陶土器	—	—	—	—	にふい櫻75YR6/4	石・長・雲・粗・細 白・円形容粒・ 多量	硬	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。	
96	SK106	土器	製陶土器	—	—	—	—	鶴灰10YR6/1	石・長・粗・灰・円 形容粒・多量	硬	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ・ナラレ日。	
97	SK106 中層	石製品	佛状 製品	全長 56	全厚 19	全幅 22	重量 301g	灰黄2.5Y6/2	砂岩製			
98	SK115	土師器	杯	13.0	30	7.8	—	にふい櫻75YR7/3	石・長・雲・赤風・ 粗・細		内外面回転ナデ。外底ナデ。	
99	SK116	土師器	甕	15.6	—	—	—	櫻7.5YR6/6	石・長・雲・灰・赤 風・粗		内外面ナデ。	
100	SK126 上層	須恵器	皿	15.2	20	12.1	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・細		内外面回転ナデ。	
101	SK126 上層	須恵器	蓋	笠部様 13.0	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・粗・細	硬	外面周縁削鉛ナデ・天井部 ナデ。内面周縁削鉛ナデ・ 中央ナデ・横みを貼付。	
102	SK124	須恵器	甕	28.0	—	—	—	外灰5Y6/1 灰白15Y7/1	石・長・粗	硬	内外面回転ナデ。	
103	SK124 上層	須恵器	甕	24.0	—	—	—	灰N6/	石・長・粗・細	硬	口縁部内外面回転ナデ。頭 部内面ユビオサエ・回転ナ デ。体部外表面平行状のタキ ギ・ヨコハケ・内面彫挫状 のタキ。	古墳時代 ～古代前期
104	SK122	須恵器	杯	11.8	28	4.3	受部様 10.0	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・細		外表面回転ナデ・外底ケツ リ・内面回転ナデ。内底中央に 直線方向のナデ。	7世紀中葉～後 半
105	SK122	須恵器	杯	10.7	25	4.5	受部様 8.5 断 外灰	5Y6/1 灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外表面回転ナデ・外底ヘラ ケズリ・内面回転ナデ。	6世紀末 ～7世紀
106	SK122	土師器	杯	15.0	30	9.2	—	櫻7.5YR6/6	石・長・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底ナデ。	
107	SK122	須恵器	壺	—	—	11.0	—	灰白2.5Y7/1	石・長・雲・粗・細	硬	体部外表面回転ナデ。底部貼 ケズリ・内面回転ナデ。貼付 高台。	
108	SK122	須恵器	甕	—	—	5.0	—	外灰5Y6/1 断 灰白N7/	石・長・粗	硬	外表面不定方向の平行タキ。 内面円錐状のタキ。	
109	P200	土師器	杯又は 皿	—	—	15.8	—	にふい黄桜10YR7/2	石・長・雲・赤風・ 粗・細		内底ナデ・外底ナデ。貼付 高台。	
110	P292 横面	須恵器	杯	—	—	10.9	—	灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。貼付高台。	
111	P470 上層	土師器	杯	—	—	7.6	—	にふい櫻7.5YR6/4	石・長・灰黒・粗	やや 軟	内外面回転ナデ。贴付高台。	
112	P552	土師器	皿	—	—	14.4	—	にふい櫻7.5YR7/4	石・長・雲・チ・暗 灰・粗・細	软	摩耗し調整不明。外底ナデ。	
113	P673	土師器	皿	16.0	21	10.0	—	にふい櫻7.5YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。内と外 底ナデ・口縁部内面に沈線。	
114	P199	須恵器	蓋	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細		横み外面回転ナデ・内面直 線方向のナデ。	8世紀
115	P742	土師器	杯	13.2	—	—	—	にふい黄桜10YR6/3	石・長・雲・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。贴付高台。	
116	P664 1号	須恵器	杯	—	—	7.8	—	灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外表面ナデ・内面回転ナデ。 内底直線方向のナデ・外底 ナデ。	
117	P733 柱頭	須恵器	蓋	—	—	—	横み様 22	灰N6/	石・長・粗・細・黒 色粒	硬	天井部外面回転ヘラケズリ。 内面ナデ・横みを貼付。	
118	P715	須恵器	甕	19.0	—	—	—	灰N6/	石・長・粗・細・黒 色粒	硬	口縁部内外面回転ナデ。頭 部外表面回転カギ目。体部内 面圓錐状のタキ。	
119	P765 上層	須恵器	蓋	笠部様 14.2	—	—	—	灰白N7/	石・長・粗・細	硬	外表面周縁回転ナデ・内面圓 錐回転ナデ。外面錐やかな ロクロ目。	
120	P742	須恵器	甕又は 甕	—	—	—	—	灰N6/	石・長・粗・細・黒 色粒	硬	内外面回転ナデ。	

Table.11 遺物觀察表(5)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・ 年代・使用例)
				口径	器高	底径	最大径					
121	P664 1層	須恵器	高杯	—	—	—	—	外)灰白25Y7/1 断)灰黄25Y7/2	石・長・雲・暗灰/ 粗	硬	脚部の鉄錆箇所をもつ。 外面回転ナデ・ナデ。内面 ロクロ目・シリ目。	
122	P742 床	木製品 又は 木片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
123	P770	須恵器	甕	—	—	3.0	—	灰N6/	石・長・細	硬	外面平行状のタキ、内面 円周のタキ。	
124	P752	須恵器	平瓶	—	—	—	—	灰白N7/	石・長・粗・織、黑 色粒	硬	天井部中央は貼付による。 天井部回転ナデ、内面回転ナ デ、貼付部分ナデ。	
125	P747 上層	須恵器	蓋	笠部径 12.4	4.2	天井部 径 5.9	—	外)灰褐75YR5/1 断)褐褐75YR5/2	石・長・雲・粗・織	硬	外面周縁回転ナデ。天井部 回転ナデ。内面周縁回転ナ デ。中央に直線方向 のナデ。	杯口の蓋 6世紀末～7世紀 天井部外周に ヘリによる痕印
126	P512 上層	須恵器	杯	11.5	3.2	5.0	受部径 9.6	外)灰N6/ 断)灰褐75YR5/2	石・長・粗・織	硬	体部周縁回転ナデ。外底ハ ラ切り、外底周縁ヘラケス リ。内面回転ナデ。内底中 央に直線方向のナデ。	杯口の身 6世紀末～7世紀 ～7世紀
127	SX2 上層	土器器	杯	13.2	—	—	—	にぶい・褐75YR6/4	石・長・雲・チ/ 粗・織	軟	内外面回転ナデ。	
128	SX2	土器器	杯	13.5	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・織	軟	内外面回転ナデ。	
129	SX2 上層	土器器	杯	—	—	8.8	—	灰白25Y8/2	石・長・雲・赤風/ 粗・織	硬	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。内底難かむなロクロ 目。	
130	SX2	土器器	杯	—	—	7.3	—	にぶい・褐75YR6/4	石・長・雲・織	软	磨耗し調整不明。外底ナデ。	
131	SX2 上層	土器器	杯	—	—	8.0	—	橙5YR6/6	石・長・雲・織	软	磨耗し調整不明。外底ヘラ 切り。	
132	SX2 上層	土器器	杯	—	—	10.0	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ/ 粗・織	软	磨耗し調整不明。貼付高台。	
133	SX2	土器器	皿	15.8	15	11.3	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ・赤 風・粗・織	软	磨耗し調整不明。	
134	SX2	土器器	皿	—	—	12.0	—	橙75YR7/6	石・長・雲・粗・織	软	磨耗し調整不明。外底ヘラ 切り。	
135	SX2	須恵器	皿	—	—	—	—	黄灰25Y5/1	石・長・雲・粗・織	やや 软	内外面回転ナデ。	
136	SX2	須恵器	杯	13.6	31	8.0	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・赤風/ 粗	软	磨耗し調整不明。	
137	SX2 上層	須恵器	蓋	笠部径 13.5	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・織	硬	外面周縁回転ナデ。天井部 回転ヘラケスリ後ナデ。内 面周縁回転ナデ。中央部直 線方向のナデ。	
138	SX2 上層	須恵器	高杯	—	—	13.4	—	灰5Y7/1	石・長・雲・織	やや 软	脚部外面回転ナデ。	
139	SX2 上層	須恵器	甕	8.0	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・赤/ 粗・織	硬	内外面回転ナデ。	
140	SX2	須恵器	甕	7.1	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・織	硬	内外面回転ナデ。	
141	SX2 床	須恵器	甕	13.3	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・織	硬	内外面回転ナデ。口縁部に 自然崩。	
142	SX2 床	土器器	製塙土器	—	—	—	9.5	にぶい・褐75YR6/4 断)灰5Y4/1	石・長・雲・灰・小 裡・粗多量	硬	外底スピオサエ・ナデ。内面 ナデ・チグレ目。	
143	SX2 下層	土器器	製塙土器	—	—	—	—	黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰・小 裡・粗多量	硬	外底スピオサエ・ナデ。内面 ナデ。	
144	SX2 下層	土器器	甕	13.0	—	—	—	橙75YR6/6	石・長・雲・灰・赤 風・粗・織多量	硬	外面タキ。ナデ。内面ナ デ。	
145	SX4 上層	土器器	杯	14.8	36	10.0	—	橙5YR6/6	石・長・雲・粗・織	软	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。	
146	SX4 上層	土器器	杯	15.5	—	—	—	にぶい・褐75YR6/3	石・長・雲・灰/ 粗・織	软	内外面回転ナデ。	
147	SX4	土器器	杯	—	—	8.7	—	にぶい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・赤 風・粗・織	软	摩耗し調整不明。貼付高台。	
148	SX4	土器器	杯	18.0	—	—	—	にぶい・褐75YR6/4	石・長・雲・粗・織	软	内外面回転ナデ。	
149	SX4	土器器	杯	—	—	8.6	—	にぶい・褐75YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・織多量	软	摩耗し調整不明。外底ヘラ 切り。	
150	SX4 上層	土器器	皿	13.7	—	—	—	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・赤風/ 粗・織	软	内外面回転ナデ。外底ナデ。	
151	SX4 上層	土器器	皿	—	—	15.4	—	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・赤風/ 粗・織	软	摩耗し調整不明。	
152	SX4 上層	土器器	皿	—	—	12.8	—	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・粗・織	软	内外面回転ナデ。貼付高台。	
153	SX4 上層	須恵器	杯	14.0	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・織	硬	内外面回転ナデ。	
154	SX4	須恵器	杯	11.2	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・チ/ 粗・織	硬	内外面回転ナデ。	
155	SX4 下層	須恵器	杯	—	—	8.4	—	灰白5Y8/1	石・長・雲・灰・織	软	摩耗し調整不明。内底ロク 口目。	
156	SX4 下層	須恵器	不明	—	—	11.6	—	外)灰NS/ 断)灰白5Y7/1	石・長・雲・粗・織	やや 软	摩耗し調整不明。貼付高台。	

Tab.12 遺物観察表(6)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量			色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	載大径				
157	SX4 下層	須恵器	不明	—	—	6.8	—	灰白75Y7/1	石・長・粗・細	硬	内外面回転ナデ。貼付高台。
158	SX4 下層	須恵器	壺	5.7	—	—	—	灰75Y6/1	石・長・雲・チ・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。
159	SX4 上層	須恵器	壺	244	—	—	—	灰75Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。
160	SX4 上層	須恵器	壺	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・赤・粗・細	硬	内外面回転ナデ。
161	SX4 上層	土師器	壺	—	—	—	—	に赤い褐75YR5/4	石・長・雲・チ・粗・多量	硬	口縁部外表面ヨコナデ、内面 ヨコハケ。
162	SX4	土師器	壺	224	—	—	—	に赤い褐75YR5/4	石・長・雲・赤・粗・多量	硬	口縁部と面部外表面ヨコナデ、 内面ヨコハケ。体部外表面タ テハケ、内面ナデ。
163	SX4	土師器	壺	158	—	—	—	に赤い褐75YR5/3	石・長・雲・灰・粗・多量	硬	口縁部と面部外表面ヨコナデ、 内面ヨコハケ。体部外表面タ テハケ、内面ナデ。
164	SX4	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外) に赤い褐75YR5/3 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・赤・楕・粗・多量	やや 軟	外面ナデ。内面ナデレ日。
165	SX4	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外) に赤い褐75YR5/3 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・粗・多量、 灰・白・小壁	硬	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデレ日。
166	SX4 上層	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外) 灰黄褐10YR5/2 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・粗・多量	硬	外面ナデ。
167	包含層 Ⅲ層	土師器	皿	16.0	22	11.0	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	軟	口縁部内面に段。摩耗し調 整不明。
168	包含層 Ⅱ層	土師器	皿	17.0	20	12.2	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底ナデ。 内底摩耗し調整不明。
169	包含層 Ⅱ層	土師器	皿又は 盤	—	—	19.8	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・赤・楕・ 粗・細	—	内底摩耗し調整不明。外底 ナデ。貼付高台。
170	包含層 Ⅱ層 最下層	須恵器	杯	15.0	5.7	9.0	—	黄灰25Y6/1	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底ナデ。 貼付高台。高台端部は摩 耗。
171	包含層 Ⅱ層	須恵器	杯	15.8	3.4	10.0	—	灰5Y6/1	石・長・雲・黑。黑色紋	硬	内外面回転ナデ。外底ナデ。 内底ナデ。
172	包含層 Ⅱ層	須恵器	杯	—	—	7.9	—	黄灰25Y6/1	石・長・粗	软	摩耗し調整不明。
173	包含層 Ⅱ層	須恵器	皿	13.9	20	9.0	—	外) 灰N6/ 断) 灰白N7/	石・長・粗・細、黑 色紋	硬	内外面回転ナデ。
174	包含層 Ⅱ層	須恵器	杯	—	—	7.6	—	灰N5/	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。外底圓錐 回転ナデ、中央ナデ。貼付 高台。
175	包含層 Ⅱ層 下位	須恵器	蓋	笠部様 15.2	—	—	—	灰白N7/	石・長・粗・細	硬	外底圓錐回転ナデ。内面圓 錐回転ナデ、中央部ナデ。
176	包含層 Ⅱ層	須恵器	蓋	笠部様 13.2	—	—	—	灰N5/	石・長・雲・粗・細	硬	外底圓錐回転ナデ、天井部 ヘラケズ。内面圓錐回転 ナデ、中央部ナデ。
177	包含層 Ⅱ層	須恵器	蓋	笠部様 11.6	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・粗・細	硬	笠部内外面回転ナデ。天井 部内外面ナデ。
178	包含層 Ⅱ層	縫輪 陶器	不明	—	—	—	—	外) オリーブ灰10Y6/2 断) 灰白10Y7/1	—	硬	口縁部内面無釉。薄緑色の 約軸を施釉。
179	包含層 Ⅱ層	灰釉 陶器	碗	19.2	—	—	—	外) 灰黄25Y6/2 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細	—	内外面回転ナデ。内外面に 灰オリーブ色の釉がかかる。
180	包含層 Ⅱ層	灰釉 陶器	碗	—	—	7.0	—	灰白25Y8/1	石・長・雲・粗・細	—	内底ナデ。外底ナデ。貼付 高台。高台内外面回転ナデ。
181	包含層 Ⅱ層	須恵器	壺	38.6	—	—	—	外) 灰黄25Y6/1 断) 褐灰75YR6/1	石・長・雲・赤・楕・ 粗・細	—	口縁部内外面回転ナデ。
182	包含層 Ⅱ層	須恵器	不明	—	—	4.8	—	灰白N7/	石・長・粗・黒色紋	硬	内面回転ナデ。内底クロ 目。外底へきり。
183	包含層 Ⅱ層 D - 7	土師器	壺	25.0	—	—	—	に赤い黄褐10YR5/3	石・長・雲・チ・赤 風・粗・多量	硬	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外表面タテハケ。内面ユビオ サエ・ナデ。
184	包含層 Ⅱ層	土師器	壺	29.6	—	—	—	赤褐5YR4/6	石・長・雲・褐灰・ 小壁・粗・多量	—	口縁部内外面ヨコナデ。頭 部内面ヨコハケ。体部外表面 タテハケ、内面ナデ。
185	包含層 Ⅱ層	土師器	壺	23.8	—	—	—	外) に赤い黄褐10YR6/3 断) 褐7.5YR4/3	石・長・赤褐・粗・多量	硬	口縁部内外面ヨコナデ。
186	包含層 Ⅱ層	土器	製塙 土器	8.0	—	—	—	灰N5/	石・長・粗・細、灰 白・小壁	—	内外面ナデ。
187	包含層 Ⅱ層	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外) に赤い褐7.5YR5/3 断) 灰N4/	石・長・雲・灰・粗・ 多量	硬	内外面ナデ。
188	包含層 Ⅱ層 D - 7	土器	製塙 土器	—	—	—	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・底・円形 粒・角柱粗多量	やや 軟	外面ユビオサエ・ナデ・チヂ レ日。
189	包含層 Ⅱ層	土器	製塙 土器	—	—	—	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・底・円形 粒・角柱粗多量	やや 軟	外面ユビオサエ・ナデ・チヂ レ日。

Tab.13 遺物觀察表(7)

國版 番号	出土 地點	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徵	備考(生産地・ 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
190	包含層 Ⅲ層 下層 G-3-4	土器	製塙 土器	—	—	—	—	黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰白／ 小繩・粗多量	硬	外面ナデ。内面垂目。	
191	包含層 Ⅲ層	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外) にぶい褐7.5YR5/4 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰白／ 小繩・粗多量		外面ビビオナエ・ナデ。内 面ナデ。	
192	包含層 Ⅲ層 E-3	須恵器	皿	154	23	128	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・繩		口縁部内面に段。外面部回 転ナデ。外底ナデ。	
193	包含層 Ⅲ層	須恵器	皿	176	—	—	—	黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗・繩	硬	外面部コナデ。内面回転ナ デ。	
194	包含層 Ⅲ層	須恵器	皿	156	20	116	—	灰25Y6/1	石・長・雲・粗・繩	硬	内外面部回転ナデ。外底ナデ。 8世紀後半 ~9世紀	
195	包含層 Ⅲ層	須恵器	碗	134	—	—	—	外) 灰N5/ 断) 灰N6/	石・長・雲・粗・繩	硬	内外面部回転ナデ。	輪C 7世紀
196	包含層 Ⅲ層	須恵器	碗	127	61	66	—	外) 灰N5/ 断) 灰N6/	石・長・粗・黑色粒	硬	外面部回転ナデ。底部付近 転ヘラケズリ。内面回転ナ デ。内底直線方向のナデ。	輪C 7世紀
197	包含層 Ⅲ層	須恵器	不明	—	—	60	—	灰白N7/	石・長・粗・黑色粒	硬	外底回転ヘラケズリ。内底 回転ナデ。	
198	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	240	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・小繩・ 粗・黑色粒	硬	口縁部外面上に凹継。口縁部 内面回転ナデ。内面に自 然地。	
199	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	240	—	—	—	外) 黄灰25Y5/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・赤褐色・ 繩	硬	内外面部回転ナデ。	
200	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	118	—	—	—	内) 灰N7/ 断) 灰N7/	石・長・雲・粗・繩	硬	内外面部回転ナデ。外面上に灰 オリーブ色の自然地。	7~8世紀
201	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	—	—	112	—	灰N6/	石・長・粗・黑色粒	硬	内外面部回転ナデ。外底ナデ。 底付高台。	8世紀
202	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 内) 灰5Y6/1 断) 灰白N8/	石・長・雲・粗・繩	硬	外面平行状のタキ。内面 凹継のタキ。	
203	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰25Y6/2 断) にぶい黄橙10YR7/3	石・長・灰・赤褐色・ 繩	硬	外表面土状のタキ。内面 ビビオナエ・ナデ。	
204	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰N5/ 断) 黄灰7.5YR5/1	石・長・繩	硬	外面部コナデ。内面内面團状のタ キ目。	
205	包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰N7/ 内) 灰N6/ 断) 灰白N7/	石・長・粗・黑色粒	硬	外表面團状のタキ。内面 円潤のタキ。	
206	包含層 Ⅲ層 E-1	土器	甕	190	—	—	—	外) にぶい褐7.5YR6/4 断) 明褐灰7.5YR7/2	石・長・灰・黒・赤風・ 粗・繩	硬	口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ナデ。内面に粘土 帶接合痕。	
207	包含層 Ⅲ層	土器	甕	—	—	—	—	外) にぶい褐7.5YR5/4 断) 黄灰N3/	石・長・雲・チ・暗 灰・粗多量		外面ヨコナデ。内面ナデ。	7~8世紀
208	包含層 Ⅲ層 上層 H-6	土器	土師	残存長 [36]	全幅 16	全幅 16	孔径 0.5 重量 (6.7g)	にぶい黄橙10YR7/2	石・長・雲・赤・黒・ 赤風・粗・繩	やや 軟	外面ナデ。	口縁部内外面ヨコナデ。
209	包含層 Ⅲ層	土器	碗	118	—	—	—	にぶい褐7.5YR6/4	石・長・雲・粗・繩		内外面ナデ・1ガキ。内面 に放射状の暗文。	鍛入品 輪C類 7~8世紀
210	包含層 Ⅲ層	土器	甕	—	—	—	—	外) 橙5YR6/6 内) 黄褐橙10YR5/2 断) 灰5Y4/1	石・長・雲・チ・暗 灰・粗多量		口縁部内外面ヨコナデ。	
211	包含層 Ⅲ層 G-2	土器	甕	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	石・長・雲・チ・灰・ 灰・粗・繩多量		口縁部内外面ヨコナデ。	
212	包含層 Ⅲ層	土器	甕	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	石・長・雲・チ・角 粒粗糞・赤褐色・暗灰 ・円錐形粗糞・小確 粒		口縁部内外面ヨコナデ。	
213	包含層 V-1層	土器	甕	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・灰・小繩・ 繩		内外面ナデ。	古墳時代
214	包含層 IV層	土器	甕	214	—	—	—	外) にぶい褐7.5YR6/4 内) 黄褐橙10YR6/2 断) 灰5Y4/1	石・長・雲・チ・暗 灰・粗多量		内外面ナデ。	
215	包含層 IV層	土器	甕	184	—	—	—	外) 橙5YR6/6 断) 黄灰5YR5/2	石・長・雲・チ・暗 灰・粗多量	硬	口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ナデ。	
216	包含層 V-4層 C-4	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 橙5Y6/1 断) 黄灰5YR5/2	石・長・雲・チ・粗 ・繩		外表面タキ・ヨコバケ。内 面内面團状のタキ目。	
217	SD8	土器	杯	151	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・粗 ・繩	硬	摩耗し調整不明。	
218	SB15 -P6	土器	皿	138	22	100	—	にぶい褐7.5YR7/4	石・長・雲・暗灰・ 粗・繩	やや 硬	摩耗し調整不明。	
219	SD6	土器	碗	—	—	56	—	浅黃橙10YR8/3	石・長・雲・チ・赤 風・粗・繩	硬	摩耗し調整不明。貼付高 台。	9世紀か

Tab.14 遺物観察表(8)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	載大径					
220	SK24	赤色漆 彩土鉢 器	杯	—	—	約8.0	—	外)にぶい檜25YR6/4 断)浅黄檜10YR8/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	貼付高台。赤色塗料。 は剥離し易い。	
221	SD9 下層	赤色漆 彩土鉢 器	杯又は 皿	—	—	—	—	外)明赤檜25YR5/6 断)灰白10YR8/2	石・長・雲・粗	やや 秋	赤色塗彩。 内外面回転ナデ。	
222	P431	赤色漆 彩土鉢 器	杯又は 皿	—	—	—	—	外)にぶい檜5YR6/4 灰白10YR8/2 内)灰白10YR8/2 断)灰白10YR8/2	石・長・雲・チ/ 赤 風/粗・細	表面の赤色顔料は剥離し復 かに残る。		
223	SD3 床	土器器	皿	17.2	1.0	14.0	—	檜75YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	磨耗し調整不明。外底ヘラ 切り。	
224	SD6 上層	土器器	皿	16.5	1.6	13.5	—	にぶい檜10YR7/3	石・長・雲・赤風/ 粗・細	内外面回転ナデ。内底と外 底ナデ。		
225	SK56 2層	土器器	皿	17.4	1.5	13.6	—	にぶい檜75YR6/3	石・長・雲・チ・赤 風/粗・細	口縁部内外面回転ナデ。内 底ナデ。外底ヘラ切り。		
226	P54 床	土器器	皿	16.4	1.6	14.2	—	檜5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	磨耗し調整不明。	
227	SK56 2層	土器器	皿	15.4	1.4	12.9	—	にぶい檜75YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風/粗・細	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。		
228	SD9	土器器	蓋	笠部錫 15.0	—	—	—	浅黄檜10YR8/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面回転ナデ。	
229	SK22	土器器	蓋	笠部錫 13.6	—	—	—	にぶい檜10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	表面磨耗し調整不明。内面 回転回転ナデ。		
230	SD8	須恵器	杯	17.6	5.5	11.0	—	外)灰白25Y8/2 断)灰白25Y8/1	石・長・雲・粗・細	やや 秋	内外面回転ナデ。貼付高台。	
231	P25	須恵器	杯	14.6	3.7	10.6	—	灰白N7/	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	内外面回転ナデ。貼付高台。	
232	SD6 下層	須恵器	杯	約100	—	—	—	灰白75Y7/	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	内外面回転ナデ。貼付高台。9世紀	
233	SD1	須恵器	杯	15.3	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。	
234	SK37 下層	須恵器	杯	14.0	2.9	—	—	灰N6/	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。	
235	SD5	須恵器	杯	—	—	8.2	—	灰15Y7/1	石・長・雲・灰・粗	やや 秋	内外面回転ナデ。外底ナデ。	
236	SK63	須恵器	杯	12.7	—	—	—	灰5Y5/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	磨耗し調整不明。	
237	SD6	須恵器	杯	14.0	—	—	—	灰白15Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	磨耗し調整不明。	
238	SK118	須恵器	杯	—	—	8.1	—	灰N5/	石・長・雲・粗	硬	内外面回転ナデ。外底ヘラ 切り。内底クロロ目。	
239	SD6 下層	須恵器	皿	16.5	2.0	10.1	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	やや 秋	内外面回転ナデ。内底ナデ。9世紀	
240	SK23	須恵器	皿	13.6	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・細	やや 秋	内外面回転ナデ。内底磨耗 し調整不明。	
241	SD9	須恵器	皿	14.0	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。	
242	P460	須恵器	皿	16.8	2.5	13.6	—	灰白N7/	石・長・雲・細	硬	内外面回転ナデ。内底切 欠ナデ。中央ナデ。外底 ナデ。	
243	SD6 下層	須恵器	蓋	笠部錫 15.5	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲・細	硬	内外面周縁回転ナデ。9世紀	
244	SK28	須恵器	蓋	笠部錫 13.0	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	外周縁回転ナデ。笠部錫 内面回転ナデ。	
245	SD3	須恵器	蓋	笠部錫 12.9	—	—	—	灰白N7/	石・長・細	硬	外周縁回転ナデ。笠部錫 ナデ。内面回転ナデ。	
246	SD4	須恵器	蓋	笠部錫 14.0	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細	硬	外周縁回転ナデ。笠部錫 ケズリ。内面回転ナデ。	
247	SX3	須恵器	蓋	笠部錫 12.4	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	外周縁回転ナデ。笠部錫 付近回転ヘケズリ後ナデ。 内面回転ナデ。	
248	SD4 上層	須恵器	蓋	笠部錫 15.0	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・細	やや 秋	外周縁回転ナデ。内面回 転ナデ。	
249	P661	須恵器	高杯	—	—	15.0	—	9.5)灰白25M7/1 断)にぶい檜10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	舞部内外面回転ナデ。	
250	SD7 灰	須恵器	高杯	—	—	—	—	灰白5Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	磨耗し調整不明。	
251	SX1	須恵器	高杯	—	—	8.0	—	灰白N7/	石・長・雲・チ/ 粗・細	舞部	舞部内外面回転ナデ。7世紀 ~8世紀前半	
252	SK60	須恵器	不明	—	—	5.8	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	外面回転ナデ。外底回転ナ デ。内底ナデ。	
253	SK22 上層、 下層	須恵器	蓋	—	—	10.0	17.2	灰白5Y7/1	石・長・雲・粗・細	硬	貼付高台。底部外縁方向 のイタナ。内面ユビオサ 工。回転ナデ。	
254	SD4	須恵器	蓋	—	—	9.6	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	外面回転ナデ。内面對転ナ デ後不定方向ナデ。貼付 高台。	
255	P425	須恵器	瓶	10.5	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。頭部内面 にシボリ目。	

Tab.15 遺物觀察表(9)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・ 年代・使用目的)
				口径	器高	底径	最大径					
256	SX3 床	須恵器	壺又は瓶	—	—	10.4	—	灰白5Y7/1	石・長・雲・チ・粗	硬	体部前面下位回転ハケアリ。外底ナデ。内面ロクロ目。貼付高台。	
257	SD4	須恵器	鉢	—	—	6.1	—	灰5Y6/1	石・長・雲・チ・粗・細	軟	底部外面ヨコナデ。外底ヘタ切り。	7~8世紀
258	SX3	須恵器	壺又は瓶	—	—	—	17.4	灰白10Y7/1	石・長・藍・粗・細	硬	外面部面ヨコナデ。内面回転ナデ。	
259	SX3	須恵器	壺又は瓶	—	—	13.0	—	外)灰5Y6/ 断)灰11N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外面部面回転ナデ。外底ユビサエ・ナデ。内底ユビオサエ。貼付高台。	
260	SD8	土師器	甕	約258	—	—	—	に赤い褐4.75YR5/4	石・長・雲・灰・粗多量	硬	体部前面タテハケ。口縁部内外面回転ナデ。体部内面ヨハケ。	
261	SD7	土師器	甕	239	—	—	—	に赤い黄褐色10YR5/3	石・長・雲・赤・赤透・粗多量	硬	口縁部内外面回転ナデ。体部内面ヨハケ。	
262	P322	土師器	甕	165	—	—	—	外)に赤い黄褐色10YR5/3 断)に赤い黄褐色10YR6/3	石・長・雲・チ・赤透・粗・細多量	硬	口縁部外底回転ナデ。内面ヨコハケ。体部外底タテハケ。内面横方向のイタナデ。	
263	P51	土器	製塙土器	約92	—	—	—	外)に赤い橙7.5YR6/4 断)灰5Y5/1	石・長・雲・暗灰 周・灰白・小穂・粗多量	硬	内外面ナデ。	
264	SK22	土器	製塙土器	—	—	—	—	外)に赤い褐7.5YR6/3 断)灰5N4/	石・長・雲・チ・灰 透・粗多量	硬	外面部面ユビオサエ・ナデ。内面チラレ目。	
265	SD4	土器	製塙土器	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・粗・細	硬	外面部面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。	
266	SD4	土器	製塙土器	—	—	—	—	外)に赤い黄褐色10YR6/3 断)灰白10YR7/1	石・長・灰・粗多量	硬	外面部面ユビオサエ・ナデ。内面チラレ目。	
267	SD6 検出面	土器	製塙土器	—	—	—	—	外)灰5Y6/1 断)灰N5/	小穂・石・長・灰・粗多量	硬	外面部面ユビオサエ・ナデ。内面布目。	
268	SD6 下層	須恵器	蓋	笠部径 13.7	—	かえり 径 11.6	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	外面部面回転ナデ。	7世紀後半~末
269	SD5	須恵器	蓋	笠部径 8.7	—	—	—	外)灰10Y6/1 断)灰白10Y7/1	石・長・雲・粗	硬	外面部面回転ナデ。天井部回転ハケアリ。内面回転ナデ。	
270	SD4 P2 P316床	青磁	碗	—	—	5.0	—	外)明るい赤灰5GY7/1 断)灰白1N8/	—	硬	内底にヘラ形による文様。	中国龍泉窯系
271	SI5 P3	瓦器	輪	—	—	—	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白1N8/	石・長・灰・赤・粗・細	硬	外面部面ヨコナデ。体部外底ユビオサエ・ナデ。内面吸着良好。	和泉型
272	SB5 P3柱頭	土師質 土器	杯	—	—	6.6	—	に赤い褐7.5YR7/4	石・長・粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
273	SB5 P3	青磁	碗	—	—	—	—	外)灰オリーブ5Y5/3 断)灰白15Y7/1	—	硬	外面部面ヨコナデ。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類鏡観I ~56類・小野分類鏡観II類 13世紀後半~14世紀前半
274	SI5 P6	瓦器	輪	約16.4	—	—	—	外)暗灰N3/ 内)暗灰N3/ 断)灰白5Y8/1	石・長・粗・細	硬	口縁部外面ヨコナデ。体部外底ユビオサエ・ナデ。内面ミガキ・暗文。吸着良好。	和泉型
275	SI8 P5	土師質 土器	杯	—	—	8.0	—	浅黄褐色7.5YR8/6	石・長・雲・赤風・粗・細	硬	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
276	SB6 P3柱頭	土師質 土器	杯	—	—	6.6	—	に赤い橙5YR6/4	石・長・雲・チ・粗・細	软	内底回転ナデ。外底回転系切り。外面部面吸着良好。	
277	SI10 P5又2 SI14 P6 柱頭	土師質 土器	小皿	6.9	11	4.9	—	外)に赤い橙5YR6/4 断)暗灰N3/	石・長・粗	硬	内外面回転ナデ。外底回転系切り。	
278	SI10 P5又2 SI14 P6 柱頭	土師質 土器	小皿	—	—	5.3	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・粗	やや 软	内外面回転ナデ。外底回転系切り。内底ロクロ目。	
279	SI11 P8	瓦質土 器	不明	—	—	—	—	外)灰25Y5/1 内)灰15Y7/1 断)灰白5Y7/1	石・長・雲・赤風・粗・細	硬	内外面ナデ。	
280	SI12 P2 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.8	—	に赤い橙5YR7/4	石・長・雲・粗・細	やや 软	内外面回転ナデ。外底回転系切り。内底ロクロ目。	
281	SI12 P3	土師質 土器	杯	—	—	6.8	—	に赤い橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・粗・細	硬	内外面回転ナデ。外底回転系切り。内底多段の強いロクロ目。	
282	SI12 P3	土師質 土器	杯	—	—	7.8	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・灰・粗・細	やや 软	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
283	SI12 P3	土師質 土器	杯	—	—	6.2	—	に赤い橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	软	摩耗し調整不明。	

Tab.16 遺物観察表(10)

団版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有粘土・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	載大径					
284	SB12 - P3	土師質土器	杯	—	—	9.0	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。内底に強いロクロ目。	
285	SB12 - P3 下層	土師質土器	杯	—	—	7.0	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底回転系切り。外端に強いロクロ目。	
286	SB12 - P3	土師質土器	杯	—	—	4.0	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・赤風／粗・細		内外面回転ナデ。外底回転系切り。	
287	SB12 - P3 下層	土師質土器	小皿	7.8	1.1	57	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
288	SB12 - P3	土師質土器	小皿	8.0	1.4	48	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。	
289	SB12 - P3 F層	土師質土器	小皿	8.0	1.5	48	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	やや秋	内外面回転ナデ。外底回転系切り。内底ロクロ目。	
290	SB12 - P3 F層	土師質土器	小皿	8.0	1.5	56	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
291	SB12 - P3	土師質土器	小皿	7.4	1.5	53	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・灰／粗・細	やや秋	内外面回転ナデ。外底回転系切り。	
292	SB12 - P3 下層	土師質土器	小皿	7.0	1.6	46	—	橙75YR6/6	石・長・雲・チ／粗・細	やや秋	内外面回転ナデ。外底回転系切り。内底ロクロ目。	
293	SB12 - P3 上層	土師質土器	小皿	7.2	1.0	62	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	やや秋	内外面回転ナデ。	
294	SB12 - P3	瓦器	陶	17.6	—	—	—	外：灰白5Y7/1・灰5Y4/1 内：灰5Y5/1 断：灰白15Y7/1	石・長・雲・チ／粗・細	やや秋	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビリサエ・ナデ。内面ナデ。内外面の灰素は剥離。	和泉型
295	SB12 - P3	瓦器	陶	18.0	—	—	—	外：黄灰25Y5/1・灰白25Y7/1 内：黄灰25Y5/1・灰白25Y7/1 断：白25Y7/1	石・長・雲・チ／粗・細	やや秋	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビリサエ・ナデ。内面ナデ。灰素は剥離。	和泉型
296	SB12 - P3 下層	瓦器	陶	—	—	—	—	外：灰青荷10YR5/2 内：にぶい青橙10YR6/3 断：にぶい青橙10YR6/3	石・長・雲・灰／粗・細		口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビリサエ・ナデ。内面ナデ。外側の灰素はほどど剥離。内面灰素吸着無し。	和泉型
297	SB12 - P3	瓦器	陶	—	—	4.4	—	外：黄灰25Y6/1 内：灰黄25Y7/2 断：灰黄25Y7/2	石・長・雲・チ／粗・細		外側ユビリサエ・ナデ。内面ナデ・ミガキ。外側灰素は殆ど剥離。内面灰素吸着無し。	和泉型
298	SB12 - P3	瓦器	陶	—	—	4.0	—	内：灰白25Y7/1 断：灰白25Y5/2 断：灰白25Y7/1	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	やや秋	外側ユビリサエ・ナデ。内面ナデ。灰素は剥離。	和泉型
299	SB12 - P3	瓦器	陶	9.2	—	—	—	外：灰灰N3/ 内：灰灰N3/ 断：灰白5Y8/1	石・長・雲・灰／粗・細		口縁部外面ヨコナデ・ユビリサエ。外底ユビリサエ。内面ナデ。灰素吸着良好。	和泉型
300	SB12 - P3	埴輪器	陶	—	—	—	—	外：灰白25Y7/1 内：黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬	頭部内外面回転ナデ。体部内外面ナデ。	
301	SB12 - P3	白磁	陶	16.0	—	—	—	外：灰白5Y7/1 断：灰白5Y8/1	—	硬	内外面回転ナデ。	中国 晋南分類陶V類 12世紀
302	SB12 - P3	青磁	陶	15.8	—	—	—	外：灰オリーブ5Y6/2 断：灰白5Y7/1	—	硬	外側鶴目、内面片切期による文様と團扇。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で買入が入る。	中国同安窯系 12世紀後半～ 13世紀前半
303	SB12 - P3	青磁	皿	—	—	50	—	外：灰オリーブ5Y6/2 断：灰白5Y7/1	—	硬	内面ヘラと横溝による文様。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で買入が入る。	中国同安窯系 12世紀後半～ 13世紀前半
304	SB12 - P4 3層	土師質土器	杯	13.8	—	—	—	外：にぶい青橙10YR6/3 断：灰白10YR7/1	石・長・雲・チ／粗・細		内外面回転ナデ。外底多段のロクロ目。	
305	SB12 - P4 3層	土師質土器	梅又は杯	15.0	—	—	—	にぶい・黄橙10YR6/4	石・長・雲・灰黒／粗・細		摩耗し調整不明。外底強いロクロ目。	
306	SB12 - P4 2層	土師質土器	杯	14.6	—	—	—	にぶい・橙75YR7/4	石・長・雲／粗・細	秋	摩耗し調整不明。	
307	SB12 - P4 3層	土師質土器	杯	13.8	—	—	—	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・赤風／粗・細	やや秋	内外面回転ナデ。外底多段のロクロ目。	
308	SB12 - P4 3層	土師質土器	杯	—	—	7.0	—	にぶい・橙5YR7/4	石・長・雲・灰黒／粗・細	秋	内外面回転ナデ。外底回転系切り。外端と内底強いロクロ目。	
309	SB12 - P4 1層	土師質土器	杯	—	—	7.6	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ／粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
310	SB12 - P4 3層	土師質土器	杯	—	—	5.4	—	にぶい・橙75YR7/4	石・長・雲・粗・細		内外面回転ナデ。外底回転系切り。外端と内底多段のロクロ目。	

Tab.17 遺物観察表(11)

国版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
SB12-311	P4 3層	土師質 土器	小皿	86	16	48	—	に赤い橙75YR6/4	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
SB12-312	P4 3層	土師質 土器	小皿	78	12	54	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
SB12-313	P4 2層	土師質 土器	小皿	80	12	50	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・灰黒／ 粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-314	P4 3層	土師質 土器	小皿	82	15	52	—	に赤い橙75YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風／粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。内底多段のクロロ目。	
SB12-315	P4 1層	土師質 土器	小皿	82	12	60	—	に赤い橙75YR6/4	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
SB12-316	P4 3層	土師質 土器	小皿	80	11	60	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。内底クロロ目。	
SB12-317	P4 3層	土師質 土器	小皿	80	12	60	—	に赤い橙5YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風／粗・細	やや 軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-318	P4 1層	土師質 土器	小皿	76	13	56	—	に赤い橙75YR6/4	石・長・雲・チ・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
SB12-319	P4 3層	土師質 土器	小皿	78	14	52	—	浅黄橙75YR8/4	石・長・雲・チ・赤 風／粗・細	やや 軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-320	P4 3層	土師質 土器	小皿	76	17	60	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-321	P4 3層	土師質 土器	小皿	72	15	50	—	灰黄褐10YR5/2	石・長・雲・灰黒／ 粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。内底多段のクロロ目。 中央にユビリサ。	
SB12-322	P4 3層	土師質 土器	小皿	70	18	50	—	に赤い橙75YR6/4	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-323	P4 3層	土師質 土器	小皿	64	15	50	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・雲・チ／ 粗・細	軟	内外面回転ナチュラル。外底回転 系切り。	
SB12-324	P4 3層	瓦器	碗	158	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白15Y7/1	石・長・雲・チ・赤 風／粗・細	口縁部外面ヨコナチュラル。体部 外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。内底に平行状の暗 文。周縁に乱れた円周状の暗文。 炭素は部分的に剥離。	和泉型	
SB12-325	P4 3層	瓦器	碗	152	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・チ／ 粗・細	口縁部外面ヨコナチュラル。体部 外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。内底に乱れた円周状の暗 文。内外面とも炭素吸着有し。	和泉型	
SB12-326	P4 3層	瓦器	碗	152	—	—	—	外) 灰5Y3/1 内) 灰5Y3/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・チ／ 粗・細	口縁部外面ヨコナチュラル。体部 外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。内底に乱れた円周状の暗 文。内外面炭素吸着有り。	和泉型	
SB12-327	P4 3層	瓦器	碗	148	—	—	—	外) 灰5Y3/1 内) 灰5Y3/1 断) 灰白15Y7/1	石・長・雲・赤風／ 粗・細	口縁部外面ヨコナチュラル。体部 外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。内底に乱れた円周状の暗 文。炭素は部分的に剥離。	和泉型	
SB12-328	P4 3層	瓦器	碗	—	—	45	—	外) 黄灰25Y6/1 内) 黄灰25Y6/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・暗灰／ 粗・細	外面ユビリサエ・ナチュラル。 内底に乱れた平行状の暗文。貼付高台。内外 面に炭素吸着有り。	和泉型	
SB12-329	P4 3層	瓦器	碗	152	—	—	—	外) 暗灰N3/ 内) 暗灰N3/ 断) 灰白15Y8/1	石・長・雲・灰／ 粗・細	口縁部外面ヨコナチュラル。体部 外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。ミガキ。内外面と も炭素吸着有り。	和泉型	
SB12-330	P4 3層	瓦器	碗	158	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白125Y8/2	石・長・雲・灰／ 粗・細	外面ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。炭素は剥離。	和泉型	
SB12-331	P4 3層	瓦器	碗	—	—	42	—	外) 灰5Y7/1 内) 灰5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・粗・細	外面ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。内底に平行状の暗 文。貼付高台。内面炭素吸着良好。 外表面無し。	和泉型	
SB12-332	P4 3層	瓦器	碗	150	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白125Y7/1	石・長・雲・チ／ 粗・細	口縁部外面ユビリサエ・ナチュラル。 体部外縁ユビリサエ・ナチュラル。 内面ナチュラル。ミガキ。内外面炭 素吸着有り。	和泉型	
SB12-333	P4 3層	瓦器	碗	145	—	—	—	外) 暗灰N3/ 内) 暗灰N3/ 断) 灰白15Y8/1	石・長・雲・粗・細	口縁部外面ユビリサエ・ヨ コナチュラル。体部外縁ユビリサエ・ ナチュラル。内面ナチュラル。内外 面炭素吸着有り。	和泉型	

Tab.18 遺物観察表 (12)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量			色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調製・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	載大径					
334	SB12 - P4 2層	瓦器	輪	—	—	4.8	—	外) 砂5Y5/1 内) 白25Y7/1 断) 白25Y7/1	石・長・灰黒・赤風 /粗・細	やや 軟	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。貼付高台。外表面 素吸着無し。内面吸着は部 分的に弱め。	和象型
335	SB12 - P4 2層	瓦器	皿	9.4	20	4.0	—	外) 砂5Y4/1 内) 砂5Y4/1 断) 白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軟	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナデ。外底ユビオサエ・ナ デ。内面ユビオサエ・ナデ。 外面に弱い吸着。内面無 し。	和象型
336	SB12 - P4 3層	瓦器	皿	8.4	18	4.2	—	外) 砂5Y5/1 内) 白25Y7/1 断) 白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナデ。外底ユビオサエ・ナ デ。内面ユビオサエ・ナデ。 外面に弱い吸着。内面無 し。	和象型
337	SB12 - P4 2層	瓦器	皿	9.2	15	4.0	—	外) 砂5Y4/1 内) 砂5Y4/1 断) 白25Y8/2	石・長・雲・暗灰/ 粗・細	—	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナデ。外底ユビオサエ・ナ デ。内面ユビオサエ・ナデ。 内外面吸着あり。	和象型
338	SB12 - P4 1層	瓦器	皿	8.2	13	6.0	—	外) 砂5Y5/1 内) 黄灰25Y6/2 断) ぶい黄灰10YR7/2	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナデ。外底ユビオサエ・ナ デ。内面ユビオサエ・ナデ。 内外面に弱い吸着。	和象型
339	SB12 - P4 2層	青磁	碗	16.0	—	—	—	外) オリーブ灰25GY6/1 断) 白NS/	—	硬	内面片切期による花文。中 リープ灰色を帯びる透明の 釉。	中国廣東窓系 森田分類窓I -2類・小野分 類窓A2類 12世紀後半- 13世紀前半
340	SB12 - P4 2層	青磁	碗	16.9	—	—	—	外) 灰オリーブ75Y6/2 断) 白N7/	—	硬	内面片切期による花文。外 面緋や小さなロココ目。灰オ リーブ色を帯びる透明の 釉。	中国廣東窓系 森田分類窓I -2類・小野分 類窓A2類 12世紀後半- 13世紀前半
341	SB12 - P4 1-2層	青磁	碗	—	—	6.4	—	外) オリーブ灰25GY6/1 断) 白N7/	—	硬	内面片切期による文様。高 台設置まで粗。オリーブ 灰色を帯びる透明の釉。	中国廣東窓系 森田分類窓I -2類・小野分 類窓A2類 12世紀後半- 13世紀前半
342	SB12 - P4 2層	青磁	碗	15.9	—	—	—	外) オリーブ灰25GY6/1 断) 白N7/	—	硬	内面片切期による文様。オ リーブ灰色を帯びる透明の 釉。	中国廣東窓系 森田分類窓I -2類・小野分 類窓A2類 12世紀後半- 13世紀前半
343	SB12 - P4 3層	青磁	皿	10.0	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 白N7/	—	硬	内面に勝描きによる文様。 灰オリーブ色を帯びる透明 の釉。	中国同窓系 森田分類窓I -2類・小野分 類窓A2類 12世紀後半- 13世紀前半
344	SB12 - P4 1層	須恵器	鉢	26.5	—	—	—	外) 黄灰25Y6/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・灰/ 粗・細	—	内外面回転ナデ。	東洋系3期 13世紀前半まで
345	SB12 - P4 2層	須恵器	甕	15.0	—	—	—	外) 灰NS/ 断) 灰NS/	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬	口縁部内外面回転ナデ。	—
346	SB12 - P4 2層	須恵器	甕	20.0	—	—	—	外) 白25Y7/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬	頭部内外面回転ナデ。体部 内外面ナデ。	—
347	SB12 - P4 3層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 灰暗黃25Y4/2 内) 黄灰10YR5/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・灰/ 粗・多量	硬	口縁部内外面回転ナデ。口 縁部内面と肩部に自然釉。	常滑 赤羽・中野編年 3-4型式 12世紀第4四半 期-13世紀第1 四半期
348	SB12 - P4 1-2層	陶器	甕	約46.8	—	—	—	外) 黄灰25Y5/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・暗灰/ 粗・多量	—	口縁部内外面回転ナデ。体 部外表面ナデ。粘土帶接合部 付近にタタキ目。体部内面 横方向のイタネ。粘土帶 接合痕。口縁部内面と肩部 に灰オリーブ色の自然釉。	常滑 赤羽・中野編年 3-4型式 12世紀第4四半 期-13世紀第1 四半期
349	SB12 - P4 3層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰10YR4/1 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰/ 粗・多量	硬	外面ナデ。粘土帶接合部付 近にタタキ。内面ナデ。	常滑
350	SB12 - P4 2層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰10YR4/1 断) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰/ 粗・多量	硬	外面ナデ。粘土帶接合部付 近にタタキ。内面ユビオサ エ・イタネ。	常滑
351	SB14 - P8 桂紙	瓦器	輪	—	—	5.0	—	外) 明褐灰75YR7/2 内) 明褐灰75YR7/2 断) 明褐灰75YR7/2	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	—	外底ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。貼付高台。炭素吸 着無し。	和象型

Tab.19 遺物観察表 (13)

回版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
352	SB15-P5上層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y5/1 内) 黄N5/ 断) 灰白10R5/1	石・長・雲・赤褐色 ・粗	硬	頭部外側面回転ナデ、体部外側ヨコナデ。内面に円錐状のタキ目。肩部に自然軋。	
353	SB15-P6	土器	土瓶	全長49	全厚10	全幅10	孔徑0.4 重量2.8kg	橙5YR6/6	石・長・灰・粗	やや軟	外側面ナデ。	
354	SK5	土師質土器	小皿	8.1	1.2	5.3	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・雲・金黄色 ・粗		内外面ナデ。外底ナデ。	関西
355	SK7	瓦器	皿	8.2	1.2	5.0	—	外) 黄N5/ 内) 黄N5/ 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・灰・粗		口縁部外側ヨコナデ、体部エビオサエ・ナダ。内面ナデ。炭素は部分的に剥離。	和泉型
356	SK23	土師質土器	杯	15.0	3.7	8.8	—	橙7YR7/6	石・長・雲・粗		内外側面回転ナデ。外底回転系切り。内外面クロロ目。	
357	SK23下層	土師質土器	杯	—	—	7.4	—	橙7YR7/6	石・長・雲・チ・粗	軟	外表面耗し調整不明。内底クロロ目。外側面回転系切り。	
358	SK23下層	土師質土器	杯	—	—	8.9	—	橙7YR6/6	石・長・雲・粗	軟	外表面耗し調整不明。外底回転系切り。	
359	SK15	土師質土器	小皿	—	—	6.0	—	にふい黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・粗		内外側面回転ナデ。外底回転系切り。	
360	SK15	土師質土器	杯	—	—	9.0	—	にふい黄7.5YR7/4	石・長・雲・チ・粗	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
361	SK23下層	土師質土器	杯	—	—	5.9	—	にふい黄橙10YR6/3	石・長・雲・チ・粗		外底回転系切り。	
362	SK23上層	土師質土器	小皿	7.5	1.1	4.7	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ・粗	軟	摩耗し調整不明。	
363	SK34	土師質土器	小皿	7.8	1.3	6.0	—	にふい橙7.5YR7/3	石・長・雲・チ・粗	硬	内外側面回転ナデ。外底回転系切り。	
364	SK29	土師質土器	小皿	8.2	1.5	6.3	—	にふい橙7.5YR7/3	石・長・雲・チ・粗	軟	摩耗し調整不明。	
365	SK29	土師質土器	小皿	6.5	2.0	2.5	—	橙5YR6/6	石・長・雲・粗・細		内外側面回転ナデ。外底回転系切り。外面クロロ目。	
366	SK28	土師質土器	杯	—	—	6.7	—	褐灰7.5YR6/1	石・長・雲・粗・細	やや軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
367	SK21下層	瓦器	碗	14.5	—	—	—	外) 黄灰2.5Y5/1 断) 灰白1N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外面エビオサエ・ヨコナデ。内面ナデ。下面は灰青色剥離。	和泉型
368	SK22	瓦器	皿	8.8	1.5	4.4	—	外) 黄N5/ 断) 灰白17Y5/8	石・長・雲・灰・粗		口縁部外側ヨコナデ。外底エビオサエ・ナダ。内面ナデ・円錐状の附着。炭素吸着は良好。	和泉型
369	SK22	青磁	碗	—	—	—	—	外) 斧オーリーブ7.5Y6/2 断) 灰白1N7/	—	硬	外側面青磁。底オーリーブ色を帯びる透明釉。	中国同安窯系 12世紀後半～13世紀前半
370	SK29	須恵器	鉢	23.0	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外側面回転ナデ。口縁部内面回転ナデ。体部内面斜方向のナデ。口縁部外側は黒色に発色。	東播系
371	SK35	土師質土器	杯	—	—	8.0	—	橙5YR6/8	石・長・雲・チ・粗	軟	摩耗し調整不明。	
372	SK35	須恵器	鉢	—	—	—	—	灰白5Y8/1	石・長・雲・チ・粗	硬	内面クロロ目。口縁部外側は黒色に発色。	
373	SK36下層	土師質土器	杯	14.0	—	—	—	にふい黄橙10YR6/4	石・長・雲・チ・赤風・粗・細	硬	内外側面回転ナデ。	
374	SK39下層	土師質土器	碗	—	—	7.8	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・チ・赤風・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
375	SK39上層	土師質土器	碗又は杯	—	—	7.5	—	にふい橙7.5YR7/3	石・長・雲・チ・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
376	SK40	土師質土器	杯	—	—	7.4	—	明赤褐5YR5/6	石・長・雲・チ・粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
377	SK41下層	土師質土器	碗又は杯	—	—	7.0	—	灰白2.5Y7/2	石・長・雲・チ・粗・細	やや軟	摩耗し調整不明。内底クロロ目。	
378	SK41	土師質土器	小皿	6.5	1.6	5.1	—	にふい橙7.5YR7/3	石・長・雲・チ・赤風・粗・細		内外側面回転ナデ。外底回転系切り。	
379	SK41	土師質土器	小皿	—	—	4.4	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	やや軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
380	SK41	白磁	皿	—	—	3.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白1N8/	—	硬	灰白色の釉。外底無釉。	中国 森分田窯区類 13世紀後半～14世紀前半
381	SK42	土師質土器	杯	14.4	4.1	7.0	—	浅黄橙7.5YR8/4	石・長・雲・チ・粗・細		内側面回転ナデ。外底回転系切り。	
382	SK42	土師質土器	小皿	8.0	1.5	6.0	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ・灰・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
383	SK44	土師質土器	小皿	5.4	1.6	3.7	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	

Tab.20 遺物観察表(14)

図版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径					
384	SK46 上層	瓦器	皿	7.1	1.3	4.0	—	95%灰N5/ 断)灰白25YR7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	内外面ナゲ。	和泉型
385	SK56 1層	土師質 土器	杯	—	—	8.0	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・赤楓/ 粗	摩耗し調整不明。内底ロク 口目。	
386	SK56 1層	土師質 土器	小皿	3.9	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・粗・細	秋 摩耗し調整不明。	
387	SK58	土師質 土器	小皿	7.8	1.5	5.8	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/細	やや 秋 内外面回転ナゲ。外底回転 系切り。	
388	SK58	瓦器	碗	—	—	—	—	外)灰N4/ 断)にぶい黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・灰/ 粗・細	口縁部外面ヨコナゲ。体部 ユビオサエ・ナゲ。内面ナ ゲ。内外面素吸着良好。	和泉型
389	SK60	瓦器	碗	—	—	4.0	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白5YR7/1	石・長・雲・赤楓/ 粗・細	外面ユビオサエ・ナゲ。内 面ナゲ・ミガキ。隨付高台。 内外面素吸着良好。	和泉型
390	SK67	瓦器	碗	15.4	3.8	5.5	—	外)灰黄25Y7/2 内)灰黄25Y7/2 断)灰黄25Y7/2	石・長・雲・チ・灰/ 粗・細	口縁部外側ヨコナゲ。体部 ユビオサエ・ナゲ。内面磨 耗し調整不明。底足は剥 離。	和泉型
391	SK58 上層	土師質 土器	杯	15.1	3.9	7.5	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	内外面回転ナゲ。外底回転 系切り後直角方向の板状压 痕。外面多段のロク口目。 内底ロク口目。	
392	SK42	陶器	甕	—	—	—	—	外)灰黄褐10YR5/2 断)にぶい黄褐10YR7/2	—	硬 磨耗し調整不明。	
393	SK74	土師質 土器	杯	—	—	5.3	—	浅黄褐10YR8/3 断)にぶい褐25YR6/3	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 秋 磨耗し調整不明。外底回転 系切り。	
394	SK74	土師質 土器	小皿	8.2	2.2	5.8	—	にぶい橙75YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	秋 磨耗し調整不明。外底回転 系切り。	
395	SK74	瓦器	皿	9.5	0.9	7.8	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白N7/	石・長・雲・粗・細	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナゲ。外底ユビオサエ・ナ ゲ。内面ナゲ。底足吸着良 好。	和泉型
396	SK74	青磁	碗	—	—	—	—	外)灰オリーブ75Y6/2 断)灰白75Y7/1	—	硬 内面に片切剛による文様。 灰オリーブ色を帯びる透明 の釉。	中田屋泉窯系 森田分類鏡I —4類 小野分 類鏡A4類 12世紀後半— 13世紀前葉
397	SK75	土師質 土器	小皿	7.3	1.3	4.9	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 摩耗し調整不明。	
398	SK75	土師質 土器	小皿	9.6	1.7	6.7	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 摩耗し調整不明。	
399	SK75	土師質 土器	杯又は 碗	—	—	8.0	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。内底強烈多段のロ ク口目。	
400	SK77	土師質 土器	杯	—	—	8.2	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	内外面回転ナゲ。外底回転 系切り。内底多段のロク口 目。	
401	SK77	土師質 土器	杯	14.2	—	—	—	浅黄褐10YR8/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 摩耗し調整不明。	
402	SK77	土師質 土器	杯又は 碗	—	—	6.8	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 外底回転系切り。内底強 烈ロク口目。	
403	SK78	青磁	碗	—	—	—	—	外)オリーブ灰5GY6/1 断)灰白N7/	—	硬 外面鏡造弁文。オリーブ灰 色を帯びる半透明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類鏡I —5b類 小野 分類鏡B1類 13世紀後半— 14世紀前半
404	SK79	土師質 土器	小皿	7.5	1.5	4.5	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・灰/ 粗・細	内外面回転ナゲ。外底ロク 口目。外底回転系切り。	
405	SK79 上層	須志器	甕	—	—	—	—	外)灰N6/ 断)灰白25Y8/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	硬 外面ナゲ・椅子状のタケキ 口目。	
406	SK74	陶器	甕	—	—	—	—	外)灰黄褐10YR6/2 断)にぶい黄褐10YR7/2	石・長・灰黒・赤楓/ 粗	硬 外面ナゲ・椅子状のタケキ 口目。内面イナナゲ。	常滑
407	SK91	土師質 土器	杯	—	—	8.6	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋 内外面回転ナゲ。外底回転 系切り。内底強烈やかなロク 口目。	
408	SK91	土師質 土器	小皿	9.2	1.5	6.8	—	にぶい橙75YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 秋 内外面回転ナゲ。外底回転 系切り。	
409	SK91	土師質 土器	小皿	6.9	1.0	5.0	—	にぶい黄褐10YR7/2	石・長・雲・チ/ 粗・細	内外面回転ナゲ。外底回転 系切り。	
410	SK91	瓦器	皿	9.8	1.5	4.2	—	外)黑5Y2/1 内)黑5Y2/1 断)灰白5Y8/1	石・長・雲・粗・細	口縁部外面ユビオサエ・ヨ コナゲ。外底ユビオサエ・ナ ゲ。内面ナゲ。	和泉型

Tab.21 遺物観察表(15)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・ 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
411	SK91	白磁	不明	—	—	—	—	外) 灰白15Y7/1 断) 灰白1N8/	—	硬	内面クロロ目、内面施釉。 灰白色を帯びる半透明の 釉。	中国
412	SK92	土師質 土器	杯	—	—	6.0	—	橙25YR6/8	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	内外面回転ナチュラ。外底回転 系切り。外側はロクロ目、 内底多段のロクロ目。	
413	SK92	土師質 土器	杯	—	—	5.4	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。外底回転 系切り。	
414	SK92	土師質 土器	小皿	8.0	—	—	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・細	軟	磨耗・調整不明。	
415	SK92	土師質 土器	碗又は 杯	—	—	9.0	—	浅黄橙7.5YR8/4	石・長・雲・赤風/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
416	SK92	土師質 土器	碗	—	—	7.0	—	にふい黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
417	SK98	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。外底回転 系切り。内底多段のロクロ目。	
418	SK98	土師質 土器	杯	約15.4	—	—	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
419	SK98	土師質 土器	杯	—	—	6.3	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。外底回転 系切り。内底多段のロクロ目。	
420	SK110	土師質 土器	杯	—	—	8.0	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面回転ナチュラ。外底回転 系切り。外側ロクロ目。	
421	SK118	土師質 土器	小皿	—	—	4.6	—	にふい橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	硬	内外面回転ナチュラ。外底回転 系切り。	
422	SK118	瓦器	碗	—	—	5.4	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白15Y8/1	石・長・雲・灰・粗	—	内外面ナチュラ。貼付高台。灰 素は部分的に剥離。	和泉型
423	SK118	青磁	碗	—	—	—	—	外) 黄褐25Y5/3 断) にふい黄橙10YR7/2	—	硬	外表面蓮瓣弁文。黄褐色を帯 びる透明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類第I -5b類・小野 分類第II類 13世紀後半- 14世紀前半
424	SE1 1層	土師質 土器	杯	—	—	6.2	—	外) 橙5YR7/6 断) 灰N5/	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軟	内外面回転ナチュラ。外底ロク 口目。外底回転系切り。	
425	SE1 1層	土師質 土器	小皿	7.8	1.2	5.8	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・灰・赤 風・粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
426	SE1 1層	土師質 土器	小皿	7.4	—	—	—	にふい黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
427	SE1 1層	土師質 土器	小皿	—	—	4.6	—	にふい橙7.5YR6/4	石・長・灰・赤風/ 粗・細	やや 軟	磨耗・調整不明。	
428	SE1 1層 最下層	土師質 土器	小皿	—	—	4.6	—	にふい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面回転ナチュラ。外底回転 系切り。	
429	SE1 1層	瓦器	皿	—	—	4.0	—	外) 灰5Y3/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白25Y8/2	石・長・雲・細	—	外表面位ヨコナヂ。外底ユ ビオサエ・ナヂ。内面ナヂ。 灰素吸着有り。	和泉型
430	SE1 1層	白磁	不明	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	—	硬	灰白色を帯びる透明の釉。	中国
431	SE1 1層	白磁	不明	—	—	—	—	外) 灰黄5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	—	硬	灰白色を帯びる透明の釉。	中国
432	SE1 1層	白磁	皿	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白1N8/	—	硬	平底。外底無軌。灰白色を 帯びる透明の釉。	中国 森田分類改編 13世紀後半- 14世紀前半
433	SE1 2層 最下層	須恵器	不明	26.0	—	—	—	にふい黄橙10YR7/3	石・長・雲・赤・粗 多量	—	口縁端部と外表面が黒色に染 色。	東播系
434	SE1 2層	須恵器	甕	—	—	—	—	黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬	外表面格子状のタキギ・ヨコ ハナ。内面凹凸状のタキギ。	
435	SE1 1層	須恵器	甕	—	—	—	—	灰5Y6/1	石・長・雲・粗・黒 色紋	硬	内面平行状のタキギ。内面 ナヂ。	
436	SD1	土師質 土器	小皿	—	—	—	—	橙5YR7/6	石・長・雲・赤風/ 粗・細	軟	内外面回転ナチュラ。	
437	SD3	土師質 土器	小皿	—	—	—	—	橙5YR6/8	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
438	SD3	瓦器	碗	—	—	—	—	外) 灰黄褐10YR6/2 内) 灰黄褐10YR6/2 断) 灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	外表面ユビオサエ・ナヂ。内 面ナヂ。灰素は剥離。	和泉型
439	SD3	瓦器	碗	—	—	4.5	—	外) 灰黄25Y6/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面ナヂ。貼付高台。灰 素は剥離。	和泉型
440	SD4 上層	土師質 土器	杯	13.5	3.0	8.5	—	明赤褐5YR5/6	石・長・雲・細	軟	磨耗・調整不明。	
441	SD4 上層	土師質 土器	杯	—	—	8.4	—	明赤褐5YR5/8	石・長・雲・粗・細	軟	磨耗・調整不明。	
442	SD4 下層	土師質 土器	杯	—	—	5.9	—	橙5YR7/6	石・長・細	軟	磨耗・調整不明。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	

Tab.22 遺物観察表(16)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	載大径					
443	SD4 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.1	—	明赤褐5YR5/6	石・長・雲・粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転系切り。内底クロロ目。	
444	SD4	土師質 土器	小皿	7.2	1.3	4.6	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・細	やや 軽	内外面回転ナヂ。外底回転系切り。	
445	SD4	土師質 土器	小皿	5.0	1.4	4.0	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・細	やや 軽	内外面回転ナヂ。外底回転系切り。	
446	SD4	土師質 土器	小皿	—	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR7/4 断)黒N2	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面回転ナヂ。外底回転系切り。	
447	SD4 下層	青磁	皿	9.1	—	—	—	外)灰オリーブ5Y5/2 断)灰白5Y7/1	—	硬	灰オリーブ色を帯びる透明 の釉。	中国腹窯系
448	SD4	青磁	碗	—	—	5.0	—	外)オリーブ灰25GY6/1 断)灰白N7/	—	硬	外面端邊丸文。高台端部と 高台内無地。オリーブ色を 帯びる透明の釉。	中国腹窯系 森田分類編Ⅰ —5b類・小野 分類田中類 13世紀後半～ 14世紀前半
449	SD4	須恵器	羹	—	—	—	—	外)灰25Y6/1 断)灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細、 黑色粒	硬	口縁部内外面回転ナヂ。表 面に黒色粒をきららせる。	高知庵山窯
450	SD4	須恵器	羹	29.0	—	—	—	外)黑7.5Y2/1 断)灰黄25Y7/2	石・長・雲・チ・灰/ 赤透・粗・細多量	硬	口縁端部と口部内面回転 ナヂ。頭部端面ハケ・ナヂ。 体部外面タキ。頭部内面 に粘土帶接合痕。外面上に灰 素。	東徳系 12世紀末～ 13世紀以降 450・452同一個 体
451	SD4	須恵器	羹	—	—	—	—	外)灰5Y6/1 断)灰白5Y5/1	石・長・粗・赤色較	硬	外面平行状のタキ。内面 内凹状のタキ。	
452	SD4 上層	須恵器	羹	—	—	—	—	外)黑7.5Y2/1 断)灰白25Y7/2	石・長・雲・チ・灰/ 赤透・粗・細多量	—	外面平行状のタキ。内面 内凹状のタキ。	450・452同一個 体
453	SD5	土師質 土器	杯	—	—	8.1	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。内底クロロ目。	
454	SD5	土師質 土器	杯又は 碗	—	—	6.4	—	浅黃褐7.5YR8/4	石・長・雲・粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。	
455	SD5	土師質 土器	杯	—	—	8.0	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軽	焼毛し調整不明。	
456	SD5	土師質 土器	杯	—	—	7.3	—	橙7.5YR7/6	石・長・粗	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。	
457	SD5	土師質 土器	小皿	9.9	1.5	7.5	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。	
458	SD5	土師質 土器	小皿	—	—	4.8	—	橙7.5YR7/6	石・長・粗	やや 軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。内底クロロ目。	
459	SD6 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。内底に多段のタ ク付目。	
460	SD6 上層	土師質 土器	小皿	8.1	1.3	5.4	—	にぶい黄橙10YR7/3	石・長・雲・細	軽	内外面回転ナヂ。	
461	SD6 下層	土師質 土器	小皿	8.2	1.0	6.5	—	橙5YR7/6	石・長・雲・赤風/ 粗・細	軽	焼毛し調整不明。外底回転 系切り。	
462	SD6 下層	土師質 土器	小皿	8.4	1.3	5.2	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	軽	焼毛し調整不明。	
463	SD6 石集束	瓦器	鉢	13.5	4.3	4.5	—	内)にぶい橙7.5YR7/4 断)灰白10YR8/2	石・長・雲・チ・灰 黒・粗	やや 軽	外面エビオサエ・ナヂ。内 面ナヂ。炭素吸着無し。	和泉型
464	SD6 上層・ 下層	瓦器	碗	15.4	—	—	—	外)灰5Y4/1 断)にぶい黄橙10YR7/2	石・長・雲・粗・細	—	外面口縁部エビオサエ・コ ナヂ。体部エビオサエ・ナヂ・ ミガキ。炭素は部分的に 剥離。	和泉型
465	SD6 下層	瓦器	碗	13.0	—	—	—	外)灰N4/—・灰白25Y7/1 内)灰白25Y7/1 断)灰白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軽	口縁部外面エビオサエ・コ ナヂ。体部外面エビオサエ・ ナヂ。内面ナヂ。外面上半 のみ炭素吸着有り。	和泉型
466	SD6 検出面	瓦器	鉢	—	—	—	—	外)灰N4/—・灰白25Y7/1 内)灰白N4/ 断)灰白C1N8/	石・長・雲・灰/ 粗・細	やや 軽	外面エビオサエ・ナヂ。内 面ナヂ。炭素吸着良好。	和泉型
467	SD6 検出面	瓦器	鉢	—	—	—	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白N7/	石・長・雲・灰/ 粗・細	—	外面エビオサエ・ナヂ。内 面ナヂ。炭素吸着良好。	和泉型
468	SD6 下層	瓦器	鉢	—	—	4.0	—	外)灰N6/—・灰白5Y7/1 内)灰N6/—・灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軽	外底エビオサエ・ナヂ。内 面ナヂ。貼付高台。炭素は 剥離する。	和泉型
469	SD6 上層	瓦器	皿	10.0	—	—	—	外)にぶい橙7.5YR7/1 内)灰N4/ 断)灰白25Y7/1	石・長・灰・粗	やや 軽	口縁部外面エビオサエ・外底 エビオサエ・ナヂ。内面ナ ヂ。	和泉型
470	SD6 上層	陶器	羹	—	—	—	—	内)灰黃褐10YR6/2 淡黃褐10YR8/3	石・長・雲・灰・赤 風・粗	硬	外面イタナヂ・格子状のタ ク付目。内面イタナヂ。	常滑
471	SD6 検出面	陶器	羹	—	—	—	—	外)灰10YR6/1 断)にぶい黄橙10YR7/2	石・長・雲・灰・赤 風・粗多量	硬	外面ナヂ・格子状のタク 付目。内面イタナヂ。	常滑
472	SD6 上層	須恵器	羹	—	—	—	—	外)灰25Y6/1 断)灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細	硬	外面平行状のタクキ・瓶方 向のイタナヂ。内面ナヂ。	

Tab.23 遺物観察表(17)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徵	備考(生産地・ 年代・使用状態)
				口径	器高	底径	最大径					
473	SD6 上層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰25Y6/1 断) 白25Y7/1	石・長・粗・繩、黒 色粒	硬	外面平行状のタキ。内面 ナデ。表面に黑色斑が吹き 出る。	高知県庵山窯
474	SD6 上層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰25Y5/1 断) 白25Y7/1	石・長・粗・灰・粗	硬	内外面回転ナデ。口縁部内 面に白色粒。	
475	SD7	土師質 土器	小皿	7.5	1.3	5.7	—	にぶい・橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
476	SD7	土師質 土器	小皿	—	—	4.4	—	にぶい・橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
477	SD7 上層	土師質 土器	小皿	—	—	4.3	—	橙7YR6/6	石・長・雲・チ・粗	やや 軟	内面回転ナデ。外底回転系 切り。	
478	SD7	瓦器	碗	—	—	—	—	外) 灰N5/ 内) 灰5Y6/1 断) 白25Y8/1	石・長・雲・粗・細	—	口縁部外面ヨコナデ、体部 外面ニビオサエ・ナデ。内 面ナデ。外面吸着良好、内 面には斑斑。	和泉型
479	SD7	白磁	皿	9.8	—	—	—	灰白5Y8/1	—	硬	内外面回転ナデ。灰白色を 帯びる透明の釉。	中国
480	SD7	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y5/2 断) 白25Y7/1	—	硬	内側面回転ナデ。内面に片 切面による文様。灰オリーブ 色を帯びる透明の釉。	森田分類鏡Ⅰ-2類又はI-4 類・小野分類鏡A2類又はA4類 12世紀後半～13世紀前葉
481	SD7 上層	陶器	甕	—	—	—	—	外) にぶい・赤褐色5YR5/3 断) にぶい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・赤・粗・多量	硬	外面ナデ・格子状のタキ 目。内面ナデ。	常滑
482	SD7	須恵器	甕	—	—	—	—	黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗・繩、 黒色粒	硬	外面平行状のタキ。内面 ナデ。表面に黑色斑が吹き 出る。	高知県庵山窯
483	SD8 下層	土師質 土器	杯	13.4	4.3	7.6	—	にぶい・橙7.5YR6/4	石・長・雲・赤風・ 粗・繩	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。外底ロクロ目。	
484	SD8 上層	土師質 土器	杯	15.4	—	—	—	にぶい・橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・粗・ 繩	軟	摩耗し、調整不明。外面強 いロクロ目。	
485	SD8 上層	土師質 土器	杯	13.4	3.3	8.6	—	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・灰・粗	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
486	SD8 上層	土師質 土器	杯	13.6	3.3	9.6	—	外) にぶい・黄橙10YR7/3 断) 灰N5/	石・長・雲・チ・粗・ 繩	軟	摩耗し、調整不明。外底回転 系切り。	
487	SD8	土師質 土器	杯	—	—	8.1	—	橙5YR6/6	石・長・雲・灰・粗・ 繩	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
488	SD8	土師質 土器	杯	—	—	7.4	—	橙5YR6/6	石・長・雲・灰・粗・ 繩	軟	摩耗し、調整不明。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
489	SD8 上層	陶器 又は 杯	—	—	6.8	—	外) にぶい・黄橙10YR7/3 断) 灰N5/	石・長・雲・チ・ 粗・繩	やや 軟	摩耗し、調整不明。外底回転 系切り。外底ロクロ目。		
490	SD8 下層	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	外) にぶい・黄橙10YR7/3 断) 灰N5/	石・長・雲・赤・粗	軟	摩耗し、調整不明。外底回転 系切り。	
491	SD8 下層	土師質 土器	杯	—	—	6.4	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ・ 粗・繩	軟	摩耗し、調整不明。	
492	SD8 上層	土師質 土器	小皿	7.8	1.1	5.4	—	にぶい・橙7.5YR7/4	石・長・雲・赤風・ 粗・繩	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目後中 央ニビオサエ。	
493	SD8 下層	土師質 土器	小皿	7.6	1.2	5.6	—	浅黄橙7.5YR8/3	石・長・雲・繩	やや 軟	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
494	SD8	土師質 土器	小皿	7.4	1.1	4.6	—	にぶい・橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・繩	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
495	SD8 上層	土師質 土器	小皿	7.4	1.6	4.4	—	橙5YR6/6	石・長・雲・繩	やや 軟	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
496	SD8	土師質 土器	小皿	9.0	—	—	—	にぶい・橙7.5YR6/4	石・長・雲・チ・ 粗・繩	—	内外面回転ナデ。	
497	SD8	瓦器	碗	—	—	4.0	—	外) にぶい・黄橙10YR6/3 断) 浅黄橙10YR8/3	石・長・灰・粗・繩	やや 軟	貼付台面、外外面の炭素吸 着者無。	和泉型
498	SD8 上層	瓦器	碗	15.3	—	—	—	外) 灰N4/ 内) 灰N4/ 断) 白25Y8/1	石・長・灰・粗・繩	やや 軟	外面ニビオサエ・ナデ。体部 ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ・ミガキ。貼付台面下半分は 炭素吸着無し。内面は剥離。	和泉型
499	SD8	瓦器	碗	—	—	4.0	—	外) 灰N4/ 内) 灰N4/ 断) 白25Y8/2	石・長・雲・灰・繩	—	外面ニビオサエ・ナデ。内 面ナデ。貼付台面、外外面とも 炭素吸着良好。	和泉型
500	SD8 上層	瓦器	碗	—	—	3.2	—	外) 灰N5/ 内) 灰N4/ 断) 白25Y8/1	石・長・雲・繩	—	外面ニビオサエ・ナデ。内 面ナデ・ミガキ。貼付台面、 外外面とも炭素吸着良好。	和泉型
501	SD8 上層	瓦器	碗	—	—	5.4	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰25Y7/1 断) 白25Y7/1	石・長・繩・赤色粒	—	外面ニビオサエ・ナデ。内 面ナデ・ミガキ。貼付台面、 内面の炭素吸着無し。	和泉型
502	SD8 下層	須恵器	甕	33.0	—	—	—	外) 灰N17/ 内) 灰25Y7/1 断) 白25Y7/1	石・長・雲・粗	硬	内外面回転ナデ。口縁部外 面ニビオサエ。	
503	SD9 床	土師質 土器	小皿	—	—	6.0	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・灰・赤 風・粗・繩	—	内外面回転ナデ。外底中央に直線方 向の押庄村痕。	

Tab.24 遺物観察表(18)

団版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	載大径					
504	SD9 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	橙5YR7/6	石・長・雲・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。	
505	SD9 上層	瓦器	碗	約134	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰15Y8/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	口縁部外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。外側面 炭素吸着良好。	和泉型	
506	SD9	陶器	壺か	—	—	10.6	—	にふい・橙7YR5/3 黄灰25Y6/1	石・長・雲・粗	—	内外面削輪ナデ。外底ナデ。 内底ロクロ目。	—
507	SD10 上層	土師質 土器	杯	14.0	4.0	7.5	—	浅黃橙7YR8/6	石・長・雲・粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。外底と内底に多段 の強いロクロ目。	—
508	SD10 上層	土師質 土器	杯	148	34	7.2	—	橙7YR8/6	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。	—
509	SD10	土師質 土器	杯	153	—	—	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外側ロク ロ目。	—
510	SD10	土師質 土器	杯	138	34	8.2	—	橙7YR8/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外側ロク ロ目。	—
511	SD10 下層	土師質 土器	杯	140	36	8.0	—	橙7YR8/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
512	SD10 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.2	—	にふい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。内底に多段の強い ロクロ目。	—
513	SD10	土師質 土器	杯	141	45	8.8	—	にふい・橙7YR7/3	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。外底ロクロ目。	—
514	SD10	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	にふい・橙7YR6/4	石・長・雲・粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。内底ロクロ目。	—
515	SD10 中層	土師質 土器	杯	—	—	8.2	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。内底多段の強いロ クロ目。	—
516	SD10	土師質 土器	杯	—	—	7.8	—	浅黃橙10YR8/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。外底ロクロ目。	—
517	SD10 中層	土師質 土器	小皿	82	24	5.4	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
518	SD10 下層	土師質 土器	小皿	87	17	6.2	—	橙5YR7/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。内底ロクロ目。	—
519	SD10 中層	土師質 土器	小皿	77	12	5.0	—	にふい・黄橙10YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
520	SD10 下層	土師質 土器	小皿	70	13	5.6	—	にふい・橙7YR6/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
521	SD10 上層	土師質 土器	小皿	74	17	5.0	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。	—
522	SD10 下層	土師質 土器	小皿	78	16	4.8	—	橙7YR7/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。	—
523	SD10 上層・ 下層	土師質 土器	小皿	7.0	15	4.8	—	にふい・黄橙10YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。外底削輪 系切り。内底凸状。	—
524	SD10	土師質 土器	小皿	72	14	5.0	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・粗・細	やや 秋	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
525	SD10	土師質 土器	小皿	80	12	5.2	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。	—
526	SD10 上層	土師質 土器	小皿	10.5	21	8.0	—	にふい・橙7YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	秋	摩耗し調整不明。内底多段 のロクロ目。	—
527	SD10 上層	土師質 土器	小皿	78	14	4.8	—	にふい・橙7YR6/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。内底多段のロクロ 目。	—
528	SD10 上層	土師質 土器	小皿	82	15	5.3	—	橙7YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	内外面削輪ナデ。外底削輪 系切り。内底多段のロクロ 目。	—
529	SD10 上層	瓦器	碗	152	4.9	3.6	—	外) 灰N5/ 内) 灰N5/ 断) 灰白N7/	石・長・雲・灰・灰 黒・粗	—	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。内面に凹面状の暗 斑。炭素吸着良好。	和泉型
530	SD10 上層	瓦器	碗	156	—	—	—	外) 灰N6/ 内) 灰N6/ 断) 灰白N8/	石・長・灰・赤風/ 粗	—	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ・ミガキ。炭素吸着 良好。	和泉型
531	SD10 上層	瓦器	碗	150	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1 断) 灰白7Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	口縁部外面ヨコナデ。内面 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。内面に凹面状の暗 斑。炭素吸着良好。	和泉型
532	SD10 上層	瓦器	碗	152	—	—	—	外) 灰N5/ 内) 灰N5/ 断) 灰白N7/	石・長・雲・灰・粗	—	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。内面に凹面状の暗 斑。炭素吸着良好。	和泉型
533	SD10	瓦器	碗	156	—	—	—	外) オリエーブ5Y3/1 内) にふい・黄橙10YR7/3 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	—	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。外底に凹面状の暗 斑。内面は無し。	和泉型

Tab.25 遺物観察表(19)

国版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	最大径						
534	SD10 上層	瓦器	碗	162	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・チ／粗・細	口縁部外面ヨコナギ、体部外縁スピオサエ・ナダ。内面ナダ。内面の一部に灰素吸着あり、その他の吸着無し。	和泉型		
535	SD10 中層	瓦器	碗	147	46	55	—	外) 喜灰N3/ 内) 喜灰N3/ 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・赤透／粗・細	口縁部外面ヨコナギ、体部外縁スピオサエ・ナダ。内面ナダ。内面周辺に円錐状の暗文、内底に平行状の暗文、内面と外縁に灰素吸着良好、外縁下部は吸着無し。	和泉型		
536	SD10 上層	瓦器	碗	160	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・チ／粗・細	やや 軟	口縁部外面ヨコナギ、体部外縁スピオサエ・ナダ。内面摩耗し調整不明。灰素は弱。	和泉型	
537	SD10	瓦器	碗	154	—	—	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/2	石・長・雲・チ／粗	口縁部外面ヨコナギ、体部外縁スピオサエ・ナダ。内面ナダ。外縁の一部に灰素吸着あり、その他の吸着無し。	和泉型		
538	SD10 上層	瓦器	碗	—	—	56	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰N4/ 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細	外縁スピオサエ・ナダ。内面ナダ。貼付高台。内底に平行状の暗文。内面の灰素吸着良好、外縁は僅かに吸着。	和泉型		
539	SD10 下層	瓦器	碗	—	—	38	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・粗・細	外縁スピオサエ・ナダ。内面ナダ。貼付高台。内底に暗文。灰素吸着良好。	和泉型		
540	SD10 上層	瓦器	碗	—	—	44	—	外) 黄灰25Y7/2 内) 黄灰25Y7/2 断) 黄灰25Y7/2	石・長・雲・粗・細	外縁スピオサエ・ナダ。内面剥離し調整不明。貼付高台。外縁灰素吸着無し。内面は不明。	和泉型		
541	SD10 下層	瓦器	碗	145	—	—	—	外) 黄褐10Y8E-2 内) 黄褐10Y8E-2 断) 黄褐10Y8E-2	石・長・雲・チ／粗・細	外縁ナダ。	和泉型		
542	SD10 下層	瓦器	皿	96	16	50	—	外) 喜灰N3/ 内) 喜灰N3/ 断) 灰白10N8/	石・長・雲・粗・細	口縁部外面ヨコナギ、外底スピオサエ・ナダ、内面ナダ・ミガキ。底面吸着良好。内面周辺ナギ、口縁端部と内底部内面剥離。オリーブ黄色を帯びる灰白色の釉。	和泉型		
543	SD10 上層	白磁	皿	109	—	—	—	外) 灰7.5Y7/2 断) 灰白10Y8/1	—	硬	内表面回転ナギ。内面ロタク。灰白色を帯びる半透明の釉。	中国 森田分類区分 13世紀後半～ 14世紀前半	
544	SD10 上層	白磁	甕	—	—	—	—	外) 灰7.5Y7/1 断) 灰白10N7/	—	硬	内表面回転ナギ。外表面ロタク。灰白色を帯びる半透明の釉。	中国	
545	SD10 下層	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ黄5Y6/3 断) 灰白5Y7/1	—	硬	内表面回転ナギ。外表面ロタク。オリーブ黄色を帯びる透明の釉。	中国阿宋窯系 12世紀後半～ 13世紀前半	
546	SD10 下層	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰5Gy6/1 断) 灰白N8/	—	硬	内表面回転ナギ。内面片切形による文様。オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類区分 1-2類・小野分類系統A2類か 12世紀後半～ 13世紀前半	
547	SD10 上層	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ7.5Y6/2 断) 灰白10Y7/1	—	硬	内表面回転ナギ。内面片切形による文様。オリーブ色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系	
548	SD10 上層	須恵器	鉢	—	—	—	—	外) 喜灰N3/ 内) 喜灰N3/ 断) 灰白5Y7/1	石・長・灰・赤透／粗・細	やや 軟	外縁ナダ。内面回転ナギ。外底内面が黒色に発色。	東播系	
549	SD10 下層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄褐10Y8E-2/ 内) 黄褐25Y6/1	石・長・雲・赤／粗	硬	内外面ナダ。	常滑	
550	SD10 中層	瓦	丸瓦	—	—	厚さ 20	—	外) 灰15Y7/1 内) 灰白5Y7/1	石・長・灰黒／粗	硬	摩耗し調整不明。		
551	SD10 上層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰7.5Y4/1 内) 灰白10Y8E/1 断) 灰N6/	石・長・雲・赤褐／粗	硬	外表面ナギ。内面回転ナギ。		
552	SD10 上層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰7.5Y5/1 内) 灰7.5Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬	外表面平行状のタキ。内面ナダ。		
553	SD13 土師質土器	杯	—	—	81	—	にぶい 外) 灰7.5Y8E/4	石・長・雲・チ／粗	软	摩耗し調整不明。			
554	SD13 土師質土器	小皿	68	12	42	—	橙5YRE/6	石・長・雲・赤風／粗・細	やや 軟	内外表面回転ナギ。外底回転系切。			
555	SD13 土師質土器	小皿	—	—	49	—	にぶい 黄褐10YR7/2	石・長・雲・チ／粗	やや 軟	外底回転系切。			
556	SD13 土師質土器	小皿	72	13	61	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・チ／粗	—	内外表面回転ナギ。			
557	SD13 土師質土器	小皿	—	—	53	—	にぶい 橙7.5YR6/4	石・長・雲・細	软	摩耗し調整不明。			

Tab.26 遺物観察表(20)

団版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径					
558	SD13 下層	瓦器	輪	142	—	—	9% 灰5Y6-1 内灰5Y6-1 断灰15Y7-1	石・長・灰/粗	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。	和泉型	
559	SD13 上層	瓦器	輪	約142	—	—	外灰5Y5-1 内灰5Y5-1 断灰15Y8-1	石・長・芸/粗・細	口縁部内部に段あり。外面 エビオサエ・ナデ。内面ミガ キ。内外面に吸着あり。	輪型	12世紀後半～ 13世紀前半
560	SD13 上層	瓦器	輪	—	—	42	外灰25Y7-3 内灰25Y7-3 断灰25Y7-3	石・長・芸・チ/粗	外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。外側灰素吸着良 好。内面は無。	和泉型	
561	SD13	土師質 土器	小皿	—	—	6.0	にぶい黄10YIG-2	石・長・芸/粗	軋耗し調整不明。		
562	SD13	青磁	皿	112	—	—	9% 灰オリーブ7SY6-2 断灰N8-	—	硬 灰オリーブ色を帯びる透明 の釉。	中国	
563	SD13	青磁	碗	—	—	—	外灰オリーブ5Y6-2 断灰白5Y7-1	—	硬 リーブ色を帯びる透明の 釉。	中国	
564	SD13	青磁	碗	—	—	—	外) オリーブ灰25GY6-1 断) 断白N7-	—	硬 外面彫刻文。オリーブ灰 色を帯びる透明の釉。	中国龍溪系 森田分類編I —5b第1・小野 分類既出第1 13世紀後半～ 14世紀前半	
565	SD13 下層	白磁	盃か	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6-2 断) 断灰5Y7-1	—	硬 白の耳か。外縁に2条の円 線。灰オリーブ色を帯びる 透明の釉。	中国	
566	SD13 上層	陶器	不明	—	—	7.8	9% 黄灰褐10YRS-2 断灰白N7-	石・長・芸/粗	外面彫刻方向のイタナデ。内 面回転ナデ。内面強けロカ ロ目。		
567	P75 床	土師質 土器	杯	113	33	6.4	にぶい橙7SYR6-4	石・長・芸/粗・細	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。外底強け多段のロ クロ目。		
568	P59	土師質 土器	杯	—	—	5.2	外) 橙5YR6-6 断灰N3-	石・長・芸・チ/ 粗・粗	やや 軟 外底回転ナデ。内底に強い ロクロ目。		
569	P77	土師質 土器	杯	—	—	7.0	灰25Y7-2	石・長・芸・チ/ 粗・粗	軋耗し調整不明。 外底回転 系切り。		
570	P100	土師質 土器	杯	—	—	6.7	橙5YR6-6	石・長・芸・チ/ 粗・粗	やや 軟 内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底に強いロ クロ目。		
571	P207 柱頭	土師質 土器	杯	—	—	5.5	にぶい橙7.5YR6-4 断灰N4-	石・長・芸・チ/ 粗・粗	やや 軟 内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底多段の強いロ クロ目。		
572	P307	土師質 土器	杯	—	—	8.0	外) 橙5YR6-6 断灰N3-	石・長・芸・チ/ 粗・粗	内外面回転ナデ。外底回 転系切り。外表面強いロ クロ目。		
573	P3 中壇	土師質 土器	小皿	6.9	1.1	5.1	にぶい橙75YR7-4	石・長・芸・チ/ 粗・細	軋耗し調整不明。外底回転 系切り。		
574	P156 柱頭	土師質 土器	小皿	8.6	1.3	6.8	灰25Y7-2	石・長・芸・チ/ 粗・粗	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。		
575	P161	土師質 土器	小皿	8.0	1.2	5.6	外) 橙5YR6-6 断灰N4-	石・長・芸・チ/ 粗・粗	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。		
576	P99 柱頭	土師質 土器	小皿	—	—	4.7	灰125Y8-2	石・長・粗	内外面回転ナデ。外底回 転系切り。外表面強いロ クロ目。		
577	P361 柱頭	土師質 土器	小皿	7.6	1.5	6.5	橙5YR7-6	石・長・芸・チ/ 粗・粗	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内底中央に凹み。		
578	P206 柱頭	土師質 土器	小皿	7.8	1.2	5.4	にぶい黄橙10YR7-2	石・長・粗・細	やや 軟 軋耗し調整不明。		
579	P307	土師質 土器	小皿	9.6	1.6	7.4	にぶい橙75YR7-4	石・長・芸・チ/ 粗・粗	軋耗し調整不明。		
580	P329	土師質 土器	小皿	7.8	1.7	5.0	にぶい橙75YR7-4	石・長・芸/粗	軋耗し調整不明。		
581	P367	土師質 土器	小皿	—	—	4.5	にぶい黄橙10YR7-3	石・長・芸・チ/ 粗・粗	やや 軟 内外面回転ナデ。外底回転 系切り。底部にぼ3mmの円 孔あり。		
582	P387	土師質 土器	小皿	7.2	1.4	5.0	橙5YR6-6	石・長・芸・チ/ 粗・粗	軋耗し調整不明。		
583	P344	土師質 土器	小皿	6.6	1.0	5.0	にぶい橙75YR7-4	石・長・芸・チ/ 粗・粗	軋耗し調整不明。 外底回転 系切り。		
584	P38	瓦器	輪	140	—	—	外) 黄灰25Y7-2 内) 黄灰25Y7-2 断) 黄灰25Y7-2	石・長・芸・チ/ 粗・粗	やや 軟 口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。外側灰素吸着無 し。	和泉型	
585	P350	瓦器	輪	17.0	—	—	9% 黄灰25Y5-1 内) 黄灰25Y5-1 断) 黄灰25Y5-1	石・長・芸/粗・細	口縁部外面ヨコナデ・ユビ オサエ。体部外面ユビオサ エ・ナデ。内面ナデ。外 面に灰素が薄く吸着。	和泉型	

Tab.27 遺物観察表(21)

国版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径					
586	P367	瓦器	碗	—	—	4.0	—	外) に赤い黄橙10YR7/2 内) 黄灰2.5Y6/2 断) に赤い黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	面ナデ、貼付高台。内面に 赤い炭素吸着、外側は吸着 無し。	相模型	
587	P3	瓦器	皿	11.0	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 内) 黄灰2.5Y6/1 断) 黄灰2.5Y7/2	石・長・雲・チ・ 粗・細	口縁部外面ヨココデ、体部 内面ヨココデナダ。内面ナ デ、贴付高台。 内面赤炭素吸着良好。	相模型	
588	P229	瓦器	碗	—	—	5.0	—	外) 灰4/ 内) 灰4/ 断) 灰白1N8/	石・長・雲・チ・ 粗・細	外底ヨコオサエ・ナダ。内 面ナデ、贴付高台。 内面赤炭素吸着良好。	和泉型	
589	P64	瓦器	皿	8.0	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰山1SY8/1	石・長・赤風・細	口縁部外面ヨココデ、体部 外底ヨコオサエ・ナダ。内 面ナデ。 内底に平行状の暗 文、周縁に乱れた円筒狀 の暗文。炭素は部分的に剥 離。	相模型	
590	P375	瓦器	皿	7.8	1.2	4.4	—	外) 灰白2.5Y7/1 内) 灰山2.5Y7/1 断) 灰山2.5Y7/1	石・長・雲・赤風/ 粗・細	口縁部外面ヨコオサエ・ヨ ココデ。外底ヨコオサエ・ナ ダ。内面ナダ。炭素は殆ど 剥離。	和泉型	
591	P271	白磁	碗	17.0	—	—	—	外) 灰白1.7Y7/1 断) 灰山1SY7/1	—	硬 灰白色を帯びる半透明 の釉。	中国 森田分類瓶V類 12世紀	
592	P156	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰白1SY7/1 断) 灰白1SY7/1	—	硬 灰白色を帯びる半透明 の釉。	中国 森田分類瓶V類 12世紀	
593	P262	白磁	皿	—	—	5.0	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白1N8/	—	硬 平底。外底無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。	中国 森田分類瓶V類 13世紀後半～ 14世紀前半	
594	P347	白磁	壺か	—	—	—	—	外) 灰1.7SY7/1 断) 灰白1N8/	—	硬 内面クロロ目。内面施釉。	中国	
595	P146	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰2.5GY6/1 断) 灰白1N7/	—	硬 外表面ハラ剛による文様。 オリーブ灰色を帯びる透明 の釉。	中国龍泉窯系	
596	P183	青磁	碗	—	—	6.0	—	外) 明オリーブ灰5GY7/1 断) 灰白1N8/	—	硬 内面に片切剛による文様。 明オリーブ灰色を帯びる透 明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類瓶I ～2類・小野分 類瓶A類 12世紀後半～ 13世紀前半	
597	P271	青磁	碗	—	—	—	—	外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 断) 灰白1N8/	—	硬 内面に片切剛による文様。 明オリーブ灰色を帯びる透 明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類瓶I ～4類・小野分 類瓶A類 12世紀後半～ 13世紀前半	
598	P105	青磁	皿	9.4	—	—	—	外) 明オリーブ5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	—	硬 灰オリーブ色を帯びる透明 の釉で粗い質感入る。	中国	
599	P385	須恵器	鉢	—	—	—	—	灰山2.5Y7/1	石・長・雲・チ・ 粗・細	外面ヨコナデ。内面に軽 度の凹凸ナデ。口縁部外 面に炭素。	束縛系	
600	P52	瓦質土器	刷	—	—	約17.0	—	外) 灰灰10YR4/1 断) 灰山2.5Y7/1	石・長・雲・チ・ 粗・細	やや 軟 内外面ナデ。	14世紀 外底に赤い垢。	
601	P383	須恵器	甕	—	—	—	—	灰山2.5Y8/1	石・長・雲・粗・細	外表面子状のタキ。内面 円筒狀のタキ。	中国龍泉窯系	
602	P344	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰10YR5/1 断) 赤白2.5Y7/1	石・長・雲・粗	硬 外ナデ、粘土と接合部付 近に子状のタキ目。内 面ヨコオサエ・イタグレ。	常滑	
603	P406	白磁	壺又は 水注	—	—	—	—	外) オリーブ灰5Y6/3 断) 灰白1N8/	—	硬 オリーブ黄色を帯びる半透 明の釉。	中国	
604	P456	青磁	碗	約16.8	—	—	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰山2.5Y7/1	—	硬 内面切剛による文様。灰 オリーブ色を帯びる透明 の釉。	中国龍泉窯系	
605	P409	白磁	不明	—	—	—	—	外) 灰山1SY7/1 断) 灰白1N8/	—	硬 内面クロロ目。灰白色を 帯びる半透明の釉。	中国	
606	P409	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄黄10YR5/2 断) 黄灰2.5Y6/1	石・長・雲・粗・細	硬 外面ナデ、内面ヨコナデ。	常滑	
607	P409	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰山1N7/ 内) 灰5Y6/1 断) 灰山1N7/	石・長・雲・粗・細 黒色粒	硬 外面平行状のタキ。内面 ナデ。	高知県龜山窯	
608	P409	瓦器	皿	—	—	—	—	外) 灰N5/ 内) 灰N5/ 断) 灰N8/	石・長・雲・細	内外面ナデ。内外面炭素吸 着良好。	和泉型	
609	P409	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 内) に赤い場7.5YR6/3 断) 黄灰2.5Y6/1	石・長・雲・チ・ 粗・細	上半に自然釉。	高知県龜山窯 か	
610	P411	土質 土器	杯	12.1	4.4	7.7	—	に赤い場7.5YR7/4	石・長・雲・チ・ 粗・細	軟 摩耗し調整不明。		

Tab.28 遺物觀察表(22)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量				色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	載大径					
611	P411	瓦器	碗	148	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y8/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビサエ・ナデ。内 面ナデ・ミガキ。外面上半 に炭素吸着あり。内面と 下面下半は無。	和風型	
612	P411	床	陶器	羹	—	—	—	外) 緩7.5YR4/3 断) 灰白7.5Y7/1	石・長・雲・灰/ 粗多量	口縁部内外回転ナデ。口 縁部内面に自然施。	常滑 本京・中野編年 3~4世纪 12世纪後半~14世紀第1 四九期	
613	P411	須恵器	羹	—	—	—	—	外) 灰白N7/ 内) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白N7/	石・長・雲・粗・細、 黒色絞	硬	外面ナデ、内面回転ナデ。 外面に強いクロロ目。 内外面部分に黄色の自然施。	高知県龜山窯
614	P419	土師質 土器	杯	—	—	80	—	外) にぶい黄澄10YR7/2 断) 緩灰N3	石・長・雲・暗灰/ 粗・細	軟	内外面回転ナデ。外底回 転系切り。外縁強いクロロ 目。	
615	P425	—	盃	112	—	—	—	外) 緩灰2.5Y5/2 断) 灰白2.5Y7/1	黒色絞	硬	内外回転ナデ。内面施 輪。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉。	中国福建省組 窯窯
616	P428	須恵器	羹	—	—	—	—	外) 灰白N7/ 断) 灰白2.5Y7/1	石・長・雲・粗多量、 黑色絞多量	硬	外面平行状のタキ、内面 ナデ。	高知県龜山窯
617	P435	須恵器	羹	—	—	—	—	外) N6/ 断) 灰白N7/ 外) N5/ 断) 灰白2.5Y8/1	石・長・雲・粗	硬	外面平行状のタキ、内面 ナデ。	
618	P479	須恵器	羹	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1	石・長・雲・灰/ 粗	硬	外面平行状のタキ、内面 ナデ。	
619	P480	土師質 土器	小皿	6.8	15	5.1	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ・暗 灰・粗・細	硬	内外回転ナデ。外底回転 系切り。	
620	P480	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰10Y6/1 断) 灰白N7/	—	硬	内面ヘラと脚掻きによる文 様。灰オリーブ色を帯びる 透明の釉で貯入がある。	中国同安窯系 12世纪後半~ 13世纪前半
621	P483	土師質 土器	杯	—	—	6.2	—	にぶい黄澄10YR7/2	石・長・灰・褐色	硬	内外回転ナデ。外底回転 系切り。内外面強いクロロ 目。	
622	P483	土師質 土器	小皿	5.5	15	4.5	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 軟	内外回転ナデ。外底回転 系切り。	
623	P483	青白磁	皿	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 灰白N5/	—	硬	内面に蕩削による草花文。	中国
624	P483	須恵器	羹	—	—	—	—	外) 暗黄褐10YR5/2 断) 灰5Y6/1	石・長・雲・粗多量、 黑色絞多量	硬	外面平行状のタキ、内面 ナデ。	高知県龜山窯
625	P485	瓦器	碗	162	—	—	—	外) N5Y6/1 内) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y8/1	石・長・雲・チ/ 粗・細	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビサエ・ナデ。内 面ナデ・ミガキ。炭素は薄 くかかり部分的に剥離す る。	和風型	
626	P487	土師質 土器	杯	15.0	4.2	7.6	—	にぶい黄澄10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	内外回転ナデ。外底回転 系切り。内外面クロロ目。	
627	P487	須恵器	羹	—	—	—	—	外) N6/ 断) 灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	外面平行状のタキ、ナゲ、 内面圓潤のタキ。	
628	P490	瓦器	碗	166	—	—	—	外) 緩灰N3/ 内) 緩灰N3/ 断) 灰黄2.5Y7/2	石・長・雲・灰黒/ 粗・細	口縁部外面ヨコナデ。体部外側 ユビサエ・ナデ。内面ナ デ。炭素は薄く部分的に剥離す る。	和風型	
629	P496	土師質 土器	杯	—	—	7.5	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。内外面多段のクロロ 目。	
630	P500	土師質 土器	杯	166	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・赤風・灰/ 粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
631	P500	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	にぶい橙5YR7/4	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。外縁口内底クロロ 目。	
632	P500	土師質 土器	杯	—	—	7.9	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・赤風/ 粗	軟	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。外縁口内底クロロ 目。	
633	P500	土師質 土器	杯	—	—	8.0	—	にぶい黄澄10YR6/3	石・長・雲・粗・細	软	内外回転ナデ。外底回転 系切り。	
634	P500	土師質 土器	小皿	7.8	14	5.8	—	灰黄2.5Y7/2	石・長・雲・灰黒・ 赤風・粗・細	やや 軟	内外回転ナデ。外底回転 系切り。内面に強いクロロ 目。	
635	P500	土師質 土器	小皿	7.4	13	5.6	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	内外回転ナデ。外底回転 系切り。	
636	P500	土師質 土器	小皿	7.3	14	5.6	—	にぶい黄澄10YR7/2	石・長・雲・赤風/ 粗・細	软	内外回転ナデ。外底回転 系切り。	
637	P500	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y5/2 断) 灰白10YRG/1	—	硬	内面脚掻きによる文様。灰 オリーブ色を帯びる透明の 釉で貯入がある。	中国同安窯系 12世纪後半~ 13世纪前半

Tab.29 遺物観察表(23)

国版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有物物/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・年代・使用痕跡)	
				口径	器高	底径	最大径						
638	P520	土師質土器	小皿	6.6	1.1	5.4	—	にふい橙75YR7/4	石・長・雲・赤風・粗・織	内外面回転ナチュラル底回転系切り。			
639	P520	土師質土器	小皿	7.6	1.4	5.6	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ・粗・織	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。		
640	P520	土師質土器	杯	11.0	—	—	—	にふい橙75YR7/4	石・長・雲・赤風・粗・織	軟	摩耗し調整不明。		
641	P520	土師質土器	杯	—	—	8.2	—	にふい橙75YR7/4	石・長・雲・チ・粗・織	内外面回転ナチュラル底回転系切り。内底ロクロ目。			
642	P520	土師質土器	杯	—	—	8.3	—	灰黄25Y7/2	石・民・雲・チ・灰黒・赤・粗・織	内外面回転ナチュラル底回転系切り。外面凹凸ロクロ目。内底底面多段のクロ目。			
643	P520	土師質土器	杯	—	—	7.2	—	にふい橙75YR7/3	石・長・雲・チ・粗・織	内外面回転ナチュラル底回転系切り。			
644	P529	瓦器	碗	14.6	—	—	—	灰白5Y7/1	石・長・雲・粗・織	やや軟	口縁部外面ヨココテ、体部内面ヨコサエナガナ。内外面とも炭素吸着無し。	和泉型	
645	P519	土師質土器	小皿	—	—	6.1	—	浅黄橙75YR8/4	石・長・雲・チ・粗・織	内外面回転ナチュラル底回転系切り。			
646	P519	埴輪器	裏	—	—	—	—	外)灰白N7/1 内)黄灰25Y6/1 断)灰白N7/1	石・長・粗・多量、黑色粒多量	外表面平行状のタキタキ、内面ナチュラル。	高知県龜山窯		
647	P528 灰	埴輪器	裏	—	—	—	—	灰白N7/	石・長・粗・多量、黑色粒多量	外表面平行状のタキタキ、内面ナチュラル。	高知県龜山窯		
648	P521	瓦質土器	鍋	28.0	—	—	—	外) 黑 内) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	石・長・雲・粗・織	軟	口縁部内外面ナチュラル。体部外表面タケハケ。	14世紀後半以降	
649	P531	土師質土器	杯	13.0	—	—	—	橙75Y7/6	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底ロクロ目。		
650	P531	土師質土器	杯	13.2	—	—	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ・赤風・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底多段のクロ目。		
651	P531	土師質土器	杯	13.6	—	—	—	にふい橙75YR7/3	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底ロクロ目。		
652	P531	土師質土器	杯	—	—	6.0	—	浅黄褐10YR8-3 断)灰白10YR8-2	石・長・雲・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
653	P531	土師質土器	杯	—	—	8.0	—	にふい橙75YR6/4	石・長・雲・チ・粗・織	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。外底ロクロ目。		
654	P531	土師質土器	小皿	8.4	1.5	5.0	—	にふい橙5YR6/4 断)烟灰N3/2	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
655	P531	土師質土器	小皿	—	—	5.4	—	にふい黄橙10YR7/3	石・長・雲・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
656	P531	土師質土器	小皿	7.8	1.2	5.0	—	にふい黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・赤風・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
657	P531	土師質土器	小皿	6.8	1.1	6.0	—	外)浅黄橙10YR8-3 内)灰白黄橙10YR6-3 断)灰白10YR6-3	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
658	P536	土師質土器	小皿	7.8	1.4	—	—	黄灰25Y7/2	石・長・雲・赤風・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
659	P531	瓦器	碗	16.0	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・チ・粗・織	口縁部外面ヨココテ、体部内面ヨコサエナガナ。内面ナチュラル。炭素吸着無し。	和泉型		
660	P531	青磁	皿	10.6	—	—	—	外)にふい黄25Y6/3 断)灰白25Y7/1	—	硬	外面下半無釉。にふい黄色を帯びる透明の釉で貴人が入る。	中国	
661	P535	土師質土器	杯	—	—	9.0	—	橙75YR6-6	石・長・雲・灰・粗・織	軟	摩耗し調整不明。外底回転系切り。		
662	P535	土師質土器	小皿	8.0	—	—	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。		
663	P535	瓦器	皿	10.0	—	—	—	外)暗灰N3/ 断)灰白N8/	石・長・雲・粗	口縁部外面ヨココテ、体部内面ヨコサエナガナ。内面ナチュラル。炭素吸着良好。	和泉型		
664	P536	土師質土器	小皿	—	—	4.6	—	灰白10YR8/2	石・長・雲・チ・灰・赤風・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
665	P537	土師質土器	小皿	7.9	1.1	5.4	—	にふい橙75YR7/4	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
666	P537	土師質土器	小皿	6.6	1.2	4.7	—	にふい黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
667	P537	土師質土器	小皿	7.2	1.0	5.4	—	にふい橙10YR7/3	石・長・雲・チ・粗・織	やや軟	内外面回転ナチュラル。外底回転系切り。		
668	P537	瓦器	碗	15.0	—	—	—	外)灰N5/・黄灰25Y7/2 内)灰N5/・黄灰25Y7/2 断)灰白25Y7/2	石・長・灰・粗・織	やや軟	口縁部外面ヨココテ、体部内面ヨコサエナガナ。内面ナチュラル。炭素は部分的に剥離。	和泉型	
669	P537	瓦器	碗	—	—	4.6	—	外)黑・灰白25Y8/2 内)黑・灰白25Y8/2 断)灰白25Y8/2	石・長・雲・粗・織	やや軟	体部外面ユビサエ・ナチュラル。内面ナチュラル。炭素は部分的に剥離。	和泉型	

Tab.30 遺物観察表(24)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量			色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径					
670	P537	瓦器	輪	15.6	—	—	外:黒・淡黄橙10YR8/3 内:淡黄橙10YR8/3	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	やや 軟	口縁部外面コナデ。体部 外面ユビサエ・チナデ。内 面ナデ。炭素吸着無し。口 縁の一部は黒色に発色。	和泉型
671	P537	青磁	瓶	17.4	—	—	外:灰オリーブ5Y5/2 内:灰白5Y7/1	—	硬	灰オリーブ色を帯びる透明 の釉で貫入がある。	中国
672	P537	青磁	瓶	約18.5	—	—	外:灰オリーブ5Y6/2 内:灰白N7/	—	硬	灰オリーブ色を帯びる透明 の釉で貫入がある。	中国
673	P537	青磁	碗	16.8	—	—	外:灰オリーブ5Y5/2 内:灰白5Y7/1	—	硬	口縁部内面にヘラ形の北 側。灰オリーブ色を留める半 透明の釉。	中国龍泉窯系 森田分類鏡I-2 類又はI-4 類・小野分類鏡 A2類又はA4類 12世紀後半- 13世紀前半
674	P537	白磁	壺	11.2	—	—	外:灰白10Y7/1 内:灰白N8/	—	硬	内面施釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	中国
675	P537	白磁	壺	—	—	—	外:オリーブ黄5Y6/3 内:灰白5Y7/2 内:灰白N8/	—	硬	内面施釉。オリーブ黄色を 留める半透明の釉。	中国 675・676同一個 体
676	P537	白磁	壺	—	—	—	外:オリーブ黄5Y6/3 内:灰白5Y7/2 内:灰白N8/	—	硬	内面施釉。オリーブ黄色を 留める半透明の釉。	中国 675・676同一個 体
677	P537	須恵器	鉢	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲・粗・細、 黒色粒	硬	内外面回転ナデ。	東播磨系鏡3期 13世紀
678	P549	土師質 土器	杯	13.1	3.6	7.2	橙5YR7/6	石・長・粗	軟	摩耗し調整不明。内底ロク 口目。	
679	P651 上層	白磁	壺	—	—	—	外:灰白5Y7/2 内:灰白5Y7/1 内:灰白5Y8/1	—	硬	体部上位に2条の沈線。沈 線を施した耳を貼付。内外 面回転ナデ。内面クロロ目。 内面下半無釉。灰オリーブ 色を帯びる半透明の釉で貫 入がある。	中国
680	P680	土師質 土器	杯	15.0	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	内外面回転ナデ。	
681	P680	土師質 土器	杯	—	—	7.4	にぶい・橙5YR6/4	石・長・雲・暗灰/ 粗	软	内外面回転ナデ。系切り。外 底回転ナデ。内底ロクロ目。 内底強多い多段のロクロ目。	
682	P680 下層	土師質 土器	小皿	7.0	1.1	4.2	にぶい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
683	P680	瓦器	輪	—	—	—	外:にぶい・橙5YR6/4 内:にぶい・橙5YR6/4 内:にぶい・橙5YR6/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	やや 软	口縁部外面コナデ。体部 外面ユビサエ・チナデ。内 面ナデ。内面ととも炭素吸 着無し。	和泉型
684	P680	瓦器	輪	—	—	4.4	外:黄25Y6/2 内:淡黄橙10YR8/3	石・長・雲・暗灰/ 粗・細	やや 软	外面ユビサエ・チナデ。内 面ナデ。貼付高台。内外面 に薄い炭素吸着。	和泉型
685	P680	白磁	壺か	—	—	—	外:灰オリーブ5Y6/2 内:灰白5Y7/2 内:灰白5Y7/1	—	硬	内面強いロクロ目。内面施 釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉。	中国
686	P680	須恵器	鉢	—	—	—	灰N6/	石・長・粗・細、黑 色粒	硬	内外面回転ナデ。	
687	P680	陶器	壺	—	—	—	外:灰黄褐10YR5/2 内:青褐25Y5/3 内:脚灰10YR6/4 内:灰白25Y7/1	石・長・雲・粗・細、黑 色粒	硬	内外面に粘土帯接合痕。接 合部上面に平行状のタキ目。 内底に溝2mmの凹丸あり。	常滑 赤堀、中野編年 14世紀式 12世紀第4四半 期-13世紀第1 四半期
688	P680	須恵器	壺	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲・粗・細	硬	内外面回転ナデ。	
689	P695 柱痕	土師質 土器	杯	15.0	—	—	にぶい・橙75YR7/3	石・長・雲・暗灰/ 赤風・粗・細	软	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
690	P695	土師質 土器	杯	—	—	6.6	にぶい・橙75YR7/3	石・長・雲・赤風/ 粗・細	软	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
691	P695	土師質 土器	杯	—	—	6.3	灰黃褐10YR6/2	石・長・雲・暗灰/ 粗・細	やや 软	摩耗し調整不明。内底に溝 2mmの凹丸あり。	
692	P695	土師質 土器	小皿	—	—	5.2	にぶい・橙75YR7/4	石・長・雲・灰・赤 風・粗・細	软	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
693	P695	土師質 土器	杯	—	—	5.0	にぶい・橙75YR7/4	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
694	P698	土師質 土器	小皿	7.8	1.0	6.0	橙5YR6/6	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	摩耗し調整不明。	
695	P698	土師質 土器	小皿	7.6	1.3	5.6	にぶい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
696	P709	土師質 土器	小皿	7.8	1.3	6.6	にぶい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ/ 粗・細	软	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	

Tab.31 遺物観察表(25)

回版番号	出土地点	種類	器種	法量・重量			色調	胎土 (含有物質・粒度)	焼成	成形・調整・特徵	備考(生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径					
697	P709	土師質土器	杯	136	—	—	橙75YR7/6	石・長・雲・チ・粗・細	鉄	摩耗し調整不明。外面部口目。	
698	P709	土師質土器	杯	—	—	8.2	浅黃橙10YR8/3	石・長・雲・赤・暗灰・粗・細	やや鉄	摩耗し調整不明。外底回転系切り。内底多段のロクロ目。	
699	P709	土師質土器	杯	124	—	—	にふい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・暗灰・赤褐色・粗・細	鉄	摩耗し調整不明。外面部多段の盛り・ロクロ目。	
700	P709 下刷	土師質土器	杯	—	—	6.2	にふい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・暗灰・粗・細	やや鉄	摩耗し調整不明。外底回転系切り。	
701	P709	瓦器	碗	146	53	4.4	—	外) 桃N5・灰黄25Y7/2 内) 灰灰NS3 断) 灰黄25Y7/2	石・長・雲・チ・赤 透・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部円筒状の縮文。内底 格円筒の暗文。内底黄素吸 着良好。外面部縫合は 吸着無し。	和泉型
702	P713	瓦器	皿	9.1	—	—	—	外) にふい・黄橙10YR7/3 内) にふい・黄橙10YR7/3 断) にふい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ・暗 灰・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ヨコナダ・ナダ。底面 は剥離する。	和泉型
703	P774	丸器	皿	8.4	1.4	6.0	—	にふい・黄橙10YR7/2	石・長・雲・チ・赤 風・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。底面は剥離 する。	和泉型
704	P774	土師質土器	小皿	7.3	1.5	5.3	—	灰白10YR8/2	石・長・雲・チ・粗・細	鉄 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
705	P774	土師質土器	小皿	7.3	1.6	5.4	—	灰白25Y8/2	石・長・雲・チ・粗・細	やや鉄 内底回転ナダ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
706	P774	土師質土器	小皿	8.4	1.4	5.8	—	灰白10YR8/2	石・長・雲・チ・粗・細	やや鉄 内底回転ナダ。外底回転 系切り。	
707	P778	土師質土器	小皿	8.4	1.6	5.2	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・雲・チ・粗・細	やや鉄 内底多段回転ナダ。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
708	P774	瓦器	碗	14.0	4.6	5.0	—	外) 灰N5/ 内) 灰N5/ 断) 灰白5Y8/1	石・長・雲・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。内底回転状の縮文。 内底黄素吸着良好。	和泉型
709	P751	瓦器	碗	約11.6	—	—	—	外) 灰灰NS3/ 内) 灰NS5/ 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・チ・暗 灰・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。内底回転状の縮文。 内底黄素吸着良好。	和泉型
710	P764	土師質土器	杯	14.8	4.1	7.4	—	にふい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ・暗 灰・粗・細	内底回転ナダ。外底回転 系切り。内外面ロクロ目。	
711	P709	青磁	皿	9.2	—	—	—	外) 黄桃25Y5/3 断) 灰白25Y7/1	—	外面上半無施。黃褐色を帯 びる半透明の釉。	中国
712	SX3	瓦器	碗	—	—	5.6	—	外) 桃5YR7/6 内) 桃5YR7/6 断) 桃SYR7/6	石・長・雲・赤 風・粗・細	外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。貼付高台。底面吸 着無し。	和泉型
713	SX6	瓦器	碗	15.3	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1 断) 灰5Y7/1	石・長・雲・粗・細	口縁外面部ヨコナデ、体部 ビオサエ・ナダ。内面部 ナダ。内底に暗緑。底面吸 着良好。	和泉型
714	包含層Ⅱ層	土師質土器	杯	15.0	5.6	7.3	—	橙75YR6/6	石・長・細	摩耗し調整不明。外底回 転系切り。内底ロクロ目。	
715	包含層Ⅱ層	土師質土器	杯	12.8	3.7	7.0	—	にふい・黄橙10YR7/3	石・長・雲・チ・灰 ・粗・細	鉄 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。内底ロクロ目。	
716	包含層Ⅱ層	土師質土器	杯	14.4	3.9	8.0	—	にふい・黄橙10YR7/4	石・長・雲・細	鉄 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
717	包含層Ⅱ層	土師質土器	杯	—	—	5.7	—	橙5YR6/6	石・長・雲・チ・粗・細	鉄 摩耗し調整不明。内底多段 のロクロ目。底部円盤状。	
718	包含層Ⅱ層	土師質土器	杯	—	—	6.6	—	にふい・橙10YR7/3	石・長・雲・チ・粗・細	鉄 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
719	包含層Ⅱ層	土師質土器	小皿	8.5	1.3	6.7	—	灰白25Y8/2	石・長・雲・赤風・ 粗・細	鉄 摩耗し調整不明。外底回転 系切り。	
720	包含層Ⅱ層	土師質土器	小皿	8.2	1.4	5.0	—	にふい・橙75YR7/4	石・長・雲・チ・粗・細	やや鉄 内底へによるロ クロ目。外面部手彌ロクロ 目。	
721	包含層Ⅱ層	瓦器	碗	13.8	—	—	—	外) 灰桃25Y6/1 内) 灰桃5YR7/4 断) にふい・橙5YR7/3	石・長・雲・赤風・ 粗・細	口縁部外面部ヨコナデ、体部 外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。内外面とも底面吸 着無し。	和泉型
722	包含層Ⅱ層	瓦器	碗	15.2	—	—	—	外) 灰桃25Y6/1・灰白 25Y8/1 内) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y8/1	石・長・雲・チ・赤 透・粗・細	外面部ビオサエ・ナダ。内 面部ナダ。底面は外面上半 に薄く残り。外面部手彌ロ クロ目。	和泉型

Tab.32 遺物観察表(26)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法算・重量				色調	胎土 (含有物質/粒度)	焼成	成形・調製・特徴	備考(生産地、 年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	乾大径					
723	包含層 Ⅱ層	瓦器	輪	136	—	—	—	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y5/1・灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・赤楓／ 粗・細	口縁部外面 ヨコナデ。ユビ オサエ。体部外面ユビオサ ・ナデ。内面ナデ。外面 と内面の一部に炭素吸着あ り。	和良型	
724	包含層 Ⅱ層	瓦器	皿	8.0	1.6	3.5	—	外) 灰5Y4/1 断) 灰白2.5Y8/1	石・長・雲・細	内外面ユビオサエ・ナデ。 内外面炭素吸着良好。	和良型	
725	包含層 Ⅱ層	瓦器	皿	102	—	—	—	外) 雨灰N3/ 断) 雨灰N3/・灰白5Y8/1	石・長・雲・暗楓／ 粗・細	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。炭素吸着良好。	和良型	
726	包含層 Ⅱ層	白磁	皿	—	—	—	—	灰白5Y7/1	—	硬	平底。外底無釉。底白色を 帯びる透明の釉。	中国 森田分類既知類 13世紀後半～ 14世紀前半
727	包含層 Ⅱ層	青磁	輪	—	—	—	—	外) オリーブ灰2.5GY6/1 断) 灰白N8/	—	硬	内面片切による文様。オ リーブ灰色を帯びる透明の 釉。	中国龍泉窯系森 田分類既知類 I～4 類・小野分類既 知類 A4類 12世紀後半～ 13世紀前半
728	包含層 Ⅱ層	—	盤か	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 内) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰5Y6/1	黑色絞を含む	硬	外面ナデ。内面施釉。外 面無釉。灰黄色を帯びる半透 明の釉。内面に鉄絞。	中国
729	包含層 Ⅱ層	俎	鉢	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・灰／粗	内外面回転ナデ。	束縛系	
730	包含層 Ⅱ層	瓦	平凡	—	厚さ 21	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y8/1	石・長・雲・チ／ 粗・細	外面ナデ。内面布目。		
731	包含層 Ⅱ層	瓦質 土器	鍋	208	—	—	—	外) オリーブ黒5Y3/1 断) 雨灰N3/	石・長・雲・チ／ 粗・細	やや 軟	口縁部外面ヨコナデ。体 部外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。	13世紀後半～ 14世紀 外に埋。
732	包含層 Ⅱ層	瓦質 土器	鍋	—	—	—	—	灰白5Y7/1	石・長・雲・灰／ 粗・細	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面ナデ。内面ナデ。	口縁部外面ヨコナデ。 14世紀後半以降 外に埋。	
733	包含層 Ⅱ層	土器	土輪	残存長 [39]	全厚 1.0	全幅 12	孔径 0.3 重量 [41g]	黄灰2.5Y4/1	石・長・雲・灰・暗 灰／粗	—	外面ナデ。	
734	包含層 Ⅱ層	俎	裏	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗・細	硬	外面ナデ。粘土帶接合部付 近に平行状のタキ目。内 面ナデ。	
735	包含層 Ⅱ層	俎	裏	—	—	—	—	灰白5Y7/1	石・長・雲・粗。黑色絞 多量	—	外面平行状のタキ目。内 面ナデ。	高知県山鹿
736	包含層 Ⅰ層	磁器	中碗	102	—	—	—	外) 白 断) 白	—	硬	外面宝文か。口縁部内に 乳頭と略化した文様。	肥前 19世紀
737	包含層 Ⅰ層	白磁	紅皿	4.6	1.4	1.4	—	9.5) 白 断) 白	—	硬	壓搾成形。外表面による壓 搾。	肥前
738	包含層 Ⅰ層	白磁	紅皿	4.6	1.3	1.6	—	9.5) 白 断) 白	—	硬	壓搾成形。外表面による壓 搾。外面下部無釉。	肥前
739	包含層 Ⅰ層	陶器	小皿	—	—	4.0	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 内) 灰白5Y7/1	—	硬	内底に段。高台無釉。灰オ リーブ色を帯びる半透明的 釉。内底に土目吸。	肥前 1300～1600年代
740	包含層 Ⅰ層	陶器	裏	220	—	—	—	外) 黑褐7.5YR3/2 内) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・粗、黑色絞	硬	体部外面に黒絞。肩部に黒 色の釉を刷し掛け。口縁部 と内面灰釉。	丹波
741	包含層 Ⅰ層	銅製品	鍍金 吸口	全长 7.1	全厚 1.0	全幅 1.1	孔径 0.5 重量 86g	—	—	—	表面に金が残存。	
742	SD15 下層	土師質 土器	小皿	7.9	1.4	6.4	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・灰／ 粗・細	やや 軟	内外面回転ナデ。外底刻 糸切り。	
743	SK130	土師質 土器	小皿	—	0.8	—	—	外) にぶい橙7.5YR6/4 断) 黄灰2.5Y4/1	石・長・雲・粗・細	—	内外面回転ナデ。外底刻 糸切り。	
744	SD16	土師質 土器	小皿	7.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
745	SD16	土師質 土器	杯	—	—	5.8	—	にぶい橙7.5YR7/4	石・長・雲・粗・細	軟	摩耗し調整不明。	
746	SK130	俎	鉢	—	—	—	—	9.5) 灰N5・黄灰2.5Y6/1 断) 黄灰2.5Y6/1	石・長・雲・灰／粗	硬	内外面回転ナデ。口縁部外 面の灰色に発色。	束縛系
747	SD16	俎	鉢	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・粗	硬	内外面回転ナデ。口縁部外 面に自然釉。	束縛系
748	SK130	土器	土輪	残存長 [30]	全厚 1.1	全幅 12	孔径 0.4 重量 [25]	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・細	—	外面ナデ。	
749	SD16	白磁	輪	168	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	—	—	灰白色を帯びる半透明の釉 で買入が入る。	中国 森田分類既知類 M 類か 12世紀～13世 紀初頭

Tab.33 遺物観察表(27)

回版 番号	出土 地点	種類	器種	法量・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	焼成	成形・調整・特徴	備考(生産地・ 年代・使用鉱物)
				口径	器高	底径	最大径					
750	SD16 下層	青白磁	皿	—	—	6.6	—	外) 明緑灰 7.5GY8/1 内) 灰白 5Y8/1	—	内底に蘭刻文様。外底施 釉。	中国	
751	SD16 上層	瓦質 土器	鍋	—	—	—	—	外) 灰 NA4/ 内) 灰 5Y5/1 断) 灰 5Y5/1	石・長・暗灰・灰/ 粗	内外面ナデ。	14世紀後半以降	

【遺物観察表凡例】

- 1) 法量・重量: [] は残存分。
- 2) 色調: 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。
- 3) 胎土: 含有鉱物は、石=石英、長=長石、雲=雲母、チ=チャート、砂=砂岩、とした。その他、鉱物名が不明なものについては、赤風=赤色風化粒、赤=赤色系鉱物、赤褐=赤褐色系々、灰=灰色系々、灰黒=灰黒系々、白=白色系々、黒=黒色系々とし、特徴を記した。粒度については、20倍率ルーペを用いて含有鉱物の観察を行なった。鉱物の粒度区分は土壤学区分によっており、およそ2mm以上を砾、200μ～2mmを粗砂、200μ以下の砂粒を細砂とした。「細」「粗・細」「粗」の表記分けについては、水鏡が良好で粗砂を殆ど含まず細砂のみ含むものを「細」、細砂が多く粗砂が少ないものを「粗・細」、粗砂が多いものを「粗」とし、相対的に区分した。また、特にその量が多いものについては「多」と表記した。
- 4) 焼成: 焼成については、土器・須恵器についてのみ相対的に区分し表記している。「硬」は焼成が良好で器表の摩耗が殆どみられないもの、「軟」は焼成が不良で触ると胎土が粉状に剥離する程度のもの、また、その中間的なものについては無表記とした。

第V章 考察

第1節 弥生時代から古代の検出遺構と遺物

はじめに

今回の神田ムク入道遺跡の調査では、弥生時代後期から古墳時代にかけての自然流路、古代の集落に伴う遺構が検出され、該当期の遺物が出土した。神田南部地域での弥生時代から古墳時代の遺跡については不明な所が多く、周辺域での該当期の動向を知る貴重な成果が得られている。また古代については、これまでに神田川北岸の鶴部遺跡発掘調査にて8世紀末～9世紀の掘立柱建物跡、溝、横列が確認されているが、今回、神田南部地域まで古代の遺跡が広がっていることが新たに確認できた。

本節では、弥生時代から古代までの検出遺構と遺物について概要を述べる。遺構数、遺物量とも少なく、不十分なところが多いが、今次検出遺構・遺物の特徴と性格についてまとめておきたい。

1. 弥生時代～古墳時代の環境と遺物

神田ムク入道遺跡が所在する神田地区では、現在、鏡川の一支流である神田川が北方を流れているが、かつてその河道は一定せず、度々氾濫を繰り返したとみられる。このため神田地区周辺には、現在も蛇行する旧河道路らしい地形が幾筋か認められている。(Fig.2・3) 今次調査区においても、IV・V層(シルト質砂層・砂礫層)が堆積した古墳時代以前には、北方を蛇行して流れる河川の影響を強く受ける環境下にあり、支流の河筋にあたっていたとみられ、特に調査区南壁の西側部分では、自然流路の一部とみられる砂礫層(SRL)が検出されている。

今次調査にて出土した弥生時代～古墳時代の遺物は、主にこの自然流路と遺物包含層IV・V層から出土したもので、IV・V層出土遺物については周辺の遺跡からの流れ込みの可能性が高い。

このうち、自然流路SRLからは、弥生土器及び土師器の高杯(1)・甕(2～7)、須恵器壺(8)・壺又は瓶(9)など、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土し、包含層V層からは、弥生後期末の二重口縁壺(10)、弥生土器及び土師器の甕(11～17・19・20・28)・鉢(21)・高杯(22～27)、叩石(31)、須恵器蓋(29)・甕(30)など弥生時代末～古墳時代の遺物が出土している。また、IV層からの出土遺物は少量であるが、土師器甕(32)、須恵器杯(50)・甕(41)など古墳時代から古代7世紀までの遺物が出土している。

この他、包含層III層(シルト層)の下位からも古墳時代の遺物が出土するが、須恵器杯(49・51～54)・杯蓋(36・37)・高杯(38)・平瓶(39)・平瓶又は提瓶(40)・甕又は壺(44～46)・甕(47)・瓶(48)など古墳時代後期から古代7世紀までの遺物が主体をなしている。

これらの出土状況から、本調査地点の周辺が居住域として安定し始めるのは、III層の堆積が始まると古墳時代後期以降とみられる。そして古代には安定した立地環境へ移ったとみられ、遺構群が出現し始める。

2. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑45基、ピット92基、性格不明遺構2基を検出した。遺構は8世紀～9世紀のものが主体をなすが、8世紀～9世紀の遺構検出面より下位の面では、SK124・P511・512・514～516・747など7世紀に遡る遺構が少数確認されている。

出土遺物は8世紀～9世紀のものが最も多く、土師器杯・皿・盤・壺・須恵器杯・皿・高杯・杯蓋・壺蓋・壺・壺・製塙土器・土錐などがある。この時期の遺物で注目されるものとしては、SK16出土の赤色塗彩土師器の細片(81)、中世遺構への混入品である赤色塗彩土師器杯(220)・赤色塗彩土師器杯又は皿(221・222)がある。このうち81・221・222は灰白色、220は浅黄橙色の胎土をもち、その表面に赤色の顔料で塗彩している。この赤色塗彩土師器が一定量出土した県下の遺跡には、下ノ坪遺跡、十万遺跡、深渕北遺跡、田村遺跡などがあるが、きわめて限定期的な分布で、寺院や地域の拠点、中央権力と在地支配層との接点となる遺跡、水上・陸上交通の要衝に位置する遺跡に特定されている。^(註1)この他、搬入品では、7世紀～8世紀の土師器椀(209)、9世紀以降の京都系綠釉陶器(178)などが含まれる。また製塙土器(186～191・263～267他)は41点が出土している。

一方、7世紀までの遺物では、7世紀の須恵器椀(195・196)、6世紀末～7世紀の須恵器杯(49～54・104・105・126)と須恵器杯の蓋(74・125)などが出土している。

さて、今回の調査地点にて、8世紀～9世紀の遺構が多く検出されたことは先述の通りである。この時期の遺構では、官衙や豪族の居宅を思わせる大型の柱穴を作り掘立柱建物跡は検出できていないが、赤色塗彩土師器や搬入品、製塙土器が出土していることなどからみると、周辺に寺社や地域の拠点的施設が存在していた可能性が考えられる。

神田ムク入道遺跡が所在する神田と近隣の朝倉地区には、古代の条里地割が広く分布することが指摘されており^(註2)、神田ムク入道遺跡の東方にもN-16°-Wの軸をもつ地割構が分布している。これによって、古代の神田では律令制下の土地開発と管理が進められたことが推察され、神田ムク入道遺跡でも関連の集落が展開したと考えられる。また、神田ムク入道遺跡の北には、延喜式内社である郡頭神社があり、これを祀る勢力の屋敷が周辺に存在したことも想定される。

また本遺跡では、検出遺構数は少数ながら、先行する6世紀末～7世紀の遺物も良好な状態で出土しており、奈良時代より以前の集落が近隣に展開したことが示唆されている。

[註]

- 1) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 下ノ坪遺跡の成果を中心として」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会1998年
- 2) 大脇保彦「土佐の条理」「高知の研究2 古代・中世編」昭和57年

[参考文献]

- 「深渕北遺跡」野市町教育委員会1996年
「十万遺跡」香我美町教育委員会1988年
「鴨部遺跡」高知市教育委員会2002年
「田村遺跡群Ⅱ」高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年

第2節 神田ムク入道遺跡、中世検出遺構の性格と変遷

はじめに

今回の調査では、古代末～中世の掘立柱建物跡12棟、土坑62基、井戸1基、溝及び溝状遺構13条、ピット642基、性格不明遺構2基を検出した。これらの遺構は南北方向の溝を境として、それより東側に分布しており、溝によって区画された屋敷地の一角を構成するものであったと考えられる。

本節ではこれらの遺構のうち、特に屋敷地の性格を特徴付ける掘立柱建物跡、溝、井戸を取り上げ検討する。そして検出遺構の分析を通して、屋敷地の構造と空間構成を復元し、その変遷の姿をみていくこととする。

1. 検出遺構の特徴

(1) 掘立柱建物跡

古代末～中世の掘立柱建物跡では1間×3間の東西棟建物12棟を確認した。調査区内には柱痕をもつピットが他にも分布しており、確認できたもの以外にも多くの建物が存在したと考えられるが、ここではSB4～15についてその特徴をまとめておきたい。

まずSB4～15は建物の軸方向や規模に一定の規格性をもつものがあるため、共通の規格をもつグループに分類し、これに建物間の重複や近接があり併存したと考えにくいものなど、位置関係を加えて検討した。また、遺構の切り合い関係や出土遺物等も、建物群の帰属時期を推定する根拠とした。なお、各建物の規模の詳細はTab.34に示している。

①分類

1群 (SB12・13)

調査区南部で検出した1間×3間の東西棟建物で、SB12・13が該当する。軸方向はN-87°～88°-Eと、真北より2～3°西に振っており、後述の建物群と異なる。柱間寸法が1.98～2.13mと小さく、また梁間が3.80～3.84mと大きい点にも違いが認められる。面積は22～24m²前後と、後述の建物群に比較すると大型で、特にSB12では径40～60cm前後の大型の柱穴をもつ。

2群 (SB4～11・14・15)

中央部から北部で検出した1間×3間の東西棟建物で、SB4～11・14・15が該当する。軸方向はN-86°～90°-Wではらつきがあるが、真北あるいは真北から東に2～4°振った軸をもつ。ただしSB4は例外として西に1°振っている。これら2群の建物については、規模や形態、柱間寸法の規格などから、以下のタイプに細分が可能である。

2-A群 (SB4・5)

SB4・5が該当する。軸方向はSB4が西に1°振り、SB5が東に2°振るなど一定しない。梁間の規模は2.44～3.04mと若干の違いはあるが、ともに桁行が5.80m、柱間寸法が1.93mで共通性がみられる。面積は14～17m²前後と、やや小型である。他建物との前後関係をみると、SB4が後述するSB6(B群)とSB8(C群)に切られ、SB5もSB8(C群)に切られており、他の建物に先行する一群と考えられる。また、SB4とSB5は近接しており併存は考えにくい。

2-B群 (SB8~11)

SB8~11が該当する。B群ではSB8・10が真北、SB9・11が東に3~4°振った軸方向をもつ。建物の規模は梁間が3.24~3.36m、桁行が5.68~6.40mと大型で、柱間寸法は1.89~2.13mとなる。面積は18~21m²前後と、やや大型化する。B群はA群に後続する建物群であるが、B群内においても、位置関係からみてSB8~11の併存は考えにくく、少なくともSB8・10とSB9・11で前後関係があったと思われる。

2-C群 (SB6・7・14・15)

SB6・7・14・15が該当し、真北に沿った軸方向をもつ。規模は梁間が2.36~2.90m、桁行が7.50~8.50mと東西に長い建物形態になり、柱間寸法は2.50~2.83mと大きくなる。面積は20~24m²前後と、やや大型である。他SBとの前後関係をみると、SB6がSB4（A群）を切り、SB14がSB10（B群）を切っており、最も新しい段階の建物群と考えられる。またC群内においても、位置関係からみてSB6・7の併存は考えにくく、少なくとも2度の建て替えがあったと思われる。

②建物の形態変化と帰属時期

これらの建物群について、出土遺物や建物の位置関係、他構造との切り合い関係を考え合わせると、本屋敷地では1群→2-A群→2-B群→2-C群という変遷が想定される。さらに、2群については同一地点での建物の重複が多く、最低6度の建て替えがあったことが推察される。

またこれらの変遷に伴って、建物は1群から2群にかけて大型のものからやや小型のものへ移行するなど、規模の変化がみられる。軸方向についても、西に振ったもの（1群）から、真北あるいは東に振ったもの（2群）への緩やかな変化が認められる。

次に各建物群の帰属時期については、まず、1群に属するSB12から12世紀後半~13世紀前半の中国同安窯系青磁碗・皿と、12世紀第4四半期~13世紀第1四半期の常滑焼甕が出土しているため、SB12（1群）の廃絶が12世紀第4四半期以降に推定できる。次に、2-A群に属するSB5からは中国龍泉窯系青磁碗（森田分類碗I-5b類）、瓦質土器鍋等の13世紀後半~14世紀前半の遺物が出土しているため、SB5（2-A群）の廃絶が13世紀後半以降に推定できる。また2-B群と2-C群については、SB8（2-B群）が13世紀後半~14世紀前半の遺物を含むSK41を切るため、SB8（2-B群）の出現が13世紀後半以降に特定できる。また、13世紀後半~14世紀前半の遺物を含むSD10がSB5（2-A群）とSB8（2-B群）を切り、SB9・10（2-B群）とSB6・7（2-C群）に切られていることから、SB9・10（2-B群）とSB6・7（2-C群）の出現が13世紀後半より以降と特定できる。この他、2-B群と2-C群建物からは瓦器碗・皿、瓦質土器羽釜などの13~14世紀の遺物が出土しているため、その廃絶は13~14世紀以降に比定できる。

以上のことから、各建物群の廃絶年代は、1群が12世紀第4四半期~13世紀前半、2群が13世紀後半~14世紀前半に帰属する。特に2群については、13世紀代の遺物が主体を占めており、14世紀の遺物は瓦質土器鍋などごく一部であるため、その終焉は14世紀前半の早い時期までにとどまる可能性がある。

(2) 溝

溝は調査I区で14条(SD1~14)、II区で2条(SD15・16)を検出した。これには時期、性格ともに不明なものも含まれるが、ここでは特徴的なものを取り上げ、その機能と年代観について検討を加えておきたい。

①屋敷境の溝 (SD1・2・4・8)

SD1・2・4・8は調査区西部で検出した南北方向の溝で、軸方向は、SD1がN-4°-W、SD2がN-3°-Wと、ともに真北から3~4°西に振った軸をもつ。SD4とSD8については軸が一定しないが、SD4が北部でN-3°-E、南部でN-3°-W、SD8が北部でN-0°-E、南部でN-2°-Wで、ともに南部で西に2~3°振っており、北部ではやや東に振る。これらの南北方向の溝SD1・2・4・8については、溝を境界に以西での遺構が激減すること、軸方向が建物群に共通することなどから、屋敷境の溝であった可能性が高い。

出土遺物については土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、須恵器甕、常滑焼甕など12世紀後半~13世紀を主体とするものが出土しており、建物群との併存が推定できる。

②性格不明の溝 (SD5・6・9・10・10')

調査区西部に位置するSD5・6、中央部のSD9、北部のSD10・10'がある。

SD6はN-85°-Eの軸をもつ東西方向の溝である。西に4°振った南北溝SD5とは直角に交わることになるので、両者が別の屋敷の区画溝の一部であった可能性も考えられるが、双方とも部分的な検出であり、屋敷地との関係性がよく分からぬ。切り合い関係ではSD4・5に切られており、これに先行する段階のものである。土師質土器杯・小皿、瓦器椀・皿、常滑焼甕などが出土しており、12世紀末から13世紀の溝とみられる。

SD9は調査区中央部を南北に延びる溝で、1群のSB13、2群のSB15に切られている。性格はよく分からぬが、位置関係からみて本屋敷地の区画溝以外のものと考えられる。軸方向はN-7°-EからN-9°-Eで、建物群との共通性は認められない。

SD10・10'はN-60°-EからN-70°-Eの軸方向をもつ溝で、SB5(2-A群)とSB8(2-B群)を切り、SB9・10(2-B群)とSB6・7(2-C群)に切られていることから、屋敷地が機能する間に敷地内に掘削された溝と考えられる。廃絶に際して、東部側では完形に近い土師質土器が多く廃棄されている。廃棄遺物中には13世紀後半~14世紀前半の白磁皿が含まれていることから、SD10の廃絶年代は13世紀後半以降と考えられる。

③周溝状遺構 (SD7・13)

調査区の北端と東端で検出したSD7・13は、部分的な検出であるが、楕円形あるいは隅丸方形のプランをもって巡る周溝状の遺構であった可能性がある。中世前期における類例の遺構は、高知県中央部の西野々遺跡で検出された周溝があり、周溝墓の可能性が指摘されている。時代は15世紀に下るが高知県中央部の田村遺跡群では、溝によって区画された中世屋敷地の一画に屋敷墓が出現しており、神田ムク入道遺跡においても、周溝によって区画された小規模な墓域が居住域の近辺に出現していた可能性がある。田村遺跡では集石を伴う中世墓が検出されているが、本調査区では周溝内部での墓坑および類例の遺構は検出できていない。

他遺構との切り合い関係では、SD7がSB7（2-C群）とSB9（2-B群）を切り、SD13がSB12を切っている。こうしたことから、SD7・13は建物群に後続する遺構であり、屋敷地が終焉した後に、墓域の一部として機能していた可能性がある。

（3）井戸

SE1は調査区の東部で検出された石組の井戸で、底には木製の曲物がはめ込まれている。SE1に交わるように掘削された中世の遺構は無く、屋敷地の継続期間を通じて最終段階まで機能した可能性がある。SE1埋め戻しの埋土中からは13世紀後半～14世紀前半の白磁皿が出土しており、井戸の廃絶は13世紀後半～14世紀前半以降に比定される。

なお、同様の形態をもつ井戸は東に接する平成7年度調査地点でも検出されている。

2. 屋敷地の空間構成と変遷

ここまで検討したように、今次検出の遺構群は、12世紀後半～14世紀前半にかけての屋敷地に関する施設であった。以下では、この屋敷地の空間構成やその変遷過程について、若干の考察を行いたい。

（1）屋敷地の規模と空間構成

まず屋敷地の規模については、今次調査区内では明瞭な東西方向の区画溝が検出されていないため、敷地の南北の長さが明らかにできない。しかし調査区西端で検出された南北溝SD4が30.9mの検出長をもつことから、少なくとも南北31m以上の規模をもつ敷地であったことが推定される。また、現在の敷地南側道路のラインまで屋敷地が延びると仮定すれば、南北42m以上の規模を推定することができる。一方、東西の規模については、東側に接する平成7年度調査にてほぼ同時代の溝、掘立柱建物跡、井戸等が検出され、同じ屋敷地の一部である可能性も考えられるため、これを参考したい。まず、平成7年度調査区では屋敷境とみられる溝が東部で検出されており、これを屋敷地の東端とし、今次調査のSD1・2・4・8を西端と仮定すれば、東西幅約45m、南北幅31～42m、敷地面積1395～1890m²以上の方形のプランをもつ屋敷が復元できよう。(Fig.97－復元案A)

この他、部分的な検出ではあるが、今次調査のII区でN-5°-Wの軸方向をもつ2条の溝、SD15・16が検出されている。溝は出土遺物から13世紀～14世紀に比定されるものであるが、これがさらに南側まで延び区画溝になると仮定すれば、西側の屋敷地（今次調査区）は東西幅28m前後、東側の屋敷地（平成7年度調査区）は東西幅17m前後となり、各々の屋敷が敷地の東隅に1個の井戸を設けるという空間構成になろう。(Fig.97－復元案B) そしてこれによると、西側の屋敷地では868～1176m²以上の敷地面積が推定できる。

さて、復元案Bによって東西2棟の屋敷が存在すると仮定すると、東西の屋敷はともに敷地の東端に井戸を設けた空間構成となる。屋敷地における井戸の設置位置について、14・15世紀代に成立した中世屋敷地が多数検出された田村遺跡群の事例を参考にすると、田村遺跡群では殆どが屋敷地で敷地の南東部に井戸が設けられており、井戸の配置に規則性があったことが報告されている。^(注1)また、田村遺跡群の事例では、井戸を所有している屋敷は概して大規模な屋敷が多く、殆どが敷地面積1000m²以上のものであったとの報告がなされており、本調査区の状況ともほほ類似している。

そしてこうした他遺跡での井戸の配置の在り方を参考にすると、今次調査区の屋敷地については、2つの屋敷が各々1基の井戸を敷地東部に設けた（復元案B）と考える方がより妥当に思われる。

また、後節にて触れる『神田庄地検帳』によれば、16世紀末の屋敷地では、「上ヤシキ」は、「式反廿壱代」と「壱反十代」の敷地面積のものがあり、また「中ヤシキ」「下ヤシキ」はその敷地面積は様々で、「中ヤシキ」では面積が十五代から四十代、「下ヤシキ」では五代から一反までのものがある。これに比較すれば、本屋敷地の規模や屋敷の等級についてもある程度の推定ができ、今次検出の屋敷地は「中ヤシキ」程度の規模をもっていたことが推察されよう。

次に区画溝に視点を移すと、SD1とSD2、SD4とSD8など、2条の溝が平行して延びる様子が検出されている。このような2条の溝に挟まれた小空間は隣接する屋敷地間の緩衝地帯の役割を果たすとともに、通路の機能も兼ねたものだろうか。本調査区ではSD1・2・4・8の他にも区画溝の可能性をもつものが検出されており、神田ムク入道遺跡とその周辺には、区画溝によって囲まれた屋敷地が連続して広がっていたと推察される。

(2) 屋敷地の変遷

それではこれらの屋敷地はいつ成立し、どのような変遷を遂げたのだろうか。以下は各検出遺構群の出現と消失の在り方を再度まとめ、その変遷過程について検討したい。

1期～屋敷地の出現

本調査区の屋敷地を構成する遺構群はいつ頃から出現したのだろうか。前項までの検討では、初期の段階の掘立柱建物（1群）の廃絶時期は、早くとも12世紀第4四半期以降に位置付けられている。この初期の建物群の出現年代については特定し難いが、調査区全体での出土遺物の年代幅を検討することによって、ある程度の推定は可能であろう。

今回確認できた初期の段階の遺物では、11世紀の灰釉陶器椀（179・180）、12世紀の白磁碗IV・V・VI類（301・591・592）、12世紀～13世紀初頭のVII類（749）、12世紀後半～13世紀前葉の青磁碗I～2類、I～4類（339・396・340・341・342・480・546・596・597・673・727）、白磁壺（544・674・675・676・679）、壺又は水注（603）、青白磁皿（623・750）などがあるが、奢侈品的性格をもつ白磁壺・水注・青白磁は伝世しやすく、また古代末の灰釉陶器椀についても包含層からの少量の出土であるため、遺構年代の検討対象から除く。この中で白磁碗（301・591・592・749）はSB12～P3・P156・271・SD16から出土しているが、うちSB12では白磁が12世紀第4四半期の遺物と供伴、P271では12世紀後半以降の遺物と供伴、SD16でも13世紀以降の遺物と供伴する。このため、白磁も殆どが12世紀後半以降の遺構内から出土したものと考えられる。

よって、今次検出の遺構群は最も初期のものでも12世紀後半以降に廃絶年代が求められ、本屋敷地の出現時期も12世紀後半を大きく過らないだろうと推定される。これ以前については、様相がつかめないが、包含層から11世紀の灰釉陶器椀（179・180）が出土していることを考えると、近隣に先行する屋敷地が存在していた可能性も否定できない。

2期～屋敷地の展開

その後、12世紀後半から14世紀にかけて、少なくとも6・7回の建物の建て替えが考えられ、その間に建物の規模が縮小し、軸方向が西に振るものから真北～東に振るものへと変化していったこと

は先述の通りである。今回建物と特定できたもの以外にも敷地内には多くの柱穴が分布しており、この期間に掘立柱建物が盛んに建てられ、屋敷地が盛行したことが窺われる。

西側の区画溝については、屋敷地の拡張 (SD4・8 → SD1・2)、あるいは縮小 (SD1・2 → SD4・8) に応じて区画溝の位置が変更された可能性が考えられる。先に1群とした初期の建物をみると、SB13がSD4に非常に近接しており、1群とSD4との併存が考え難い。また、SD4・8が多くの中世の遺構を切っていることからみても、SD4・8が屋敷地内に一定の遺構が出現した後に新たに掘削されたものであることが分かる。こうした点からみて、屋敷地は2期のいずれかの段階で、区画溝が東へずれ (SD1・2 → SD4・8)、敷地がやや縮小されたことが推察される。

井戸については終始その地点は一定であり、他遺構との切り合いが見られないことから、屋敷地自体の終焉まで機能し続けたと推察される。

3期～屋敷地の終焉と墓域の出現

屋敷地の終焉時期については、該当時期のまとまった廃棄遺物が無く、明瞭な根拠が得られない。

しかし、井戸SE1の埋め戻しに伴う廃棄遺物には、13世紀後半～14世紀前半の白磁IX類皿(432)が含まれており、屋敷地の廃絶もこの時期に近いと推察される。また、最終段階まで機能したとみられる区画溝SD4からは、東播系須恵器甕(450・452)、13世紀後半～14世紀前半の青磁碗I-5b類(448)が出土している。

この他、屋敷地廃絶後の遺構である周溝SD7からは13世紀までの遺物、SD13からは14世紀前半までの遺物が出土しているのみで、14世紀後半を下る遺構は確認できていない。

こうした出土状況からみて、屋敷地の終焉時期は14世紀前半までであり、14世紀後半まで下るとは考え難い。本調査区では、これ以後中世の遺構は出現せず、15世紀以降の出土遺物も確認することができない。

3. 屋敷地の特質

さて、上述の変遷過程をまとめると、大きく次の様になる。(Fig.95・96)

1期：屋敷地の出現と1群建物の展開 (12世紀後半～13世紀前半)

2期：2群建物の展開 (13世紀後半～14世紀前半)

3期：屋敷地の終焉と墓域の出現 (14世紀前半)

これによれば、神田ムク入道遺跡では150～200年程度の期間に屋敷地が盛行、終焉しており、ここで大きな画期は、屋敷地が出現する12世紀後半と、屋敷地が終焉する14世紀前半にあったことが分かる。14世紀前半以降、本調査区は墓域と耕作地に転じており、このような動向は屋敷地の性格を反映したものと考えられよう。

また、全ての時期を通じて屋敷地のあり方を規定した軸については、建物の軸方向が西に2～3°振るもの(1群)から、真北あるいは東へ3～4°振るもの(2群)に移るなど多少の変化はあるものの、全体を通じて真北からあまり大きく振ることがないといえる。これを、朝倉・神田地区に分布する古代条里遺構の軸に比較すると、古代の地割は西に16°振った軸をもっており⁽³⁾⁽²⁾、古代条里地割からの影響は認めにくい。

神田ムク入道遺跡では2次にわたる発掘調査によって、溝に区画された屋敷地が連続して広がっていることが確認された。13世紀を中心に盛行したこれらの屋敷群は、どの様な性格をもち、地域の歴史事象の中でどのような位置付けがなされるのだろうか。これらの問題については、次節以降、遺跡を取りまく立地環境や出土遺物の内容を検討しつつ補っていくこととしたい。

[註]

- 1 田村遺跡では、溝によって囲まれた中世の屋敷31区画が検出されており、うち16区画において石組の井戸が検出されている。井戸は溝によって囲まれた屋敷地の南東部に構築されている。「田村遺跡群」5号「中～近世小結」高知県教育委員会1986年
- 2 朝倉、鴨部、神田地区など鏡川下流域にN-16°-Wの地割遺構が広く分布することが指摘されている。
大脇保彦「土佐の条理」「高知の研究2 古代・中世編」昭和57年

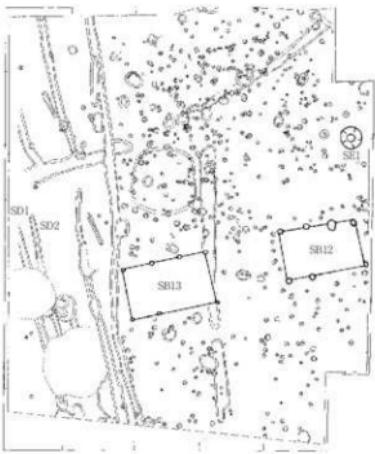
[参考文献]

「神田ムク入道遺跡」高知市教育委員会2005年

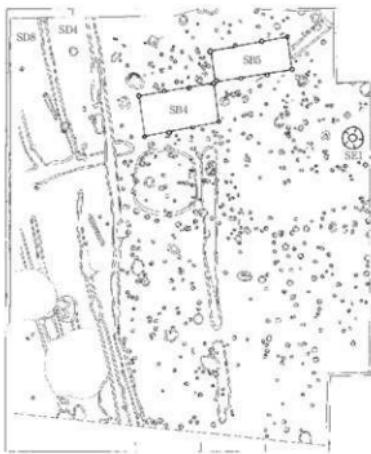
Tab.34 据立柱建物跡計測表

分類	遺構名	桁行の軸	真北との ずれ	規模				面積 (m ²)
				梁×桁(間)	梁間(m)	桁行(m)	桁行の柱間 寸法(m)	
1群	SB12	N-87°-E	西に3°	1×3	3.80	5.94	1.98	22.57
1群	SB13	N-88°-E	西に2°	1×3	3.84	6.40	2.13	24.57
2-A群	SB4	N-89°-E	西に1°	1×3	3.04	5.80	1.93	17.63
2-A群	SB5	N-88°-W	東に2°	1×3	2.44	5.80	1.93	14.15
2-B群	SB8	N-90°-W	0°	1×3	3.36	6.04	2.01	20.29
2-B群	SB10	N-90°-W	0°	1×3	3.30	6.14	2.04	20.26
2-B群	SB9	N-86°-W	東に4°	1×3	3.24	5.68	1.89	18.40
2-B群	SB11	N-87°-W	東に3°	1×3	3.30	6.40	2.13	21.12
2-C群	SB6	N-90°-W	0°	1×3	2.36	8.50	2.83	20.06
2-C群	SB7	N-90°-W	0°	1×3	2.90	8.30	2.76	24.07
2-C群	SB14	N-90°-W	0°	1×3	2.78	7.50	2.50	20.85
2-C群	SB15	N-90°-W	0°	1×3	2.84	7.50	2.50	21.30

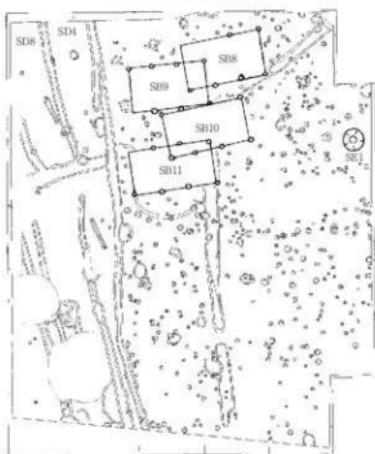
1期（1群建物の出現）



2期（2-A群建物）



2期（2-B群建物）



2期（2-C群建物）

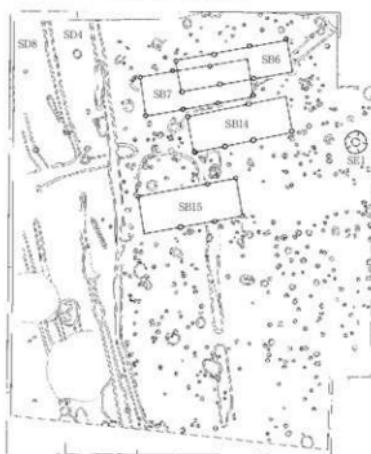


Fig.95 神田ムク入道遺跡屋敷地の変遷 (1)



Fig.96 神田ムク入道遺跡屋敷地の変遷 (2)



Fig.97 神田ムク入道遺跡屋敷地の空間構成

第3節 中世神田の景観復元 —『長宗我部地検帳』にみえる中世の神田と神田ムク入道遺跡

はじめに

前節までで触れたように、神田ムク入道遺跡では溝によって開まれた古代末～中世の屋敷地が展開し、12世紀後半から13世紀にかけて盛行した。しかし屋敷地は14世紀前半には廃絶し、以降、耕作地へと転じている。本遺跡にみられるこうした屋敷地の出現と廃絶のあり方は、地域の歴史事象の中でどのような意味をもつただろうか。

本節では、今次検出の屋敷地の性格を探る手立てとして、『長宗我部地検帳』を取り上げる。そして同帳での記載内容をもとに、文献史学や歴史地理学の視点から中世神田の景観復元を試み、そこから読み取られる神田ムク入道遺跡の立地と性格を明らかにしたい。また、あわせて遺跡の変遷の背後にある地域の歴史的動向についても検証したい。

1.『長宗我部地検帳』にみえる中世の神田

神田之庄地検帳

神田に関する記述は、天正16年(1588)『長宗我部地検帳』の『神田之庄地検帳』に収められている。その村城は「西ハ猿谷朝倉境北ハ川を詰面東ハ袖崎限瀬江境を限」と示され、冒頭には「土州土佐郡神田之庄地検帳之事」とあり、「天正十六年二月十八日」と卒入の日が記されている。そして全ての記載の末尾には「惣都合八十七町七段四十毫代毫分」とする仕上げの合計と「三月五日」の日付、及び検地担当者の連名が記されている。

同地検帳では、当時の字、地籍と田・畠・屋敷などの土地の状況、土地の領有関係、土地の名請人などが示されており、中世後期における土地の領有のあり方や屋敷の位置等を読み取ることができる。中でも神田においては、「八名分」「地頭分」の表記が多くみられ、もと領家の支配地であったとみられる「八名分」が長宗我部氏の家臣に対する給地となったことが示されている。そして中世の神田庄が「八名分」と「地頭分」に分割されていることから、細かな下地中分が行われた跡と推測されている。^(註1)

また、同地検帳に示された字には、その起源を中世後期以前に求めることができるものがあり、かつての土地の状態を探る手掛かりとなり得る。そこで以下では、現在の小字図^(註2)を利用し、これに基づいて検証を進めることとしたい。(Fig.98・99)

まず、今まで残る小字と、これに対応するとみられる『地検帳』記載の字をTab.35～37に示した。また、現在消滅している字については、検地が進められた一筆ごとの記載の順序や、同帳に付記された地形の特徴などを参考として、対象地を推定していく。

なお、同地検帳の冒頭と末尾の記載によると、神田の検地には19日間の日数が必要なことになるが、実際にはその内容は12項目に分割されており、各小項目の末に土地の小計を記す構成となっている。この小項目のまとめを確認することによって、対象エリアと検地が進められた順序をある程度つかむことができ、現在消滅している字についても、位置の推定範囲を求めることができる。

そこで、Tab.35～37には、「神田之庄地検帳」を分割順に1～12の小項目に分けたうえで、各項に示された字、土地の利用状況や領有関係をみていくこととした。

以下、「神田之庄地検帳」の記載をもとに、まず中世後期の景観を復元し、その後、遡る古代末～中世前期の神田へと検証を進めていきたい。

中世後期の景観

まず、道に関する記載について検討した。それによると、神田北東部の字「坊ノ前」に「道添」、「徳久」に「道」、その近辺の「セキノ本」に「道南越」、神田北西部の「片山ノ下」に「道ソヘ」の記述があり、神田川を南に渡った辺りから南へ直線的に延びる道と、分かれて南西方向へ延びる道が存在していたことが分かる。このうち前者の南北の道については、周辺の古代条里と一致する軸方向を示しており、古代以来の道であった可能性がある。また後者の南西方向の道は、現在も神田と高知市中央部を結ぶ主要道となっているもので、これらが当時の土佐郡中央部と神田を結ぶ主要な陸路であったことが窺われる。(Fig.99)

次に、屋敷について検討すると、「地検帳」には「上ヤシキ」「中ヤシキ」「下ヤシキ」「下々ヤシキ」等の記載がみられ、「上ヤシキ」では、北東部の「徳久土ゐヤシキ」に「式反廿宅代」の敷地面積をもつ「上ヤシキ」、南西部の「土居ヤシキ」に「宅反十代」の面積をもつ「上ヤシキ」、同じく南西部の「ヒノクチ」に「七代」と「八代」の面積をもつ「上ヤシキ」2箇所が記されている。(Tab.35～37、5・9項)また「中ヤシキ」「下ヤシキ」については、「中ヤシキ」ではその面積が十五代から四十代まで、「下ヤシキ」が五代から一反までと、その敷地面積は様々であるが、比較的小規模な屋敷地であったことが分かる。

記載順からおよその推定位置を求めて、屋敷の分布をみると、「中ヤシキ」「下ヤシキ」は北東部域に集中する一群と、南西部域に集中する一群、南部山際の微高地に散在する一群に分かれ、「上ヤシキ」は、北東部の「徳久土ゐヤシキ」(現在の「徳久」)、南西部の「土居ヤシキ」(現在の「高野前」)の東側の道の近く。現在の「泉川」の辺りか)と「ヒノクチ」(現在の「樋ノ口」)に認められる。これらのうち最も敷地面積が大きい「上ヤシキ」が存在する「徳久」の周囲は「中ヤシキ」「下ヤシキ」が多く分布するところから、中世後期における神田の政治・経済の中心がこの北東部域にあった可能性がある。該当地点は、南北に延びる2条の「道」に接し、神田川を北へ渡ると当時の土佐郡中央部と陸路で結ばれる。中世後期には神田川の北岸に石立城跡⁽³³⁾などの中世城館も存在しており、中世後期における神田北東部城の政治的重要性が窺われる。

一方、屋敷以外の一帯は主に耕作地であり、特に神田中央部には「上」「中」の耕作地が多く存在している。このように、中世後期の神田では、中央部の耕作地域に臨んで南の微高地に中小の屋敷が散在し、主要道路に沿った北東部と南西部には、「上屋敷」とそれを取り巻く中小の屋敷が展開していたと思われる。

さて、この当時の神田ムク入道遺跡の状況についてであるが、現在の「神田ムク入道」の字は「神田之庄地検帳」に見出すことができない。しかし本遺跡が所在した地点は現在の「片山ノ下」「谷間鹿」に隣接しており、「神田之庄地検帳」ではこの一帯は耕作地とされている。よって神田ムク入道遺跡では、14世紀前半に屋敷地が廃絶した後も16世紀末頃まで居住地が出現せず、耕作地の状態で

あったと分かる。

中世後期以前の景観

さて、次に中世後期以前の景観についても検討しておきたい。同帳に記載された字には、中世後期以前に成立し引き継がれた地名が残っており、かつての土地利用の在り方を示すものがある。

まず、古代に関わるとみられるものとしては、古代条里の存在を窺わせる「大坪」の字が、『神田之庄地検帳』の神田南東部域 (Tab.35～37、3項) に表れている。^(註4) 神田地区東部に古代の条里地割が分布することは、すでに先学の諸氏によって指摘されており^(註5)、古代条里と同じ軸方向をもつ南北の道もこの地域を貫いている。こうしたことから、古代の神田では東部域に生産の拠点があり、律令制下の土地開発と管理が進められたことが推察される。

次に中世で注目されるものとしては、『神田之庄地検帳』の神田南西部域 (Tab.35～37、9項) に見える「マトコロヤシキ」の字がある。同項目には「青木」「シウケンヤシキ」「西ノ川原」「ヒノクチ」「カウヤノマヘ」などの現存する字がみえ、記載順序から同地点の位置を推定すれば、「マトコロヤシキ」は現在「間所」の字が残る地点に該当すると思われる。(史料1) さらに同帳第8項目の「片山ノ下」の記載にも「政所ノ東前一反地」と記された一筆があり、やはりその北西に位置する現「間所」が「マトコロヤシキ」の位置に特定できる。(史料2)

また同地検帳では、この「マトコロヤシキ」の後に「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「シウケンヤシキ」など、屋敷の存在を示唆する字の記載が続いている。「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」については字が現存しないが、地検帳での記載順序からみると、現在の「間所」「青木」「祝言屋敷」の字の範囲辺りに「マトコロヤシキ」「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「シウケンヤシキ」が存在したことが推定されよう。

上記のような『神田之庄地検帳』の記載から、当地点では、地域の拠点的施設とみられる「マトコロヤシキ」を中心として、周間に複数の屋敷群が集まっていたことが窺える。しかしながら、「マトコロヤシキ」や周囲の屋敷群がどの程度の規模と構造をもち、各々の屋敷がどのような景観をなして集まっていたのかについては、史料からはつかむことができない。そこで、近年までの発掘調査成果を照合させ、補ってみると、「マトコロヤシキ」推定地の近隣に所在する平成7年度・22年度の神田ムク入道遺跡と平成23年度の御手洗遺跡発掘調査^(註6)で、古代末～中世前期の屋敷地が検出され、複数の屋敷が溝を境界として連続的に広がる様子が確認されている。また前節で触れたように、神田ムク入道遺跡では区画溝や掘立柱建物が西に2～3°振る軸から東へ3～4°振る軸の範囲内で構築されており、西に16°振った古代の地割とは異なる軸方向を示していた。こうしたことから、古代末～中世前期には、古代条里の影響を受けない地割りのもとで新たな屋敷群が形成され、「マトコロヤシキ」の周囲に、溝によって区画された屋敷群が連続的に広がっていたと推察される。

2. 神田ムク入道遺跡の立地と性格

「マトコロヤシキ」の性格

では、神田南西部域に所在した拠点的施設と周辺の屋敷群はどのような性格をもっており、いつ頃成立したのだろうか。まず、その中心的機関となる「マトコロヤシキ」について考えてみたい。

「マトコロヤシキ」については、土佐全域に点在する「政所」について総括された矢野城樓氏の研究があり、神田の「政所」についても触れているためこれに学びたい。矢野氏は神田における「マトコロヤシキ」の具体的な設置権力者は不詳であるが、これが領家の支配地とみられる「八名分」の一つにあることから、中世莊園の支配体制をなした領家の現地管理機関の跡であると推定されている。^(註7)

これに基づけば、本地点は神田庄を支配した領家が所領莊園の管理を司った場所であり、政治・経済上の拠点でもある。また周辺に存在する「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「シウケンヤシキ」のうち「道場ヤシキ」「シウケンヤシキ」は寺社の屋敷、「別当ヤシキ」は政所の長官の屋敷あるいは寺を統轄する僧官の長官の屋敷を窺わせるものであり、当地点には領家と寺社勢力に関わる屋敷がまとまって配置されていたことになる。

神田の歴史的動向と神田ムク入道遺跡

以上のことから、神田ムク入道遺跡が所在した神田南西部域は、古代末～中世前期には「政所」を中心として領家や寺社の屋敷が集まり、神田庄を掌握する政治・経済上の拠点として機能していたと考えられる。

また当地点は神田川とも至近の距離にあり、古代以来の良港である浦戸湾とは鏡川・神田川の水運によって結ばれていた。『神田之庄地検帳』と『朝倉庄地検帳』には、南西の神田川沿いの位置に「舟岡」の字がみえ、現在でも「船岡」「船戸」「下船戸」など、「津」の存在を思わせる字が周囲に残されている。さらに陸路においても、先述の北東から南西へ延びる道によって土佐郡中央部域と結ばれていた。このように、当地点は鏡川・神田川水運による物資流通経路と陸路の双方を備え、経済拠点として機能したことが窺われる。

さて、こうした内容に、再度近年の発掘調査成果を照合させてみると、先に触れた平成7年度・22年度の神田ムク入道遺跡と平成23年度の御手洗遺跡発掘調査で、複数の屋敷地が溝を境界として連続的に広がる様子が確認されている。「マトコロヤシキ」推定地から東へ125m、西へ175m以内の範囲にあるこれらの屋敷地は、立地からみて「マトコロヤシキ」に付随する一連の屋敷であった可能性が高い。そして、これらの屋敷地が何れも12世紀後半に出現し、14世紀前半に廃絶していることからみると、その拠点である「マトコロヤシキ」と周辺の屋敷群の出現から衰退までの過程もこれとほぼ重なるのではないかと推察される。

12世紀後半から14世紀前半にかけての神田庄が、どのような勢力によって掌握され、どのような経過をたどったのかについては、史料を欠き明らかにできない。しかし、同じ神田川水運上にあら近隣の朝倉庄については、山本大氏が朝倉庄と法金剛院との関係性に触れ、法金剛院領の動向について述べておられる^(註8)ため、参考としたい。それによると、朝倉庄は法金剛院領36箇所の一つとされており、法金剛院はもと山城国葛野郡双丘（京都市花園扇野町）の清原夏野の別荘を寺とし、双丘寺（天安寺）と称したのに始まるが、大治5年（1130）鳥羽天皇の中宮侍賢門院（藤原璋子）が再興して法金剛院と称したものとされる。法金剛院領は久安元年（1145）に皇女の上西門院に伝えられ、文治5年（1189）には後白河法皇に伝領されたが、後に皇女の宣陽門院の所領となつた。承久の変で鎌倉幕府に没収されたが返付され、建長3年（1251）宣陽門院の養女で後堀河天皇の中宮鷹司

院長子に譲られた。その後建治元年（1275）後深草天皇に伝わり、以後、持明院統の皇領として伝えられたが、南北朝の内乱にあたり武士の乱妨によって大部分が押領されたという。^{②⑨} 山本氏は、法金剛院領の領有の経緯を挙げながら、法金剛院領の一つであった朝倉庄についても同様な運命をたどった可能性を示唆しておられる。そして、こうした法金剛院領の動向からみて、領家による支配が想定された神田庄においても、同様の状況があつたのではないかと推察できる。

権門とのつながりのもとで、朝倉・神田地域の中世荘園の經營が進められた過程は、神田ムク入道遺跡の屋敷地が12世紀後半から13世紀に盛行し、豊かな内容の貿易陶磁器や国産陶器を所有した状況とも重なる。この後、本遺跡の屋敷地は14世紀前半には衰退し、廃絶に至るが、こうした現象もまた、屋敷群の主体部である「マトコロヤシキ」の衰退と中世荘園の解体、新たな支配勢力の出現を暗示するものであろうか。

[註]

- 1) 矢野城樓『土佐の政所』高知市民図書館 平成元年
- 2) 高知市教育委員会社会教育課作成の小字図。また字の一部については高知市史編纂委員会絵図・地図部会よりご教示を得た。
- 3) 城主は神田勘助・吉田三郎右衛門等と伝えられるが詳細は不明。
- 4) この他、起源は不明であるが同じ東部域に「井領」の字もみえる。「井領」については、岡本健児氏が、高知市布師田に「井領」の字が現存する地点を土左郡衙推定地とされており、郡司の長官（カミ）の名称である「大領」の字が各地の郡衙推定地に所在することから、「タイレウ」のタが長い年月の間に省略され「イレウ」となった可能性が高いとされている。しかし、土左郡衙がすでに布師田に推定されているため、神田地区的「井領」についてはその起源は不明である。「井領」の字は現在消滅しているため位置を特定できないが、同項目にて記載された「コモテン」「七反田」「中山東」「江ノ本」「クマキ」などの現存する字から、「コモテン」の東側の位置、現在の「中藏」の辺りに「井領」の地点が推定できる。この他、そこから北にある字「太郎丸」の記載箇所にも「太郎丸井領」の記述が認められる。
- 5) 朝倉・鴨部・神田地区など鏡川下流地域に N-16° - W の地割遺構が広く分布することが指摘されている。大脇保彦「土佐の条理」「高知の研究2古代・中世編」昭和57年
- 6) 「御手洗遺跡発掘調査現地説明会資料」高知市教育委員会2011年
- 7) 矢野城樓『土佐の政所』高知市民図書館平成元年。神田の「マトコロヤシキ」の位置については、矢野氏は「大の宮ノ前」を推定しておられるが、本稿では推定地を「問所」とした。
- 8) 山本大「土佐国荘園研究序説」「高知の研究2古代・中世編」昭和57年
- 9) 『御府文書』、『島田文書』

[参考文献]

- 矢野城樓『土佐の政所』高知市民図書館平成元年
大脇保彦「土佐の条理」「高知の研究2古代・中世編」昭和57年
横川末吉「第一編 古代・中世」「高知市史 上巻」高知市昭和33年
『長宗我部地検帳 土佐郡上』高知県立図書館昭和32年

史料 1. 「神田之庄地検帳」

「マトコロヤシキ」とその周辺に関する記載(1)

史料2 「神田之田地検帳」

「ヨリシキ」とその周辺に関する記載(2)

卷之六

古香文 古句三

四ノ木一通

卷之三

正心ノ通事一枝

分句上
八分
西兵
かん長面
今由利ノ西阿倍

• • •
略

一八十七

八名分 古田 三郎左衛門繪

ビツヘキミ

同上

列傳一

八名
同

一、四十八代一

分中 八名之 一 円松熊凡給

一九四七年七月
西海ノ北緯

文前一反地

同上

上
八多分同地頭手作分

一四〇

八分下村与衛門給

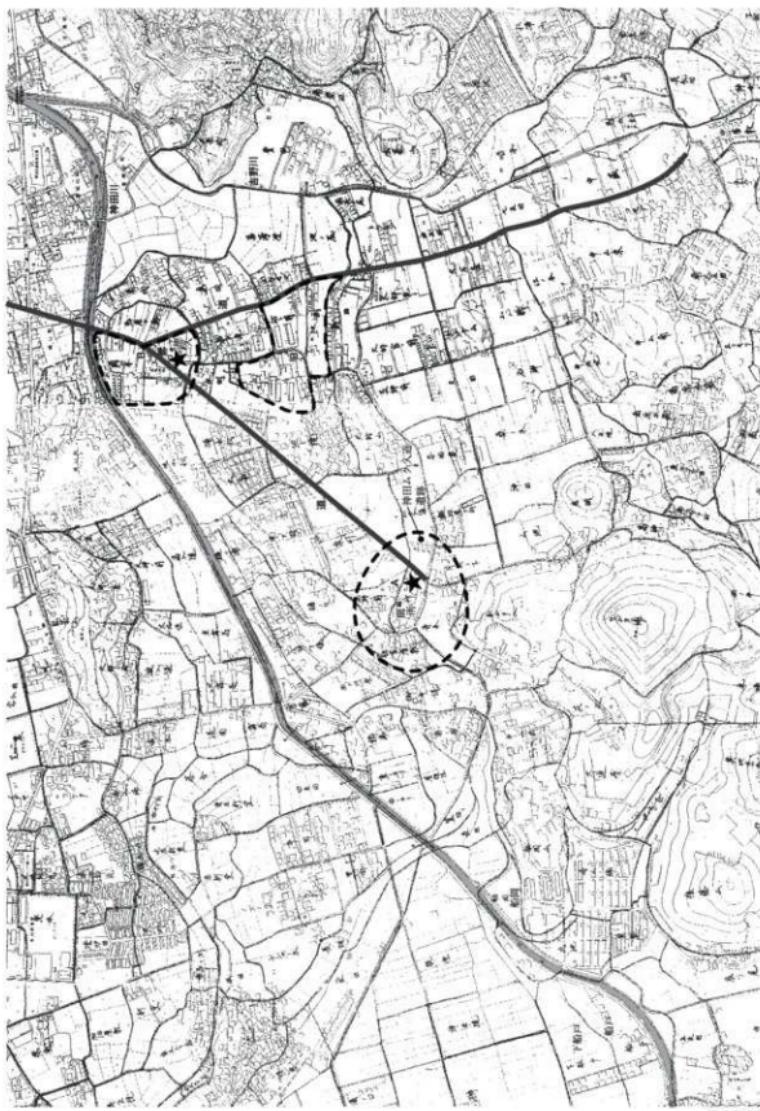
一
二
三
四

卷之三

一、六反乱代上名九代一石八名分公忠兵衛始



Fig.98 「マトヨロヤシキ」推定地と周辺の小字



A:「マトロヤシキ」を中心に屋敷が集中するエリア。★は「間画」の字が残る地点。

B:「長宗我部地帳帳」記載当時、「徳久上らヤシキ」を中心に屋敷が集中するエリア。★は「徳久」の字が残る地点。

(S=1/5000)

Fig.99 神田小字図と中世の景観復元

Tab.35 神田の小字と「神田之庄地検帳」の記載（1）

現在の字	地帳標記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と総に関する記載
1項 (東部山腹)					
— タキノ下		2 中		地頭分	
— □時		1 岛		地頭分	
豊田 小ウタ		23 中、下、久荒		地頭分、八名分 慶田神左衛門給	
— ミノコシ	3	下、下々		地頭分	
— ハシカ崎	2	中、下々		地頭分	
— ミキレタ	3	下々、荒		地頭分	
— 下延	1	下		地頭分	
— 上□	1	下		地頭分	
— シモサワ	2	下、下々		地頭分	
下沢					
上沢	上沢	2 下々		地頭分	
— 山マイメ水田	1	下		地頭分	
— ノチナシカ浦	2	下、荒		地頭分	
— クチナシノ木	1	下		地頭分	
— フカ	5	下、下々		地頭分	
— ハラノハラ	5	下々		地頭分	
片岡沢 片岡沢		2 下々		地頭分	
石ヶ崎 石ヶ崎	5	下々		地頭分	
— ヒロ沢	1	下々、荒		地頭分	
— 小かうし沢	1	下々、荒		地頭分	
— メウシヤウ沢	2	下々		地頭分	
2項 (東部山腹)					
— 丸タ		2 下		地頭分	
古本 古本		2 下		地頭分	
石ヶ崎 石ヶ崎 □カ崎		5 下、下々		地頭分	
東赤坂 西赤坂 アカ坂	新ヤシキ	20 下々ヤシキ 2中、下、 下々、下々、久荒		地頭分	
— 大チ	南道添、西道添	4 下、下々		地頭分	
— ヨハ原		1 下々		地頭分	
— 馬ノ□		1 下		地頭分	
— — 道キレ 江懸テ		1 中、荒		地頭分	
— フテン馬ノ□		8 中、下		地頭分	
— イワミタ		1 中		地頭分	
— 木ノ本		1 中		地頭分	
— ナワ苗タ		3 中、下		地頭分	
— 山ウクリ		1 中		地頭分	
— カチツサ		1 下		地頭分	
— カイトク		4 下、下々、久荒		地頭分	
3項 (南東部)					
— クロタ		1 下		地頭分	
コモデン コモテン		2 下々、荒		地頭分	
— ヒロ沢		1 下々		地頭分	
— 大坪	3 下			地頭分	
— 角沢	1 下			地頭分	

現在の字	地帳標記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と総に関する記載
— 中沢			9	中、下	地頭分
— 井瀬			1	下	地頭分
— 橋テ	江添	3 中			地頭分
— 丸タ		1 中			地頭分
— ハルノ木		1 中			地頭分
— エホシカタ		4 下、下々、荒			地頭分
七反田 七反タ		6 中			地頭分
中山東 中山南 中山北	新屋敷、新ヤシキ	18 下々ヤシキ 2下、下々、荒			地頭分
南六反田 六反沢		5 下、下々			地頭分
— クマ沢		3 下々			地頭分
— 挿母タ	2 中				地頭分
江ノ本 江ノ本		12 中			地頭分
— 三斗	3 中				地頭分
久万寄 クマキ		10 中			地頭分
山ノ前 山ノ前	西道添	7 中			地頭分
4項 (東部中)					
大的山か	一 ヤマノ北	6 中			地頭分、八名分 弘治介兵衛給、谷忠兵衛給
大的宮前	大マト宮ノ前	7 中			八名分、島崎彦左衛門給、吉田三郎左衛門分、 亀岡太兵衛給、鍋島守介批、吉良伊兵衛分
大的山か 大マト		5 中			地頭分
太郎丸 太郎丸井頭		6 中			地頭分
大田か □タ		10 中			地頭分
— □カ崎		12 中			地頭分
— フタイ		1 中			地頭分
池ノ瀬 池ノ瀬		3 中、下			地頭分、八名分、吉村九兵衛給
— 牛ワタ鰐		5 中			地頭分
5項 (東北部)					
— カヌ尾		5 中、下、下々			八名分、谷忠兵衛給、橘内三介給、吉村九兵衛給、 玉木新助門給
ハイノ木か サハイノ木		2 中			地頭分
池ノ尻 池ノ尻	道前	2 下、荒			地頭分
— ケキヤウラ		2 中、下			地頭分
菖蒲坂 菖蒲		5 中			地頭分、八名分、横山 神兵衛給、笠田久衛門給、 横山兵衛給
— ヲサタ		1 中			地頭分
— 秽ノ木		2 中			地頭分
坊ノ前 坊ノ前	道添	10 下々ヤシキ 2中、下々、 下々、久荒			地頭分、八名分、中島 帶刀給、谷忠兵衛給、鳥 村源次郎給
— ハサマ		2 中			地頭分
池ノ瀬 池ノ瀬	4 中ヤシキ	1.下ヤシキ 1.中、下々			八名分、谷忠兵衛給、西 沼源十郎給、梅せ孫 十郎給
松ノ本 松ノ本		6 中ヤシキ 1.下々 シキ3.下々			地頭分
— クホタ		2 下			八名分、一円又兵衛 給、一円松原元信

Tab.36 神田の小字と「神田之庄地検帳」の記載(2)

現在の字	地名帳記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と締に関する記載
一 東タ			5	上, 中, 下	地頭分。八名分 山崎宗兵衛船, 玉木新衛門船, 細木善蔵門船
馬屋ヶ尾 馬ヤノシリ			2	上	八名分 山崎八郎左衛門船, 今村九郎左衛門船
一 下本			1	上	八名分 下村治部船
島田 路タ			4	上	地頭分。八名分 畠村善衛門船, 下村与三左衛門船
石丸 石丸			3	上	地頭分
一 杉ノ本			6	下ヤシキ 3, 中, 下	八名分 一円兵衛船, 細木市船門船, 橋山平兵衛船, 前田新兵衛船, 中与三左衛門船, 谷忠兵衛船
徳久 トク久	道添		4	上	八名分 四内善左衛門船, 谷忠兵衛船, 徳久次郎衛門船
徳久 徳久土みヤシキ			3	上ヤシキ上	八名分 徳久次郎衛門船, 谷忠兵衛船, 执行六大夫船
岡ノ本 セキノ本	道越, 川添		9	中ヤシキ2, 下タ ヤシキ1, 下ヤシキタ, 上, 中	地頭分。八名分 中島守刀船, 吉川左衛門船分, 稲木九郎右衛門船, 弘田介兵衛船, 井舟
一 ソウメンヤ			5	下ヤシキ1, 下タ ヤシキ上, 下晶	八名分 竹内五郎兵衛船, 橋山神兵衛船, 谷忠兵衛船, 中間喜左衛門船, 前大太夫衛門船
北小松 南小松	小松	廣添	1	中	地頭分

6項(東部)

北小松 南小松	小松		4	下	地頭分。八名分 亀岡太兵衛船
一 城ノ前	道越, 道ノ浦		13	下, 下晶タ	地頭分。八名分 谷忠兵衛船, 野村吉兵衛船, 今村十郎船, 下村善介船, 兼岡太兵衛船, 中島平兵衛船, 田内善左衛門船, 池上左衛門船, 橋山博兵衛船。
雖ノ浦小 ヒノ本			9	下, 下タ	地頭分。一円松丸船。
一 ナカレタ			1	下タ	地頭分
舞高 北舞高 東舞高 マイ高			5	下タヤシキ 1中, 下, 下晶	地頭分。八名分 植瀬孫四郎船
一 ヒノ面			1	下タ	地頭分
竹ノ後	竹ノ後		4	中	地頭分。八名分 葛岡七郎兵衛船
一 茶ヤンノ芝			4	中, 下, 下タ	八名分 谷忠兵衛船, 一円兵衛船, 植瀬孫十郎船, 竹内九郎兵衛船

7項(南部山間)

一 古野			3	下ヤシキ1, 下タ, 下晶	地頭分
一 ヒノ谷			1	下タ晶	地頭分
一 吉野土居			3	中ヤシキ2, 下タ シキ1	地頭分
神母メン 神母免			1	中	地頭分

現在の字	地名帳記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と締に関する記載
一 坊ノ下			3	中ヤシキ1, 中	地頭分
坊屋敷	坊ヤシキ		2	下ヤシキ2	地頭分
一 ムツク			3	下, 荒	地頭分
一 ナワシロタ			4	上, 中	地頭分
一 人工船			1	中	地頭分
一 木ノ下			1	中	地頭分
一 ナカレタ			4	中	地頭分
一 二反田			3	中	地頭分
中原敷	中ヤシキ		1	下ヤシキ1	地頭分
一 西ノヤシキ			1	中	地頭分
一 □□ヤシキ			2	中	地頭分
ノツクス	能津		1	中	地頭分
一 十市ヤシキ			1	中晶	地頭分
一 道ノ下			3	中, 下	地頭分
北ビワ谷 中ビワカ 谷	ビヤカ谷		4	下タ	地頭分
東高座か 東高座	東高□□		5	下タ, 下タ晶 田, 荒	地頭分
ホリキリ	ホリキリ		6	1下タ, 下山晶 田, 下タ晶	地頭分
高座□か 高座	高座ノ前		3	中ヤシキ 田, 中, 荒	地頭分
高座土居 高座土	高座土, 荒		1	下ヤシキ	地頭分
一 ツルモノ尾			3	下タ	地頭分
一 アラタ			1	下タ, 荒	地頭分
東ウツワ 田, 西ウツ タ田			8	下, 下タ	地頭分
木谷	木谷	道ノ下	7	下タ, 下タ山タ	地頭分
一 ス・ワニノ ヤシキ				下ヤシキ	地頭分
ケジカ□か	ケシカハラ		4	下ヤシキ5	地頭分
高神	高神		4	下ヤシキ2下	地頭分, 八名分
八反沢	八反沢		8	下, 荒	八名分 浜田新兵衛船, 弘田孫兵衛船, 橋山左近兵衛船, 植瀬孫四郎船, 橋山喜兵衛船, 横山喜兵衛船, 中島帯刀船
一 スミ沢			1	上	地頭分
高座□か 高座	高座ノ後		2	下	地頭分

8項(中部・西部)

高座か 高座	高座ノ後		5	中, 下	地頭分
一 福井沢			2	下, 荒	地頭分
一 ク□沢			2	下タ, 荒	地頭分
一 ツ・シリ			6	中, 荒	地頭分, 八名分 谷忠兵衛船, 执行六大夫船
一 スツルキ山			1	下タ山晶	地頭分
一 トワタリ	南道越		9	中, 荒	地頭分
一 久ミタ			3	中	地頭分
神田	神田		9	中	地頭分
山地	山路		9	中, 下タ	地頭分
シルタニ	シル谷		3	中ヤシ キ, 中, 下タ	地頭分

Tab.37 神田の小字と「神田之庄地検帳」の記載(3)

現在の字	地籍帳記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と前にに関する記載	現在の字	地籍帳記載の字	土地についての補足	筆数	土地の使用状況	土地の領有と前にに関する記載					
片山ノ下	片山ノ下		21	上ヶ上、中、下、下ヶ下、下畠田	地頭分、八名分 燐山 植物館、礪山左衛門、 西田かん兵衛給、一円又 兵衛給、弘田神介給、吉 田三郎左衛門給、吉田三 郎左衛門給、吉田三郎 左衛門給、吉田三郎左 衛門給、吉田三郎左衛 門給、一円松丸給、吉 田利左衛門給、下村母 衛門給、执行六大夫給	—	土居ヤシキ	西路懸 テ	38	上ヤシキ1、 上、中、下、下品、下畠、下 畠田	地頭分、六名分 植せ十郎給、山川修 船、谷兵右衛門給、下村口 衛門給、礪山左衛門給、 吉村九兵衛給、浜田兵 衛門給、吉田七郎兵 衛門給、下村六郎左衛 門給、堀屋喜十郎大坂 かん兵衛給、島村博衛 給、木本分 国税殿分、五郎六衛門給					
一	角田		2	上、下ヶ大の大明 神田	八名分 谷忠兵衛給	—	中ツヅ		2	上	八名分、吉田三郎左衛 門給、木本分 国税殿分					
谷間塙	谷マカタ		8	中	八名分 岩村善右衛門給、 吉水四郎左衛門給、下村 与一郎給、竹内久郎左衛 門給、吉水九郎左衛門給、 弘瀬四郎左衛門給、 吉忠兵衛給	—	ホウメン		16	上、中	地頭分、八名分 竹内善一郎衛門給、一円又 兵衛給、礪山左衛門給、 吉田三郎左衛門給、今村 与十郎給、弘田四郎 給、吉忠兵衛給、礪山二 郎衛門給、前田源介給、 执行六大夫給、池上左平 左衛門給					
一	サイノウ		2	中	八名分 前田作衛門給	水町	水町		5	中、下畠	地頭分、八名分 中馬平兵衛給、喜田又衛 門給、鍋島四郎左衛門給					
桑ノ木	タワノ木		14	中	地頭分、八名分 鹿田 又衛門給、一円又衛門給、 礪山左衛門給、輪セ孫 十郎給、小木本衛門給、 吉本久郎左衛門給、谷忠 兵衛給	—	溝添		6	中	地頭分、六名分 江綱彦四郎給、竹内与 兵給、浜田新兵衛給、池上 平左衛門給					
石狩	石狩		12	中	地頭分、八名分 弘田 助左衛門給、吉村六兵衛 給、下村母衛門給、一門 又兵衛給、野村清兵衛給、 执行六大夫給、谷忠兵衛 給	大畠	大ハタケ		9	中、荒	地頭分、八名分 国税左衛門別給、西本 寺介給、入村清兵衛給、吉 田三郎左衛門給、中間善 左衛門給、中馬刀引給、 弘田又衛門給					
荒神前	荒神舞		6	上中、中、下ヶ 地頭分	—	ス・レ川		5	中、下	地頭分						
大的山か	大的		1	下ヶ大の大明 神テン	御手洗	ミタライ		1	中	地頭分						
樋ノ口	ヒノクチ		5	上	地頭分、八名分 吉村九兵衛給	—	三月テン	道懸テ	1	上	地頭分					
中ノ内	中ノ内		2	上	地頭分、八名分 地岡左兵衛給	—	寺内		3	下ヤシキ1下F ヤシキ1、下、山 畠	地頭分					
9項(南西部)																
問所	マトコヨヤ シキ		2	中ヤシキ2	八名分 田村八郎左衛門給、谷忠 兵衛給	—	馬場ノウラ		1	中	地頭分					
一	作道		3	上	地頭分	花ノ木	花木		3	下ヶ山ヤシ キ、下ヶ山畠	地頭分					
一	造場ヤシキ	寺中	1	下ヤシキ1	地頭分	—	鍵堂寺中		1	下ヶ山田	地頭分					
青木	青木		1	上	八名分 高崎彦左衛門給	11項(西南部山腹、神田川沿)										
—	ヤカシロ		1	下ヤシキ1	地頭分	中山田	中山田		6	下ヤシキ 1中、下	地頭分					
—	別当ヤシキ	寺中	1	下ヤシキ1	地頭分	大通寺	大通寺		5	下山ヤシキ 1下ヶヤシ キ、下ヶ山畠	地頭分					
—	土ぬヤシキ		2	中ヤシキ1中	地頭分、八名分 袖内二助給	—	崎山ノ鼻		9	下、下ヶ	地頭分					
祝言被載	シケンヤ シキ		1	中ヤシキ1	中馬帯刀丞給	船岡	舟岡	江ヲ話 テ	13	中、下、下ヶ	地頭分、朝倉分					
中ノ内	中ウチ		4	中ヤシキ3下ヤ シキ1	地頭分、八名分 一円松丸丸給、谷忠兵衛 給	—	宍戸尾	サ子モリ	8	中、下	地頭分					
—	テウハイ		2	上	地頭分	—	カケカ子	カケカ子	11	下、下ヶ	地頭分					
西ノ原原	西ノ原原		8	中ヤシキ1下ヤ シキ5下ヶヤシ キ1下ヶ	地頭分、八名分 谷忠兵衛給、竹内九郎兵 衛給	—	申谷	江添	24	中、下、下ヶ ヤシキ、下 畠	地頭分					
樋ノ口	ヒノクチ	土ぬノ 内	11	上ヤシキ2中ヤ シキ5下ヶヤシ キ2下畠	地頭分、八名分 吉田三郎左衛門給、田村 八郎左衛門給	—	石横		32	下、下ヶ、下ヶ 山タ、下ヶ野 原、久里、荒	地頭分					
高野原	カウヤノマ ヘ		1	上	地頭分	—	申谷	江添	24	中、下、下ヶ ヤシキ、下 畠	地頭分					

第4節 神田ムク入道遺跡出土遺物の様相

はじめに

今回の神田ムク入道遺跡発掘調査では、溝によって開まれた古代末～中世の屋敷跡が検出され、屋敷地が機能した12世紀後半～14世紀前半の遺構内から関連の遺物が出土している。これらの遺物には土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、貿易陶磁器などが含まれるが、国内の各生産地よりもたらされた搬入品の種類の多さ、多様な貿易陶磁器など、その内容の豊かさも本遺跡の特徴の一つとなっている。

本節では、これらの出土遺物の様相を検討し、遺物所有のあり方における神田ムク入道遺跡の特質を明らかにする。また、各搬入品の流通上の特性を検討することによって、そこから見えてくる神田ムク入道遺跡の性格についても触れることとしたい。

1.出土遺物の様相

古代末～中世の屋敷地に関わる遺物は、土坑、ピット、井戸、溝内から出土している。多くの遺物がまとまって廃棄された状況を示した遺構には、SD10とSB12・P3・4があるが、その他の遺構では全体的に出土量が少ない傾向がみられた。また、今次調査区では中世の包含層の殆どが削平されていたため、包含層からの出土遺物も僅少であった。

しかし、遺物の内容は豊富であり、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、貿易陶磁器からなる各地の製品が含まれている。また、遺物の多くは屋敷地が機能する12世紀後半から14世紀前半にかけての遺構から出土したものであり、出土量のピークは13世紀に求めることができる。

これらの出土遺物の特質を検討するにあたり、以下ではまず、搬入品を中心とする瓦器、須恵器、陶器、貿易陶磁器の出土資料をまとめておく。

①瓦器

瓦器では和泉型と楠葉型の椀・皿が出土した。このうち楠葉型瓦器碗の出土は1点のみであり、その他は全て和泉型に属するものである。^(注1)

和泉型瓦器碗については小破片で出土するものが多いが、形態特徴をつかめるもの多くが13世紀代のものであった。出土した和泉型瓦器碗の中には、炭素吸着が弱く炭素が殆ど剥離しているもの(294・295・298・330・390・438・439・468・536・590・659・703・722)や、外面の一部にのみ炭素吸着を施し内面は吸着が無いもの(296・297・336・465・501・533・537・611)、内面の一部にのみ炭素吸着を施し外面は吸着が無いもの(334・498・534・540・586)、内外面とも炭素吸着がみられないもの(325・351・463・497・531・584・644・670・683・712・721)が含まれており、こういった粗製タイプの瓦器碗が多く認められるのも本遺跡の特徴である。

一方、楠葉型瓦器碗で確認できたものは、SD13出土の椀(559)1点のみで、12世紀後半～13世紀前半に比定される。同資料は口縁部内面に段をもち、内面にミガキを施す。

②須恵器

須恵器では、東播磨地域からもたらされた東播系須恵器の鉢と甕、亀山窯(高知県香南市野市町

佐古) 産の壺、その他产地不明の壺が出土した。

A. 東播系須恵器

東播系須恵器は鉢 (344・370・372・548・599・677・729・746・747)、壺 (450・452) が出土した。鉢は何れも13世紀代に比定されるもので、壺 (450・452) については12世紀末～13世紀以降に該当する。ただし今回出土した壺 (450・452) は同一個体とみられるもので、本遺跡での確認数は1個体となる。壺 (450・452) は口縁部径29cmで、体部外面にタタキ目が残る。

B. 亀山窯産須恵器

亀山窯は現在の高知県香南市野市町佐古に所在する須恵器窯である。発見された窯跡からは平安時代の須恵器杯・蓋・壺・瓦などが出土しており、その生産は古代まで遡る。^(註2) また、窯跡からは古代末～中世前期の須恵器壺も出土しており、中世の須恵器生産も確認されている。中世の亀山窯製品については、これまで窯跡以外からの出土事例が報告されておらず、流通の実態が殆ど分かっていないが^(註3)、今回の出土により同窯の製品が県中央部以西まで流通していることが明らかにされた。

亀山窯産須恵器では、壺 (449・473・482・607・609・613・616・624・646・647・735) が出土している。^(註4) これらの遺物は胎土が緻密で胎土中に1mm前後の大粒の黒色粒を多く含んでいる点に特徴があり、壺体部片 (473・482・607・616・624・646・647・735) は外面にタタキ目が残る。

③陶器

陶器では常滑焼の壺 (347～350・392・406・470・471・481・549・602・606・612・687) が出土している。口縁部が残存する347・348・612・687については、何れも赤羽・中野編年の3～4型式(12世紀第4半期～13世紀第1四半期)に該当するものであり、他の体部片もほぼ同時期におさまる可能性が高い。壺の口縁部径が復元できた348は口径約46.8cmの大型品であったことが分かる。

④貿易陶磁器

貿易陶磁器は遺構内より61点、包含層内より2点が出土した。器種や分類が明らかにできたものの中では、以下が挙げられる。(白磁、青磁の分類は森田分類による。)

【青白磁】青白磁皿 (623・750)

【白 磁】白磁碗IV類 (591)、V類 (301・592)、VI類 (749)

白磁皿IX類 (380・432・543・593・726)

白磁壺 (544・674・675・676・679)、壺か (565・594・685)、白磁壺又は水注 (603)

【青 磁】同安窯系青磁碗 (302・369・545・620・637)、青磁皿 (303・343)

龍泉窯系青磁碗I～2類 (339・340・341・342・546・596)、I～4類 (396・597・727)

I～5b類 (273・403・423・448・564)

【その他】福建省系灰釉壺 (615)、灰釉鉄絵盤か (728)

これによると、貿易陶磁器出土のピークは12世紀から13世紀にかけてあり、集落部でも出土する白磁碗IV類や白磁皿IX類、龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁碗・皿等が多くみられる。一方、青白磁皿、白磁壺・水注、灰釉壺・盤など、集落部では散見されにくいタイプのものが含まれ、多様な内容をもっている。

Tab.38 神田ムク入道遺跡出土遺物器種別出土点数と組成比

出土地点	SK	P	SD	SE	SX	計	A.推定個体数計	A.組成比	B.推定個体数計	B.組成比
土師質土器 杯	104	336	218	2	4	664	659	42.9%	659	39.2%
土師質土器 小皿	77	382	152	4	1	616	616	40.1%	616	36.6%
瓦器 碗・皿	40	70	76	—	2	188	188	12.2%	188	11.2%
瓦質土器 鍋	—	4 (11)	—	1 (1)	—	5 (12)	5	0.3%	12	0.7%
東播系須恵器鉢	2 (2)	3 (4)	2 (2)	—	—	7 (8)	7	0.5%	8	0.5%
東播系須恵器 甕・器種不明	—	—	1 (1)	1 (1)	—	2 (2)	2	0.1%	2	0.1%
龜山窯須恵器甕	—	1 (8)	1 (3)	—	—	2 (11)	2	0.1%	11	0.7%
その他の須恵器 甕	0 (9)	3 (58)	2 (29)	0 (1)	—	5 (97)	5	0.3%	97	5.8%
常滑焼甕	0 (2)	4 (14)	0 (10)	—	—	4 (26)	4	0.3%	26	1.6%
貿易陶磁器 壺・水注	0 (1)	4 (7)	0 (2)	—	—	4 (10)	4	0.3%	10	0.6%
貿易陶磁器 碗・皿・盤	5 (6)	24 (26)	11 (13)	2 (3)	0 (2)	42 (50)	42	2.7%	50	3.0%
貿易陶磁器 器種不明	—	0 (1)	—	—	—	0 (1)	0	0%	1	0.1%
土錘	1	1	—	—	—	2	2	0.1%	2	0.1%
計							1536	99.9%	1682	100.2%

*点数は推定個体数による。()は体部片も含めた推定個体数。その他は口縁部・底部点数より割り出した推定個体数。

Tab.39 神田ムク入道遺跡出土遺物用途別出土点数と組成比

	A.推定個体数	A.組成比%	B.推定個体数	B.組成比%
供膳具(碗・杯・皿)	1463	95.2%	1463	87.0%
調理具(鉢)	7	0.5%	8	0.5%
煮炊具(鍋)	5	0.3%	12	0.7%
貯蔵具(甕・不明)	13	0.8%	136	8.1%
奢侈品(貿易陶磁器壺・水注・碗・皿・盤)	46	3.0%	61	3.6%
その他(土錘)	2	0.1%	2	0.1%
計	1536	99.9%	1682	100.0%

2. 遺物組成にみる特徴

次に、神田ムク入道遺跡出土遺物の器種組成と用途別組成、生産地別組成について検討し、今次検出の屋敷地における遺物所有の特質について検討したい。遺構内から出土した遺物の器種別出土点数と組成比はTab.38、用途別出土点数と組成比はTab.39に示した通りである。^(註5)

器種組成・用途別組成の特徴

Tab.38・39によると、器種組成では土師質土器の杯が39～43%、皿が37～40%、瓦器椀・皿が11～12%と、供膳具の出土比率が最も高く、その他の器種では、甕が0.8～8%、鉢が0.5%、鍋が0.3～0.7%と続く。その他、貿易陶磁器については碗・皿・盤が3%、壺・水注が0.3～0.6%となる。用途別には供膳具が87～95%、貯蔵具が0.8～8%、調理具が0.5%、煮炊具が0.3～0.7%、漁労具が0.1%、貿易陶磁器については用途を限定し難いものがあるため奢侈品とし3～37%を占めている。

上記の器種組成と用途別組成の内容については、集落遺跡でのデータで対比できるものが無いため、集落部との違いを明確にしにくい。しかし、本遺跡出土の貯蔵具の中には、常滑焼の陶器甕などが含まれており、一般的な集落にみられる貯蔵形態とは内容に違いがある。この他、貿易陶磁器が含まれる割合が高く、宴器や礼器的性格の強い壺・水注など、集落部に出土しない性格のものが認められる。

一方、同じ屋敷地の対比データとして、高知市中央部の寺社関連の屋敷跡である土佐神社西遺跡の器種組成データ^(註6)を取り上げると、土佐神社西遺跡では供膳具が93.5%、貯蔵具が2.5%、調理具が1.2%、煮炊具が0.9%、奢侈品が1.7%、その他漁労具が0.2%であった。これと対比すると、神田ムク入道遺跡では貿易陶磁器の占める比率がさらに高く、その一方で調理具、煮炊具など生活に関わる遺物が少ないなどの特徴が認められる。

生産地別組成にみる特徴

次に、生産地別に先の器種組成をみると（Tab.38）、地元産とみられる土師質土器と産不明の須恵器などが最も多いが、この他、瓦器椀などの畿内系の製品が11～12%、須恵器鉢・甕など東播磨地域の製品が0.6%、陶器甕など常滑の製品が0.3～1.6%、須恵器甕など佐古亀山窯の製品が0.1～0.7%、中国製品が3～37%を占めている。

このうち和泉型瓦器椀、東播系須恵器鉢は、12世紀末～13世紀にかけて、県内の各遺跡にて出土数が増加するもので、神田ムク入道遺跡でも多く搬入されている。しかし、今回の出土資料の中には、楠葉型瓦器椀、東播系須恵器甕、初期の常滑焼甕（赤羽・中野編年3～4型式）、中国産の壺・水注など、特定の遺跡に出土が限定される製品が含まれている点に特質がみられる。

3. 搬入品の特性

ここまでみてきたように、本遺跡では畿内、東播磨、常滑などからもたらされる搬入品、貿易陶磁器が豊富に出土しており、中には、中国産の壺・水注、初期の常滑焼甕、楠葉型瓦器椀、東播系須恵器甕など、特定の遺跡に出土が限定される稀少な遺物が含まれていた。そこで以下では、後者の遺物について、その流通上の特性を検討し、神田ムク入道遺跡の性格を探る手掛かりとしたい。

なお、これらの遺物については、近年、各地での発掘調査事例が蓄積されるに従って分布状況が

明らかになってきており、県下の中世遺跡における搬入品の流通のあり方について集成が進められている（池澤2010他）ため、その成果とも照合させつつ検討を進めたい。

①貿易陶磁器、壺・水注

本遺跡では白磁壺・水注の口縁部片が3点、別遺構内から出土した同体部片6点のうち確実に別個体と判断できるものが2点以上、灰釉壺の口縁部が1点確認されており、少なくとも6点以上の壺・水注が出土している。

まず貿易陶磁器のうち、中国産の壺・水注・梅瓶についてみてみると、これまでに確認できたところでは、白磁水注が土佐神社西遺跡（寺社関連の屋敷）、白磁四耳壺が神田ムク入道遺跡平成7年度調査地点（屋敷）、白磁梅瓶が姫野々城跡（城館）、坂本遺跡（寺院関連）、青白磁梅瓶が拝原遺跡、青磁壺がアゾノ遺跡と具同中山遺跡群1997年度調査地点（津）、土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査地点（寺社の近隣地）で出土が報告されている。これらの出土遺跡の性格をみると、中国産の壺・梅瓶・水注が寺社関連の遺跡、屋敷跡、城館、莊園や寺社勢力の支配を背後にもつ物資集積の要衝の遺跡などに限定されて出土していることが窺われる。

この他、福建省磁竈窯の灰釉壺（615）は博多に多く出土するが、その他は国内でも限定された分布状況で、県下では他に確認事例がない。^(註7)また、盤の可能性があり鉄絵を施した728についても、県下では神田地域以外の出土事例が認められていない。^(註8)

②常滑焼甕

今回は4～26点の常滑焼甕を確認しており、口縁部が残存する347・348・612・687については、何れも赤羽・中野編年の3～4型式（12世紀第4四半期～13世紀第1四半期）に該当するものであった。本県において3型式まで遡るタイプのものは、県東部の土佐国衙跡、県中央部の土佐神社西遺跡、県西部の上ノ村遺跡からの出土が報告されている。また、これ以降の型式のものになると、6型式（13世紀後半）のものが岡豊城跡、芳原城跡、岩井口遺跡、上美都岐遺跡、具同中山遺跡群から、9型式（14世紀末～15世紀前半）のものが姫野々土居跡から、その他、時期不明の底部と体部片が田村遺跡群、林口遺跡、二ノ部城跡、千本杉遺跡等で確認されている。

これによると、本県において常滑焼の流通が一般化するのは主に15世紀以降であり、それ以前のものは出土が限られる。これまでに3型式の常滑焼甕が出土した遺跡の性格をみると、土佐の政治上の拠点である国衙跡、土佐の一宮である土佐神社に付随した寺社関連の屋敷地である土佐神社西遺跡、仁淀川河口の物資の集散地である上ノ村遺跡など、政治・宗教の拠点的施設の周辺や、物資流通の拠点的性格をもつ「津」の遺跡に限定されている。

③楠葉型瓦器椀

今回、楠葉型瓦器椀で確認できたものは、SD13出土の椀（559）1点のみである。

本県においては、12世紀末から和泉型瓦器椀の出土が集落部を含めた各地の遺跡で増加する一方、楠葉型瓦器椀については出土遺跡が限定される。該当期の楠葉型瓦器椀が出土した遺跡には、県東部物部川流域の深瀬北遺跡（津）、クメ丸遺跡、口植ヶ谷遺跡、県中央部仁淀川流域の上ノ村遺跡（津）、県西部中筋川流域の具同中山遺跡群と清水港の加久見城館遺跡群（館）等があるが、集落部

では殆ど確認できていない。

こうした楠葉型瓦器碗の県下の分布状況について、12世紀後葉～13世紀後葉の楠葉型瓦器碗の分布域は、高知平野東沿岸部と物部川下流に一定の集まりがあり、その他は土佐西部から西南部の津の性格をもつ遺跡から出土するとし、楠葉型瓦器碗が遺跡の性格に強く関連する遺物であるとの指摘がされている。そして、楠葉型瓦器碗が畿内以外では限定的な出土状況であることから、土佐で出土する12世紀後葉～13世紀後葉の楠葉型瓦器碗が、政治・経済の拠点や交通の要衝に関連した性格をもつと指摘されている。^(註9)

この他、楠葉型瓦器碗については、「輪花碗」など特殊な器形のものが京都、鎌倉、博多や、各地の政治・経済の拠点や交通の要衝の遺跡に限定されて出土し、特に北条得宗家と関連する遺跡に多く搬入されたとの指摘がなされている。^(註10)

④ 東播系須恵器窯

今回出土した須恵器窯(450・452)は12世紀末～13世紀以降に比定されるもので、1個体となる。

東播系須恵器の鉢は、12世紀末～13世紀を中心に土佐での流通量が増加するが、窯の出土事例は非常に少ない。各地での報告例によると、東播系須恵器窯は県東部の田村遺跡、県西部の木塚城跡、上ノ村遺跡、岩井口遺跡、県西南部の坂本遺跡などで確認されており、やはり屋敷や津の性格をもつ遺跡に出土が限定されている。

4. 遺物所有にみる神田ムク入道遺跡の特質

遺物所有の特質と屋敷地の性格

ここまで検討した内容をもとに、以下では、遺物所有のあり方に見える神田ムク入道遺跡の特質について、再度まとめておきたい。

まず、中国産の壺・水注、初期の常滑焼窯など、屋敷や流通の拠点の性格をもつ遺跡に出土が限定される遺物が一定量含まれている点が挙げられる。特に初期の常滑焼窯は、「津」の遺跡の他では、国衙跡や、土佐の一宮である土佐神社に付随する寺社関連の屋敷地（土佐神社西遺跡）など政治・宗教の拠点の性格をもつ遺跡に限定されて出土するものであった。また、貿易陶磁器については、出土遺物全体に占める貿易陶磁器の比率が3～37%と高く、特に壺・水注は個体数にして6個体以上出土しており、壺・水注の出土点数の多さは県下の遺跡の中でも突出している。

このような遺物所有のあり方からみて、神田ムク入道遺跡屋敷地の所有者が稀少的価値の高い製品を入手できるルートをもっていたことが窺われる。また、中国産の壺・水注が多い点に関しては、後述する領家の現地管理機関や寺社関連の屋敷が周囲に存在するなど、立地上の特質も考えなければならず、儀礼的な目的から壺・水注が特に選択され持ち込まれた可能性がある。

一方、出土点数が非常に少なく、使用を目的として一定量搬入される製品群とは別に、偶発的に入ったと思われる遺物の存在がある。特に東播系須恵器の窯は、流通の拠点である「津」の遺跡から出土するが、その他の消費地では殆ど認められず広域の流通上にのぼりにくい器種であるため、物資の流通に直接関わる人物や、流通を管理する勢力の動きに伴って入って来た可能性がある。また、県下の遺跡での流通が稀である12世紀後葉～13世紀後葉の楠葉型瓦器碗についても、京都の

権門や鎌倉政権に関わる勢力との関係性を通じてもたらされた可能性が考えられる

こうした遺物所有のあり方を通してみると、神田ムク入道遺跡は政治・経済の拠点、あるいはそれに関連する屋敷地としての性格が強いといえる。また、東播系須恵器甕などの出土からは、近隣に「津」が存在したことが示唆されている。

流通の背景

さて次に、前節にて検討した神田ムク入道遺跡の立地についても振り返り、補足しておきたい。先に触れたように、神田ムク入道遺跡から西に125mの位置には、『神田之庄地検帳』に「マトコロヤシキ」の字が記載され、中世荘園の支配体制をなした領家の現地管理機関である「政所」が所在したと推定される地点があった。そして『神田之庄地検帳』での字の記載や、発掘調査の成果等から、「政所」の周囲には複数の屋敷が集まっており、神田ムク入道遺跡の屋敷地も「政所」に付随する屋敷の一つと推定された。そして、このような神田ムク入道遺跡の性格や立地をみると、その遺物組成に現れる数々の特質は、中世荘園を支配する領家の現地管理機関「政所」との関係性の中からもたらされたものと考え事ができよう。

なお、神田庄を支配した領家の具体像については史料が得られていないが、近隣に所在し、同じ神田川の水運上にある朝倉庄については、大治5年（1130）に鳥羽天皇の中宮侍賢門院（藤原璋子）によって再興された法金剛院領の一つであったとされている。^{〔注11〕} 法金剛院領は久安元年（1145）に皇女の上西門院に伝わり、その後も、後白河法皇、皇女の宣陽門院、後堀河天皇の中宮鷹司院長子、後深草天皇に伝領され、以降、南北朝期の内乱の頃まで、皇領とされている。朝倉庄がいつ頃まで法金剛院との関係を持ち得たのかについては不明であるが、これらの動向から朝倉庄と京都の権門や寺院勢力とのつながりが窺え、同じ水運上にある神田庄についても、同様の関係性が推察される。

最後に、神田ムク入道遺跡の立地環境を物資流通路の視点からもみておきたい。神田ムク入道遺跡が所在する神田南西部域は神田川と至近の距離にあり、古代以来の外港である浦戸湾とは鏡川・神田川の水運によって結ばれていた。浦戸湾から鏡川上流へ上る水運上の遺跡には尾立遺跡があり、ここからも古代～中世の貿易陶磁器が出土しているが、この鏡川と神田川が合流する地点からすぐ上流の位置に朝倉庄と神田庄及び神田ムク入道遺跡がある。そして先の『神田之庄地検帳』によれば、神田ムク入道遺跡から南西の神田川沿いの位置に「舟岡」の字がみえ、現在でも「舟岡」「船戸」「下船戸」など、「津」の存在を思わせる字が周囲に残されている。

このように、神田ムク入道遺跡が所在する神田南西部域の屋敷群は、鏡川・神田川水運による物資流通のルート上にあり、「津」を擁する経済の拠点としても機能したことが窺われる。そして古代末から中世には、この浦戸湾から鏡川・神田川を上る古代以来の物資流通ルートを通じて、当地域へ豊富な貿易陶磁器や数々の国内製品が運び込まれたとみられる。

【註】

- 1) 瓦器椀の産地同定にあたって徳平涼子氏のご教示を得た。
- 2) 岡本健児『高知県の考古学』吉川弘文館 昭和41年
- 3) ただし県東部の田村遺跡で亀山窯製品に類似した須恵片の出土が確認されているとのご教示を吉成承三、松村信博氏より得た。
- 4) 亀山窯製品の産地同定にあたり、松村信博氏よりご教示を得た。
- 5) 今回表示した出土点数と組成比(%)は、推定個体数を用いて割り出している。ただし、推定個体数については、そのカウント方法によって個体数が大きく変わってしまう器種(特に壺など)があるため、以下の2つの方法で割り出し、各々について出土点数と組成比(%)を求めた。
算出法A:全ての器種とも、口縁部点数と底部点数からカウントした。この場合、同一遺構内で口縁部と底部が同時に出土している時は、底部のみをカウントした。
算出法B:土師質土器杯・皿と瓦器椀・皿では口縁部点数と底部点数からカウントした。この場合もやはり、同一遺構内で口縁部と底部が同時に出土している時は、底部のみをカウントした。瓦質土器鍋、須恵器壺、陶器壺、貿易陶磁器壺・水注・碗・皿・盤では、口縁部・底部・体部を含めてカウントの対象としたが、同一遺構内で同じ器種の破片が複数出土した場合は、釉調、胎土、調整痕等の観察から別個体と判断できたものを1点としてカウントした。
なお、どちらの方法が実態数に近いかは判断がつかないため、組成比の推定は両者の範囲内で扱う。
- 6) 土佐神社西遺跡は土佐の一宮である土佐神社の近隣に立地する屋敷跡で、12世紀末~14世紀にかけて機能した。浜田恵子「土佐神社西遺跡出土遺物の様相」『土佐神社西遺跡』高知市教育委員会2006年
- 7) 同定にあたって森達也氏のご教示を得た。
- 8) 近隣の御手洗遺跡にて同様の鉄絵盤が出土している。『御手洗遺跡発掘調査現地説明会資料』高知市教育委員会2011年
- 9) 池澤俊幸「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」「中世土佐の世界と一条氏」高志書院2010年
- 10) 橋本久和『中世考古学と地域・流通』真陽社2009、橋本久和「瓦器椀の西日本における分布と畿内産瓦器椀の流通」「中世山茶碗と瓦器椀・その流通と背景を探る」中世土器・陶器編年研究会記録2008年
- 11) 「御府文書」、「島田文書」。山本大「土佐國莊園研究序説」「高知の研究2古代・中世編」より引用。

【参考文献】

- 「解説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会1995年
「日本出土の貿易陶磁器」国立歴史博物館1993年
「長宗我部地検帳 土佐郡上」高知県立図書館昭和32年
「田村遺跡群」高知県教育委員会1986年
「土佐国衙跡発掘調査報告書第8集一松ノ下・金屋地区的調査」高知県教育委員会1988年
「木塚城跡」春野町教育委員会1988年
「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡・アゾノ遺跡」高知県教育委員会1989年
「岡豊城跡 第1~5次発掘調査報告書」高知県文化財団埋蔵文化財センター1990年
「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群」高知県文化財団埋蔵文化財センター1992年
「芳原城跡Ⅱ 第2~4次発掘調査報告書」春野町教育委員会1993年
「押原遺跡」香我美町教育委員会1993年

「岩井口遺跡・二ノ部遺跡・城跡」佐川町教育委員会1995年
『姫野々土居跡Ⅰ』葉山村教育委員会1995年
『姫野々土居跡Ⅱ』葉山村教育委員会1996年
『深瀬北遺跡』野市町教育委員会1996年
『上美都岐遺跡』佐川町教育委員会1997年
『具同中山遺跡群Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター1997年
『具同中山遺跡群Ⅳ』高知県文化財団埋蔵文化財センター2001年
『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター2001年
『野田遺跡Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
『千本杉遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年
『木塚城跡Ⅱ』春野町教育委員会2004年
『野田遺跡Ⅱ・野田庵寺』高知県文化財団埋蔵文化財センター2005年
『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
『土佐神社西遺跡』高知市教育委員会2006年
『口楨ヶ谷遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2008年
『坂本遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2008年
『クノ丸遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年
『上ノ村遺跡Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年
『加久見城館遺跡群』土佐清水市教育委員会2010年

写 真 図 版



調査前全景（北より）



調査区全景（北より）



I 区完掘状況（第 1 面、北より）



I 区北西部完掘状況（第 2 面、北より）



I 区南壁



II 区北壁



SE1 半掘状況（南より）



SE1 完掘状況（南より）



SE1 石組（上部、北面）



SE1 石組（下部、北面）



SE1 曲物出土状況



SK16 (南より)



SK41 磚出土状況（南より）



SK56 セクション（南より）



SK106 遺物出土状況（94）



SD5・6 種出土状況（東より）



SD7 (南より)



SD7 セクション



SD8 (南より)



SD8 セクション



SD9 (南より)



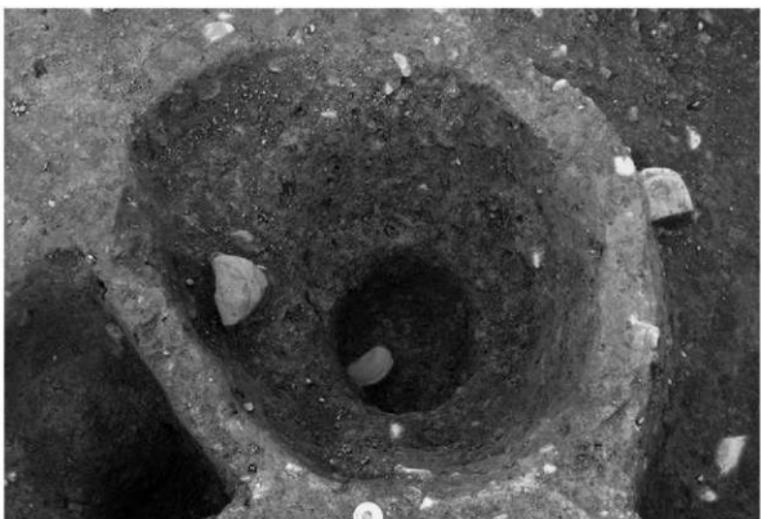
SD13 完掘状況 (南より)



SD10 遺物出土状況（東より）



SD10 遺物出土状況（東部）



SB8 - P6 遺物出土状況 (276)



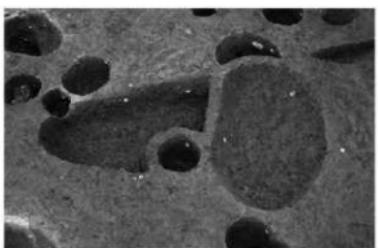
SB12 - P4 セクション



P651 遺物出土状況 (679)



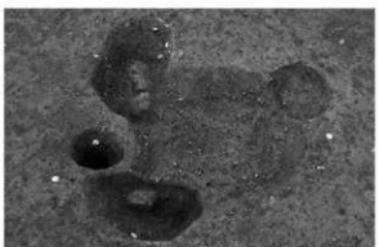
SX4 (南より)



SK37・39 完掘状況（南より）



SK40 遺物出土状況（南より）



SK42 完掘状況（南より）



SK56 遺物出土状況（西より）



SK79 遺物出土状況（南より）



SK124 遺物出土状況（103）



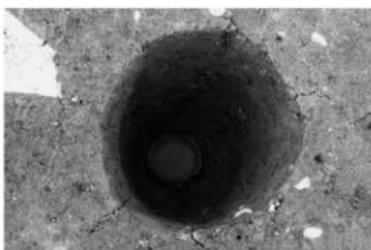
SD5 遺物出土状況（南より）



SD13 セクション



SB12 - P4 遺物出土狀況 (342)



P75 遺物出土狀況 (567)



P271 遺物出土狀況 (591)



P480 磚出土狀況



P483 遺物出土狀況 (621)



P500 遺物出土狀況 (631 · 632 · 634)



P747 遺物出土狀況 (125)



SX4 遺物出土狀況 (155 · 156 · 157 · 159)



V層遺物出土狀況 (20)



V層遺物出土狀況 (21)



V層遺物出土狀況 (22)



V層遺物出土狀況 (24)



V層遺物出土狀況 (25)



III層遺物出土狀況 (40)



SK23 遺物出土狀況 (66)



SK124 遺物出土狀況 (103)



SK122 遺物出土狀況 (104)



SK122 遺物出土狀況 (106)



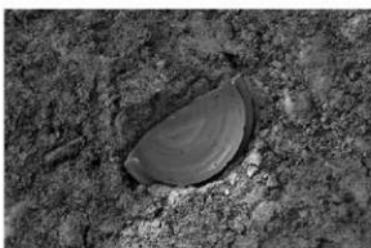
SK122 遺物出土狀況 (107)



SK122 遺物出土狀況 (108)



P770 遺物出土狀況 (123)



P512 遺物出土狀況 (126)



SX4 遺物出土狀況 (162)



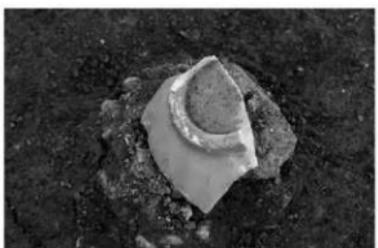
Ⅲ層遺物出土狀況 (177)



III層遺物出土狀況 (201)



III層遺物出土狀況 (206)



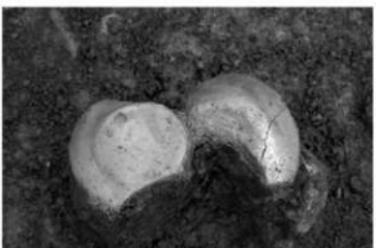
SD4 遺物出土狀況 (448)



SD10 遺物出土狀況 (507 · 508)



SD10 遺物出土狀況 (513)



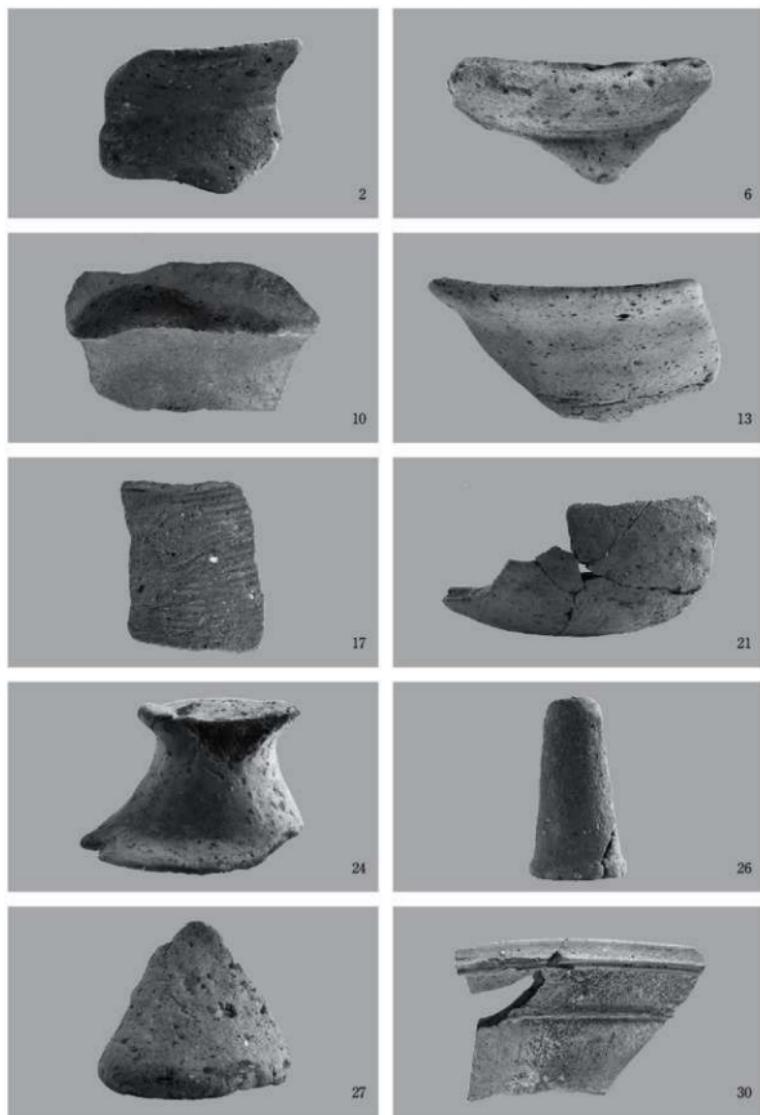
SD10 遺物出土狀況 (517 · 519)



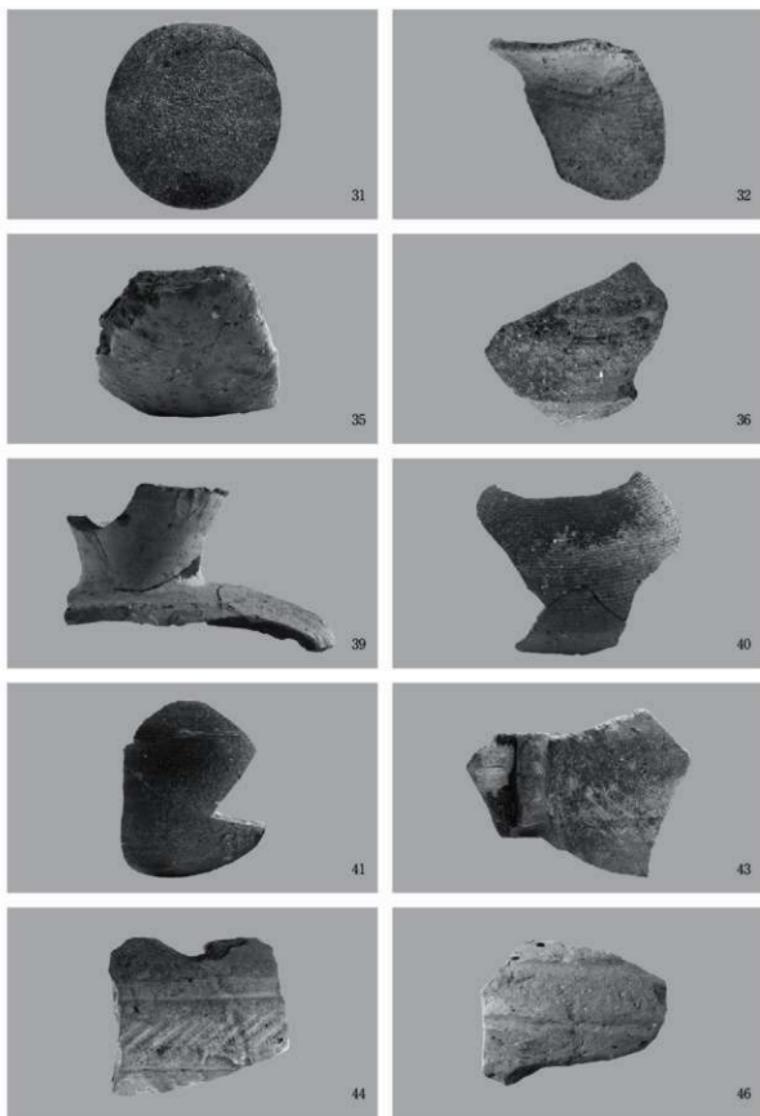
SD10 遺物出土狀況 (525)



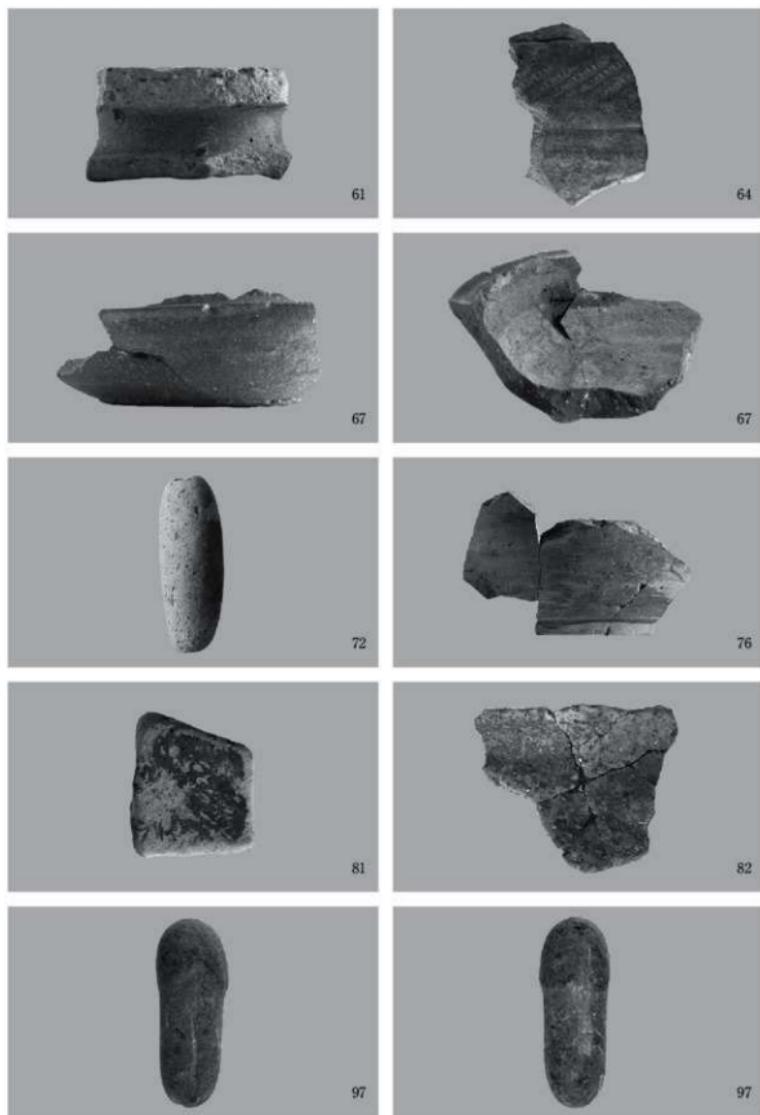
II層遺物出土狀況 (714)



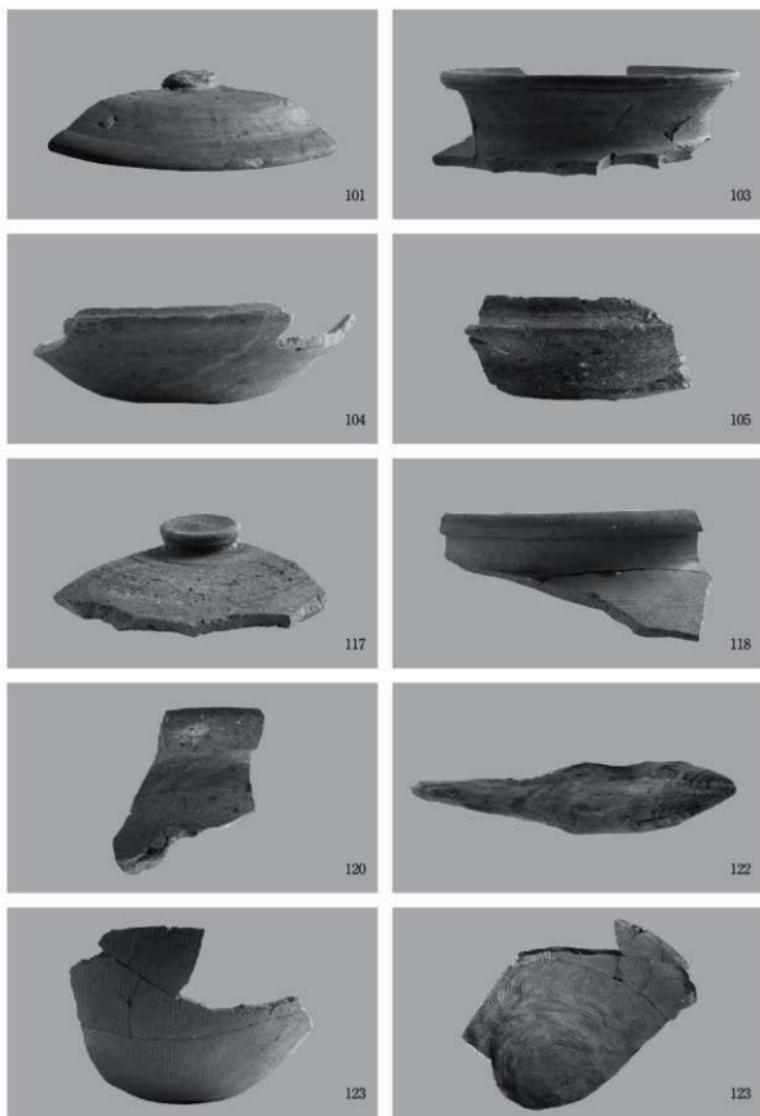
SR1 · V 層出土遺物



III・IV・V層出土遺物



SD4 · SX3 · SB3 - P2 · SK14 · 106 出土遺物



SK122 · 124 · 126 · P715 · 733 · 742 · 770 出土遺物



125



125



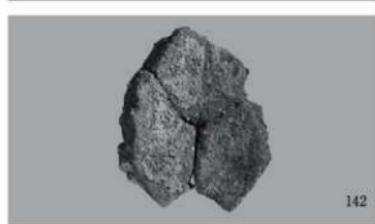
126



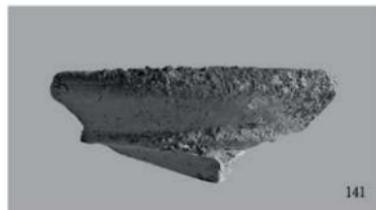
126



142



142



141



157



171



172

P747 · 512 · SX2 · 4 · II層出土遺物